調第二四六號

昭和十八年一月

エス・ヴェ・バフルーシン著

スラヴ民族の東漸

外務省調査局

調査
146
外史

外務省
調書
E3-1/4

調—0523

0005

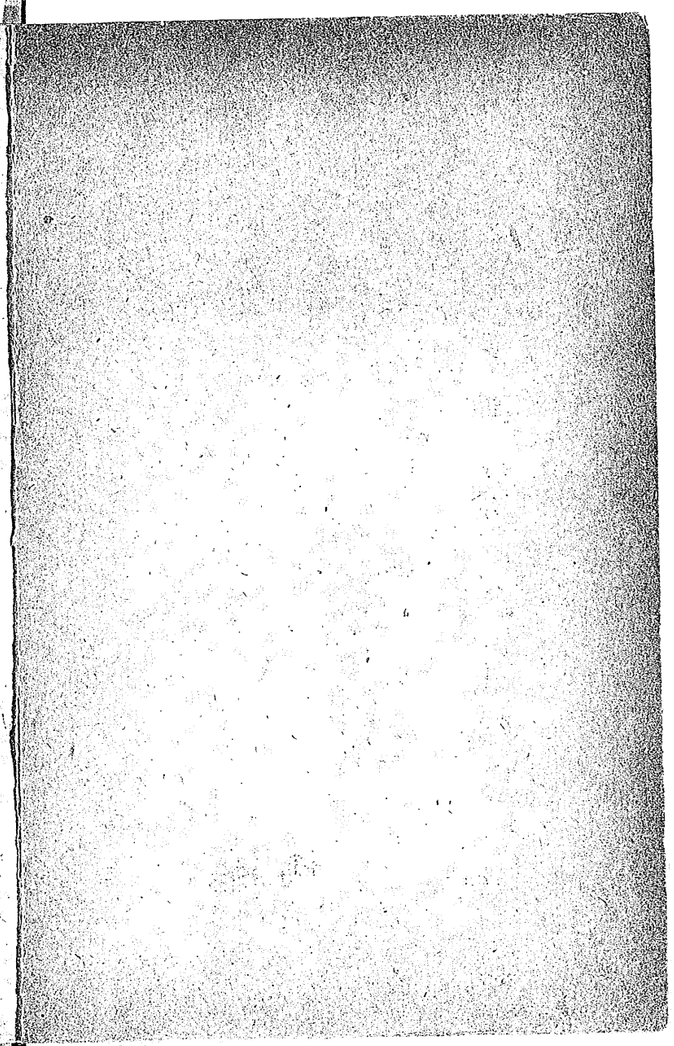
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

エス・ヴェ・バフルーシン著

スラヴ民族の東漸

外務省調査局

外務省
調査 146
圖書館
41. 9. -9



調—0523

0006

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

はしがき

一、ロシア民族の東方進出は、ソヴイエト政權の下に於ても依然續けられてゐる。而もそれは思想進擊の形に於て、從つて帝政ロシアの夫れに比し、宏大にして且遠大な規模の下に行はれ又行はれやうとしてゐる。然しその形は今姑く措き、我々はこの東方進出の推進的根柢を把握する爲に、その基底に横はる基本的要因を究めねばならぬ。而してこの究明は我が共榮圈建設の構想とその將來性の上よりも必要であらう。依て茲にその序說としてスラヴ民族の西伯利東漸の過程を明にすべく、エス・ヴェ・バフルーシン教授著「十六、七世紀における西伯利植民史概觀」(モスクワ、一九二八年刊) Проф.С.В. Бахрушин:«Очерки по истории колонизации Сибири в XVI и XVII вв.» Москва 1928 г. を選ぶこととした。

一、著者バフルーシンは現在モスクワ大學教授、國立歷史博物館管理委員、聯邦科學アカデミアの有力な會員である。著作としては「ロシア商業史」「ロシアにおける勞働」等のほか西伯利の歷史に關する多くの研究があり、そのロシア歷史學者の間における學流は、ソロ

調—0523

0007

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ヴィヨフ＝クリュチェフスキイの傳統を繼承する歴史家であるが、本書の内容は（1）何時（2）どういふ狀態のもとに（3）いかなる手段方法をもつてロシア民族がウラル以東に進出しそして全西伯利を征服したかといふ、史實の究明である。著者の立場は抽象的な觀念にもとづく説明をゆるさない。そこでは個々の歴史上の事實がつねに嚴密に第一源泉を基礎として具體的・實證的に、克明に追及されてゐる。この點において著者の研究方法は、非常にクリュチェフスキイにちかい。「既刊未刊の保存文書資料を基礎として植民過程の概括的な構圖をあたへる」といふ著者の意圖は、いままで發表されてゐる西伯利の歴史に關する誤謬や曖昧な點を、信憑すべき源泉の照明のもとに檢覈しつつ、この書のなかで美事に果されてゐる。

一、著者が研究の直接對象としてゐる時期は、原書の表題が示してゐるごとく、ロシア人が最初に西伯利を發見し、ウラルを越えて逐次に東方太平洋岸に達し、その全領域の征服占領を完遂するにいたつた十六、七世紀であるが、概括的な歴史の叙述においては十九世紀の中葉まで及んでをり、西伯利征服の歴史に關する文獻の研究においては、ごく最近までを取扱つてゐる。とくに注目すべきは、著者がもつとも力をそそいでゐるロシア人の西伯利

進出の實際狀態の詳細な記述（譯書第二編）と西伯利年代記やその後の古典的歴史文獻の成立過程の究明を意圖してゐる歴史編纂學的な論述（譯書第三編）である。後者についていへば、そこではまづ第一章において歴史の初歩的形式としての各種の西伯利年代記における物語的・小説的要素と歴史的事實との限界が明確に分析されてをり、その第二章においては西伯利の歴史の研究といふ仕事においてロシアの歴史家たちが過去においてどういふ足跡をたどつて來たか、また現在どのやうな段階に立つてゐるかといふことが、開明されてゐる。西伯利の歴史は今日でもなほ小説的な物語と歴史的事實とが混同して傳へられてゐる場合が往々であつて、西伯利の歴史の新らしい研究を進めるため、史實の究明や方法論の上で本書が參考となるべき點は決して尠くないと信ずる。

一、原書においては西伯利征服の歴史に關する文獻の研究が第一篇（第一章では十八世紀以前、第二章では十八世紀以降）におかれ、第二篇ではロシア民族の西伯利への交通路の發見と征服占領の過程（第一章ではウラルまで、第二章ではウラル以東太平洋岸まで）の詳細な叙述がおこなはれ、そして第三篇においてウラルから太平洋までのロシア民族進出の概括的な記述があたへられてゐる。しかし譯書においてはこの配列の順序をかへて、原書

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の第三篇を第一篇とし、第一篇を第三篇とした。その理由は、まづ西伯利征服の概括的な叙述に觸れたのち、更により詳細な問題の研究にはいつてゆく方が理解に便利であり且つ興味も多いとおもはれるからである。

一、著者は、ロシアの歴史一般については固より、西伯利の歴史やそこに住む諸民族についてもかなりの程度に專門的知識をもつてゐる讀者を對象において記述をすすめてゐる。したがつて時として叙述がかなり煩鎖な細部にわたつてをり、今日われわれが地圖の上で見いだすことのできぬやうな古代の小さな町や寺院のことを書いてゐる。たとへばウラル山麓のレジアチィの町や、そこにあつたトロイツア寺院とノヴゴロド商人の産業組合との關係を説いてゐるやうな場合に、これは著者が好んで記述を煩雜にしてゐるわけではなく、そこでは西歐の古文獻などにもしばしば報道されてゐる古代の「ユーグラの國」が果してどの地域にあつたかといふロシア史家の間における過去の論爭を解決するための實證としての事實關係を指摘してゐるのである。譯書では年代記の考證について若干の省略をした。

一、本書の理解と興味とを補ふため、本文中の歴史上の關係人物や時代の背景、またロシア人が次々に征服していつた土地やそこに住んでゐる民族がその後において、或は現在において、どのやうな狀態にあるかといふ樣な事柄について譯註を附し、卷末に添へることゝした。本文中の（ ）内に和數字をもつて示してあるのがそれである。＊印は原著者の註であるが、譯出に際し若干の省略をした。

一、【 】を附し本文中に六號活字で組込んである小見出は、本文の内容を表示するため頁の上欄に組込む豫定のところ、紙幅の都合で欄内に挿入することとなつたのである。

一、重量や尺度をあらはすブウド（一六・三八瓩）フント（〇・四瓩）露里（ヴョルスト）（一・〇六七粁）サージェン（二・一三四米）等は、ロシア語をそのまゝ示して一々換算はしなかつた。

昭和十八年一月

外務省調査局第二課

調—0523

0009

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

スラヴ民族の東漸

目次

序言……一

第一篇　ウラル以東へのロシア民族の進出……七

第一章　十六世紀末までのロシア民族の東漸……七

ロシア民族の西伯利進出と東歐平原占領との關係。ウラル以東へロシア民族進出の初期。毛皮の需要とノヴゴロド人の東漸。ノヴゴロド人の毛皮産業組織。ノヴゴロド貴族の活動。ノヴゴロド商人と領主の經濟競爭。モスクワ大侯領と毛皮産地との關係。ペルミ大主教領地とストロガノフ家の私領地。ロシア人のウラル以東進出の二つの方法。國家的占領の蹤跡。十六世紀以前の進出が遲々たる理由。ヘルベルシュタイン時代の毛皮産地。十六世紀中葉における東方進出の刺戟。東西から毛皮註文の殺到。海外の毛皮需要と毛皮相場との關係。ストロガノフ一家の活動とエルマクの遠征。新毛皮産地マンガ

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ゼイアの發見。楯と砦市の建設。ツングスカ河、エニセイ河流域への侵入。カザン汗國の沒落とカマ河交通路の掌握。オスチャク族とモスクワ侯國の關係。西伯利汗國の征服。モスクワ國家の毛皮貿易と侵略政策。西伯利汗の毛皮貢納。政府と個人企業との利害衝突。西伯利汗國の首都イスケル城。西伯利汗國の統治組織と汗位爭奪。クチュム汗のモスクワ離反。エルマク遠征の動機と成功の原因。エルマク遠征の結果。國家的遠征計畫の失敗とエルマクの戰死。西伯利最初のロシア人の町。西伯利征服計畫の統一策。トボリスク市の發生。西伯利タタール族の反抗。異民族間における西伯利汗國再興の願望。ペルミ汗國の征服。ウェルホトゥリエ砦市の建設。トゥリンスクとチュメニ。南方遊牧民族との衝突。南方防禦要塞の建設。クルガン市の建設。イルトゥイシュ河上流の諸砦市。南方進出の停頓と北方征服。オスチャク諸部族の歸順。オスチャク族の叛亂。以夷制夷政策。

第二章　十七世紀における西伯利の發見と征服……四四

タズ河畔への大遠征隊。トヤン汗の歸順とトムスク砦市の端初。チュルク諸部族及びアルタン汗との衝突。準噶爾汗フン・タイシとの角逐。ビイスキイ櫓の建設。西伯利征服史における新段階。無組織・無秩序の侵略時代。エニセイ河流域侵入。二つの交通路。

アルタン汗の反撃。アンガラ河への進出。ツングス族征服。ブリヤト族の反抗。イルクーツク砦市の建設とブリヤト族征服。マンガゼイアからの東方進出。ノワツキイ遠征隊。シャホフ遠征隊。パリツィン侯のレナ河地方占領計畫案。ヤクーツキイ櫓の建設とレナ河口への進出。東方海岸への到達。匪賊的侵略。ロシア人同志の掠奪鏖爭。政府の統一政策。ヤクーツク政廳の創設。デジュネフのアジア北東端廻航。オホツク海浩岸の探檢。カムチャトカ半島の征服。日本國への着目。チュコト半島の征服。ウェルホレンスク砦市の建設。バイカル湖畔への侵入。アムール（達呼爾の國）への侵寇。ポヤルコフのアムール探檢隊。ハバロフの掠奪的侵寇。ネルチンスク砦市の建設。流刑囚のアルバジン柵建設。カザック自由國の形成。康熙帝の支那軍との衝突。ゼイヤ河畔諸柵の撤退。露蒙中立條約の締結。ネルチンスク條約とロシア側讓歩の原因。

第三章　十八世紀および十九世紀中葉までの發見と征服……七五

西伯利地圖の編纂。十九世紀前半までの領土擴張の方向。アレウト諸島の發見と征服。露米會社の成立とカリフォルニアへの進出。ベーリング探檢隊。日本領土の測量。アメリカ海岸におけるロシア植民地。アルタイ山麓への進出。ピョトル大帝の中央アジア進出計畫。西伯利要塞線の完成。ゴリカヤ要塞線。ロシア資本主義の發達と近東および東

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

調—0523

第二篇　西伯利征服と交通路の發見

第一章　ウラル以東への交通路發見と征服……九
一、カマ（ウラル）越え交通路の發見……九
イ、カマ越え交通路の方向……九
ペチョラ河。北ドヴィナ河。ユグ河。スキナ河。ウイチェグダ河。ウイマ河。テラ河。
コフニヤ河。サムスキイ連水陸路。ウフタ河。イジマ河。メゼニガ河。ピネガ河。ク
ラ河。ヒネシスキイ連水陸路。マザ河。ベスキイ連水陸路。ルヒベ河。チルカ河。ツィ
リマ河。メゼンスキイ交通路。ウラル越え連水陸路。オビ河交通路。シチュルク河。ス
イグワ河。キルタス河。ソシワ河。イルイチ河。イジマ河古代フィン族の交通路。ウラ
ル以東ロシア人發展の交通路。
ロ、ノヴゴロド人の「ユグラ」の國への交通路……九
スキナ河。サスチュグ族のノヴゴロド人襲撃。ノヴゴロド人のサスチュグ族征服。毛皮の
貿易「ユグラの國」と「サモエチの國」。毛皮遠征隊とユグラの反抗。ノヴゴロドのユグラ
作合。モスクワのノヴゴロド領略。
ハ、ウイマ河畔における正教普及……一〇
モスクワ大侯のスイリトン派教と懐柔。ペルミ正教管區の政治的活動。および蕃族原住民
のキリスト教化。
ニ、モスクワのベチョルスキイ交通發見……一〇三
ウラル地方征服の準備。モスクワ諸侯のユグラ大遠征。モスクワのカザン占領とカマ河交
通路。イギリス人の毛皮催促とロシア人の西伯利征服。
ホ、ペチョラ河畔における農耕部落の發生……一〇六
初期におけるウラル植民部落の狀態。自治的植民部落の發展。リンドラ地帶植民部落の狀
態。生活根源の漁獵と副業の發達。サモエド族との交通關係。十七世紀初における貢
祿納の狀態。
ヘ、ウラル以東のロシア人の進出。……一一六
ウラル以東の諸蕃民族との初期の交易。ウラル半島地にたいするイギリス人の注目。初
期におけるロシア人の人口動態。漁獵農耕地の狀態。漁獵農業によるマン
ガゼイ期の發展。ウラル越え交通路にたいする政府の注目。ウラル越え交通路公許の時

古、滿洲、朝鮮への侵入と日露戰爭。トルキスタン占領と露英間におけるペルシアの經濟的分劃。

期。
ト、ウラル越え交通路上における關所の發生……一二三
ロシア本國と西伯利との國境稅關。ソビスカヤ關所。オブドルスカヤ關所。キルタススカヤ關所。
チ、ウラル峠の狀態……一二八
交通路上の最大難所。サモエード族の襲撃。
リ、ウラル越え交通路の運輸狀態……一三〇
十七世紀中葉の西伯利旅行者統計。關稅統計。マンガゼイアの凋落とウラル越え交通路の要退。官用黒貂の輸送路。
ヌ、ウラル越え交通路の閉鎖……一三四
交通路閉鎖に關するピヨトル大帝の勅令。
二、海上交通路の發見……一三五
イ、海上交通路の方向……一三五
十七世紀初の北氷洋沿岸交通路。ドヴィナ河の河口。カニン半島廻航。クルイ河。チジア河。チェシア河。連水陸路におけるコチヤ船の移搬。ルスキイ海角。ペチョルスカヤ灣。メヂァンスキイ海角。ユゴルスキイ海峽。ハイプドゥイルスカヤ灣。ユゴルスキイ海臨。
ロ、北氷洋岸の航海狀態……一四二
海洋帆船「コチヤ船」の大きさ。自然との鬪爭。北洋貿易とドイツ商品。十七世紀初マンガゼイ來舶のコチヤ船と旅客統計。十六世紀の北氷洋航海者——イギリス人パロウ。十六世紀後半オビ河流域の貿易。初期のオビ河口探檢隊。十六世紀イギリス人の北氷洋より支那への交通路探求。奇書「珍奇な人間の話」と古代北氷洋地圖。
ハ、十七世紀における海上交通路の運命……一四八
十六、七世紀イギリス人およびオランダ人の北氷洋探檢。ロシア人漁獵者のエニセイ河口發見。エニセイ河と北海との通絡。海洋交通路發見と覇ドイツ貿易の利益。海路ドイツ人侵入の危惧。海上密貿易の危惧。海路禁制の上奏と勅令。中央政府の地理的知識の缺乏。海路禁制令違反者に死罪。ドイツ人およびロシア人貿易者の通航監視。監視役人の任務遂行難。北氷洋航海史の空白時代。十九世紀における北氷洋探檢……一五五
三、カマ河交通路の發見と征服……一五五
イ、カマ河交通路の歷史……一五五

ワイガチ島。サモエード族の震所。カルスカヤ灣。ヤルマル半島。ムトナヤ河。ゼリ・ナヤ河。湖水から湖水へ船の移搬。カァメンヌイ岬。海路の終點——タズ河畔のマンガゼイ市。

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

西伯利征服史との重要關係。ロシア諸侯のカマ河邊征。タタール侵寇とブルガル帝國の衰落。古代カザン街道。ロシア人のカザン占領とカマ河擴張。

ロ、ロジヴィンスキイ交通路……一五八

ウイシェラ河。ロジワ河。タウダ河。トボル河。イルトゥイシュ河。オビ河。

ハ、チュソフスキイ交通路……一五九

ソリウイチェグダ河。ウィレヂァ河。スイソラ河。ウジガ河。カマ河。ガイン河。ヴィシエラ河。ネム河。コルワ河。ヴーシェルカ河。チュソフスコエ湖。ヴォグルカ河。十五世紀におけるベルム遠征の交通路。ヴォグル族のベルム侵寇路。エルマク遠征の交通路。城砦都市の建設。トゥラ河上流への新交通路發見。カマ河よりウラルへの別路。タタール族のカザン——チュメニ通絡路。カザン汗國植民の遺跡。カザン占領前のロシア人の西伯利貿易路。

ニ、ストロガノフ一族の植民活動と交通路占領における役割……一六五

カザン汗國の沒落とロシア人の西伯利進出。カマ河沿岸の鹽坑開發。モスクワ政府の領土擴張。ストロガノフ家の勅許私領地の邊境國家的形態。新植民地領内の原住民部落。ストロガノフ家私領植民地の發展狀態。修道院植民部落の發展。異民族の壓迫と掠取の狀態。原住民の反抗と叛亂。西伯利タタール族のロシア植民地侵寇。チェレミス族の叛亂とクチュム汗の關係。マフメット・クルのベルミ侵寇計畫。鹽組侯アグタコフの侵掠。ヴォグル族のカマ河鹽鹽所劫掠。私設驛寨および柵の建設。オリョル砦市。ヤイツエンスキイ砦市。チュソフスキイ砦市。スイルワ河畔の砦市。植民地砦市の狀態。ガザク扈衛の特權。植民地砦市とロシア人進出の關係。私領植民地の獨立性。異民族の經濟的征服。異民族領土の軍事的侵略。エルマク遠征隊の組織内容。エルマク遠征隊とストロガノフ家との契約内容。エルマク遠征隊とモスクワ政府の關係。征服の基地としての大莊園の發達。

ホ、十七世紀におけるチュソフスキイ交通路……一八九

「西伯利直通路」における稅關の建設。逃亡農民と流民の西伯利往來。遣支使節イズブラントの交通路。

ヘ、ウェルホトゥルスキイ交通路……一九一

毛皮貿易港アルハンゲリスクとの關係。ウラル峠の寒村。新西伯利街道。モスクワ——ウリ・カムスカヤ第二交通路。西伯利街道の狀態。西伯利街道の關所。

ト、ヴェルホトゥルスカヤ稅關の運營統計……一九七

十七世紀における西伯利への交通狀態と統計資料。ヴェルホトゥリエ市の發展。西伯利旅行者の宿驛。

調—0523

00 14

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

調—0523

第二章　東部西伯利への交通路發見と征服……二一〇
一、オと河よりエニセイ河への交通路發見……二一〇
ロシア民族東漸の概略。
イ、マコフスキイ迂水陸路經由の發路……二一〇
遭麥俄斯パーフリの侵略。商人の自由部落。エニセイスクへの迂水陸路。ツングス族
便への最初の侵入。アルイニフ征服。
ロ、エロゲイスキイ迂水陸路經由の交通路……二一五
エロゲイスキイ橇。商人・猟師のツングスカ河畔への進出。マンガゼイ軍人の密賣
島。スイマ河口の關所。
ハ、マンガゼイへの海上交通路……二一〇
ダス河。エニセイスキイ迂水陸路。トゥルハン河。トゥルハンスコエ參所。海上機關
行の狀態。サモエド族の巢窟。オと總の連絡サモエド・ユラク族の襲撃。サモエド討伐
險。トボリスクーマンガゼイの行程。海路における暴風と天候の關係。氷雅派行にお
けるロシア人氣質。コチア船の修造。船人。コチア船の難波とサモエド族の掠奪。トボ
リスク軍人逃難事件。チュリャニア逃難事件。海路の危險はロシア人の進出を亂せず。
真逃避地としてのマンガゼイア。
ニ、マンガゼイアよりトゥルハンスコエへの交通路……二三五
酒川を辿つて東進。トゥルハンスキイ交通路の狀態。トゥルハン公道の建設。
ホ、マンガゼイアよりオビ河下流への交通路探査……二三九
ツンドラ機關探査。難波遭難非件の續發。
ヘ、海上交通路の閉鎖……二四一
海上交通路の凋落期。海上交通路廢止令。
二、エニセイ河よりレナ河への交通路發見……二四三
エニセイスキイ柵の建設。レナ河への交通路發見と原住民の征服。レナ河にたいするキ
クの關心。コサック探險隊の危險。唐北陸交通路。ヤクーツク公道
イ、南路——レナ迂水陸路經由の交通路……二四六
ツングスカ河。河筋の難路。ムラ河の難關。難船筋の狀態。イリム河の荒瀧。レンスキ

イ連水陸路の狀態。イリムスキイ砦市の建設。連水陸路における宿驛の發達。レナ河畔の關所。ムカ河の筏航。タタ河口の定期市。旅行の所要時間。……一二

ロ、北路――ヴィリュイスキイ交通路……二五三

ティテ河。チョナ河。ヴィリュイ河。マンガゼイアとヴィリュイスキイ交通路の關係。ヴィリュイスキイ交通路凋落の原因。ヤクーツクの發展とマンガゼイアの凋落。

ハ、チュイスキイ（ツングスキイ）交通路……二五四

ヴィリュイスキイ交通路に代る新交通路。ネバ河。クレンガ河水源。チチュイスキイ小橇。旅行の所要時間。

三、レナ河より北東海岸への交通路發見……二五六

イ、ヤナ河――アナドゥイル河への交通路……二五六

「海の彼方の諸河」と「極北海」。ウェルホヤンスキイ山脈。アルダン河。ヤナ河。トルストカ河。タイ・ハヤンタス山脈。インヂギルカ河。アラゼイ河。コルイマ河。アナドゥイル河。ホドゥイン族の報告。アニュイ河。デジュネフの地圖。ベーリング海峽。ベンジェンスキイ山脈。ベンジナ河。チョンドンスキイ山脈。ギジカ河。スタドゥヒンの發見とその地圖。ラムゥト族、ユカギル族、ホドゥイン族。原住民襲擊の危險。

ロ、オレネク河、コルイマ河への海路發見……二五九

ツングス族の「神聖なる海」。オレネク河。氷海旅行の狀態。ブルダコフの「遭難記」。飢寒と壞血病。氷上の漂流。十七世紀中葉における氷海旅行者の統計。

ハ、チュコト半島附近の海上交通路發達……二六五

ロシアにおける商業發展期と東方海岸進出の關係。エラストフの探檢計畫案。チュクチ族との最初の交易。デジュネフの氷海漂流。スタドゥヒン探檢險。北東海岸の交通路探求の成果。

四、アムール河畔および太平洋への交通路發見と征服……二六八

イ、アムール河の發見と交通路……二六八

アムール發見の歷史的意義。アムール河に關する初期の報道。ハバロフのアムール侵寇。エニセイ軍人のバイカル湖畔進出。ベケトフのシルカ河踏査。對支貿易にたいするモスクワ政府の關心。スパーファリの「支那交通路記事」。レナ――アムール交通路にたいする原住民の知識。

ロ、トゥギルスキイ連水陸路からアムール河への交通路……二七三

ハバロフ侵寇の交通路。ウルカ河。アマザル河。旅行の所要時間。オレクマ河口の關所建設。露支兩國間における連水陸路爭奪戰。ネルチンスク砦市の建設。

調―0523

0016

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ハ、ゼィヤ山脈越えアムール河への交通路……一四
アルダン河。ウチュラ河。ゴノマ河。ニュエムカ河。ゼィヤ峠越え連水陸路。ブリアンダ河。ボヤルコフの旅行所要時間。トントラ河。カトゥマ河。ゼィヤ流域における露支衝突。ロシア側のゼィヤ再進出。セリンビンスキイ棚とドロンスキイ棚の建設。支那の最後通牒とドロンスキイ棚の撤退。支那のアムール艦隊派遣と愛琿城建設。ネルチンスク條約。半世紀にわたる露支の角逐。ニニセイ河からアムール河への路程。イリム河。ツングスカ河。ツングスカ河上流の舟航狀態。スパーファリの旅行記。僧侶アワクムの旅行記。アンガラ河。イルクーツキイ棚。バイカル湖。バイカル湖横断旅行に關するレミゾフの報道。
ニ、バルグジン棚經由アムール河への交通路……二八二
バルグジンスカヤ入江。バルグジン棚。バイカル湖の神祕。原住民の迷信とロシア人の迷信。バイカル湖よりシルカ河への道。冬の密林旅行。
ホ、イルゲニ湖運水陸路よりアムール河への交通路……二八四
新交通路の探求。イルゲンスキイ運水陸路。セレンガ河。ヒルカ河。イルゲニ湖。インゴダ河。ネルチ河。シルカ河。イルゲンスキイ棚の建設。第三の交通路。セレンガ河。ウダ河。エラヴィンスキエ岬湖。チタ河。インゴダ河。遣支使節スパーファリ、イズブラント、ランゲ等の支那への交通路。ネルチンスキイ棚の建設。群湖々畔の諸棚。「ダウリアの鍵」――ウヂンスキイ棚。旅行所要時間。
ヘ、レナ河よりオホツク海への交通路……二八八
ロシア人の大平洋進出の出口となつた諸河――ウヂ河、ウリヤ河、オホタ河。アルダン河。マヤ河。マコフスコエ冬營所の建設。海までの旅行所要時間。ウリスキイ運水陸路。シクシァ河。ウリヤ河。オホツク海。ウリヤ河の舟航狀態。マヤ河よりオホタ河への交通路。ヤクーツクからの別路の探査。グメーリンの報道。クラシェニンニコフの報道。交通路の行程。オホツク市建設の端初。
五、むすび……二九一
ロシア民族東漸の諸條件とその方法。

第三篇　西伯利征服に關する歴史文獻の研究……二九四

第一章　西伯利年代記の研究……二九四

一、同一源泉から發生した諸年代記……二九四
イ、キプリアン大主教と「過去帳」……二九四
西伯利最初の大主教管區の誕生。トボリスク中央寺院の建立。エルマクの英雄化と「過去帳」……二九五

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の編纂。エルマク・ガラク隊の宗教化。「過美候」の文學的構成。
ロ、「過美候」と「エシポフスカヤ年代記」および「ストロガノフスカヤ年代記」の關係……三五
三つの「物語」の相似性。
ハ、三つの年代記の文學的手法……三五
西伯利年代記研究文獻と之の見解。
ニ、「ナビサミエ」（手記）……三六
西伯利年代記の源泉「ナビサミエ」。
ホ、「レミゾフスカヤ年代記」とその源泉……三八
「レミゾフスカヤ年代記」の特徴。レミゾフ年代記の資料源泉。レミゾフの「西伯利地圖」。レミゾフ年代記に挿入された別の年代記。年代記にあらはれたエルマク遠征の頭末。レミゾフ年代記における原住民の口碑傳說。回教徒の說話と傳說の內容。原住民の口碑と古代西伯利の地名。口碑傳說と原住民の遠征の內容。エルマクに關する原住民の遠征的傳說。エルマクの歿に關する傳說。カルムイク王の「エルマク物語」。エルマクの遠征。エルマク傳說物語の一致に關するカルムイク王の遠征。ロシア人と韃靼人の傳說におけるエルマク傳說物語の一致「エルマク物語」におけるタタール的遠征の記錄。
ヘ、西伯利征服の年時の問題……三九

年代記におけるエルマク遠征および敵先祖の不一致。レミゾフスカヤ年代記の歷史的價値性。
ニ、「ナビサミエ」を源泉とせざる年代記……四二
イ、「クングルスカヤ年代記」……四二
「クングルスカヤ年代記」の史畫傳說的色彩。「物語」の手法におけるサガ的構圖。
「クングルスカヤ年代記」の源泉の複雜性。年代記におけるタタール傳說の要素。エルマク遠征とイワン帝の訪問。原住民主侯の人名における歷史的眞性。「クングルスカヤ年代記」の獨自性。
ロ、「西伯利新領土誌」中の年代記……四六
ゲーエルの「タルタリイ物語」の源泉。「西伯利新領土誌」編纂の時期。「新領土誌」の獨自性。レミゾフ年代記との一致點。「新領土誌」における原住民傳說の變遷。エルマク遠征隊の人員と「物語」の眞實性。「物語」と公文書との關係。
三、十七世紀末および十八世紀における年代記……四八
十七世紀末以降の年代記編纂の科學性の「進展」および「記錄」の源泉。國書の歷史文獻的價値。「西伯利年代記論」「全西伯利着手編纂年代論」。チェレパノフの「西伯利史」
第二章　十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流……五三

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp
調—0523

一、十八世紀における西伯利の學術調査……三三一
西伯利の科學的調査研究の要求。メッセルシュミットの調査計畫。ベーリング探檢隊の任務。エカテリナ二世時代の西伯利探檢。
二、西伯利の歴史に關するミルレルの諸著……三三五
「西伯利國誌」とフィシェルの「西伯利史」との關係。ミルレルの西伯利史編纂の方法と特徴。ロシア史學における一歩前進。古文書の錄載とアカデミアの態度。西伯利古文書とミルレル。レミヨゾフとミルレル。西伯利古文書蒐集の方法。古文書の書寫における若干の缺陷。ストロガノフ家保存文書の研究。西伯利關係東洋文獻の利用。西伯利原住民の口碑傳說の蒐集。西伯利古代地名の復元。西伯利人種學上の研究。西伯利言語學上の研究。西伯利考古學上の研究。西伯利史の科學的研究の開拓者ミルレル。ミルレルの「西伯利國誌」にたいする批判。「西伯利國誌」の學問的價値。
三、西伯利史編纂上におけるミルレルの影響……三七七
ミルレルの「西伯利國誌」とフィシェルの「西伯利史」。カラムジンの「ロシア國史」とミルレル。ミルレル文庫の蒐集古文書。「法令全集」と西伯利關係文書。ボタァニンの西伯利史資料。西伯利局文書史料。シュチェグロフの「西伯利歴史年表」。アンドリエヴィチの「西伯利史」

四、十九世紀における西伯利史編纂の課題とスロフツォフ……三九三
ピヨトル・スロフツォフの人物。スロフツォフの西伯利觀とその史眼。
五、ブツィンスキイ教授の西伯利研究……四一八
ブツィンスキイ教授の「初期西伯利植民史」。オグロブリン教授の「西伯利局文書總覽」
六、二十世紀初における西伯利史研究の課題……四二一
ゴロワチョフの西伯利史研究綱領。オゴロドニコフ教授の「西伯利史概說」

譯者補註

目次

調一0523

0019

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

序　言

西伯利〔一〕は十六世紀以來ロシア國民の企業心と精力をひきつけ、自然發生的な自由移民の浪がこの地にむかつて奔流し、そして政府の人爲的政策もまたこの地にむかつて傾注された。ロシア民族によるウラルから太平洋にいたる全地域の獲得は右のごとき二重の過程の結果である。西伯利における中核をなしてゐるのは大ロシア人である。かくして西伯利は、ペ・エム・ゴロワチョフの言葉をかりて云へば「その人口的構成の優越性からみてロシア的」〔二〕である。かういふ事情は西伯利植民史の研究をとくに重要ならしめるのである。

「本國の特徴をもつとも良く知ることができるのは植民地に於てである」――といふ、非常にしばしば引合ひにだされるトクヴィル〔三〕の思想を敢てここに繰りかへす必要はない。本質において正常なこの思想は、「歴史の主たる要因は植民であつた」とヴェ・オ・クリュチェフスキイ〔四〕が規定してゐるロシアのごとき國家を問題として取りあげる場合、とくに留意に値するのである。

調―0523

0020

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ところで西伯利は最近數十年間において經濟的および行政的にその本國に依存する單純な植民地の限界をのり越えて發展成長をとげたのであつた。前世紀の後半このかたロシア資本主義の全般的向上に依つてよび起された西伯利の經濟的發展は、その經濟的獨立を可能ならしめ、それと關聯してこの地方の文化的繁榮を可能ならしめる新らしい諸條件を創造しつつある。

同時にまた西伯利に起つた內的變化と西伯利的な自覺の成熟に卽應した行政組織の新形態を創造しようとする意欲も明らかに認められる。この意欲は革命後、州制を原則としてそれぞれの州に經濟的ならびに文化的獨立生活を保障する西伯利の組織改造を實施させるにいたつた。それ以來、西伯利は集約的な新生活をはじめ、われわれはこの昨日までの「植民地」が、見る見るうちに壓倒的な文化的・經濟的發達をとげつつあるのを眼のあたり目擊するのである。

かかる西伯利の新局面は、おのづから西伯利の過去にたいする旺盛な興味をよび起し、そして新らしい西伯利を創造せしむべき諸現象の集中的な研究を促進せずにおかなかつた。さうした興味は、その方面における過去の諸著作の成果を統合したヴェ・イ・オゴロドニコフの「西伯利史概觀」B. И. Огородников: «Очерк истории Сибири» およびエリ・エス・ベルグの「モノグラフイ」Л. С. Берг: «Монографии» のごとき西伯利の探檢と踏査の歷史に關する特異な著述、更にまた鄕土研究的な性

質をもつ多くのエチュード——エヌ・エヌ・コジミンの「ハカス」Н. Н. Козьмин: «Хакасы» グ・ボボフの「ヤクーティアの歷史」Г. Попов: «История Якутии» ゲ・ア・スミルノフの「エニセイ地方の歷史的概觀」В. А. Смирнов: «Исторический очерк Енисейского края» ゲム・エヌ・ボグダーノフの「ブリヤート蒙古民族の歷史的概觀」М. Н. Богданов: «Очерки истории бурят-монгольского народа» ヤクート協會の論文集「サハ・ケズケム」Сборник Якутского общества: «Саха-Кескем» その他が出版されたことのうちに示されてゐる。又いまや自分自身の國土の建設に召集されつつある西伯利の原住諸民族の更生といふことも、むろん歷史的興味の喚起のうちに反映されてゐる。西伯利の歷史にたいするさうした興味は、本書の出版によつても裏書されるのである。

いまここに世に出ることとなつた「十六・七世紀における西伯利植民史概觀」の第一卷は、表題に示すそれぞれの時代の西伯利植民の歷史に關する完璧した研究を提供するといふ目的を追求するものではない。この著作の任務とするところは、全部といふにはほど遠い旣刊未刊の保存文書資料を基礎として植民過程の概括的な構圖をあたへるといふにとどまる。この著書の基礎を成してゐるのはいろいろな學術機關や學會などでさまざまな時期に私がした個々の報告や講演を、一貫したプランにしたがつて一の全體に統一したものである。かようにして生れいでた「概觀」は、書中、形式の統一や外

調—0523
0021
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

観的全體性の缺如をあらはしてゐるが、それにしても私は全體的な構成をぶち壊してはゐないと敢て自信するのである。

この第一卷はいはば西伯利植民史の「序說」のごときものである。この卷のうちにはウラル以東へのロシア民族進出に關する短簡な歷史的概觀、西伯利への交通路に關する各種の報道、史料編纂學的な性質をもつ記錄などが包括してある。本卷の中に收めてある「概觀」中のそれぞれの斷片は、かつて出版物に發表したことのあるものや講演報告の題目として取扱つたことのあるものである。たとへば西伯利年代記を取扱つてゐる章の中には、雜誌「イストリイチェスキエ・イズヴェスティア」(史報)《Исторические известия》の一九一六年三・四合併號に揭載された「エス・レミョゾフの『西伯利史』における原住民の傳說」《Гуземные легенды в "Сибирской Истории" С. Ремезова》と題する論文中で述べた基礎的な結論が含まれてをり、また右の論文を補足して一九二六年の秋に歷史科學調査研究所のロシア歷史部で「西伯利に關するヴィトセンの歷史的報道」《Исторические известия Витсена о Сибири》といふ表題でなした講演の論述も包括されてゐる。「十八世紀以降における西伯利史編纂の潮流」と題する章は、雜誌「セーヴェルナヤ・アジア」(「北亞細亞」)《Северная Азия》の一九二五年一・二合併號に要約の形で揭載されたことのあるものである。「ウラルを經てオビ河よりエニセイ河にいたる交通路」は、著者が物質文化アカデミアで爲した數回にわたる連續講演の題目として取扱つたところのものである。最後に、ウラル以東へのロシア民族の進出について述べてゐる章の主要な部分は、ロシア地學協會の北露委員會および北部植民委員會から出版された「北部および西伯利植民史概觀」《Очерки по истории колонизации Севера и Сибири》の第二分冊中に收錄された「十九世紀中葉までの西伯利移民史概觀」《Исторический очерк заселения Сибири до половины XIX века》に入つたものである。

右にあげたそれぞれの部門は、全體としての構成をたもつために著るしい程度に書きかへたり補足したりした。

この卷に續いて出版を豫定してゐる諸卷は次のやうなプランに依るつもりである。

一、十六・七世紀における西伯利の異民族

二、十六・七世紀におけるロシアの植民

イ、西伯利におけるロシア人の商業および産業

ロ、軍事的占領

ハ、農業

調—0523

0022

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ニ、教會・移民
ホ、交通手段
ヘ、一般的總括
三、十六・七世紀における西伯利の統治と財政
一九二六年十二月三十一日
エス・バフルーシン
六

第一篇　ウラル以東へのロシア民族の進出

第一章　十六世紀末までのロシア民族の東漸

【ロシア民族の西伯利進出と東歐平原占領との關係】

ウラルから太平洋にいたる全領域の征服をもつて完遂された北東アジアへのロシア人の進出は、ヴェ・クリュチェフスキイが「ロシア史」のなかで美事に解明してゐるやうに、ロシア民族が植民的方法をもつてした東歐大平原占領の長い過程の延長にほかならぬ。その進出の性質、領土獲得の方法と目的、移住民たちがその土地で定住してゆく諸關係は、十七世紀においても、將たそれ以後においても、フィン族が支配してゐた時代のヴォルガ沿岸地方におけるスラヴ民族の植民方法を反復踏襲したものであつて、ウラル以東にたいする植民の現象を研究すれば、幾世紀かの昔にロシアの本土でおこつたもろもろの過程が具體的な姿ではつきりとそこに窺はれるのである。〔五〕

【ウラル以東へロシア民族進出の初期】

ロシア民族のウラル以東への進出は非常に早期からはじまつてゐたことが明らかになつてゐる。ノ

調—0523
0023
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ヴゴロドはゴート人たちが住む「海の彼方（ザモルスキイ）」との貿易のために毛皮を必要とした[六]ので、後にモスクワがアジアの北部地方を征服したのと同様な迅速さをもつて産業的利益を目的とする掠奪行動圏を「森の彼方（ザヴォロチイエ）」の全地域におよぼし、そして夙に十一世紀のころには「暗の國」「ユグラの國、サモヤヂの國」〔七〕にいたる交通路の發見に動機をあたへたペチョラ交通路の支配者となつてゐた。

「斷崖絶壁と雪と密林で越えることができない」＊と考へられてゐたこの難路が征服されたのは、おそらく十二世紀初ごろであらうと想像される。

「森の彼方（ザヴォロチイエ）」へのロシア人の植民は、しかし長いあひだドヴィナ河の流域地方までにとどまつてゐた。＊＊

＊十二世紀初よりも前の年代記に載つてゐる有名なギュリヤタ・ロゴヴィチとの談話から推測するとノヴゴロド人たちは早くもその頃までにペチョラ河の沿岸まで進出してゐるのであるが、その先きウラル連山にいたる交通路やウラル山中の道路のことについては彼は風評によつて知つてゐたにすぎぬ。またイパチェフスカヤ年代記の一一一六年「永久四年」に相當する記錄の筆者は、丁度その年にヲドガの市長のところで「ユグラとサモヤヂの國」へ旅行した「男たち」について物語つてゐるが、年代記全集」Ⅱ. C. Ⅱ. 第二卷、第二版二七頁。

＊＊プストオゼロ砦市は十五世紀末にモスクワの軍役人たちの手でその基礎が築かれたのであるが、イジマ河やツィリマ河沿岸の自由村落は十六世紀中葉になつてようやく發生したにすぎぬ。

【毛皮の需要とノヴゴロド人の東漸】

北部ウラルの二つの斜面――ペチョラとユグラ――は「黒貂（ソボル）、白貂、黒狐、白狐、白狐魚（ベルイ・エズィーブィ）牙（海豹の牙）」＊などの産業富源がゆたかであつたので、ノヴゴロドにとつては特別の意義をもつてゐた。これらの物産はその頃すでに南部地方のロシア人やバルチック沿岸のドイツ人の市場で需要されてゐたのである。

ノヴゴロド人たちは毛皮を求めて「狩獵や採取のため」、野獸からの利益を「稼ぐ」ため、栗鼠や黒貂を「森林の中で狩獵する」ため、そして原住民たちから毛皮税（ヤサーク）〔八〕をとり立てたり、彼らとの間に生毛皮と鐵製品の交易をしたりするため、遠くこの地方へでかけていつた。

＊「年代記全集」第二卷、第二版五〇四頁。

【ノヴゴロド人の毛皮産業組織】

ノヴゴロドの東方進出はある程度の組織をもつておこなはれた。狩獵産業に參加するには有りふれた獵師たちの手には負へぬほどの資本を要した。必要な資本を産業者たちに貸しつけたり、或はまた自分のリスクを賭けて利得のために貿易や狩獵をいとなむノヴゴロドの資本家たちが、植民地の經營に優越的な役割を占めてゐたのはさうした理由によるのである。

十四世紀中葉に、ユグラへ交易にでかけた商人たちは特殊な産業組合ともいふべき「ユゴルシチナ」

十六世紀末までのロシア民族の東漸

調―0523

0024

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を組織してゐて、一三六五年（正平二〇年）にレヂャチナ町に建立された石造のトロイツァ寺院がこの組合の講元となつてゐた。

【ノヴゴロド貴族の活動】

毛皮とロシア製雑貨との交易に勢力を占めてゐた商人たちと肩をならべて、ノヴゴロドの貴族たちがまた「森の彼方（ザヴォロージエ）」でさかんに活動した。彼らはその家來どもをペチョラやユグラへ遣はし、その家來どもはまた「ユグラの部舎・土侯（クニャージ）」らと、親密な關係をむすんで、「大ノヴゴロドの旦那衆」と巧みに競爭したのである。彼らはノヴゴロド政廳の命令を俟たずに勝手氣ままに「火藥を蓄積して」これを掠奪や狩獵に使用し、流賊の徒黨を組織してゐた。かうした野武士的・狩獵産業的な遠征が基礎となつて、ドヴィナ河畔のオルレッツのごとき防備をほどこした、堅固なゴロドーク（小砦市）〔九〕が異民族部落の間に發生していつた。そしてロシア植民地の邊境では森の彼方に點々と飛石をおいたやうにノヴゴロド貴族たちのあの廣大な莊園（ラチフンディア）が建設され、それが將來の征服と侵略の足場となつたのである。*

*ノヴゴロドの植民地については エス・フェ・プラトノフ著「ロシア北部の過去」《Прошлое русского севера》を參照。オルレツの歴史は非常に興味深いものである。一三四二年（「康永元年」）にノヴゴロドの富裕な貴族ルカ・ヴルフォロメエフは「ノヴゴロドに叛いて……火藥を蓄積し」ドヴィナ河を越えて去りその對岸にオルレッツ砦市を建設した。この砦市は一三八九年〔元中元年〕にノヴゴロド人が火砲の力をかりて四週間の激戰後ようやく攻め落したほど「堅固で大きな」砦市であつた。ルカはこの砦市を足場として自分の領地の擴張に着手し、「ドヴィナ河畔の森の彼方（ザヴォロージエ）」の全地域を征服した上、敎會領地をことごとく蹂躙した。また彼の子アンツィフルは「ヴォルガへ遠征にでかけた。」これらの戰爭中にルカは討死したのであるが、そのあとでオルレッツは別の冒險者アンファル・ニキイティンが兄弟たちといつしよに守備を固めてこの砦市を東方へ向つての領土擴張の根據地とした。

アンファルは一三六〇年〔正平一五年〕にカマ河の流域へ配下の軍隊を派遣、ゾロトイ・オルドス「金銀汗國」の臣下であるジュコーチン騎組侯の居城のあるジュコーチン市を占領した。ニキイティンの部將たちは廣大な世襲領地を建設するとともにモスクワ大侯國の庇護の下に走りドヴィナ河畔にあるノヴゴロドの領地を劫掠した。ノヴゴロド人は前述のやうに一三八九年に長期にわたる攻圍戰ののちオルレッツ砦市を占領したが、その時「市中は根こそぎに掠奪され」ニキイティンの部下は鐵鎖につながれてノヴゴロドに送られ、部將の一人「イワンは首を刎ねられた」のである。「ノヴゴロド年代記」《Новгородские летописи》その他。

【ノヴゴロド商人と領主の經濟競爭】

ノヴゴロドの東方領地の開發に參加した企業家たちの間に立ちまじつて、その地においてノヴゴロド上層商人階級と經濟的方面で競爭者となつて現はれたのは代々の封建領主たちである。彼らはもつとも有利な産業を自分の掌中に獨占しようと熱中してそのためにノヴゴロド上層商人階級の權利や利益を蹂躙した。近郊の眼ぼしい漁獵地を手にいれ「市周六十露里内の漁獵區」の獨占權を獲得し、ヴォルホフ河の「鴨獵區」や郊外の「兎獵區」を奪ひあげようと畫策した。それだけで尚ほ滿足せず彼

調—0523

0025

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

らはまた権力の手を遠くウラルの森の彼方に延ばしてテルスカヤ河畔へ漁業隊を派遣する獨占権まで要求した。さらにアンドレイ・ボゴリュブスキイは森の彼方からあがる毛皮税を全部自分の手に收めようとした。この異種人（チュジエロードスイ・チェロヴェク）――封建領主――のノヴゴロド産業地にたいする侵略は、必然にその地の資本家團の側から激烈な反抗に逢はざるをえなかつた。封建領主とのあひだに捲きおこされた産業問題をめぐるこの葛藤は、多くの場合に外交手段によつて解決されたのであるが、時として実鋭な衝突がおこり、領主の更迭をみるまでにいたつてゐる。ノヴゴロド人らは自分たちの占有してゐた森の彼方の天然富源の権利を領主たちが侵害するのを意固地に警戒し、領主の家來が「狩り」にゆくのを途中で阻止したりして、この方面における領主らの権利を極度に制限するといふ目的をとげたのである。

ノヴゴロドの商人階級と貴族階級とはこのやうな狀態のもとでウラル地方における産業の支配者としての地歩を持續していつた。

【モスクワ大侯領と毛皮産地との關係】

モスクワ大侯領の邊境でもこれとよく似た過程が觀察される。ここでもやはり「ユグラやペチョラとよばれる異敎徒（バグンスキー・リュデー）の國や、チュードやサモエデの住む國々へ」は、商人や狩獵産業者たちが先頭に立つて出かけていつたのである。*

＊ペレスラフスキイの商人團と「異敎徒との交易關係」については夙に「ドミトリイ・ペリルツキイの生涯」（十四世紀）の中で物語られてゐる。上掲の引用文はエム・イ・スミルノフの「ペレスラヴリ・ザレススキイ。彼の過去と現在」（Переславль-Залесский, его прошлое и настоящее）（モスクワ、一九一一年版）から抜萃した。

【ペルミ大主敎領地とストロガノフ家の私領地】

ウスチュグの町からウイチェグダ河畔――ペルミの地へは「便利ないゝ交通路」がつづいてゐて、そのため此町は非常に早い時代からウイチェグダ河流域のズイリァン族〔一〇〕との通商交易やペルミの森林にいたる狩獵産業者の根據地となつてゐた。十四世紀の後半にウィマ河の河口にペルミ大主敎の世襲領地が形成されて、最初まづウイマ地方の原住民族の部會土侯たち、のちには後ウラル地方のオスチァク族〔一一〕がその庇護下の領民となつてゐた。その後カザンが征服〔一二〕されてからは、狩獵者たちは、カマ河を航行してウラル以東の地へでかけ、それと時をおなじくしてカマ河の上流地方にはストロガノフ家の領地が網の目をひろげ、ウラルを越えてトボール河の流域まで逐次にそれが擴張され、ストロガノフ家の「傭兵カザック」の遠征〔一三〕は、遂にロシア人をしてイルトゥイシュ河畔に侵入する可能性をあたへたのである。

十六世紀末までのロシア民族の東漸

調―0523
0026
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【ロシア人のウラル以東進出の二つの方法】

かくして初期時代におけるウラル以東へのロシア人の進出は、きはめて乏しい報道源泉によつて判断しうるところによると、二つの方法をもつて行はれたもののごとくである。すなはち、最初には交易や狩獵のために年々でかけた商人や狩獵者たちが先頭に立つてまづ道を切り拓いてそれを踏みかため、それが狩獵者の自由村落や冬營所によつて逐次に發展していつた。すると彼らの背後から大企業家がでかけて新らしく發見された地域に防備を固め、かくして邊境地方の根據地として建設された小さな砦市を利用して、異民族が居住する地方の占領を行つていつた。

【國家的占領の躊躇】

占領を目的として國家が手をだしはじめたのは遙かに後のことである。東方への領土擴張といふ點においては、ノヴゴロド共和國もモスクワ國家も私人の活動の成果を利用することを豫定計畫のうちに置きながら、極めて愼重な行動をとつてゐた。この點において歷代モスクワ大侯の政策はとくにはつきりしてゐる。彼らは幾世紀かの長い間にわたりノヴゴロドとの協定を遵守しつつその狩獵隊を北地へ送り、また「ドヴィナ河畔の貴族（ボヤール）」たちが獨立獲得のために鬪ふのを支持し、ペルミ大主教がウイチェグダ河畔の異民族のあひだにキリスト教の布教をすることを助けるといふ程度にとどめ、その

後、かなりの躊躇逡巡とともにストロガノフ一族の西伯利侵入を裁可したのである。

【十六世紀以前の進出が遲々たる理由】

ほとんど確かめがたいほど古代からはじまつてゐるロシア人のウラル以東への進出は、十六世紀にいたるまではきはめて遲々としておこなはれてゐた。カマ河へでる交通路はカザンのタタール族によつて閉鎖されてをり、ペチョラ河を越えてゆく交通路はロシアの中心地方からあまりに遠くかけ離れてゐた。そして毛皮にたいする需要はまだそれほど多くはなかつたし、ノヴゴロドの沒落およびドイツ人商館の閉鎖と時を同じくして起つたハンザ同盟の貿易活動の衰退とともに毛皮の需要がますます減少した（一四）のであつた。さういふ事情のために毛皮市場の要求は長いあひだ主としてウラルの手前――ペチョラ河畔やペルミの狩獵地方だけでこれを滿たしておいたのである。

【ヘルベルシュタイン時代の毛皮産地】

まだヘルベルシュタインがロシアに來た時代（一五）には、ごく上等な黒貂といへば例外なしにペチョラ河畔から産出し、そして上質の栗鼠はカザン、ペルミ、ヴャトカ、それからヴォログダなどの諸州からいで、西伯利からはそのうちのほんの一部分が齎らされたにすぎなかつた。十六世紀七〇年代

調一0523

0027

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

〔元龜年間〕にその原本が書かれた商業全書《Торговая книга》をみると、第一にベルミ産の「黒貂（ソボル）」が擧げられてゐるし、またベルミからモスクワへ黒貂を送つたことについては同じ七〇年代のストロガノフ家の書狀に述べられてゐる。*

*ウヴェンスキイ「十六・七世紀の商家」《Торг. дом XVI-XVII в.》（ザオゼルスキイおよびカシン監修「ロシア社會經濟史の諸記念物」《Памятники Соц.-эк. истории России》中に收錄）

一六

【十六世紀中葉における東方進出の刺戟】

しかし十六世紀中葉になると、毛皮の需要を非常に高めるとともに、それまでよりも熱烈な東方への進出を刺戟すべき必然的な變化が國内經濟生活の上におこつた。それは西歐および東洋との貿易關係の發展である。

すでに一五一四年〔永正一一年〕のスモレンスク占領によつてポーランドおよびリスアニアへの貿易上の門戸がひらかれ、モスクワ商業階級のなかから特別の商人層「スモリャニン」が獨立分離する機緣をあたへられた。それとともに決定的な意義をもたらしたのは一五五三年〔天文二二年〕にロシアへの海上航路がイギリス人によつて發見されたこと、そしてまづ最初ルゴディワ（一五五八年――一五八一年）〔永祿元年――天正九年〕に、その後バルチック海で失敗したのち白海のアルハンゲリスクへ一五八五年〔天正一三年〕にロシアの商港が設けられたことである。同時にまたカザンおよびアストラハンの占領によつてヴォルガ河による全通商路がモスクワ國家の掌中に歸し、中央アジアへの通路がひらかれ、一五六三年〔永祿六年〕にはシェマハとの間に通商條約が結ばれ、そして一五六七年〔永祿一〇年〕にはブハラおよびヒワ兩汗國の公使館がモスクワに設けられるといふ事態にいたつた。〔一六〕

【東西からの毛皮註文の殺到】

ロシアの市場へは、西からも東からもさまざまな原料や膠だしい毛皮の注文が殺到した。

「上等な黒貂は、疵のない、腹毛があつて爪の附いたもので、どこの國でもいゝ値である」と商業全書には書かれてゐる。フレッチァの述べてゐるところによると、或る年には「トルコ、ペルシア、ブハラ、グルジア、アルメニア、その他若干のキリスト教國の商人たち」はまるでお伽噺のやうに多額の毛皮を輸出していつた。〔一七〕

ライプチッヒでは十六世紀にロシア産毛皮の盛んな見本市が立つてゐた。イギリス商館の代表者たちは毛皮買入れのために北部海岸のあらゆる地方を船にのつて漁りまはり、ペチョラ河の沿岸やウラルのロゴウイの町へでかけて行き、十六世紀八十年代初ごろ〔天正年間〕には、彼らはすでにウラル

一七

調―0523

0028

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を越えてオビ河の河畔まで入りこんで居たのである。〔一八〕

ロシア人商人たちの中にもまた、ステパン・トヴェルデコフのやうに西ヨーロッパとの連絡を自分の方から直接つけようと企てた者があらはれた。すべての毛皮は殆んどそつくり外國向きの需要に充てられた。十七世紀の七十年代（寛文、延寶年間）にモスクワで「黒貂の賣物」を獲得することは殆んど不可能であつて、これを得るためにはホルモゴルへ送りつけられる柔軟毛皮をその途中で手に入れるため「ウイチェグダ河やウイマ河の沿岸地方、ペルミの町へ」人を派遣しなければならなかつた。

ソリ・カムスカヤの町においてさへ次ぎのやうな場合があつた。一六一四年（慶長一九年）にニキタ・ストロガノフは書いてゐる。

「どのやうな黒貂も、とても手にいれることはできぬ。上等品ばかりか下等品でさへも……春から商人たちの手許にあつた黒貂はそつくりホルモゴルへ持つてゆかれて、ドイツ製の雜貨と交易されてしまつた。」*

＊ウヴェデンスキイ、前揭書。

【海外の毛皮需要と毛皮相場との關係】

モスクワの貿易商人が、一六二九年（寛永六年）に書き殘してゐるところによると、國内の毛皮相場は「アルハンゲリスク港からどれだけの數量の黒貂がドイツ人やイギリス人の國へ」輸出されたかによつて決まつた。つまり外國の需要によつて相場が決定されたのである。*

＊西伯利局文書。二四號。十六世紀初における毛皮相場の騰貴に輸出がいかに影響したかについてはポール・ヨヴィの興味ある報道を參照。「外國文筆家のロシア關係文獻集」《Иностр. писат. о России》四〇―四一頁）

外國市場の側から端緒がひらかれた毛皮の需要がロシアの産業者や企業家の眼をさまし彼らはこれに刺戟されて、新らしい「黒貂産地」の發見と獲得に夢中になつた。そしてウラル以東への交通路の「探査」が熱心にはじめられたのである。

【ストロガノフ一家の活動とエルマクの遠征】

一五七四年（天正二年）にストロガノフ一族は私財を投じてトボル河、イルトゥイシュ河、オビ河の沿岸その他に武裝根據地を建設して、西伯利の奥地ふかく入りこむ道路を獲得しようと計畫的に活動をはじめた。十六世紀七十年代の末（天正年間）にストロガノフ家に雇はれてゐたオランダ人オリヴェイ・ブリュンネルは主人の命をうけて陸路サモエド族の領地を經て海洋にいで、それから更に海岸ぞひにペチョラ河の河口から東へオビ河へでる交通路の探檢をした。その後またストロガノフは彼れを隊長として海路とオビ河とによつて支那にいたる交通路を發見するために探檢隊を組織してゐる。

調―0523

0029

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

よそ一五八〇年頃（天正八年頃）には、やはりストロガノフの手でエルマクを隊長とする「傭兵カザック」の遠征が企てられ、遂にそれが西伯利汗國を壞滅せしめたのである。それから稍や時をへてフョドル・イワノヴィチ帝の治世（一九に モスクワから來たルカは「オビ河の河口を踏査」するために海路探檢隊を組織してゐる。

このやうに企業家や「狩獵者」たちがウラルの東へ進出していつた結果、十六世紀の末ごろまでには西部西伯利地方の一部は、かなりの程度に踏査探檢されて、ロシア人の手に歸してゐた。

【新毛皮産地マンガゼイアの發見】

北部においては、ペチョルスキイ交通路をたどつて進出したロシア人産業者によつて、「ユグラの國の彼方にある東の國」といはれる毛皮獸の豐富なマンガゼイアが發見された。マンガゼイアのことがロシアの文獻に最初に記されてゐるのは十六世紀初（文龜、永正年間）である。*

十六世紀の五十年代にはマンガゼイアに關する物語がイギリス人の興味をひき、そして彼らの影響

* 「マンガゼイアのサモエヂの人々」のことを初めて書いてゐる「珍奇な人間の話」〔二〇〕《Inaame o rerotones mesure-LELY》の出版は普通十五世紀とされてゐるが、この物語の筆者に關するジェンキンソンの報道から判斷すると、この古書がノゲゴロドから出たといふことは確定できぬ。マンガゼイアといふのはオビ灣東岸一帶の地域にあたへられた名稱である。

によつて海の産業者たちが一層そこへ殺到するやうになつたものであらう。十六世紀の中葉以降にはすでにオビ灣への航海に關する産業者たちの正確な記錄がある。その七十年代になるとマンガゼイアはもうロシア人の間によく知られてゐて、フョドル・イワノヴィチ帝時代にはモスクワの市場では黑貂といへばペチョラ産のものとともにマンガゼイア産のものが上等品とされてゐたのである。

【柵と砦市の建設】

十六世紀末には商人や産業者たちは海岸地方の町々からマンガゼイアへ出かけていつてそこに防備をほどこした植民部落を設け、事實上征服の根據をかためてゐた。彼らは「マンガゼイアに到るまでの途上や、マンガゼイアに柵や小砦市を建設し、そして一六〇一年（慶長六年）にさうした小砦市のうちの一つの中からマンガゼイ市が發生した。またその時代にタズ河の上流にはやはり防備をほどこした別の冬營所として「ズイリァンスキイ小砦市（ゴロドーク）」があつた。商人たちはこれらの砦市を根據にして原住民に毛皮稅を課し「まるで强盜のやうに彼等から貢稅をかき集めて自分のものにした」のである。

【ツングスカ河、エニセイ河流域への侵入】

ロシア人たちはマンガゼイアからさらにツングスカ河畔へ侵入していつた。このことは一五七七年

十六世紀末までのロシア民族の東漸

調—0523

0030

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

――一五七八年（天正五年――六年）にハインリヒ・シュタデン（二二）がゲオルグ・ファルデン伯に提出した報告書のなかに記載されてゐる。*

* シュタデンの「過去の記録」《Zamnoi izpomnoto》第二巻。シュタデンは一五六四年――一五七六年にモスクワに滞在した。

ロシア人が十六世紀末（文祿、慶長年間）にエニセイ河畔まで到達してゐたことは疑ひなく、商人たちはそこへ商品をたづさへていつて交易し、産業者はまた漁獵のために「海路とオビ河を航行して」そこへでかけていつたのである。このことについては夙に一五九〇年代の半ば（文祿年間）にオランダ人の知るところとなつてゐる。

【カザン汗國の沒落とカマ河交通路の掌握】

十六世紀中葉には西伯利への運輸交通はまた別の交通路――カマ河およびその支流によつて盛んにおこなはれた。ペルミの住民たちは夙に十六世紀半ば頃に「自分の商品を販賣するため」にチェメスキイ連水陸路へでかけていつた。一五五二年（天文二一年）にカザンが沒落するとともにこの交通路は完全に自由なものとなり、狩獵にでかける「産業者」や「オスチァク族の産物を買ひ入れる」商人たちが隊伍をなしてこの交通路から押しだしていつた。

一五七二年（元龜三年）にチェレミス族（二二）の叛亂がおこり、ロシア商人やカマ河およびチュソワ河の「漁師團」が多數に捉へられ、その中の八十七人は異民族に殺され、他の者は原住民の部會（クヤージ）らと連絡があつたお蔭で命を助けられた。

漁獵者團の背後についてストロガノフ一家もまた「ユグラの山の彼方」へ根づよく進出していつた。彼らはカマ河畔に根據をかためると同時にすでに一五七四年（天正二年）にはトボール河およびその支流、さらにイルトゥイシュ河の河畔に砦柵を築く勅許をうけ、これを産業上の交通の足場として進んだ。

【オスチァク族とモスクワ侯國の關係】

要するにトゥラ河の流域（十六世紀時代にこの地方は「タッチァ」*と呼ばれてゐた）はエルマクの遠征よりも前にすでにロシア人の支配するところとなつてゐたのである。一五七四年（天正二年）の公文書によると「タフチァ」はカザン汗國へ毛皮稅を納めてゐると同時に「タノチァ地方」に住んでゐたオスチァク族はまたモスクワ侯國の權力をも承認しはじめてゐる。だから、十六世紀の六、七十年代（永祿、天正年間）にモスクワにゐたシュタデンは「タフチァ」をロシア領土の中へいれてゐる。*

* 十六世紀末までのロシア民族の東漸

調―0523

0031

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

*「タフチァ」に關する問題は今日まで明らかに解決されてゐない。後代の文書にはこの名稱は保存されてゐない。何れにせよそれが民族の名でなくトボール河上流地方の地名であることは一五七四年の公文書によつて判斷できる。「タフチァ」の名稱は十六世紀七十年代の文書に記されてゐるだけで、それ以後には別の名に變つたことは明らかである。トゥラ河流域地方をこれに當てるのが穩當であらう。

ネボシュタデンの前揭書。

【西伯利汗國の征服】

ストロガノフ一家は一五七四年（天正二年）に「タフチァとトボール河」沿岸の漁獵區を大仕掛けに獲得する計畫を立て、それがおよそ一五八〇年頃（天正八年頃）のエルマク遠征隊の組織となり、そして彼ら一家の私領地の境界をウラルからトボール河の河口まで、すなはち舊西伯利汗國の全領域に擴張することとなつたのである。ストロガノフ家の私財をもつて征服された西伯利の新領地は、或る期間は他のストロガノフ家の私領地と同樣の仕きたりでその直接支配に委せられ、この一家に屬する土地資源はますます厖大なものとなつていつた。

【モスクワ國家の毛皮貿易と侵略政策】

ところが十六世紀末（永祿、慶長年間）になつてウラル以東の西伯利侵略の事業にあたらしい轉機がおこつた。政府がこの仕事にたいして積極的に立ち入つてきたのである。そのおもな動機はやはり個人の企業關係におけるとおなじに、ヨーロッパ商品との貿易に必要な毛皮にたいする政府の需要であつた。普通いつでも、また何處でもさうである樣に、モスクワ國家の官庫は貿易發展の初期に於て新たに發達をとげつつある貿易事業の最も大規模な代表者となり、時には獨占的な形をとつて市場に立ちあらはれた。そのために政府は、個人企業家におとらず毛皮の產地である諸地方の侵略に關心をもつたのである。

だがまた一面において國家は充分に好く組織された機構をもたず、それに必要な强靱性も、經驗によつて鍛へあげられた巧妙さも會得してはゐなかつたので、政府の競爭者である個人企業家の實績のあとに追隨しようといふ考へをもつて、きはめて愼重な態度をとりつづけてゐた。モスクワ國家がはじめて毛皮の國へ侵略を企てたのは十五世紀後半のことである。それは畢竟ノヴゴロド諸領地の占領といふ結果になつたのであるが、この規模において おどろくべき大袈裟な一四八五年および一四九九年――一五〇〇年（文明一七年および明應八年――九年）の遠征は、結局において僅かにモスクワ諸侯がオビ河下流地方に住むオスチァク族に名目上の支配權を設定するといふ、ごく意義のすくない結末をもたらしたにすぎぬ。十六世紀中葉以降になつてようやくウラル以東にたいする計畫的な侵入に着手したが、それも最初は軍事的手段よりもむしろ外交的手段をもつて行はれたのである。

調―0523

0032

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【西伯利汗の毛皮貢納】

カザン汗國の沒落後、一五五五年（弘治元年）に、西伯利汗國の君主エヂガル汗は、王位爭奪の競爭者たるブハラの汗たちに壓迫されたため、自から進んでモスクワの臣下たることを承認し、毛皮貢納の義務を負ふた。〔二三〕

彼れが戰ひに敗れて死んだのち、その地位にとつて代つたクチュム汗は、モスクワにたいする臣屬關係を卽座に破棄するといふ決意をせず、或る期間はモスクワへの貢納をつづけてゐた。同時にまたモスクワ政府は一五五八年（永祿元年）に「ユーグラの國」へ毛皮稅を取り立てるために收稅人を派遣してゐる。＊

＊ ミルレル蒐集の公文書拔萃による。一五五八年のこの公文書の原文は現在保存されてをらぬ。

【政府と個人企業との利害衝突】

ウラル以東の異民族との關係においては、この樣にして、或る程度まで一定の組織だつた政策がつくり上げられていつた。すなはち、モスクワは彼らをその庇護の下におき「他の方面からの攻擊を防護してやる」が、その代りに交換條件として「すべての人民一人から黑貂（毛皮）一枚づつの貢納」を要求したのである。ストロガノフ一家の掠奪的な政策がこの體制を相當に妨害した。そしてモスクワからストロガノフ家にたいして

「ヴオグル族、ヴォチャク族またはベルイム族らに政府が與へた特典を無視し、これを虐待迫害し、軍隊をもつて襲擊し、それによつて西伯利のサルタンたちを逃亡させ、政府と彼らとの間に紛糾の原因をつくる。」

といふ叱責の勅書が幾度か反復發送されてゐる。

政府と個人企業家との利害關係は西伯利征服の初期においてこのやうに相衝突したのである。

西伯利の西部における產業的侵略がその後ますます露骨な形をとるやうになると同時に、政府は逐次にその政策を變更していつた。そしてその侵略を自分の利益になるやうに利用した。ストロガノフ家の「傭兵カザック」のカシュルイク占領（二四）が動機となつて、政府は一五八四年（天正一二年）にボルホフスキイ侯を指揮官（後にイワン・マンスーロフが代つた）としてイルトゥイシュ河畔へ官軍を出動させたし、またタズ灣の沿岸で產業者たちが要塞を築いたのに動かされて、政府みづからの手で一六〇〇年および一六〇一年（慶長五年、六年）の兩度に、マンガゼイアへの遠征隊を發遣したのである。

國家の側から競爭が行はれるといふことは、最初に先鞭をつけてウラル以東へ侵入してゐた雜多な

調—0523
0033
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

種類のロシア人企業者側から、隠然たる反抗をよび起すこととなつた。マンガゼイアの初代軍務知事にあたへられた公文書の中には、次ぎのやうなことが起りうべき事として公然と豫見されてゐる。

「プストオゼロの町民、ウイマ、ズイリアン、ベルミその他の町々の商人どもは從前どほり掠奪をおこなひ、且つまたマンガゼイアやエニセイなどで彼らは各種の禁制品を販賣するため、その地方のサモエド族に向つて、マンガゼイアにある國家の櫛を絕滅するやうに煽動するであらう。」

一六〇〇年（慶長五年）の有名なサモエド族の遠征探檢隊虐殺事件は、ロシア人商人の參畫のもとに起つたのだと取沙汰されたほどである。

【西伯利汗國の首都イスケル城】

ロシアの西伯利侵略の途上には、最初のうちかなり強大なものと思はれてゐたタタール族の國家が障壁として横はつてゐた。この國家は、かつて勢威隆々たりし金帳汗國（ゾロトーオルドス）の一つの分身である西伯利帳（シビルスカヤ）幕（ユルタ）國で、十六世紀時代におけるその政治的中心地はトボール河とイルトゥイシュ河の合流點に「高々と聳えたつ山上」に在る「カシュルイク」城、または「イスケル」城とよばれるものであつた。これは舊都チュメニ（チンギ・トゥラ）に代つて建てられた彼らの首都である。*

＊ロシア人たちはこのクチュム汗の首都のことを「シビリ」と稱してゐた。現在タタール族はそれを「イスケル」と呼んでゐる「カシュルイク」といふのはレミョゾフがこの首都を呼んだ名稱である。

西伯利帳幕國については追つて出版すべき「西伯利植民史概觀」第二巻に特別の一章を充てて記述する。

【西伯利汗國の統治組織と汗位爭奪】

西伯利の「帳幕國」は、十六世紀時代においては兎も角も獨立した形をもち、そして西伯利の「サルタン」の權力下に、きはめて微弱な力で統合されてゐた幾つかのタタール族や原住民族の土侯領から成つてゐた。いくつもの互ひに統一のない民族領に分裂し、そして全く形式的にだけタタール族、オスチャク族、ヴォグル族などの部酋・土侯や、回教や、原始教のそれぞれの權力に統率されたこの半遊牧國家は、少數ではあるがより文化の高い、そして近代的な武器をもつた敵の襲撃を防ぐ力はなかつた。西伯利國家の力が微弱であつたため、ブハラの君侯やその地の「タイブーギン部族」の領主（ベキ）たちの間では、たえず西伯利の王位爭奪をめぐつて葛藤がつづけられてゐた。エルマクの遠征がおこなはれるすこし前に、ブハラ汗ムルトザの子クチュムは西伯利の首都占領に成功し、その地にいままで君臨してゐたエヂガルとその弟ベク・ブウラタを殺したのであるが、この後者の子セイド・アフマット（セイヂャク）は、尙ほ武運にめぐまれた勝利者をたえず脅かしてゐた。

【クチュム汗のモスクワ離反】

調—0523

0034

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

西伯利の土侯たちは自分らが無力なことを自覚してゐたので、カザン汗國が沒落すると卽座にモスクワ國家の被護者となることを承認し、エヂガルも、それからエヂガルを滅ぼしてこれに代つたクチュム汗も一時はモスクワへ貢納の誓約をした。しかしこの服從はただ表面だけのことであつた。クチュムは遠隔の地にあることを利用して貢納の義務を履行しなかつたばかりか、やがてロシアの新領土に向つて侵略的徵候をあらはし、西伯利の首都からウラルの東方にいたる河川交通路を奪取し、ペルイマ河地方のヴォグル族をその支配下に服せしめ、さらに「タフチァを自分の領土」とし、モスクワの「臣民たるオスチァク族」から毛皮稅を徵收し、さらに一五七三年（天正元年）に朔のマフメット・クルをしてペルミへの「道路を踏査する」と稱してロシア領内へ侵入せしめたのである。

【エルマク遠征の動機と成功の原因】

ごく小人數の手兵をもつておこなはれたエルマクの遠征が、當時ロシア人の間でその勢力をかなり大きくみられてゐた西伯利汗國の占領を、最初から意圖してゐたとは考へられぬ。おそらく「場合によつては戰爭もするが、場合によつては戰さをせず」にただ原住民から毛皮稅を取りあげるだけで、獲物があつたらそれを携へて引きあげるといふ程度の計畫にすぎなかつたであらう。ところがこの企業が意想外の大成功をかち得ることとなつたのである。最初の一擊とともに西伯利汗國は土崩瓦壞し、そしてクチュムの第一回の反擊が失敗に歸するや、彼れの被護下にあつた韃靼侯や部酋らが相踵いで降伏してしまつた。元來が侵入者であるタタール族と原住異民族との間を結びつけてゐる關係はさらに一層薄弱であつた。カザック隊がカシュルイクへ進擊するのをクチュムがチュワシュ附近で喰ひ止めようとした時、まづ第一にクチュムを棄てて四方へ逃げ去つてしまつたのはヴォグル族やオスチァク族の土侯や部酋たちで、それはクチュムが再び起つ能はざる敗衂を受ける動機となつた。爾來もはや捲土重來の抵抗力をうしなつたクチュム汗はその首都を放棄して、自分の同族とともに草原地帶へ遊牧し去つた。そこでストロガノフ家の「傭兵カザック」たちは無防備の城砦を易々と占領し、いままでクチュム汗の被護下に立つてゐた近鄕の異民族やタタール族の土侯らは、立ちどころに戰勝者の前に「毛皮稅を捧げた」のである。

このやうにして、ストロガノフ家が計畫した遠征はその第一着手において、いとも易々とクチュム汗の「帳幕（ユルタ）」の掃滅を完遂した。

【エルマク遠征の結果】

十六世紀末までのロシア民族の東漸

調—0523

0035

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

流賊的な偶然の襲撃にすぎぬエルマクの遠征が國家的意義をもつ大事業に轉化していつた。それはフェルナンデ・ルカの私財をもつて計畫されたピサロとアルマグロの遠征がペルーをスペイン王の版圖に加へるといふ大事業に展開して行つたのと相似てゐる。だがこの新占領地を私人の力で維持することは不可能である。カザックたちもストロガノフ自身もカシュルイクの占領後すぐさまモスクワに向つて援助を願ひ出てゐるのである。

モスクワでは最初のころストロガノフの進擊をあまり同情をもつて迎へなかつた。遠い邊境地方にたいして武力的手段をもつて確固たる成果を收める自信がなかつたためと、イワン三世帝〔一五〕以來採られてきた異民族統治の傳統政策を破壞するものと見たからである。

ソリ・ウイチェグダの製鹽業者〔ストロガノフ家〕によつて企てられた仕事が西伯利國家の首都の占領にまで發展すると、政府はいままでの戰術を變更したが、それでもやはり新占領地をストロガノフ家の支配から取りあげるといふことはせず、ただ彼らに軍事的援助をあたへる必要があると決定した。そして一五八四年〔天正一二年〕にセミヨン・ボルホフスキイ侯およびイワン・グルホフを指揮官とする五百人の軍隊を西伯利へ派遣した。

【國家的遠征計畫の失敗とエルマクの戰死】

現地の狀況もよく知らず、その上に充分な準備をせずに進發したボルホフスキイ遠征隊は、その任務を完遂することはできなかつた。食料の缺乏に惱んだ上、クチュム汗の襲擊にあつて包圍に陷り、エルマクは戰死をとげ、ボルホフスキイ侯は飢餓のために仆れ、ロシア人たちは翌春になつて餘儀なくカシュルイクを放棄し、グルホフを隊長にしてオビ河およびペチョラ河を航行してロシア本國へ引返してしまつた。

【西伯利最初のロシア人の町】

ボルホフスキイ侯に代つて新たに派遣された軍長イワン・マンスーロフはイルトゥイシュ河の河口で氷にとぢ込められてそこで冬營し、西伯利における最初のロシア人の町――オブスキイ・ゴロドーク」の基礎をその地に築き、河航の開通を待つてペチョラ交通路を通つてウラルの東へ向つた。カシュルイクではタタール族の土侯がふたたび要塞を修復し、最初クチュムの子アリが、その後クチュムに殺されたエヂガルの甥でアリと覇權を爭つてゐたセイド・アフメットが汗位についた。

【西伯利征服計畫の統一策】

かくのごとくエルマクの侵寇は西伯利汗國の土臺をゆるがし、ロシア人のためにイルトゥイシュ河

調―0523

0036

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の流域にいたる交通路を開いたのであるが、確然とした結果をもたらすには至らなかつた。それ以後においては、すでに首都で作製された計畫案により、政府の力で組織的な西伯利征服が行はれることとなつた。敵の領土へ深く侵入するためには、まづ第一に背後の交通路を手にいれてそれを堅固にかためてかかる必要があつた。さうした目的で、かつて殷盛をきはめたトゥラ河畔のタタール族の大城市「チンギ・トゥラ」の廢墟のあとにチュメニ砦市*が建設された。この要塞都市はそれから先きを占領するための前哨基地たるべき役目をもつてゐた。チュメニから派遣された秘書官長ダニィロ・チュルコフはカシュルイクの城壁のすぐ近く、トボール河の河畔に、後にトボリスク〔二六〕とよばれる大都市の礎石となつた小柵を築き、そこから敵の行動を仔細に偵察しながら攻撃の機會を待ちかまへてゐた。彼は一五八八年（天正一六年）にセイド・アフメットを巧みに自分の柵内へおびき出してこれを捕虜とした。それ以來アフメット麾下のタタール族らは、カシュルイクを最後的に引き拂ひ、草原地帶へ遁走し去つた。

*チュメニの占領についてはごく少數の年代記に書きのこされてゐるだけで、しかもそこには往々にして信ずるに足らぬ傳說が附隨してゐる。それ故、ロシア人のチュメニは、「前にチュメニ城砦のあつた場所へ、西伯利最初の小砦市が建てられ、それを落チュメニの名でよんだ」と述べてゐる新らしい年代記を採るべきである。

【トボリスク市の發生】

西伯利汗國の舊都は荒れ果て、その趾へロシア植民の中心たる西伯利の主要都市——トボリスク市が發達し、この都市が次第に新植民地の行政上の重要地點としての意義をもつやうになり、その後の西伯利占領と移民事業の指導權を把握するやうになつたのである。

【西伯利タタール族の反抗】

だがカシュルイクの陷落とともに直ちにクチュムとの闘爭が終局をつげた譯ではなかつた。ロシア人は彼の麾下のタタール族の襲撃を防ぐために一五九四年（文祿三年）に草原地帶との境界地にトゥラ砦市を建設した。そしてトボリスクにたいする南方からの侵寇をふせぐとともに、またこれを草原地帶へ向つての遠征の根據地にした。次いで一五九五年——一五九六年（文祿四年——慶長元年）にはトゥラを出發してオビ河の上流バラビンスキイ草原の奥深く戰果の多い遠征をとげ、かくてようやく一五九八年（慶長三年）にいたつて、トボリスクの軍長はクチュムに殲滅的な打擊をあたへることができた。それ以來、クチュム自身はもはや全く再起できなかつた。

【異民族間における西伯利汗國再興の願望】

だが「西伯利の帝王（ツアリ）」——クチュムの子孫たちはカルムイク族〔二七〕と同盟をむすんで、其後尚ほ十七世紀全體を通じてオビ河の上流からしばしば侵寇を企て、ロシア人の國境部落を脅威しつづけ

調—0523

0037

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た。このクチュム一族の不断の襲撃に影響されて西部西伯利の異民族のあひだには長いこと過去の獨立時代の追憶が消え去らなかつたばかりでなく、彼らは西伯利汗國の再興にたいする願望を抱きつづけてゐた。そして「クチュム汗の治世にはこれこれであつた」といつまでも語りつたへてゐた。

まだ十七世紀の六十年代（寛文年間）にはベリョゾフスキイ郡のオスチャク族の間に「クチュム汗の子孫がトボリスクへやつて來て西伯利の全領土を支配する」といふ信仰が殘つてゐた。そのため一六六二年（寛文二年）に騒氣滿々たる西伯利のシバニット（侯族）の後裔デウレト・キレイ（二八）が「ルゥシに叛旗をひるがへして起つた」際には、かつて西伯利汗國領であつた各地方のタタール族、ヴォグル族、バシュキル族（二九）らは一丸となつて結束し、ロシアに叛いた。さらにデウレト・キレイの鎭定後にいたつても尙ほ「呪はれたるバスリマン（回敎徒）ども」は、獨立分離の希望をいだいて「幻想に跳り」つづけたのである。

十七世紀から十八世紀へうつる時代にその著書を書きあげたレミョゾフ（三〇）は、當時のマホメット敎「布敎者」の說敎の斷片をわれわれに書き殘してくれてゐる。それによると彼らは「やがて間もなく回敎徒が西伯利を支配する時がくるであらう」と說敎してゐるのである。

【マルミ汗國の征服】

モスクワ政府は西伯利汗國の徹底的占領と同時に新占領地と中央とを連絡する交通路の强化策を講じた。さうした目的で、トゥラ河の支流、タギイル河の上流にあたるチュソフスキイ交通路上に、ウェルフ・タギルスキイ小砦市が建設された。だがこの交通路は航行に不便な山間の溪流が多いのと、政府が西伯利との交通連絡にウィシェラ河およびタウダ河を利用する計畫を立てたために、間もなく廢棄されるにいたつた。一五九〇年（天正一八年）にタウダ河の上流、ロジワ河の河畔に、ロジヴィンスキイ小砦市が建設されたが、それはイルトゥシュ河とカマ河の兩流域を連絡する役目を果すものであつた。その後、この小砦市を根據としてタウダ河沿岸ヴォグル族の領地ベルイムの征服（三一）がはじめられた。ロシア本國から西伯利にいたる交通路上にあつて、多數の慓悍な原住民を擁するベルイム汗國は長いあひだロシアの植民に大きな障害をあたへ、ベルイム諸汗の累次の侵寇はたえずベルミ邊境地方をおびやかしてゐた。ロシア政府はこの强力な汗領を擊碎するのに相當大きな努力を要した。ベルイム遠征の準備に着手したのは一五八〇年（天正八年）であるが、最初の組織的な遠征が實行されたのはかなり後の一五九二年（文祿元年）になつてからである。そして翌一五九三年に元ベルイム汗の城砦の趾にロシアの砦市ベルミが建設され、更に一五九四年になつてようやく、ロシア政府

十六世紀末までのロシア民族の東漸

調—0523

0038

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に懐柔されたコドスキイ・オスチャク族の部酋イギチェイ・アラチェフの力を藉りてベルイム汗領の大コンダおよび小コンダの密林を征服することができた。しかしコドスキイ・オスチャク族やコンデンスキイ・ヴォグル族とロシア人との闘爭はその後も數年間つづき、原住民の汗や土侯の子孫は全十七世紀および十八世紀を通じてコンダ地方の支配をつづけてゐた。*

＊ベルイム汗領については「西伯利植民史概觀」第二卷を見よ。

【ヴェルホトゥリエ砦市の建設】

ベルイム汗國の粉碎とともにタウダ河の航通がまつたく自由なものとなつた。が、ロジワ河を脇の方へ殘して直線的にトゥラ河へでるバビノフ新道が發見されると、それによつて著しく距離が短縮されたので、タウヂンスキイ交通路は放棄されるにいたつた。一五九八年（慶長三年）にはロジヴィンスキイ小砦市が破壞されて、それに代つてトゥラ河の上流に新らしくヴェルホトゥリエ小砦市が建設された。この小砦市は十七世紀の全體と十八世紀の若干時代を通じて西伯利にいたる要衝となり、モスクワと後ウラル地方との一切の公用連絡はこの交通路を經ておこなはれた。

【トゥリンスクとチュメニ】

一六〇〇年（慶長五年）にヴェルホトゥリエ小砦市の下流、この小砦市とチュメニとの中間に位置する元タタール・ヴォグル汗國エバンチ（この汗國は嘗てエルマクの遠征に猛烈な反抗をした）の遺跡にトゥリンスク砦市（エバンチン）が發生した。

ヴェルホトゥリエ、トゥリンスク、チュメニなどの各城砦都市が建設されるとともに、イルトゥイシュ河とカマ——トゥラ兩河の諸流域を結びつける全交通路がロシア人の手に確保されることとなり、またそれによつてモスクワ國家の中心地方とあらたに征服された西伯利汗國領とが鞏固に結びけられることとなつた。

【南方遊牧民族との衝突】

ロシア人はカシュルイクに要塞を築き、その背後にウラル越え交通路を確保するとともに、かつてクチュム汗の「帳幕國」に包括されてゐた「アガリャンスキエ・ヴェシ」地方へ逐次その勢力を擴大していつた。が、バラビンスキイ交通路の奥ふかく南方へ向つて侵入することは、多數の遊牧民族とぶつかつたので最初のころ非常に困難であつた。その方面からはクチュムの子孫に臣從してゐたガイ」のタタール族から絶えず脅威をうけ、また十七世紀初ごろからはカルムイク族、とくにそのころ同族から北西へ壓迫されつつあつたトルゴト部族およびホショト部族、またその後になつてキルギ

調—0523

0039

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ス・カイザク族〔三二〕などの側から侵寇襲撃をうけたのである。したがつてロシア人移民はトゥラ河およびトボール河から南方へはごく遅々として進出していつたにすぎない。ただ十七世紀の三十年代〔寛永年間〕になつてヤルトロフスキイ、テベンデンスキイ、イシムスキイ、ワガイスキイおよびタルハンスキイなどの諸柵が建設されるとともに、ロシア人占領地の境界點にはいくらか南方を守る防禦線ができ、ロシア移民はこの方向において事實上クチュム汗國の舊境界線に到達することをえたのである。未來のクルガン市その頃のツァレワ・ゴロディツシャが建設されたのは十七世紀後半のことに屬する。〔三三〕

【イルトゥイシュ上流の諸砦市】

イルトゥイシュ河上流のタラは、全十七世紀を通じて最先端のロシア人の町とされてゐた。そしてようやく十八世紀初の二十年間、すなはち一七一五年——一七二〇年〔寛永、享保年間〕になつて、ヤムイシェフスカヤ*、オムスカヤ、ジェレジンスカヤ、セミバラトナヤおよびウスチカメンノゴルスカヤなどの諸要塞が建設されるとともにイルトゥイシュ河の全流域がロシア人の手に歸したのである。それとまつたく同樣に、トボール河の上流地方が完全にロシアの支配に歸したのも十八世紀〔一七四三年のトロイツク砦市の建設〕のことである。

＊ヤムイシェフスコエ湖畔に柵を設けることが原則的に決定されたのは一六二七、八年であるが、これが實現されたのは一七一五、六年であるゥロシア歷史文庫」〔P. P. B〕第八卷。

上部イシム河の流域についていへば、この地方は十九世紀後半、すなはち一八六三年〔文久三年〕にアクモリンスク砦市が建設されるに及んでようやくこれを確保したにすぎぬ。〔三四〕

【南方進出の停頓と北方征服】

かくのごとく南方へ向つての進出はこれを企圖するとともに立ちどころに、そしてまた長期にわたつて、停頓狀態におかれた。そのこと自體がまた、ロシア人の武力にたいしていくらかでも頑强に抵抗するといふ力を缺いてゐた少數のヴォグル族やオスチャグ族の住む北東地方へ、すなはちトボール河の河口からイルトゥイシュ河を經てオビ河へ進出の方向を取らせたのである。

【オスチャク諸部族の歸順】

エルマクのカシュルイク占領後ただちに、これと隣接してイルトゥイシュ河下流のトゥルタス、デミャンカおよびベロゴリエ等の各地に散在する帳幕部落の異民族部會を征服する必要に迫られた。オビ河の下流、イルトゥイシュ河の河口地方から海洋にいたるまでの地域を支配してゐたオスチャク族の部會たち——リヤピンの部會ルグイ、コードの部會イギチェイ、カズイムの部會ツィンゴップ・ム

調—0523

0040

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ルザ、オブドルの部酋ワシリイらは十六世紀九十年代初（天正、文祿年間）にそれぞれ自發的に毛皮税を貢納することに同意した。

【オスチアク族の叛亂】

オスチアク族を徹底的に征服するため一五九三年（文祿二年）にこの地方のオスチアク族の首府スムグト・ワシの城趾へベリョゾフ砦市が建設された。漂悍なオスチアク族は、ロシア人の砦市が建設されたために起つた新情勢にたいして、平和のうちに立ちどころに順應したわけではない。一五九五年（慶長四年）には彼らの間に猖獗をきはめた叛亂がおこり、當時あらたに建設されたばかりのベリョゾフ砦市はこの「夷狄」に包圍されて非常な危險におちいつた。一六一〇年（慶長一五年）にはまたベリョゾフスキイ郡の諸鄉でふたたび異民族のあひだに戰爭の物發を象徴する「神聖の矢」（スヴャトストラ）（三五）が廻附されたが、時機を逸せず鎭撫策が講ぜられたのでこの陰謀は辛うじて未然に防遏されたのである。それからずつと後代の一六六二年（寛文二年）においてさへも、ベリョゾフ政廳はオスチアク族の間に叛亂が準備されてゐるといふ風評にかなりの不安を感じてゐる。（三六）

【以夷制夷政策】

ロシア人はオビ河沿岸の異民族征服にあたつて、個々の民族間の相互的な敵意をたくみに利用した。原住民の土侯や部酋たちのなかには「カザックに反感をいだく……傑出した指導者……有力な人物」がまだ少なからずゐた。ロシア人の手先となつてコンダを征服し、そしてベリョゾフやオブドル地方の同族に敗戰の機會をあたへたイギチェイ・アラチェフはこの場合にロシア人から巧みに利用された一人である。オスチアク族の土侯の血統は一律に絶滅されてしまつたわけでなく、ロシアの屬領下にあつて彼らはその後も一定の期間は自己民族を統治しつづけてゐた。ロシア官憲に忠勤をぬきんでたコードの土侯たちは實際において十七世紀中葉まで獨立した保護領の地位を持續してゐたし、さらにオブドルの土侯たちは十九世紀にいたるまで相當程度に獨立性を保つてゐたのであつた。*

モスクワ國家の政廳は、オブドルやカズイムのオスチアク族の協力をえて、それは名目上だけにとどまるとは云へ、オビ河の河口から東方のツンドラ地帶を遊牧するサモエド族にも支配權を及ぼすことができた。

＊オビ河下流地方のオスチアク汗領および彼らのロシア官憲との關係についての詳細は「西伯利植民史概説」の第二卷を見よ。

調—0523

0041

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第二章　十七世紀における西伯利の發見と征服

【タズ河畔への大遠征隊】

一六〇〇年（慶長五年）にオビ灣沿岸地方全體の征服を完遂する目的で、まづ豫備偵察をおこなつたのちトボリスクからタズ河に向つて大規模な遠征隊が發遣された。この遠征隊はその規模の點においてもまた苦勞にぶつかつた點においても、その時代としてはもつとも著名なものの一つである。タズ河の河畔には例のお伽噺のやうなマンガゼイアがあつて、そこは夙に十六世紀前半の頃から毛皮を求めてこの地方へ進入してきた海の產業者たちの手で古くから發見されてゐた。自然條件にたいする知識もなく勿卒のあひだに準備された遠征隊はまづその第一歩において大きな失敗にぶつかつた。この遠征隊が編成してゐた河航船隊は「海洋の航行」には堪えぬものであつた。そこでウェルホトゥリエで大急ぎで海洋船の建造をしてゐる間に遠征隊の本隊はオビ河の河口から馴鹿に乘つてツンドラ地帶を前進した。ところが、その途中でサモエド族から當時として未曾有の「大虐殺」に逢つた。それでも尙ほ生きのこつた部隊はタズ河に到達してその河畔にタゾフスキイ（またはマンガゼイスキイ）

砦市を築いた。そしてこの砦市は將來エニセイ河およびレナ河の流域を征服する根據地となつたのである。

【トャン汗の歸順とトムスク砦市の端初】

オビ河下流地方のオスチャク族の征服と併行してロシア人の進出はイルトゥィシュ河の河口からオビ河の上流地方へも遡つていつた。イルトゥィシュ河の河口でかつてマンスーロフが冬營した防塞の跡へオブスキイ小砦市が設けられた。この小砦市は一五九四年（永祿三年）にそこからオビ河をやや上流へ遡つた地點に新砦市「スルグト」が建てられるまで存在をつづけてゐた。だがスルグトが建設されて四年ののちには、多數の「ベゴイ」族の帳幕部落を支配してゐた勇敢なオスチャク族の土侯ワイニアから脅威される危險にせまられて、この新領土を防護するために更にオビ河の上流でずつと東へ深く切れ込んでゐる「ベゴイ・オルド」の中心へ新要塞――ナルイムを築かねばならなかつた。ナルイム要塞の建設によつて、それから先きオビ河を上流へ航行して南東にいたる諸交通路が發見されることとなつた。一六〇四年（慶長九年）エウシチンの領侯トャン汗が自發的にロシア政權の庇護下に歸順したので、彼れの領地の中へ砦市トムスク（三七）建設の標杭が建てられた。

【チュルク諸部族およびアルタン汗との衝突】

十七世紀における西伯利の發見と征服

調―0523

0042

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

それから以南への進出は絶大な困難をもつておこなはれてゐる。ロシア人はそこで、この時代に蒙古人に貢税を納めてゐた貧困で且つ慓悍なチュルク諸部族の住む「山嶽の多い邊境部落」にぶつかつたのである。山嶽といふ自然の障碍のほかに、そこでは古來よりこの地方の原住民からアルバン（貢税）を徴收してゐた、多數の人口を擁する征服者との衝突が不可避であつた。なかんづく有力な西部ハルカス族の君侯アルタン・ハン（金汗）はケムチク河およびアルタン・ノール（ウブス湖）の沿岸地方に君臨してその權力を廣く邊境異民族の上におよぼしてゐた。一六一八年（元和四年）にようやくトマ河の上流にクズネツキイの柵（三八）が建てられただけで、それから先きへの進出はまる一世紀のあひだ停頓してゐた。

【亜喝爾汗フン・タイシとの角逐】

一六二七年（寛永四年）にビイ河の河畔に要塞を築かうと企てたことが動機となつて、テレス族から殲滅的な襲撃をうけるにいたつた。前述の諸地方ではロシア人はかへつていつも蒙古人およびその被護下にあるエニセイ沿岸のキルギス族の執拗な侵寇を喰ひとめるために大きな努力をしなければならなかつた。だからロシア政府は止むなく、オビ河上流地方のチュルク諸民族からの貢税の徴收權をめぐつてトマ河の上流にクズネツキイの柵（三八）が建設（一七〇〇年――寛永六年）さ

――最初はアルタン・ハンとの間に、その後においては亜喝爾（ジュンガル）のフン・タイシおよびキルギスの土侯たちとの間に分け合ふほかはなかつた。

【ビイスキイ柵の建設】

このやうにクズネツキイ郡は長いあひだアジアの奥地にたいするロシア人進出の最先端境となつてゐたのであるが、十八世紀初ごろになつてビイスキイの柵（三九）が建設（一七〇〇年――寛永六年）されるとともに、ようやくオビ河上流に確固たる地歩を占めるにいたつた。

【西伯利征服史における新段階】

オビ河とその支流地方の征服をもつて、ロシアの西伯利征服史における一つの非常に畫期的な段階が終局をつげてゐる。この段階は、その侵略政策の一般方針がほとんど完全に政府の中央機關の手に保持されてゐたことをもつてその特徴とする。侵略の全計畫、それにたいする個々の指令、當面の任務――それらは一切モスクワにおいて立案され、そしてモスクワで書きあげられた訓令にもとづいて現地の軍務知事の手で遂行された。モスクワの指令は、非常に詳細に、それこれの行動の全細目を豫定し、遠征の軍略的方面について綿密な指令があたへられ、遠征隊の補充の方法や成員なども中央から定められたのである。殊にこの段階の初期においては軍隊の一部が往々にしてロシア本國のヴォ

調―0523
0043
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ガ沿岸地方から發遣されてゐるのである。

【無組織・無秩序の侵略時代】

かうした侵略政策の性格は、ふたたび次第に變化していつた。中央から遠くヘアジア大陸の奥ふかくすすんで行くにしたがつて、政府はそれらの地方にたいする軍事的占領の進行を指導する能力と可能性とをうしなつていつた。そしてその主動力は現地の行政官廳の手にうつり、政府は單に「皇帝の鴻業の御爲めに」とか「現地の事態を考慮して處理するやうに」とかいふ紋切型の指令を發するにとどまつた。いままでの組織的な進擊は、秩序のない行きあたりばつたりな、しかも先きをあらそつてウラルの東へ進出していつたロシア人各階層の輕擧盲動的な慾望にとつて代はられることとなつた。狩獵者たちがまづ先頭に立つてすすんでいつた。彼らは西伯利の西部地方で黒貂を狩りつくすにしたがつて遠く東へ東へとあたらしい「黒貂の狩獵場」をもとめて侵入をつづけ、そしてそこに新らしい「まだ毛皮税を課せられてゐない處女地」を發見した。クレマと稱する罠(四〇)でむやみに毛皮獸の濫獲がおこなはれたため、もつとも高價な種類が急激に絶滅され、それとともに狩獵者の前進運動はますます急速に「未知の土地」へ深入りしていつた。狩獵産業者の前進する背後からはまた西伯利各

の軍人たちが時には自分の生命までも賭して數人の小部隊で、新發見の「化外の異民族」から勝手に毛皮税をしぼりあげるため、掠奪や戰利品の獲得を眼あてに彼ら一流の貪婪な利慾と野望にかられて押しだしていつた。狩獵者の冬營所とならんで、軍人たちが皇帝の御名によつて自分のためや軍務知事のために「獻上物の黒貂」の毛皮税を掻きあつめる毛皮税徴收冬營所が次ぎ次ぎに建設された。かうしてロシア人の勢力圏はいつとはなしに擴げられていつた。現地の軍務知事たちはまた自分の利得といふ思惑からと、勤務上の打算とから、管轄地方の領土擴張にあらゆる努力を惜しまなかつた。彼らは軍人や狩獵者の「お伽噺」をきいて「新領土」にたいする小遠征隊を組織し、そして現地の力では手におへぬ場合には西伯利の行政中心であつたトボリスク〔政廳〕に援助をもとめた。かくして十七世紀初以降の、西伯利の發見と占領の仕事は、大體においてモスクワの手を通さずにすすめられていつた。モスクワはただ既成の事實としてすでに手をつけられた征服占領を完成し、新たに併合された諸州の統治を組織する必要にせまられた場合にのみ、その事業に關與したのである。

【エニセイ河流域への侵入】

エニセイ河やレナ河、およびその諸流域地方の占領はいづれも右に述べるやうな特徴をもつてゐる。ロシア人はエニセイ河の流域へ二つの交通路をとほつて侵入していつた。すなはち南方からはケ

十七世紀における西伯利の發見と征服

調一0523

0044

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ティ河を航行して、北方からはマンガゼイアを経由していつたのである。

【二つの交通路】

ケティ河の河畔には一六〇五年（慶長一〇年）以來ケトスキイの柵が設けられ、一六一八年（元和四年）にはケティ河とエニセイ河を結ぶ連水陸路の途上にマコフスキイ小柵が建設された。翌くる一六一九年（元和五年）にはすでにエニセイ河の河畔にロシア人の手でエニセイスキイの柵〔四一〕が基礎をおかれ、それから數年の後にはさらにこの柵の上流にクラスノヤルスキイの柵が建設された。＊クラスノヤルスク〔四二〕を根據地として、そこからキルギス族や遠くエニセイ河流域の南部地方に住む彼らとおなじ血統の諸民族の征服が行はれたのである。

＊「クラスヌイ・ヤールに柵を設けよ」といふ命令が發せられたのは一六二四年五月のことであるが、それが實現されたのは一六二八年夏の終りである。

【アルタン汗の反撃】

クラスノヤルスクの建設とともに、ロシア人はエニセイ河の上流を航行して、十七世紀中における南方進出の最先端に到達した。ロシア人はここでもオビ河上流地方におけると同樣にアルタン・ハン〔俺爾答汗〕の反撃に逢つた。そして當に獲物の分割を餘儀なくされたばかりでなく、往々にして名目上だけの一時的な支配權の獲得に滿足せねばならなかつた。一六五七年（明曆三年）アルタン・ハン家の汗の一人ラウザンはクラスノヤルスク、クズネックおよびトムスクの諸城砦を襲撃してこれを奪取しようと企て、國境にちかいロシア領内へ劫掠的な侵襲を行つた。しかし彼ら同族間の葛藤——父の死と準喝爾（ジュンガル）國側からの脅威——のお蔭でロシア人はようやく彼れを退却させることができたのである。

【ミヌシンスク砦市の建設】

アルタン・ハンの勢力が失墜したのちに、さらに一層强力にして危險なロシア人の競爭敵手として準喝爾（ジュンガル）のフン大石（タイシ）が立ちあらはれてキルギス族およびトゥビン族をその保護下においた。〔四三〕かくしてエニセイ河畔においてもオビ河上流におけると同樣、ロシア人の南方進出は阻止された。そして、その後一七〇七年（寶永四年）になつてトゥビン族の領地内にミヌシンスク砦市が建設されるのをみつてようやくこれを回復したにすぎぬ。

【アンガラ河への進出、ツングス族の征服、ブリアト族の反抗】

十七世紀における西伯利の發見と征服

調—0523
0045
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

蒙古人との接觸によつてかく南方への侵略を阻止されたロシア人は、エニセイスクからアンガラ河（上部ツングスカ河）を航行して東方へ進出しはじめた。そして最初のころそこでは文化程度の低いツングス族〔四四〕の側からわづかな反抗に逢つたにすぎぬ。この方面において一つの畫期的段階をなしたのは、一六三〇年〔寛永七年〕レンスキイ連水陸路上にイリムスキイの柵が建設されたことである。この柵はその後レナ河にいたる諸交通路を發見するための重要な根據地となつてゐる。しかしアンガラ河を上流へ遡つてさらにそれから先きへの侵略は、きはめて遲々としておこなはれてゐる。その一部の原因はアンガラ河の夥だしい岩石にはばまれた激流のごとき自然的な障害であるが、それよりもつと重要なのは、主としてアンガラ河の上流地方に住む蒙古民族中のブリアト人――「ブラトスキイエ・リユデイ」の勇猛果敢な反抗であつた。〔四五〕

【イルクーツク市の建設とブリアト族の征服】

彼らを征服するため一六三一年〔寛永八年〕に建設されたブラトスキイの柵は一再ならず危機に瀕した。一六三五年〔寛永一二年〕には守備隊が總員ことごとく殲滅され、翌くる一六三六年になつてようやくロシア人の勢力を回復することができた位である。その後のアンガラ上流地方における「ブラトスキイ」民族の「毛皮税賦課（ヤサチエーチエ）」政策は間斷なき闘爭によつて行はれたのであつて、結局この民族

中の大部分を、南方に住んでゐる彼らの同族バカス蒙古人の領内へ驅逐することになつた。〔四六〕アンガラ河沿岸地方の防備を確保するため一六五四年〔承應三年〕にブラトスキイの柵の南にバラガンスキイの柵が設けられた。その二年前にボハボフはイルクト河がアンガラ河へ合流する地點へ冬營所（未來のイルクーツク市）〔四七〕を建てそしてアンガラ河の支流オカ河沿岸のブリアト民族の征服を完遂した。

【マンガゼイアからの東方進出】

マンガゼイアから別の交通路をとつて進出したロシア人はエニセイスク砦市が建設されるよりも數年前にエニセイ河畔に到達してゐる。海の狩獵者たちは夙に十六世紀末においてタズ河から「エニセイスキイ連水陸路」を經てエニセイ河の支流トゥルハン河へでた。そして十七世紀初にはトゥルハン河畔にあつたトゥルハンスコエ冬營所の跡へマンガゼイア政廳の管轄に屬するちつぽけな役所が建てられた。このちつぽけな役所は、その後さらに東方に向つてロシア勢力を擴げてゆく上に大きな役目をはたし、のちにはマンガゼイア軍務知事の政廳となつたのである。狩獵者たち、また彼らのあとを追ふてマンガゼイアの軍人たちも、そこを出發點として毛皮獸と毛皮税を追求しながらエニセイ河をく

十七世紀における西伯利の發見と征服

調―0523

0046

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

だつてその河口地方にいたり、またエニセイ河の下流から北東に展開されてゐるツンドラ地帯を漁りまはつた。彼らの中の或る者はやはりそこを出發してエニセイ河を上流へさかのぼり、途中沿岸のツングス族やインバク族（エニセイ沿岸のオスチャク族）などを「皇帝の尊貴なる御手のもとに」服従せしめながら、同河東岸の諸支流――下部ツングスカ河およびボドカメンナヤ・ツングスカ河へと進出していつたのである。

【ワツキイ遠征隊】

「マンガゼイの町やトゥルハンスコエ冬營所の近郷、あるひはエニセイ河の上流、下部ツングスカ河などで黒貂やラッコの獵をしてゐた」狩獵者たちは、更にもつと「上等な黒貂や毛皮獸の豐富な遠い上部ツングスカ河へ行かうと考へて」下部ツングスカ河の上流からヴィリュイ河へ移り、それから更に「偉大なる河――レナ」へと移動していつたのであつた。これらの遠い邊境地方でスイロヤド族（サモエド族の別名）から襲撃されて危險に迫られてゐる狩獵者たちを保護する必要から、一六二九年（寛永六年）にトボリスクで組織されたサムソン・ノワツキイを隊長とする遠征隊が下部ツングスカ河およびレナ河の河畔へ向つて進發した。この遠征隊にあたへられた任務は「狩獵者たちが漁獵をいとなんでゐる地點まで到達し」そして「その邊境の地に在る彼ら狩獵者に保護を加へること」＊であつた。

＊サムソン・ノワツキイの遠征に先だつて一六二七年にミハイル・パイカシンの遠征隊が派遣されたが、これは失敗に歸した。パイカシンはオビ灣で惡天候に阻まれてトボリスクへ引返したのである。"西伯利局文書" Сиб. Прик. 二五號 一五六。

【シャホフ遠征隊】

次いでまた一六三三年（寛永一〇年）にはシャホフ將軍を指揮官とする新遠征隊が發遣されてゐる。

【パリツィン侯のレナ河地方占領計畫案】

マンガゼイの軍務知事フェ・パリツィンはモスクワへ歸還するとともにノワツキイ遠征隊の報告資料やツングス族から聽取したところにもとづいて、交通路圖や地誌をそえてレナ河地方の占領計畫案を政府へ提出した。彼はその計畫案のなかで次ぎのやうに揚言してゐる。

「東方の太陽の出る涯てまで、アレクサンダア大王が足跡をのこしたところまで、さらに高い高いカルカウルの丘陵まで……」

「雲足逞手の人間が棲んでゐるところまで……」

ロシアの領土を擴張しなければならぬ、と。＊

＊オ・パリツィンおよび彼の計畫案についてはア・ザオゼルスキイとエム・アリセルコフ編輯の論文集「世紀」《Век》ベテルブルグ 一九一八年 一巻 一七世紀における西伯利の發見と征服

調―0523
0047
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ブルグ、一九二四年所載の私の論文を見られたい。

マンガゼイを經てレナ河畔までやつてきたロシア人の進出とぶつかり合つた。十七世紀二十年代の末（寛永年間）に上部ツングスカ河（アンガラ河）からイリム河を航行し、さらにイリム河から「レンスキイ連水陸路」を越えてレナ河の支流にいたる交通路が發見され、そしてこの連水陸路上（イリムスキイの柵）とクタ河の河口に柵が建設されてこの交通路が確保されることとなつた。

【ヤクーツキイ柵の建設とレナ河口への進出】

一六三二年（寛永九年）にはレナ河畔にヤクーツキイの柵（四八）が建てられ、それにやや遅れてこの柵の上流にオレクミンスキイの柵、さらに下流にはジュガンスコエ冬營所が設けられた。それと同時にまたレナ河の諸支流――ヴィリュイ河、アルダン河、アムガ河などの踏査がおこなはれた。そしてヴィリュイ河の河畔ではすでにエニセイスクの軍人たちが設けたマンガゼイ徴稅役人の冬營所や軍長シァホフの築いた小柵があるのを發見した。それから一六三三年（寛永一〇年）にアルダン河の支流アムガ河畔にアムギンスコエ冬營所を設けた。エニセイスクの軍人たちの成しとげたところは以上に

盡きぬ。一六三三年にイリヤ・ペルフィリョフは同僚や「狩猟者たち」とともにレナ河の河口まで下り、そこから「海路により」東へ進路を轉じて「新らしい場所――ヤナ河へ」でたが、マンガゼイからレナ河地方へ派遣されてきた彼の同僚イワン・レプロフは「海路をとつて、傍きの方へそれた新らしいインヂギルスカヤ河へ」向つて航海をつづけていつた。*

一六三六年（寛永一三年）エニセイスクの十人長エリセイ・ブヴザはレナ河の河口から海路を西へ横斷してオレネク河の河口に達した。同時にペ・イワノフを隊長とする別の一隊は陸路から同河の上流にいたり、そこから一六三九年（寛永一六年）にインヂギルカ河畔へでたのである。

＊一六三三年の遠征についての報道はエヌ・オグロブリンが「十七世紀における東部西伯利極北の航海」《Восточно-сиб. отдел. Геогр. общ. Записки》（「支部會雜誌」一九〇三年第五號）と題する論文中に發表してゐる。それにも拘はらず今日にいたるまでヤナ河への海路の最初の發見は一六三七年ブヴザによつて行はれたとする誤まつた意見が往々にして文獻上に反復されてゐる。たとへばヴェ・オゴロドニコフの特別の小冊子「ユカギルの國の征服」《Покорение Юкагирской земли》（一九二二年）の如きがそれである。それと反對にベルグ著「カムチヤトカの發見とベーリングのカムチヤトカ探檢」《Открытие Камчатки и экспедиции Беринга》（一九二四年）はレプロフの探檢を指摘してゐる。

十七世紀における西伯利の發見と征服

調―0523

0048

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

かく目ざましい成功と「偉大なる河――レナ」の富源に關する風評は人々の心をひきつけ、西伯利で一攫千金的な獲物を摑まうと、あせる連中を昂奮させた。一六三六年（寛永一三年）には遠くはなれたトムスクからさへカザックの頭領（ヅヤコ）ドミトリイ・コプイロフの指揮する一隊がレナ河へ發遣されたのであつた。彼れはエニセイスク政廳の抗議を無視してエニセイスクを通つてアルダン河へ舟行し、そしてマヤ河の河口にブタリスコエ冬營所を設け、一六三九年（寛永一六年）には隊の一部をさいてマヤ河を上流へ遡航させた。このコプイロフ支隊はマヤ河の支流ニュドマ河まで遡航し、そこから峠を越えてウリヤ河にいり、同河を海まで下航した。そしてウリヤ河の河口――オホツク海の岸に冬營所を設け、そこを根據に海岸を北へタウヤ河の河口まで、また南へはウダ河の河口まで踏査をとげたのである。

【東方海岸への到達と射利冒險者の殺到】

かく十七世紀二十年代（元和、寛永年間）以降において、ロシア軍人たちは、狩獵者の足跡を追ふておどろくべき短期間に、エニセイ河から東方海岸に至るまでの廣大無邊の地域を踏破したのであつた。早くからロシア人が征服してゐた露領西伯利の各地から――マンガゼイアから、エニセイスクから、トボリスクから、さらにもつと遠隔なトムスクからさへ射利冒險の探求者が踵を接してレナ河畔や、それから先きの東方へと激流の如くなだれ込んでいつた。軍人たちも一種の熱病にとり憑かれて――命がけで金儲けを追つてでかけた。「新領土」の遠征探檢はなんの統制も秩序もない小人數の、往々にして數名から成る軍人の一團によつておこなはれた。そして狩獵者たちがこれら「往古以來いまだかつて人間世界に知られてゐない僻地」への「道先案内者」となり、彼らの直接參加のもとに危險の多い冒險的な企業が遂行されたのであつた。

【匪賊的侵寇】

それは本質において匪賊的な侵寇であつた。軍人たちは

「その土地に要塞をきづいて原住民どもを威嚇しながら交易を強要し、彼らの妻子を人質にし、家畜を掠奪し、強制的にいろいろなことを申しつけ、皇帝の尊貴なる御名のもとにそれらの現狀どもを狩り立て、かくして自分たちは夥だしい富をもつて私腹をこやし自分たちが獲得した寶々の富のなかから、ごく少量のものを皇帝陛下に捧げた」

のである。

【ロシア人同志の掠奪競爭】

レナ河畔においては各地から乘りこんできた軍人たちがかち合ひ、しかもこの同僚同志の邂逅はかならずしも常に親愛の情をもつて迎へられたわけではなかつた。競爭者同志のあひだでは毛皮稅や戰利品のうばひ合ひから戰鬪を交へるといふ事件まで惹きおこした。

調―0523
0049
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

これらトボリスク、エニセイスク、マンガゼイなどの軍人たちはお互ひに些細な分捕品のことから戰さを始めることがあり、またレナ河の河畔で黒貂狩りをしてゐる逢衆者たちも互ひに命をとり合ふほどの喧嘩をした。そして新たに貢納を誓つて歸順した住民たちは皇帝の御手といふ名目をもつて加へられる迫害や狼藉や賦役にたいし疑惑の念をいだきはじめた。」

【政府の統一政策】

この「狼藉」と「混亂」にともなふ國庫の損失をふせぐため、モスクワ政府は漸次合理的な方策をとるにいたつた。つまり、特別の任務をもつた軍務總督をレナ河へ派遣してすべてあたらしく發見された地方の統治權を西伯利現地の軍務知事たちの手からとりあげ、さらにエニセイスク、マンガゼイア、トムスクその他の軍人たちがレナ河へ旅行することを禁じてしまつたのである。

【ヤクーツク政廳の創設】

一六四二年〔寛永一九年〕にレナ河畔に獨立したヤクーツク政廳が創設されるとともにそれが東部西伯利地方の踏査研究上の堅固な根據地となつた。ヤクーツクを出發點としてそこから西伯利北東の踏査がしばしばおこなはれた。ヤクーツクの軍人はインデギルカ河畔の征服を完遂するとともに、十七世紀四十年代初〔寛保年間〕にまづアラジャ河へ、それから更にコルイマ河へと探檢の歩をすすめていつた。およそ一六四三年〔寛永二〇年〕ごろ* ミハイル・スタドゥヒンはコルイマ河畔に防備を施した三箇所の冬營所を設けて同河の流域にロシアの支配權を確立した。

＊ヴェ・オゴロドニコフは「ユカギルの國の征服」の註において、コルイマ河畔に三年滯在して一六四五年十一月にヤクーツク〔歸還したと話つてゐるエム・スタドゥヒンの談話を基礎としてこれを一六四三年のことと決めてゐるが、スタドゥヒンの口述の正確さは充分でないのでこの結論はそのまま無條件に採用できぬ。

【デジュネフのアジア北東端廻航】

コルイマ河の河口からさらに北氷洋の海岸に沿ふて遠く東方への探檢が熱心にはじめられた。この地方における高價な魚(ゾイヒーズーブ)の牙は、商人や狩獵者の心を魅惑した。メゼニの市民イサイ・イグティエフは夙に一六四六年〔正保三年〕に軍人や狩獵者の一團とともにこの「ルイビイ・ズーブ」〔海象の牙〕を求めてチャウンスカヤ灣まで到達してゐる。その翌くる年に、彼れの企てはさらに一層大規模な形でホルモゴルの市民アレクセイ・フェドトフおよび商家の手代アレクセイ・ウーソフによつて繰返されたが、この計畫は氷に妨げられて目的を達することができなかつた。そのかはりに一六四八年〔慶安元年〕六月に右のフェドトフは豪商(ゴスチ)ワシリイ・グッセリニコフの手代たちと共同して有名なカザック——セミヨン・デジュネフを加へた大探檢隊を組織し、六艘のコチァ船〔四九〕に分乘してコルイマ河の河口から海洋へ乘りだした。＊

十七世紀における西伯利の發見と征服

調—0523

0050

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊ミルレルによると七艘のコチャ船にのって行ったことになっており、それは後代の研究家たち（オゴロドニコフその他）によって無條件に反覆されてゐるが、オグロブリンの發表したデジュネフの上申書中でデジュネフは、彼および彼の同僚たちは「六艘のコチャ船にのって海路をすすんで行った」と述べてゐる。（オグロブリン著「セミョン・デジュネフ」）

探檢隊は三箇月にわたる航海ののち現時のデジュネフ岬（ラストチスイ・ムイス）（東の岬）に到達した。

「大きなカアメンヌイ・ノース（山嶽の鼻）に到達した。この鼻はおそろしく遠く海に向って突きでてゐて、そこにはチュッチ族がたくさん住んでゐる。〔五〇〕このノースと向ひ合ってゐる島々（現時のディオミド島もしくはグヴオズヂエフ島）には人間（エスキモー族）が住んでゐてこの通中のことをスパアトウイ（牙のある人）と呼んだ。そのわけは、この通中は暦に穴をあけてめいい二本づつの大きな骨製の牙を通してゐたからである」〔五一〕

ここで暴風に逢ったためにコチャ船はいろいろな方向に吹き流されて四散し、その多くは沈没してしまった。デジュネフの乗ってゐたコチャ船は海上を「思ひがけぬ方向へ」吹き流され「アナンドゥイルの河口を通りすぎて」南の方の海岸へのし上げた。

デジュネフはかうして事實上においてアジアの北東端を週航したのであった。＊〔五二〕

・デジュネフの遠征に關する企報道の美事な總括はエ・エス・ベルグ「ベーリングおよびクック以前のベーリング海峽とその沿岸に關する報道」《Известия о Беринговом проливе и его берегах до Беринга и Кука》（「水路學紀要」第二巻第二分冊。一九二〇年）中に與へられてゐる。

それと同時に狩獵者や軍人がコルイマ河の上流から陸路によってアナドゥイル河畔へ侵入しはじめた。

【オホツク海沿岸の探檢】

北東における諸發見と前後してヤクーツクからオホツク海沿岸への踏査が進められた。一六四八年――一六四九年（慶安元年――二年）にトムスクのカザックたちが遂行した探檢の成果はコツイの小柵（未來のオホツク市）の建設によってその基礎が固められた。また別に、ミハイル・スタドゥヒンは一六五一年（慶安四年）にアナドゥイル河から陸路オホツク海の北部――ペンジンスカヤ灣（十七世紀の頃にはペンジンスコエ海と呼ばれてゐた）に流入するペンジナ河およびギジカ河の河畔にたどりついた。かくして太平洋岸をたどって進んでいった進出と北氷洋岸を進んでいった進出とが互ひに其處でぶつかったのであった。

【カムチャトカ半島征服】

西伯利北東隅の踏査探檢は、一六九七年――一六九八年（元祿一〇年――一一年）にウラヂミル・アトラソフによって行はれたカムチャトカの軍事的偵察によって展開され、それによって同半島征服の端緒〔五三〕がひらかれることとなった。結局、この方向においては十八世紀初までにアジア大陸の

調―0523
0051
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

極端――「西伯利大陸の邊境にして末端」といはれるところまで到達し、ヤクーツク政廳の前にはこれである。〔五四〕

【チュコト半島の征服】

だがカムチャトカが徹底的に平定されたのは、漸やく一七三七年（元文二年）にカムチャトカの叛亂が鎮壓された時、すなはち十八世紀三十年代のことに屬する。そしてチュコト半島の征服に着手したのは十八世紀二十年代の末（享保年間）であるが、しかもロシア人は、慓悍な多數人口を擁するチュクチ族との半世紀にわたる戰鬪ののち一七七五年（安永四年）には遂にアナドゥイルの柵の撤退を餘儀なくされ、そして彼らの軍事的征服を一時斷念せざるをえなかつた。チュクチ族がロシアの權力によつて最終的に征服されたのは、やつと十九世紀中葉になつてからである。

【ウエルホレンスク砦市の建設】

ヤクーツクからはまたレナ河上流地方の征討と「毛皮稅賦課（オブヤサチニエ）」が進められ、一六四二年（寛永一九年）にヤクーツクの軍人はこの地方にウェルホレンスクを建設したのであるが、ロシア權力の根據地は勇敢なブラトスキエ・リュウディ（ブリアト人）の猛烈な抵抗に逢つて一時はウスチ・クタ河およびイリムスカヤ河の流域地方までも危殆に陷つたのである。

【バイカル湖畔への侵入】

ヤクーツクの五十人長クルバァト・イワノフはレナ河の上流からブリアト族のいはゆる「神聖なる海（レヒェ）」――すなはちバイカル湖の沿岸へ侵入した。

ヤクーツクの軍人はレナ河の「水源地」で、おなじ目的で探檢にやつてきたエニセイスクの軍人と遭遇した。ヤクーツク市の建設以來、「エニセイの徒黨」の東方における活動は阻止されてしまつたので、彼らのエネルギイは南へアンガラ河方面に向つてそそがれ、そこでまたブリアト族との執拗な鬪爭を行ふこととなつたのである。一六四六年（正保三年）にエニセイスクのカザック頭領（アタマン）ワシリイ・コレスニコフはバイカルの北西岸を迂廻し、ウェルフネ・アンガラに小柵を築いてこの遠征の成果を確保した。その翌くる年エニセイスクの貴族イワン・ボハボフはバイカル湖の氷上をわたつて南

調―0523

0052

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

岸にいで、車臣汗（ツッエンハン）〔五五〕の領地へ侵入した。さらに一六四八年（慶安元年）には有名なエニセイスクの将軍イワン・ガルキンはバイカル湖の北岸を廻つてバルグジン河の河口に到達し、そこに小柵を設けた。彼れは事業慾の旺盛な、勇猛果斷で、金儲けに熱心で、疲れることを知らぬ探檢家であり、そしてまた「新領土」の征服者であつた。要するに典型的なロシアのピサロであつた。

【アムール――ダウルの國への侵寇】

アムール――すなはち「ダウルの國」（ロシア人たちはアムール河流域のことをそこに住むダウルといふ民族の名によつてさう呼んでゐた）の占領事業においても全くこれとおなじやうな競爭がおこなはれた。

エニセイスクの軍人たちはバイカルからイルゲニ湖へ、さらにそこからシルカ河の上流へと侵入していつた。一六五二年（承應元年）にシルカ河畔に柵を設けるためエニセイスクからビョトル・ベケトフを隊長とする特別遠征隊が派遣されたが、彼れはその目的を達することができなかつた。その代りにセレンガ河畔とイルゲニ湖畔におのおの一箇所づつの柵（ウスチ・ブロルヴィンスキイの柵およびイルゲンスキイの柵）を設けてバイカル湖からシルカ河にいたる交通路を確保することに成功した。

【ポヤルコフの遠征探檢】

これと時をおなじくしてヤクーツクの軍務知事もやはりアムールに注目しはじめてゐる。一六四三年（寛永二〇年）にワシリイ・ポヤルコフを隊長とする遠征探檢隊が派遣され、この遠征隊はアルダン河の支流ウチュル河の上流から、アムール河に流入するゼイヤ河に渡り、そこからアムール河を下航して翌年海にいで、一六四五年（正保二年）の春海岸ぞひに航行してウリ河、ウリヤ河およびマヤ河等の河口に達し、一六四六年（正保三年）にヤクーツクへ歸還した。おなじ一六四六年にヤクーツクから派遣された新らしい遠征隊はレナ河を遡航してオレクマ河にいたり、同河を經てトゥギル河へ、さらにトゥギル河から「カアメニ」（山嶽）へ到達した。その目的は

「皇帝陛下の御領土とダウルの國の間にあるカアメニ（ヤブロノイ山脈）を越えてそのダウルの國を仔細に調査すること」

であつた。

【ハバロフの掠奪的侵寇】

やはり一六四六年（正保三年）にウスチュグ出身の地持農民ヤロフェイ・ハバロフは、精力家で事業慾の旺盛な新任のヤクーツク軍務知事ドミトリイ・フランツベコフから資金の一部を借りいれた。

調―0523

0053

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

て、金儲けを眼當てに自分リスクの私財を投じて大がかりな軍事産業遠征隊を組織した。彼れはボクルチニク〔五六〕の一團を雇ひいれ、武器食料品を自分の手で給與してそのボルチン〔精鋭部隊〕の隊長となり、アムールに向つて無道殘虐な劫掠的侵略を敢行した。一六五一年（慶安四年）さらに彼れは新たに「猟師（オホーティニーディ）」の徒黨を騙りあつめ、それにヤクーツクのカザック小隊をあはせ、自分の「軍隊（ダイーハ）」を强化してアムール河を下航した。彼れは行く行くダウル族の町々を占領してこれを燒きはらひ、手あたり次第に掠奪するとともに、異民族を「泡のやうに」粉碎し、その妻子を捕虜とし、毛皮税をかき集めた。新發見地の富に關する噂がつたはると冒險者や山師どものあたらしい群衆が風をのぞんで續々と彼れのところへあつまつてきた。

ハバロスの企業は、まづ企業者自身の私利私慾を滿たすことを第一の目的とし、まつたく「私腹を肥やす」ことに熱中したのであつて、彼れの遠征の大成功と狼藉ぶりがひろく取沙汰されるやうになると、政府はこの仕事に干渉せざるを得なくなつた。そして一六五二年（承應元年）に新發見のダウルの國をその統治下に納めるために貴族ドミトリイ・ジノヴィエフが現地へ特派された。

【ネルチンスク砦市の建設】

恰かもエルマクの遠征後におけると同樣に、ハバロフの個人的な企業が目ざましい大成功を收めるとともに、その背後から緩漫ではあるが然し計畫的な、彼れの踏査した地方にたいする占領征服の段階がやつてきた。しかし、ダウル民族をその庇護下において常時勢威隆々たる支那大帝國との衝突が避けがたいといふ危險があつたので、モスクワ政府はアムール占領の野望を放棄せざるをえなかつた。そしてまるで强盜團のやうにこの地を荒らしまはつてゐたカザック團は、或は戰死し、或は四方に遁走し去つた。そのかはりに一六五八年（萬治元年）になるとアムール河上流の、ネルチ河がシルカ河へ合流する地點に、獨立の軍務知事を長官とする軍事・行政上の中心地——未來のネルチンスク砦市——が建設され、そこからダウルの國の徹底的征服と建設事業を進めることになつた。それと同時に一六五九年（萬治二年）にセレンガ河畔とその支流ウダ河の河畔にテレンビンスキイの柵を建設してダウルへの交通路を確保するにいたつた。

【流刑囚のアルベジン柵建設】

一六六五年（寛文五年）にニキィフォル・ロマノフ・チェルニゴフスキイと呼ばれるボーランド人流刑囚を首領とする逃亡カザックや刑事犯人の一團がダウルの君侯アルバザの廢城の址へ「ウォロフスキイ〔盜賊〕の柵」を建てた。しかしモスクワ政府はその後ようやく一六七二年（正德二年）にな

調—0523

0054

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

つてこれをその手に收めてアルバジンの柵(五七)と名づけ、そして非常に愼重な態度でハバロフ占領の計畫を遂行していつた。

【カザック自由國の形成】

あだかもドン河畔におけるとおなじやうに、ロシアの邊境たるアムール河畔においても、單に名目上だけネルチンスク知事の權力を承認する一種獨特なカザック共和國(五八)が形成されていつた。そして彼らは自分勝手にアムール河やその支流地方へロシア人の支配權を擴げていつたのである。「盜賊團カザック」はアルバジンに要塞を築くとともにゼイヤ河およびその支流セリンガ河の河畔にも數箇所の新柵を建て、さうしてアムール河の中心に自分たちの立場をかためていつた。

【康熙帝の支那軍との衝突】

だがしかしダウルの國においては、ロシア人は、十七世紀時代にあつて强大かつ高度文化の國家であつた支那と衝突することになつた。支那人は、古代からアムール、シルカ、ゼイヤ諸河の流域一「ゼイヤ沿岸から大河アムールの河口まで」、さらにオホック海の南岸一帶に住む「魚皮を身にまとふた」「長髮」の夷狄どもに貢稅を課してゐたのであつて、この異民族との間に物々交易をしたり貢稅を徵收するため支那の國境城市寧古塔(ニングタ)から年々アムール地方へ軍人や商人の團隊を送つてゐた。「ロチェ皇帝(アバ)の國」(支那人たちはさういふ呼び方でいつた)からやつて來た「まるで虎のやうに勇猛で射擊の上手な」連中がアムール河畔に腰をすえるといふことは支那帝國にとつて焦眉の脅威であつた。支那の大官たちは毛皮稅の徵收にやつて來たロシア人にむかつて「汝らは何用あつてわが貢附の民の住むツングスの地へ來寇するか?」と豪語した。支那政府は武力と外交手段をもつてアムール地方にたいするロシアの侵略を阻止しようと試みた。十七世紀の八十年代(延寶、元祿年間)にダウル地方の支配權を主張しあつて兩國が干戈を交へるにいたるまでの間に、ロシアの諸砦市はいくたびか比較的よく整備された優勢な支那軍隊の攻擊を蒙つたのである。

十七世紀の後半に滿洲朝廷が北京において帝位を獲得するとともに、支那は北方にむかつて勢力範圍を擴張しようとする傾向を活潑に現はしてきた。この傾向は一六六二年(寬文二年)に卽位した滿洲朝廷第二代の皇帝——聰明で闘志の旺盛な康熙(カンシ)帝によつて露骨に發揮され、哈爾哈(ジュシガル)をその屬領とし、噶爾丹(ジュシガル)の準噶爾國家を席捲し、西藏を保護領として服屬させ、アムール河以北ゾイカル以東、チュコト岬にいたる全地方の宗主權を宣言して、樺太(サハリン)島の踏査に手を染めるにいたつた。だが康熙帝は蒙古におけるいろいろな問題を解決するにあたつてロシア側から侵略をうける危險を防止するために

調—0523

0055

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

あらゆる努力を拂はねばならなかつた。

【ゼイヤ河畔諸柵の撤退】

滿洲朝廷が一六八〇年代に、メルゲン、齊々哈爾(チチハル)およびゼイヤ河口の愛琿(アイグン)――ウラホト)*等の諸城市を次ぎ次ぎに建設したことは、アムール地方にたいして一定の計畫を抱いてゐたことを物語るものである。支那政府は一六八三年(天和三年)にネルチンスクの軍長にむかつてゼイヤ河畔にある諸柵の撤退を要求する最後通牒をおくつた。その結果、ロシア側のゼイヤ河流域の根據地は廢棄されるにいたつた。その後支那側はしきりに軍備をととのへ、一六八五年(貞享二年)の夏になつて軍事行動を開始し、六月中に猛烈な砲撃を加へたのちアルバジンを陷れ、その翌年ロシアが要塞の復舊を企てるや支那軍はふたたび來襲して新砦市を包圍するにいたつた。それと時をおなじくして支那側から懷柔された蒙古人たちはセレンガ河畔にあるロシア人の「邊境の町々」を劫掠しはじめたのである。

【露蒙中立條約の締結】

モスクワ政府は强力な援兵をアムール地方へ敏速に派遣する見込が立たなかつたので、餘儀なく一六八七年(貞享四年)に平和交渉にいるほか手がなかつた。一六八九年(元祿二年)全權フェ・ア・

ゴロヴィンは蒙古の大石(ウイレ)たちとの間に蒙古の中立を保障する條約を結ぶ一方、其年の八月二十七日、長期にわたる支那朝廷との外交折衝ののち、アムールを支那の支配下におき、アルグン、ゴルビッツアの兩河とヤブロノイ、スタノヴォイ兩山脈を國境線として分劃するネルチンスク平和條約を締結した(五九)。

【ネルチンスク條約とロシア側讓歩の原因】

ロシアがアムールへの侵略政策を放棄するにいたつたのは支那外交家やそのころ支那宮廷の顧問となつてゐたジェズイット宣敎師(六〇)たちの巧妙な術策のお蔭ばかりでなく、アムール地方においても、亦それ以南の邊境地方においても、人的資源と物的手段が不足であつたために充分組織化された强國を相手に角逐闘爭する實力を缺いてゐたのと、もう一つは當時ロシアの對支貿易にたいする商業的打算からみて平和政策をとる方が有利だと考へたからである。かくて、一七二七年(享保十二年)布拉(ブーリン)協定によつてネルチンスク平和條約の一般的條件が確認されるとともに、爾來十九世紀中葉にいたるまでロシア人の南東地方への進出は一時中絶されるにいたつたのである。**

* 愛琿は一六八五年にアムール河の南岸へ移された。

** アムール地方占領の一層詳細な歷史については未刊資料を基礎とした私の小冊子「アムールにおけるカザック」(Казаки на Амуре)(レニングラド、一九二五年)に記述してある。また「ルスキイ・アルヒフ」誌の一八九八年第二號に掲載された十七世紀における西伯利の發見と征服

調―0523

0056

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

チュルコフの「十七世紀における成金者エロフェイ・ハバロフ」(«Ерофей Хабаров, добытчик и землепроходец XVII в.»)は一般に知られてゐるミルレルのアムールの歴史に關する物語にたいして重要な補足をあたへてゐる。

第三章　十八世紀及十九世紀中葉までの發見と征服

【西伯利地圖の編纂】

結局において十八世紀初までに西伯利におけるロシアの領土は、北東は北氷洋東岸、南はヤブロノイ、スタノヴォイ兩山脈とサヤン、アルタイの兩山麓、オルトゥイシュ、イシム兩河の上流にいたる廣漠たる草原地帶によつて形成される自然の境界線を占有するにいたつたのである。しかしこれらの邊境地方にはまだ多數の戰鬪的な遊牧民族が蟠居してゐた上に、草原地帶といふ惡條件にはばまれてゐたので、ロシアの植民的發達がおこなはれるまでには至つてゐなかつた。ロシア人によつて征服された上掲の領域においては、占領と同時にしきりに踏査探檢がおこなはれた。踏査が一歩を進めるごとに、その成果が「地圖」(チエルテジュ)のなかへ書きこまれ、さうした各種の地圖を綜合して一六六七年——一六七二年(寛文八年——延寶二年)にわたつてトボリスク政廳の手で西伯利總地圖が編纂された。一六九六年から一七〇一年(元祿九年—十四年)までトボリスクにあつて西伯利の地圖編纂の任にあたつたのは美事な西伯利大地圖書編纂者たるレメゾフであつた。征服地域の詳細な地誌は、その

調—0523
0057
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

地方の非常に豊富な人種學上の資料を提供してゐる。十七世紀の末にこれら一切の報道資料を一つの「西伯利地誌」《Описание Сибирского государства》に統合して纒めあげる企てがおこなはれた。ロシア人のこの編纂事業はそれ迄で全く不明瞭のままにのこされてゐたアジアの一隅を西歐に紹介することとなり、ロシア地圖が出版されるやいなやスエデン人の手でそれがコッピイされて、夙に時代おくれになつてゐたヘルベルシュタインの地圖が改訂された。そしてまたヴィトセンの「北東タルタリイ」に關する尨大な研究も、主としてロシア人の手になる資料を源泉として書きあげられたのである。*〔六一〕

【十九世紀前半までの領土擴張の方向】

十八世紀および十九世紀前半におけるロシア領土のその後の擴張は、二つの方向をとつて進んでいつた。すなはち、北東へはチュコト半島、北氷洋、太平洋東岸、さらに「大きな陸地」とよばれてゐたアメリカ大陸に向つて、南へはオビ、イルトゥイシュ、イシマ、エニセイ諸河の上流に向つて。**

→「西伯利地誌」は古文獻委員會版「西伯利年代記集」《Сборник летописей》中に收錄されてゐる。ヴィトセンはデンマークその他ロシアと隣接する他の國を經て入手した報道の抜萃を利用したが、それはヴィトセンの唯一のロシア的源泉ではない。

彼は秘書官ウイニウスと連絡があつて、多數のロシア語文書資料の報道をうけてそれを引用してゐる。

*西伯利からアメリカにいたる途が發見されるかも知れぬといふことについては十七世紀中においてすでにモスクワで興味をもたれてゐた。ロデスは一六五二年にモスクワから報告して「アメリカへの旅行」のために西伯利を經て外國の士官を派遣する計畫があることを述べてゐる。(クルツ著「ロデスの報告による一六五〇年――一六五五年のロシアの狀態」一〇五頁)アメリカについてはスモレンスクの知事ムシン・プーシュキンはジェスイット宣教師アウリルと談話してゐる。(アウリル「旅行記」Ph. Avril, Voyage, パリ、一六九二年、二〇一頁)

西伯利海岸を洗ぶ北氷洋上に點在する諸島の占領は、本質において十七世紀中におこなはれたエニセイ河北東諸地方の發見征服そのものの繼續であつた。この場合にも主要な役割をつとめたのは、利益を追ふて危險さはまる海上の企業に挺身していつた漁獵者群や軍人たちの個人的な活動であつたのである。たとへば、一七一一年〔正德元年〕に邊境守備隊の叛亂に加擔したカムチャトカのカザックたちはその罪を贖ふために小型船や艀船にのつて千島諸島の探檢〔六二〕を行ひ、原住民に毛皮稅を課し、その後カザック隊長シェスタコフの發意で大仕掛けに組織された探檢隊はチュクチ地方の踏査をなしとげ、カムチャトカを廻航してつひにアメリカ陸岸に到達したのである。また十八世紀および十九世紀においても、第一に注目すべきものは、過去と同樣にロシア商人團と漁獵者群の活動である。

十八世紀及び十九世紀中葉までの發見と征服

調―0523

0058

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【アレウト列島の發見と征服、露米會社の成立とカリフォルニアへの進出】

海洋の漁獵、とくにオホツク海諸島における ラッコ獵は、金儲けのために手段をえらばず時には命がけの危險をおかして突進していつた連中の慾望を、北氷洋や北太平洋上の島々にひきつけた。彼らはそれまで名も知らなかつた島々を發見して「君國の利益のため」にロシア皇帝陛下の「貴重なる御手の下に」島民どもを「征服した」のである。十八世紀の四十年代および五十年代（延享、寶暦年間）にはアレウト列島の發見征服に動機をあたへたセレブリャンニコフ、トラペズニコフ、ユゴウイ、トルストイその他の商人團の組織した貿易探檢隊の活動が見られる。それと相前後してヤクーツクの商人シャラウノフはレナ河以東の北氷洋の踏査を數年間にわたつておこなつた。彼れがその探檢旅行中に不慮の死をとげたのち、リャホフとプロトヂャコノフの二人が多くの發見（リャホフスキイ諸島）を成しとげた。ロシア人の毛皮貿易船隊は一七七〇年代（明和七年頃）以降「大きな陸地」——アメリカ沿岸への航海をおこなつてゐるのであるが、彼らが最初にチュクチ族からこの大陸のことを聞き知つた〔六三〕のは十八世紀初のことである。一七八〇年代（天明年間）にはすでにグリゴリイ・シェレホフおよびイワン・ゴリコフの商事會社がカヂアク島とシトカ島に代理店を設け、この代理店は一七九七年（寛政九年）に別の商事會社と合併し、イルクーツクの商人ムイリニコフの手で

「アメリカ諸島における貿易と漁獵を目的」とする合同アメリカ會社（後に露米會社（ルスコ・アメリカンスカヤ・コムパニヤ）に改組された）が創設されたのである。露米會社は十九世紀初においてそのころイスパニア領であつたカリフォルニアを根據として活動し、一八一二年（文化九年）その地にロッス要塞を設けたが、やがて採算不能のため閉鎖するにいたつた。〔六四〕

【ベーリング探檢隊】

私人の懷ろ勘定で企業的に行はれた發見や占領と併行的に、十八世紀から十九世紀初にかけて西伯利や海洋の學術調査を目的とする政府の探檢隊が派遣された。アジアとアメリカの兩大陸を結ぶ海峽の疑問を解決するために行はれた有名なベーリング探檢隊はさうした計畫中の一つであつた。同時にまた十八世紀の三十年代（享保、天文年間）にアルハンゲリスクからアナドゥイルにいたる北氷洋海岸線の體系的な踏査が企てられ、ひきつづいて數回の小規模な探檢隊（オフツィン、ラプテエフ兄弟、プロンチシチェフその他）が派遣された。その後の探檢隊としてはビリングス、サルイチェフ、それから十九世紀にはいつてからは、ウランゲリの名をあげれば足りるであらう。＊〔六五〕

＊これらの探檢隊については ニ・ベルグの「カムチャトカ發見とベーリングのカムチャトカ探險」（Открытие Камчатки и экспедиции Беринга）（一九二四年）が美事な概說をあたへてゐる。〔邦譯小場有米、龍吟社版あり〕

調—0523

0059

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【日本領土の測量】

ロシアの領土はこれら總ての個人や政府の手で遂行された遠征と探檢の結果、次第に擴大されていつたのである。オホック海上に在る千島諸島の占領とともに千島以南の日本諸島に屬する島々への自然的進出が想定され、また事實において「日本國の測量」に關する若干の企てが實行される〔六六〕にいたつてゐるのである。だがしかし現地の諸條件から判斷して太平洋上のここかしこで幾多の占領征服が行はれたやうに、個人的な貿易漁獵者の手で武力的に戰ひとるべく日本國はあまりにも强大であることがわかつたので、すでに一七三二年〔享保一七年〕にベーリングの第二回探檢隊が發遣される際には、彼にたいして「日本に接續する諸島嶼の測量には赴く」べきであるが「日本の汗（ハポンスキー・ハン）」もしくはいづれの國家にもせよ他のヨーロッパもしくはアジアの皇帝の領土内に侵入せざるよう「固く要愼すること」〔六七〕といふ嚴命がくだされたのである。ただ東方への交通路の一つ、すなはちアメリカ海岸への交通路だけは不問のままに殘されてゐた。

【アメリカ海岸におけるロシア植民地】

脆弱なイスパニア政府は、アレウト列島を形成する無人の諸島嶼だけでなくサンフランシスコから僅々五十露里を隔てるにすぎぬカリフォルニアにおいてさへも、ロシア人漁獵者たちに反撃を加へる力はなかつた。アラスカおよび上部カリフォルニアまでの大陸北西岸の全體を包括する廣漠たるアメリカ諸州は、右のやうな狀態のもとにあつて、その地域に屬するシトカ（ノヴォ・アルハンゲリスク港を有する）、カデアク、シュマギン、リイシイ（フォックス）、プリブイロフ、アレウトおよびクリイ（千島）などの諸島は一八六五年〔慶應元年〕にいたるまで、例外なしにまるで露米會社の私領地のやうな形でその支配下におかれてゐたのである。

十八世紀の最後の四半世紀（明和年間以降）においては、北米合衆國が建設されて力づよい發展をとげると共に、新世界の邊境の一角に散在してゐたこれらのロシア植民地は、本國の中心から遠隔の地に偏在してゐた上に、資本と技術的知識にとぼしく、合衆國の植民地における豐富な天然資源の開發とはとうてい經濟上太刀打ちができないので、おそかれ早かれ崩壞の運命にみちびかれるほかはなかつた。ロシア政府が一八六七年〔慶應三年〕にアメリカ北部の領有地およびそれに屬する諸島嶼を引つくるめて二束三文の目くされ金でアメリカ合衆國の手に讓渡してしまつたのは、さうした理由によるのである。〔六八〕*

＊この方面におけるロシア植民地の歷史については非常に澤山の文獻がある。ここではティフメネフの大著「露米會社の創立と十八世紀中葉までの發見と征服の過程

調—0523

0060

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【アルタイ山麓への進出、ピョトル大帝の中央アジア侵略計畫】

右の時代におけるイルトゥイシュ、イシマ、オビなど諸河の上流地方にたいするロシアの侵略は別個の性格をもつてゐた。十七世紀と十八世紀の分界期にその國家的發展史上もつとも複雑且つ困難な時代を體驗しつゝあつたロシア帝國は、軍事財政上の缺乏を滿たすため金屬にたいしてとくに敏感な要求をもつてゐた。政府が埋藏資源の豐富な西伯利諸地方への勢力擴張に執拗な努力をつづけた理由はそこにある。政府は他の場合とおなじくこの時においても個人企業者の協力を利用したのである。一七二七年（享保一二年）アルタイに最初の工場を建設したデミドフ一家は、その工場警備のために私費をもつて要塞を構築し、そこに大砲をそなへつけ、守備隊を備用しなければならなかつた。それは嘗つてストロガノフが私有の製鹽工場を守備するために砦柵を設けたのと同一轍を履むものであつて、ロシアの領土はかくしてオビ河氷源地方に達し、アルタイ山脈の奥深くまで延びて行つたのである。それと軌を一にして、金屬にたいする熱烈な欲求はロシア政府を驅つてさらに一層アジアの奥深く、そのころアム・ダリア河から「砂金」がでるといふ魅惑的な噂（六九）の立ちはじめた南部トルキスタンのヤァカンドまでも進入する計畫をさせてゐる。ピョトル一世の治世にこの砂金を目あてに數回の遠征隊が派遣されてゐるのであるが、それらの遠征はロシア人がヤァカンドまで侵入する可能性を有たなかつたので失敗に終つてしまつた。このかはりにこの草原地帶への遠征の結果としてタラ、イルトゥイシュ兩河の上流までがロシア人の手に歸し、ヤムイシェフスカヤ―一七一五年（正德五年）オムスカヤ―一七一六年（享保元年）ジェレジンスカヤ―一七一七年（享保二年）セミパラトナヤ―一七一八年（享保三年）ウスチ・カァメノゴルスカヤ―一七二〇年（享保五年）といふ風に、相次いで幾つもの要塞を構築してこの地方に足場をかためることゝなつた。かくてこの方面におけるロシアの領土は、西伯利平原とトルキスタン地方とを分劃する、タルバカタイ連山によつて遮斷された自然の境界點まで到達したのである。

【西伯利要塞線の完成】

イルトゥイシュ河上流への進出は、それまで不到の地であつたバラビンスキイ草原地帶をロシア植民の前に開扉するにいたつた。＊新附の南方國境へ遊牧諸民族が來襲するのを防ぐため、數々の據點

調―0523

0061

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を系統的に押しすめてゆく必要があつた。そこで十八世紀中に、草原地帯へのロシアの侵略政策を充分はつきりと確定したところの、いはゆる「西伯利要塞線（シビルスカヤ・リニイ）」なるものが形成される事になつた。

西伯利要塞線の發端は、夙に十七世紀中にトゥラ河およびイセチ河沿岸地方の農業自由村落を防衛する目的で、トボール河に沿ふて設けられたいくつもの小さな砦柵である。十七世紀末（元祿年間）から以降これらの砦柵へは「馬に乘つて侵入してくる軍兵どもを防備するため」毎年春になるとトボリスクから軍人の一隊が派遣されてゐた。この境界線の南端はツァレヴォ・ゴロヂシェ（皇帝の小砦市）もしくはクルガンと、ウリャツキイの柵とであつた。ワガ河およびイシマ河に沿ふて別の要塞線が十七世紀中に設けられた。そしてアバツキイおよびコルキンスキイ（イシム）の兩柵がその先端になつてゐた。

かくして既に十七世紀において、草原地帯を西と東から圍む二つの防禦線が形成されてゐた。十八世紀になつて要塞線の境界は、いちじるしく南方へ押しすすめられた。十八世紀の三十年代（享保、元文年間）には、クルガンの南方にあるレビアジイの柵*からトボール河を下流へ、そしてクルガンの手前から北西へ、モレフスキイ、アラグリスキイ、スエルスキイの諸哨所を經て、オムトナヤおよびウスチ・ラミンスカヤ兩要塞にいたり、そこからふたたび南西に曲折してイシマ河（コルキンスキイの柵）に達し、その先きでまた北方へ（ズデロフスキイの柵）イルトゥイシュ河（ポリシェレツカヤ要塞）にいたり、更にまたイルトゥイシュ河に沿ふてチェルノツキイの柵（オムスクの稍や上流）で終つてゐた。このイシムスカヤ防禦線のなかへは、防備をほどこした總て約六十の村落がはいり、草原地帶を蜿蜒と流れるトボール河とイルトゥイシュ河の間に形成される廣大な地帯を包括してゐた。

＊パラピンスキイ草原地帯の植民地に關する新らしい著作ア・グリゴリエフの「西伯利研究所報第六輯」（トムスク、Г. А. Григорьев, Труды Сибирского Института, Вып. 6, Томск, 1926）参照。

◎Serpodoro и saceatume moen. tpaseta в Cufupus（トボール河の沿岸にはレセアジイの柵のほかチェルナフスキイおよびウエルフネ・ウチャツキイの兩柵を擧げることができる。

【ゴリカヤ要塞線】

十八世紀の中葉にはブレスノゴリコフスカヤ線もしくは單にゴリカヤ線と稱される要塞線があらたに形成された。この線はやはりトボール河畔の舊要塞線の稍や南方にあるズヴェリノゴロフスカヤおよびブレスノゴリコフスカヤ兩要塞を基點とし、西方へ、ペトロパウロフスカヤ要塞へ、そこからオムスカヤ要塞へとつづき、かくしてトボール河とイルトゥイシュ河の中間に三角形をつくり、だいたいにおいて現時の西伯利の南部境界に併行するものであつた。この要塞線ができるとともにイシムスカ

十八世紀中葉までの發見と征服の過程

調一0523

0062

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

や要塞線はその意義をうしなつた。十八世紀中葉にはまたアルタイ地方のクズネック・コルイワン鑛業地帶の防禦を目的とする要塞線が建設された。それはイルトゥイシュからウバ河に沿ひズメイノゴルスキイ鑛區、コルイワンスキイ製鐵所およびベロレッキイの柵を經てマラリハに達し、そこからビイスクおよびクズネックの兩砦市に達するものである。そして六十年代（寶曆年間）にこの線はズメイノゴルスクおよびコルイワンを西に殘しウバ河に沿ふて稍や南東に進められた。結局において十八世紀中に現在のトボリスキイおよびトムスキイ地方の南部境界は戰略的に防備を完成してゐたのである。その後の中央アジアへの進出は別の交通路をとつてすすみ、そして南部沿ウラル地方の植民およびオレンブルグ砦市の建設と相俟つて、現時のトルキスタン領への侵略を容易ならしめる據點が作られたのである。

【ロシア資本主義の發達と近東および東亞政策】

十九世紀中葉になつてロシアのアジア侵略政策に急激な變化がおこつた。この世紀の初頭からいちじるしく目だつてゐた資本主義の發展はロシア政府をして新らしい課題の前に立たせたのである。ロシアの商業はより技術の高い西歐との競爭をする力をもたなかつたので、みづから主人として全權を振ふことのできる、新らしい市場の探求をはじめた。ニコライ一世帝（一七〇）の治世に最初の徵候をあらはしはじめた近東および東亞地方にたいする積極政策はそこから起つたのである。

【バルカン政策の失敗と最少限抵抗線への轉進、アムール占領と愛琿條約、滿蒙鮮への侵入と日露戰爭】

バルカン半島においては、トルコ問題を中心として捲きおこされた政局の複雜性と、他の列强との衝突によつて、豫定の計畫を實現することが困難となつてゐた。だから、ロシアの軍事政策が最少限の抵抗をもつて迎へられた方向、すなはちアジアに向かつて振りむけられたのは自然である。夙にニコライ一世の治世においてヒワ汗國（一七一）の占領が豫定されてゐたのであるが、東方へ向つて徹底的な方向轉換が精力的に發揮されたのはアレクサンドル二世（一七二）の時代である。西伯利總督エム・エヌ・ムラヴィヨフの積極計畫によつてアムール地方が占領され、一八五八年（安政五年）五月十六日の愛琿條約によつてそれが確認されたことは、新方針への轉換を露骨に語るものであり、それはやがて蒙古、滿洲、朝鮮への侵入に導かざるをえず、遂に一九〇四年――一九〇五年の日本との戰爭にまで展開されたのである。

＊愛琿條約と同時に支那におけるロシアの商業的利益を保障する目的で一八五八年六月一日の天津協約、一八六〇年の北京協約が締結された。

調―0523

0063

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

他方、アレクサンドル二世時代のトルキスタン占領はロシアの商業に中央アジア市場への門戸をひらいた。この方向における爾後の段階はロシアと東洋におけるその競爭者イギリスとの間におこなはれたペルシアの經濟的分割であつた。かくして十九世紀中葉は東亞における侵略政策への轉換を特徴とする。それとともに、農奴制經濟國家から資本主義經濟國家への轉換は、土地耕作に便利で廣大な未開墾地と無限の原料資源をもつ西伯利を開發利用してあらたに發生した幾多の需要を滿足せしむべきことを必要とした。それ故、十九世紀中葉は西伯利植民史における分岐點であつて、その植民生活においてはこれに先行する各時代には嘗つてわれわれが見ることのできなかつた幾多の新事實が現はれ、それと反對に過去數世紀にわたつて存在したもろもろの現象は逐次に消失して行くのである。

第二篇　西伯利征服と交通路の發見

第一章　ウラル以東への交通路發見と征服

一、カアメニ（ウラル）越え交通路の發見

イ、カアメニ越え交通路の方向

【ペチョラ河、北ドヴィナ河、ユグ河、スホナ河、ウィチェグダ河、ウイマ河、テテラ河、ゴフニュヴ河、ウイムスキイ連水陸路、ウフタ河、イジマ河】

ロシア人はカアメニ（十七世紀ごろにはウラルのことを「カアメニ」と呼んでゐた）以東への進出に際して、二つの大きな水路を利用したのであつた。その交通路はペチョラ河およびカマ河とその諸支流とであつて、それは古代から東部ヨーロッパの平原と北アジア平原とを連絡するところのものであつた。ペチョラ河による交通路は、古來からロシア人によつて通行可能なものと成されてゐたのであり、それは十七世紀において「カアメニ越え」交通路の名を冠せられた有名なものである。この交

調—0523

0064

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

通路の重要性は北ドヴィナ河とそれからアラウン高原を水源とするその支流ユグ河およびスホナ河を仲介として中央ロシアの平原と連絡し、さらにまたペチョラ河の東部諸支流と結びついて同河とオビ河との分水點を形成してゐるウラル山に到達するといふ點にあつた。十七世紀時代にあつては「カアメニ越え交通路」は、ウスチュグからウイチェグダ河を遡航してウイマ河の合流點に達し、そこから更にウイマ河とその支流テラ河（現時のショム・ウクワ河）およびゴフニュダ河によつて遡航したのであつた。ウイマ河の上流から「ウイムスキイ連水陸路」を越えてイジマ河の支流ウフタ河に移り、それからイジマ河を同河のペチョラ河との合流點まで下航した。そしてイジマ河の河口から急に東に向つてペチョラ河を上流へ遡航したのである。

【メゼナ河、ピネガ河、クラ河、ピネジュスキイ連水陸路、ペザ河、ペズスキイ連水陸路、ルピン河、チルカ河、ツィリマ河、メゼンスキイ交通路、ウラル峠越え連水陸路】

イジマ河の河口に近いところでメゼナ河、ピネガ河、ドヴィナ河などの諸河を連結する「カアメニ越え」交通路中きはめて樞要な會交點に結びついてゐた。ドヴィナ河の河口から海岸沿ひに海路メゼナ河の河口にいたることも出來たし、またピネガ河の河口に入つてこれを遡航し、同河とクラ河とを結びつけるピネジュスキイ連水陸路に達し、そこから船をクラ河へ移搬して、同河を海まで下航し、

岬を迂廻してメゼナ河へでることも可能であつた。そこから更にメゼナ河を上流へ遡航してペザ河にいで同河を「ペズスキイ連水陸路」まで航行する交通路があつた。「ペズスキイ連水陸路」五露里を經て湖水にいたり湖水からルピン河を經てツィリマ河の支流チルカ河にいり、同河を航行してペチラ河の合流點に達した。また上揭の湖水から連水陸路によつて直接ツィリマ河にでる別の交通路もあつて、ツィリマ河からペチョラ河へ出たのである。カアメニを經て東方海岸地方と大國道とを結びつけるメゼンスキイ交通路はロシアの經濟生活にきはめて重要な意義をもつてゐた。時としてはペチラ河からウスチュグへ通行する場合にさへこの交通路を利用してゐたのであるが、それは「ルゥシへ行く人々が人家のない荒漠たる土地」を避けて旅行するためであつた。ウラル山の峠を越える「カアメニスキイ連水陸路」はいくつもの小さな湖水群を渡り越えて行くのであつたが、湖水から湖水への間では舟を移搬し、また荷物は手に持つて運んで行かねばならなかつた。

【オビ河交通路】

西伯利からルゥシへ歸つてゆくベリョゾフスク〔砦市〕の軍人たちのことが一六四一年〔寛永一八年〕の或る文書には次ぎのやうに書いてある。

「彼らがソビ河からどのやうにしてカアメニへ到達したかと云へば……まづ岩壁に圍まれた第一の連水陸路にいでそこで稅關の許

調—0523

0065

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

をうけてから運水陸路を越えてエレツ河にいたり、この河を下流へ航行して
ウラル峠を越えてからオビ河系のソビ河にでてそれを航行していった。」

「カアメニ越えの夏の交通路としてはソビ河のほかに道はない。」

ソビ河の河口から先きは二つの交通路があつた。オビ河を遡航してベリョゾフ（砦市）およびトボリスク（砦市）にいたるものと、オビ河を河口までくだつてオビ灣の岸づたひに矢張りオビ灣の一部を成してゐるタゾフ灣の東岸にあるマンガゼイ（砦市）にいたるものとである。*

*「カアメニ越え」交通路については「ロシア歴史文庫」二五四號、ティトフ「十七世紀における西伯利」《Сибирь в XVII в.》の五〇―五一頁参照。西伯利局文書の中ではこの交通路について非常にしばしば書かれてゐる。「カアメンヌイ」運水陸路の記述は西伯利局文書にある。ウラル峠越えのことは一六五三年にベリョゾフ郡を訪づれたラ・マルティネルが書いてゐる。（「北國旅行」セメンコヴィチ譯、モスクワ考古學研究所版五九―六〇頁。七一―七二頁）しかし彼れがどの地點を越えたのか正確にすることはできぬ。メゼンスキイ交通路のことはヘルベルシュタインの利用してゐる「道路案内書」《Дороммик》に記されてゐる。ベズスキイ運水陸路についてはシュレンクの《Reise nach dem Nord-Osten des Europäischen Russlands zum arktischen Ural-Gebirge》一八四八年第一巻第五章参照。「西伯利局文書」にも多くの記載がある。

【シチュゴル河、スイグワ河、キルタス河、ソキワ河、イルイチ河】

十六、七世紀時代にはウラル越えの旅行のためにウサ河およびソビ河を航行する交通路のほか、ペチョラ河の別の支流であるシチュゴル河が利用されてゐた。この交通路のことについてはヘルベルシュタイン〔一五三〕がその著書の材料としてゐる「道路案内書」の中にしばしば記されてゐる。シチュゴル河を上流へ遡つてウラル峠を越えてからスイグワ河へくだり、それからキルタス河にいり、キルタス河からオビ河に合流するソシワ河に入つたのである。レミョゾフの地圖によつて判断するとペチョラ河第三の大きな支流イルイチ河もやはり「西伯利からの通り道」となつてゐた。*

ソリ・ウイチェゴドスクからベリョゾフ（砦市）までの「カアメニ越え」交通路の全行程は、一六五六年（明暦二年）に驛逃者たちが三千露里**と計算してゐた。一六七二年（延寶二年）の「西伯利地圖要覽」《Синска с Терпема Сибирские земли》によると右の交通路を旅行するのに十三週間四日を要したと計算されてゐるが、それは眞實に近いものであらう。別の資料によるとオブドルスク（砦市）からイジマ河の河口まで五、六週間またはそれ以上を要したのであるから。***

以上述べた西伯利への道は夏季にだけ水路を利用することができたものである。冬季にあつてはカアメニ峠越えは――「ときどき大雪と大風があつて」****夥だしい困難をともなつた。冬の山越えは特別の場合にかぎつて行はれ、馴鹿または犬橇を利用した。*****

調―0523

0066

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊ヘルベルシュタイン旅行記、マレイン譯一二九―一三〇頁。アッィンスキイ「西伯利の植民」《Заселение Сибири》七七―七八頁。西伯利局文書參照。ソシツ河を航行する道路は多分一四九九年にクルブスキー僕が利用したものと思はれる。彼はウラルの岬を越えてスイグワ河畔にあるオスチァク族の城砦リァビンを占領してゐるのだから。

＊＊「古代公文書」一六五六年第四號。

＊＊＊ディトフ「十七世紀の西伯利」《Сибирь в XVII в.》五〇―五一頁。

＊＊＊＊「西伯利局文書」（Д. С.-П.）各所。

＊＊＊＊＊「ロシア歴史文庫」（Р. И. Б.）第二卷第七七號。ミルレル「西伯利園誌」六三頁。ラ・マルティネルの「スキイに乘つてカメニを越えベリゾフスク砦市を過ぎた話」その他。

【古代フィン族の交通路、ウラル以東ロシア人最古の交通路】

偶然的な考古學的發掘物＊によつて判斷するとペチョルスキイ交通路は相當古代からすでにフィン族原住民の間には知られてゐたので、最初ロシア人たちも彼らからこの交通路のことを聽き知つたのである。古代からヴォルガ沿岸地方を占有してゐたボルガル族（七四）、その後になつてカザンのタタール族によつて長いあひだ他の道路を遮斷されてゐたロシア人にとり、ウラルを越えてカマ河を航行するこの交通路はウラル以東との交通連絡上のもつとも古い交通路であつた。この交通路が十八世紀にいたるまでとくに「カァメニ越え」交通路といふ名を冠せられてゐたのはその證據である。

＊マクシモフ「北國の一年間」《Год на севере》第四版五〇六頁。シドロフ「ロシアの北部」《Север России》五四三頁。

ロ、「ユグラ」の國にいたるノヴゴロド人の交通路

これは――「ユグラ」の國＊すなはちオスチァク族の住んでゐたオビ河下流地方にいたるノヴゴロドの交通路であつた。

＊「ユグラ」といふのはズイリアン語でオスチァク族の名稱である。オスチァク族は初めウラルの西麓地方に住んでゐた。その後ユグラといふ名稱がウラル以東オビ河の下流地方のオスチァク族の領地を指してゐることは明瞭である。ユグラについての考證はドミトリエフの「古代ベルミ」《Пермская старина》および ザムイスロフキイの「ヘルベルシュタインとロシアに關する歷史地理的報道」《Герберштейн и его историко-географические известия о России》（「ペテルブルグ大學歷史紀要」第十八卷）を見よ。

【ウスチュグ族のノヴゴロド人襲撃】

ノヴゴロド交通路のコースは年代記の資料によつてかなり明確に推定することができる。この交通路がウスチュグを經てスホナ河によつて行はれてゐたといふことは、一三二二年（元享二年）に「ユグラの國へ旅行した」ノヴゴロド人たちがウスチュグの原住民どもから掠奪され、また一三二九年（元德元年）にも、ふたたびウスチュグの土侯（ウニャジ）が「ユグラへ赴く」ノヴゴロド人を擊滅したといふ記

調―0523

0067

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

逆によつて明らかである。

【ノヴゴロド人のウスチュグ征服】

そしてノヴゴロド人はとくに東方への道路を清掃する目的で一三二四年（正中元年）にウスチュグへの遠征を企て、シュチト河畔の城砦を占領してウスチュグの土侯たちに媾和條約の締結を餘儀なくせしめた。*

* 「ノヴゴロド年代記」（Новгор. лет.）古文献委員會版三二〇―三二七頁。

一一八七年（文治三年）にユグラへでかけた貢税徴收人たちがペチョラ河畔で鏖殺*されてゐることから判斷すると、この交通路はそこから先きでペチョラ河の方向へ曲つてゐたものである。そのことは「ペチョラへ遣はされ……その地からさらにユグラへ」向つて進んだギュリヤタ・ロゴヴィチ支隊の通過した順路によつても裏書される。さらに一三六四年（正平一九年）の遠征に關する物語によるとノヴゴロド人たちは、ウラルを越えてオビ河左岸の一支流、おそらくソシワ河を航行してオビ河にいで、それから二隊にわかれてその一隊は「オビ河を戰ひながら海までくだり」他の一隊は「戰ひながらオビ河を上流へ―**遡航していつたらしい。かくてノヴゴロド交通路は後の「カァメニ越え」交通路とだいたい一致してゐるのである。

【毛皮の寶庫ユグラの國とサモエヂの國】

「半ば夜の國」と云はれたこの地にはお伽噺のやうに毛皮が豊富で、そこでは「栗鼠」や「小鹿」が霧の中から飛びだしてくるといふ實見者の物語がつたへられ、この噂は企業心の旺盛なノヴゴロドの狩獵産業者（プロムィーシレンニク）たちを早くから「カァメニの彼方へ―ウラルの東へ」惹きつけ、彼らは「越えがたい斷崖絶壁や深淵に阻まれた道も、雪や密林も」おそれずに進んでいつた。ラドガの市長バウルの時代、すでに十二世紀初（康和年間）のころにおいて「人々は古くからユグラやサモエヂの國へでかけて行つた」と語られてゐる。***

* 同上一六一頁。

** 「西伯利年代記集」第四巻六四―六五頁。第五巻二三〇頁。

*** 同上第二巻、第二版二七七頁。

【毛皮遠征隊とユグラの反抗】

狩獵産業者の例にならつてノヴゴロド政權も原住民から毛皮稅を徴收する目的で軍事遠征隊を派遣し、彼らは一三六四年（正平一九年）にユグラの國のかなり奥深くまで侵入してゐるのである。年代記には生き生きとした鮮明さをもつてこれらの遠征のことや、またユグラの部酋たちが城壁の蔭に立

調―0523

0068

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

籠って頑張にノヴゴロド人に抵抗したといふ物語が書きのこされてゐる。當時これらの國々が恒常的に占領されたものと見ることはできない。遠征はかなり偶然的な侵寇劫掠の性質をもつてゐて、年代記の記すところによれば「ノヴゴロドの軍長たち」の指揮のものに「武士（ボヤール）の息子や勇俠の徒（ウダーイ・リューディ）」の中から掻き集めた義勇兵や「浮浪人（ノヴォトニ）」の一團によつて行はれたのである。ユグラ族から大ノヴゴロドへ貢稅を納めさせようとする目的で企てられた、かかる侵寇劫掠は、その地方の原住民の間に鞏固な地盤をもち、毛皮商品の產地としてユグラを大切に取扱つてゐた民間企業者の商業的利益を破壞したらしい。ノヴゴロド國家と民間企業者の間では競爭と葛藤がおこなはれ、それは往々にしてきはめて尖銳な性質をもつにいたつてゐる。たとへば一一九三年（建久四年）に軍長ヤドレイ指揮のもとに派遣された軍隊が「同胞に反對してユグラ人と通謀した」＊若干のノヴゴロド人の奸計におちいつて殲滅されたのはさういふ事情によるものと考へられる。

＊「ノヴゴロド年代記」《Новгор. летопись》

【ノヴゴロドのユグラ併合】

ノヴゴロド人がウラル以東へ遠征した結果、「ユグラ」が表向きノヴゴロドの「鄉（ヴォロスチ）」として併合されたことは十三世紀の公文書中にも記載されてゐる。併しまだ確實に占領が完遂されたとは云へない。

「ユグラの土侯たち」の大ノヴゴロド政權にたいする隷屬關係は黑貂の毛皮その他の土產物を、それもごく不規則に貢納する程度にとどまつてゐたのである。

【モスクワのノヴゴロド領侵略】

北東におけるノヴゴロド人の貿易交通路は、中部ヴォルガ沿岸を支配してゐたルゥシ諸侯の夙に注目するところとなつてゐた。スズダリ地方「七五」の諸侯は早くも十二世紀中に「ノヴゴロドの毛皮稅徵收人」たちを途中で橫奪＊することを企ててゐる。そのころスズダリ領になつてゐたウスチュグ〔市〕はノヴゴロド領地の中へ楔形に切れこんでゐてノヴゴロド人がスホナ河からウイチェグダ河へでるのを妨害してゐた。十四世紀にウスチュグがモスクワ大侯國に統合されて以來、モスクワはドヴィナ河とペチョラ河へ向つて計畫的な侵略をはじめてゐる。ノヴゴロド人はこの侵略を防禦するために十四世紀末から十五世紀初（一三九三年、一三九八年、一四一七年、一四二五年）にわたつてウスチュグへいくども遠征をおこなひ、その都度ウスチュグは無殘に掠奪された。＊＊

＊「ノヴゴロド年代記」

＊＊同上三七九頁、三八六頁、四〇四頁、四一三頁。

調—0523

0069

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ハ、ウイマ河畔における正教管區

【モスクワ大侯のズイリャン族宣教と懐柔】

ドミトリイ・イワノヴィチ大侯は、ペチョルスキイ交通路の上に確乎たる根據を固めるため、そしてウイチェグダ地方のズイリァン族（一七六）の間にキリスト教を布教するために、ウスチュグから出かけていった宣教師たちに強力な援助をあたえたのであった。モスクワ教會宗務廳から任命されて布教の途にのぼったペルミの僧ステファンは、單に「ズイリァンの使徒」たるのみでなくウイチェグダ河の流域に住む異民族の間にモスクワの勢力を扶植する水先案内人であり、そして彼がウイマ河畔に創立したペルミ正教管區の中央寺院はペチョラ河流域にたいするモスクワ政權の勢力擴張の足場として重要な政治的意義をもってゐたのである。この聖僧の死を悼む「哀詞」の中に彼れとノヴゴロド人の一隊、ノヴゴロドの掠奪團との衝突の事蹟*が特筆されてゐることは偶然でない。

* 古文獻委員會版「聖ステファン・ペルムスキイの生涯」《Житие св. Стефана Пермского》 八七頁。

【ペルミ正教管區の政治的役割】

ペルミ正教管區の中央寺院は、ウイチェグダ河からペチョラ河にいたる交通路上の、ロシア人とズイリァン族との二つの世界の境界點に在つて、全十五世紀を通じて政教兩面の役割を兼ねた特異の性格をもつてゐた。ペルミの大主教はとりもなほさずその地の領主であり、彼れは絶大な權力をもつ宗務上の顯官であると同時にモスクワ大侯の僧臣たる資格をあたへられてゐた。ウイマ河畔、ウイチェグダ河畔、さらに全ウイチェグダ地方の耕地、草場、そのほかあらゆる有用地を含む、おどろくべき廣大な土地が彼に屬してゐた。ウィチェグダ河とウイマ河の上流や下流地方には十七世紀初のころまでペルミ大主教のかなり廣大な領地がまだそのまま殘つてゐて、その領地には、大規模な「河や湖水」の漁區が附屬し、その岸には「大主教さまの森林」が廣々と展開してゐたのである。十五世紀時代におけるこの領地の中心は要塞で固められた「大主教市ウスチ・ウイムスキイ」でこの砦市はペルミのステファンがみづから自分の手をもつて破壞した異教徒の禮拜所の跡へ建設したのである。一六〇八年（慶長一三年）頃にはまだこの砦市――「ヴォログダおよび大ペルミ大主教管區市」の廢址が過去の莊大な榮華の名殘りをとどめてゐて、そこには大主教管區の守護者たる開祖聖ステファンを記念する大寺院や、瑠璃色に塗られた幾つもの棺に納めた大主教グラシム、ピチリム、ヨアンその他のペルミの聖人たちの遺骸を安置した聖廟が立ちならんでをり、十五世紀時代に存在した「偉大なる大主教さまのお百姓たちの住宅」の遺跡も保存されてゐた。

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

てゐた。*

＊グネウシェフ「ワシリイ・シュイスキー皇帝時代の公文書」《Акты Ист. архив. Ил. Вас. Шуйского》二九二―二九七頁。カラムジン「ロシア國史」《Ист. Гос. Рос.》第四巻の註四六一。

【オビ流域原住民のキリスト教化】

ペルミ大主教が特別の地位を占めたのは、後ウラルへの交通路地方に住んでゐた原住民族にたいする複雑な關係によるのである。まづ第一に彼れはウイマ河の流域に住むキリスト教徒を「異教徒」たるヴォグル族やオスチャク族の襲撃から擁護する唯一の庇護者*であつた。フィロフェイ僧正の時代に生きてゐたウイマ河畔のピョトルやフョドルのごときキリスト教徒化した原住民族の土侯たちはいづれも大主教の庇護下**におかれてゐた。そしてフィロフェイはペルミ大主教の勢力をオビ河の下流や中流地方に住む後ウラルのユグラ族やヴォグル族にまでおよぼし、ペルミのヴォグル族、コド族やユグラ族のすべての領地に勢力をもつてゐた。コド族の部酋は一四八五年〔文明一七年〕に彼の斡旋により大主教砦市ウスチ・ウイムスキイの郊外でウイマ河地方の部酋らと和睦し「害心を抱かずペルミの人々に暴力を加へず、總ての統治權を大侯にささげ奉る」と誓約した。彼れは後ウラル地方の部酋土侯たちとモスクワ大侯との間を斡旋する仲介者となつてゐたので、ペルミの土侯ユムシアンは

一四八四年〔文明一六年〕にモスクワへ參候するため「護照（オバス）」を受けることについて大主教と交渉をしてゐる。またコド族やユグラ族の部酋土侯は領民中の廣囚となつた者の釋放について大主教を通して願ひいで、大主教の「斡旋」によつて願意が聽きとどけられた。かくウラル以東の平和的占領は大主教のウスチ・ウイムスキイ砦市を足場として準備されたのである。

＊「聖ステファンの生涯」《Житие Св. Стефана》

＊＊ウイマの部酋たちについてはペルミ古文獻委員會論文集第一卷、ゴルブツォフの「大ペルミ諸侯ペルミおよびウイマの土侯たち」《Князья великопермские, пермские и вымские》を參照。

二、モスクワのペチョルスキイ交通路奪取

【ウラル地方征服の基地】

それとともにこのウイムスキイ砦市はモスクワ政府がウラル地方の異民族――原住民の部酋土侯たちを據地となり、モスクワと臣從關係におかれてゐた後ウラル地方の異民族――原住民の部酋土侯たちを信服させるために利用された。その後オビ河畔に住むオスチャク族の部酋、とくにコド族の部酋にたいして同樣のことが行はれてゐる。かくして一四六五年〔寛正六年〕のユグラの國への遠征に際しては、ウイマの土侯ワシリイが領内のウイマ族を率ひてこの遠征に加はつてゐるのである。*

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523
0071
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊「アルハンゲリスク市年代記」《Архангелогор. лет》一七八一年版一四一頁。

【モスクワ諸侯のユグラ大遠征】

ノヴゴロドが沒落するとともに全ペチョルスキイ交通路がモスクワの手に歸し、モスクワはウラル以東の古代ノヴゴロド領を自分の手に確保するため直ちにこの交通路を利用した。一四九九年（明應八年）にはモスクワの諸侯セミョン・クルプスキイ、ピョトル・ウシャトゥイ、ワシリイ・ガヴリロフらを指揮者としてユグラの國のゴド族とオグル族にたいする大遠征＊が企てられた。四千人以上からら成る遠征軍は二途にわかれて前進した。ドヴィナ、ピネガ、ワガ諸地方の兵をもつて編成されるウシャトゥイ指揮の一隊はピネジスキイ連水陸路を經てメゼンスキイ交通路をとつて進み、クルプスキイ侯はウスチュグおよびウイマ地方の兵を率ひウイムスキイ連水陸路を越えて進んだらしい。兩隊の集合地點はペチョラ河の河畔と定められ、そこで「秋休み」をしてから晩秋になつて進發し、ウラル越えの「隘路」を過ぎてユグラへ侵入した。軍隊はオスチャク族の城砦リャビンまで、道路案内書によると四千六百露里の長途を行軍したのであるが、西伯利のツンドラ地帶では犬橇にのつて進み、軍長たちは馴鹿に騎乘して進んだ。＊＊

＊「ユグラ」はオビ河畔におけるオスチャク族の侯領でベリョゾフスキイ郡内にあつた。

＊＊ミリュコフ「古代貴族名鑑」《Древнейшая разрядная книга》二五頁。ミルレル「西伯利國誌」六三―六四頁。「西伯利年代記余集」四、六、八、第十二卷（ヘルベルシュタイン（マレイン譯）一二五頁、一三三頁、

【モスクワのカザン占領とカマ河交通路】

けれども彼らが後ウラル地方の確實占領を完遂するためにはそこは餘りにも遠くモスクワから隔絶してゐた。結局、個々のユグラの部酋たちがときどきモスクワ大侯の官庫へ若干の貢納物を贈るといふことに止まつた。だからモスクワ政府は十六世紀に入つてカザンを占領しカマ河による交通路を獲得すると共に、ペチョルスキイ交通路を西伯利侵略の目的に利用するといふ考へを全然放棄したのである。しかしその後においても「カァメニ越え」のペチョルスキイ交通路は普通の道路として利用され、十六世紀および十七世紀を通じてウラル以東への大規模な運輸交通がここを通つて行はれてゐたのである。

【イギリス人の毛皮需要とロシア人の西伯利征服】

本章の研究對象となつてゐる時代（十六世紀および十七世紀）のカァメニ越えの交通路は、主として半ば壞廢した道をたどつて高價な毛皮を探し求めつつ進んでいつた商人や狩獵産業者たちの交通路

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0072

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

となつてゐたのである。この交通路は十六世紀の中葉以降、海岸地方の經濟生活にたいしてとくに大きな意義をもつやうになつた。この時代において白海を經てイギリス人との貿易が開かれ、西伯利の毛皮にたいする需要が增大し、それがロシア人の東方へ向つての狩獵産業的進出を旺んならしめたのである。ウスチュグ市は、中部ヴォルガ沿岸地方のロシア市場および當時ロシアにおける唯一の海外貿易港であつたアルハンゲルスクとペチョラ河とを結びつける會交點に在るといふ獨特の地位によつて、西伯利産毛皮の大集散地となつてゐた。そしてそこから先きへ次第に北東方面へ、ペチョルスキイ交通路の全線にわたつて狩獵産業者の自由村落（スロボトカ）やカザックの屯營地がひろがつて行つた。

ホ、ペチョラ河畔における産業部落の發生

ペチョラの産業――漁業のために遠くでかけて行つたケウロル、チアコル、メゼニなど各地の住民たちは、この寂漠たる北方の大河の沿岸にある「漁場」や「鹿の産地」に古くから興味をひかれてゐた。一六〇三年（慶長八年）の公文書によると「ピネガ、メゼニ、ワガ、ウイマ、ブストオゼロなどの住民がペチョラ河畔に赴き、その地の有用地區において産業をいとなんでゐた」*のである。すでに十五世紀時代にそこに産業者の部落――教會村や自由村落が形成されてゐた。イジマ河がツィリマ河へそそぐ合流點近くに在つたイジムスカヤ自由村落はそのやうにして發生したものである。このイジマ河の河口附近には夙に十五世紀時代に網漁場があつた。漁業や鳥獵や獸獵のいろいろな漁獵區があちこちに散在し、農耕に從事する家族の小部落もそこに形成**されてゐた。ツィリマ河がペチョラ河にそそぐ合流點ちかくにはイワン雷帝の勅許をえたノヴゴロド出身のイワシュコ・ラストカが建てた別の自由村落ウスチ・ツィレムスカヤ村が發生したが、そこには「黒々とした森があり、人里からは五百露里以上も遠くはなれて」ゐて村民たちは皇帝から賦與された特權を利用し、この村へ移住を希望する者を自由につれてきた。一五六四年（永祿八年）にウスチ・ツィリムスカヤ村の戸數は十四戸、人口は十九人であつたが、一五七五年（天正三年）には十六戸二十三人となつてゐた。村民の大部分は個人企業者であつて彼らは「すべての漁獵區における漁獲物の三分の一」を常に與へられた。***

* 「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」第四四號および第四五號。

** 「ロシア歴史文庫」第三十二卷。

*** 「北方の一年間」第四版四三〇―四三二頁。十七世紀のウスチ・ツィリマに關するイギリス人の記述はシェレンクの上揭書第二卷にある。

【初期におけるウラル植民部落の狀態】

ペチョラ河畔の第三のロシア植民中心地であるアストオゼルスキイの柵の起原は前述の二つの村落

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0073

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の發生ほど明瞭になつてをらぬ。おそらくこれはイワン三世の軍長がペチョラ河畔の別の場所に「砦市」を建てた」十五世紀の末頃に發生したもので、多分産業の屯營所であつたらうと思はれる。この砦市は十七世紀時代を通じて「モスクワから西伯利へ貿易のために旅行するモスクワ侯國の商人たちの根據地」として役立つてゐたのである。*

* ミルレル「西伯利國誌」六三頁

【自治的植民部落の形成】

これらペチョラ河畔の産業村落はかなりの程度に自治權をもつてゐた。われわれはボリス皇帝の治世(一七七)においてウスチ・ツィリマ村では村長(スタロスチ)や收入役(プロワリニク)が存在したことを知るのである。その後ウスチ・ツィリマ村はイジマ村と合併され普通選擧によつて選出された「ザカシチク」の統治のもとにおかれ、この「ザカシチク」は、村民全體の正式代表者として、モスクワおよび地方行政官廳との間に交渉をもち、彼はまた管轄村内の秩序維持やチァグロ(納稅と賦役)*を正しく履行せしめる責任をもつてゐたのである。ウスチ・ツィレムスカヤ自由村落の權利に關しては、イワン雷帝や一五九八年(慶長三年)のボリス皇帝、一六一〇年(慶長一五年)二月二十九日および三月二日附のワシリイ皇帝、また一六一六年(元和二年)十二月十九日附のミハイル皇帝などの幾多の勅許狀によつて**

確認されてゐる。アストオゼルスクでは城外町の長としてソートスキイ(百人長)がおかれ、その役目は「ザカシチク」と大差なきものであつた。***

* 「西伯利局文書」では「ザカシチク」は「ゼムスキイ・ツェロワリニク」と呼ばれてゐる。「古代公文書」一六七〇年では「ソートスキイ」と呼ばれてゐる。「ザカシチク」の法的立場については「西伯利局文書」第四七〇號によく描かれてゐる。

** 「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」第四四號、第四五號。

*** ウエ・セ・ロフスキイ「ロシア植民初期の記念物」(Ключ. периол. изд. русского старообрядчества) 第二卷一一頁。

【ツンドラ地帶植民部落の狀態】

食料のとぼしい北方邊境地方に、ロシアの他の社會とまつたく隔絶されてゐたこれらの自由村落は辛うじてみじめな生活をたもつてゐた。ロシアの郡會地方との交通はただ夏季にだけ可能であつた。といふのは「自由村落には冬の交通路はなかつた」からである。そしてまた地理的な惡條件が農業の發達を不利ならしめてゐた。ツィリマ村では「年によつては耕作をしたが、また年によつては酷寒のために耕作できなかつた」のである。「ツンドラで地盤が凍つてゐて森林もなく、冬になると水の多い場が流砂に蔽はれてしまふといふやうなツンドラ地帶はすつかり氷にとざされ」或る年には草場が流砂に蔽はれてしまふといふやうなアストオゼロ村のごときは言葉のほかであつた。自由村落では全部「ルウシ」から遠くはこばれてくる移入穀物をもつて養はれてゐたので、年に一度春になるとウィチェグダ河を經て小さな河舟でカレンスク

調—0523

0074

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

やベルミから食料品が着いた。かういふ食料品の不足からいろいろな代用食――木の皮ガの木の葉の「ボリシチイ」を喰べてゐた。一六七〇年（寛文一一年）にウスチ・ツィリマ村とイジマ村の村民は皇帝に嘆願書をだして彼らの窮狀を訴へてゐる。

「私どもの村では十人からの人間が餓死いたしました。雜草やナナカマドの葉、松の皮をたべてをります。陛下のみなし兒である私ども臣民は壞血病のためにからだが脹れあがり飢餓瀕死のありさまであります。履物がなく裸足のままで暮らしてをります。」

プストオゼロではもつと悪い狀態であつた。そこでは「人間の數がすくなく、穀物がなくてクワスの搾り糟を大切に喰ひ」また「精進祭の時期にも肉食戒をやぶつて野鳥の肉やペチョラ河でとれる魚肉で生命をつないだ」のである。

ア・エス・マトウェエフは流刑地からの手紙に書いてゐる。

「プストオゼロでは人々は餓死してしだいに減つて行きます。住民の常食はボルシチイですが、食料はプスロオゼロにはなくてイジマから運んで來るので、トウリン、ウスチ・ツィリマ、プストオゼロなどの柵ではいたるところ甚だしい困苦缺乏を訴へてゐます。」*

＊「古代公文書」一六七〇年第四六七號。シュレンク第二卷一七八頁。ア・エス・マトウェエフのユ・ドルゴルキイ侯宛の手紙（「貴族マトウェエフの犯罪史」ペテルブルグ一七七三年）。ウェセロフスキイ「若教初期の記念物」《Памятники нер. нор. стародубства》第二卷。「ロシア歴史文庫」第二十七卷。スミルノフ「モスクワ國家の諸都市」《Города Моск. гос. суздальск.》第一卷第二冊。ヤコフレフ「軍兵徴募の命令」《Приказ сбора ратных людей》四三八頁。

かうした狀態であるから自由村落の發達はきはめて遲々たるものであつた。一六三八年（寛永一五年）におけるイジマ村の納稅戸數は二十一戸であり、十六戸は貧家、十戸は廢屋である。ツィリマ村では納稅戸數十五戸、十一戸は貧家、十戸は廢屋である。プストオゼロでは商人および産業者四十四戸、寡婦十戸である。そして一六四六年（正保三年）にはツィリマは三十七戸、プストオゼロは商人および産業者三十六戸、寡婦三戸に減少してゐる。＊

＊ヤコフレフ「軍兵徴募の命令」三七二頁、四三七頁。ボゴスロフスキイ「十七世紀におけるロシア北部の地方自治」《Земское самоуправление на русском севере в XVII в.》第一卷附錄六八頁。スミルノフ「モスクワ國家の諸都市」第一卷第二冊七三頁、八四頁。

これらの貧困な村民の唯一の生活手段は、漁獵産業であつた。ボリス皇帝は嘆願書に答へて「しからば汝らはよろしく鳥獸の肉と魚肉とをもつて食とせよ」と書いてゐる。＊

夏になると自由村落はまつたく無人の村となつた。村民だちは「穀物が高價なため河や湖水で魚肉を喰ひ、また野鳥の肉やナナカマドの葉のボリシチィを食ふために林間の湖水や河の岸へみんな漁獵にでかけた」＊のである。

＊「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」第四四號。

＊ヤコフレフ、上揭書。

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0075

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【生活資源の缺乏と漁獵貿易の發達】

生活手段の缺乏が住民のあひだに漁獵にたいする慾望と商業神經とを發達させた。ブストオゼロはその地の住民のみならず、他地方がらいりこんでくる狩獵産業者たちの、更にそこから先きへ遠く漁獵にでかけて行く根據地となつていつた。

すでに十六世紀中葉（天文、永祿年間）にはこの地を足場にして「魚の牙（ルイビイ・ズーブ）」――マンモスや海象の牙を採るために海へでかけ、また馴鹿にのつてランボジエ、メゼニへ、更にそこから先きのホルモゴル地方に*出かけていつた。ブストオゼロの住民たちはまた春から夏にかけて白鳥、雁、鴨、鶴鵠などの獵にでかけ、彼らは一年ぢうの大部分その肉を食料とし、その羽毛は重要な貿易商品**の一つとなつた。しかし、自由村落民のおもな仕事はやはり魚漁であつた。ブストオゼロ、ウスチ・ツィリマ、イジマなどの住民は毎年六月になるとペチョラ河の河口やボルワノフスカヤ灣へ「いろいろな魚族や鱘（クワリ）」***の漁に出かけていつた。海漁や河漁の獲物――鱘油、ショムガ（鮭）、シグ（鮭の一種）、オームリ、ローハ（産卵後の鮭）、ネリマ（西伯利産の鱒の一種）、ヤーズイ（鯉の一種）、シチョーカ（鱸の一種）などの乾魚や魚卵（イクラ）は、馴鹿の鞣革とともに河船に積んでペチョラ河からウスチュグへ、それからソリ・ツイチェグダ地方へとはこばれていつた。****冬季には魚類は馴鹿の橇につんで

數臺づつ列をなして市場でこれを販賣するためメゼニの町へ送られた。*****

ブズトオゼロやウスチ・ツイリマの住民は附近の漁獵區だけでなく、十六世紀末および十七世紀初のころに粗末なコチァ船にのつて遠く海にいで、オビ灣やタズ河、マンガゼイ方面まで出かけていつた。

* 「歴史的公文書」第一卷一五四號。ハクルート、エヴリマン文庫版第一卷二五四頁。シュレンク第一卷二五四頁。
** シュレンク第二卷各所。
*** 「古代公文書」一六七〇年第四六七號。シュレンク第二卷各所。
**** 「稅關書」參照。例へば外務省保存文書、ウスチュグ、一六三四年。
***** シュレンク第二卷、一七三頁以下。
****** 「ロシア歴史文庫」第二卷第二五四號。シュレンク第二卷、一八四頁。

【サモエド族との交渉關係】

ペチョラ河畔の自由村落の住民たちはまた、大陸ツンドラ地帶を遊牧するサモエド族ばかりでなく西伯利の奥ふかくウラル東部地方に住むサモエド族とも頻繁な交渉をもつてゐた。彼らはこれらの未開民族と隣接して生活しながら、しばしば甚大な被害を蒙むつてゐる。

一六七〇年（寛文一一年）にウスチ・ツィリマおよびイジマの住民は次のやうに訴へてゐる。

「昨年も今年もツンドラ地方の隣人サモヤヂどもが私たちの馴鹿を全部奪ひ去りました……馴獵も魚漁もなにも出來ませんでした……

調―0523

0076

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

…ツンドラ地方のサモヤヂ匪賊の掠奪と殺害をおそれたからであります。彼らサモヤヂどもは夏小屋と多の住居（部落）を襲撃して家畜牛馬を殺し、漁獵場では掠奪をしたり人を殺したりいたしました。」*

* 「古代公文書」一六七〇年第四六七號。「西伯利局文書」第一三四號。

だがこのことはプストオゼロや、イジマや、ウスチ・ツィリマ諸村の住民が憚悍なサモエド族と貿業關係をつくつて行くのを全然不可能にした譯ではなく、彼らはこの異民族の間に、それぞれ「知己」や「友人」も有つてゐたのである。プストオゼロやウスチ・ツィリマやイジマへやつて來て交易をするプストオゼロ地方のサモエド族ばかりでなく、化外のサモエド族までが大きな團隊をつくつて遠くウラルの東からプストオゼルスクへ遊牧しながら、マンガゼイ地方のサモエド族から買集めた毛皮類を持ち込んできた。* 自由村落の住民は、すでに十六世紀時代において彼らから買ひとつた毛皮や鹿皮をランボジニへ移出してゐた。**

* 「西伯利局文書」第一〇三號。シュレンク第二巻一七七頁、一八二頁、一八五頁、一九〇頁。

** ハクルート、エヴリマン文庫版第一巻。二九七―二九八頁。

【十七世紀初における異民族掠取の狀態】

プストオゼロの住民は年とともに逐次ペチョラ河からウラル山麓のウサ河畔へ自分の方からでかけて行くやうになり、その地に彼らの貿易地點――ロゴウィ（ゴロドーク）小砦市が形成された。そして彼らはその町でウラルの東、カズイマ河、オブドル河、クノワダ河の諸流域からきたサモエド族たちを「接待して」彼らとの間に活潑な物々交換の貿易をしたのである。彼らは尚ほそれに滿足せずプストオゼロやカアメニ（ウラル）地方のサモエド族、自分の知己や友人たちの手にある馴鹿を駄賃で雇ひいれてウラルを越えて商品を移送し、數十人一團となりツンドラ地帶を通り越してベリョゾフスキイ地方のサモエド族のところへ交易にでかけていつた。プストオゼロの商人たちはすでに十七世紀初（慶長年間）には近傍の異民族を高利のくびきで縛りつけ、商品の前貸しをし、そして「古い貸金を取り立てるために」彼らのところへ旅行したのである。一六四一年（寛永一八年）にウスチュグの市民ミシュカ・コンダコフは次のやうに報告してゐる。

「閣下よ、ずつと前々から私どもの兩親、祖父、そのまた父や伯父、プストオゼロの住民たちはあの後カアメニ（ウラルの東）の化外のサモヤヂ達と巨額の取引をしたり、漁獵をいたしまして、多くの人たちは彼らに貸金をもつてをりました。プストオゼロやオブドルでは彼らはこの借金の代物として陛下の官庫に納める毛皮を支拂ひ、彼らにはまたロシアの雜貨を前貸しいたしたのであります。」*

* 「西伯利局文書」第八八號。「ロシア歴史文庫」第二巻第七七號。「歴史的公文書補遺」第五巻第三五號。

その頃から逐次に新來者によるツンドラ地帶の占領がはじまり、彼らの馴鹿牧畜はサモエド族のそれを驅逐衰滅せしめながら發達していつたのであつた。*

調―0523

0077

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊一六一一年―一二年におけるブストオゼロ住民たちのユグラへの旅行に關するイギリス人の報道は、シュレンク第二巻一八四、二八五、一九〇頁。また馴鹿の牧畜については同上二七七頁および「西伯利局文書」第一三四號。

へ、ウラル以東へのロシア人の進出

【ウラル東部異民族との初期の交易】

ウラル以東における（ペチョラ河畔の）住民たちの活動はブストオゼロや後ウラル地方サモエド族との交易にとどまるものではなかつた。ウイマやブストオゼロの住民たちは非常にはやく、夙に十七世紀時代に「西伯利のいたるところの町々へ……有らゆる品々を携へて西伯利ぢうの村や天幕部落や森の中へまで出かけてゆきタタル族やオスチアク族やヴォグル族やサモエド族と交易をした」のである。＊

＊「西伯利局文書」第一册、一〇三號。

【ウラル毛皮産地にたいするイギリス人の着目】

かくて自由村落は小規模な商業集散地となり、ロシアの都會地方から商人たちがそこへ毛皮の買入れ＊に集まつてきた。ロシア人とウラル近傍の異民族との貿易仲介地となつてゐたペチョラ河畔の自由村落の意義は十六世紀末において夙に外國人の注目するところとなつてゐる。イギリス商館の代表者は一六一一年――一六一三年（慶長一六年――一八年）の間にブストオゼルスクに根據をすえてツィリマ河からウラルにいたる全商業區域＊＊をその手に獲得しようと企てた。その後一六五三年「承應二年」にはノルヴェイ探檢隊員がブストオゼロで毛皮の買入れをしてゐる。＊＊＊

＊「西伯利局文書」第一〇三號。シュレンク第二卷六六頁。

＊＊アメル「十六、七世紀のロシアにおけるイギリス人」《Тамель: Англичане в России в XVI и XVII вв.》「九〇―一九六頁。シュレンク第二卷各所。

＊＊＊「ラマルティネル旅行記」《Путешествие Ламартинера》五五頁。

西伯利にいたる交通路の狀態、困難な生活條件、それからまた産業上の興味などが住民を驅つてペチョラ河畔からさらにその先きの東方へ向つて移動進出せしめるにいたつた。ズイリァン、ウイマおよびブストオゼロなどの住民については十六世紀末から十七世紀初にかけて西伯利へ送られた公文書中＊に絶えずその名があげられてゐる。モスクワの軍務知事（ウォエヴォダ）や軍隊が姿をあらはす遙か以前に、ズイリァンやウイマ地方の住民たちはマンガゼイへ侵入してゐたのである。＊＊

＊「西伯利局文書」第一册。

＊＊「ロシア歷史文庫」第二卷第一八八號。

【植民の初期におけるロシア人の人口動態】

ウイマと後ウラルとの密接な關係は一六〇八年（慶長一三年）の戶口臺帳によく描かれてゐる。こ

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の臺帳にはウイムスキイ（ヴォロスチ）郷の住民三百六十一人のうち、ユグラすなはちオビ河の下流地方で二十九人、マンガゼイで二人、ベリョゾフへ一人、それからトボリスクで二人が殺され、ユグラへ轉住した者三人、ベリョゾフへ一人、西伯利へ逃亡した者一人、ベリョゾフでカザック隊に徴用された者三人と記されてゐる。そして總計四十六人（總人口の一一%）がウラル以東の地へ立ち去り行衛不明となつたと記されてゐる。*

＊「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」二六七―二八四頁。

一六二三年（元和九年）にマンガゼイの軍務知事は次ぎのやうに報告してゐる。

「メゼニ、プストオゼロ、ウイマ等よりの逃亡者がマンガゼイへ入り込み來れるが、それらの者はいづれも國法不納か然らざれば窃盗の罪を犯せる者、多額の借財のためその兄弟の許より逃亡せる者どもにして、マンガゼイ市へ來着しマンガゼイ郡内に居住しつつあり。」*

＊「ミルレル文庫」第二卷四七七。

かうした東方への移動はしばしば指摘するやうにペチョルスキイ交通路上に點在する村落の荒廢に多く由來するのである。たとへば一六三八年（寛永一五年）にイジェムスカヤおよびウスチ・ツィリムスカヤ兩自由村落の六十三戸の家屋中その二十四戸（約二八%）は廢屋となつてゐる。その理由は「住んでゐた人々がロシアや西伯利の郡會地方へ食を求めて散り去つてしまつた」*からである。一六七〇年（寛文一一年）にはこの二つの自由村落の殘留者のうち「二十家族が甚だしい穀物缺乏のために西伯利の郡會地方へ去り」またプストオゼルスキイの軍長は一六七一年（寛文一二年）にモスクワへ報告して、前年中に「プストオゼルスキイの柵市（オストルグ）、イジェムスカヤおよびウスチ・ツィレムスカヤ兩自由村落から租稅と賦役を負擔する農民二十二人が妻子その他の全家族とともにロシアまたは西伯利の郡會地方へ逃亡した」*と書いてゐる。

＊ヤコフレフ上揭書。四三七―四三八頁。

＊「古代公文書」一六七〇年第四六七號。

【漁獵産業屯營地の狀態】

ロシア人の漁獵産業者たちはウラル以東へ進出するとともに、その進んでいつた交通路上のあちこちへ點々と産業屯營地を建設していつた。ヘルベルシュタインがその著書に利用した「道路案内書」にはシチュグラ河およびボドチェレマ河の二つの河口の中間における物資貯藏所となつてゐた右のやうな屯營根據地のことが記されてゐる。*

＊「ヘルベルシュタイン」マレイン譯、一二九頁。

また別のもう一つの屯營地は、前述のウラル山麓のウサ河上流にあるロゴウイの町（オスチアク族のスカル城市）で、一六〇七年（慶長一二年）の公文書に依るとプストオゼロの住民たちはウラル

調―0523

0079

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を越えてゆく途中そこで「秋休みをしながら後ウラルのサモエド族らと交易を行つた」のである。レミョゾフの地圖書によると峠の上に「小町」があつて冬營小屋の遺跡らしいものが殘つてゐることが記されてゐる。後年オブドルスク砦市がその跡に建設されたノゾウイ・ゴロドク〔鼻の町〕もやはりさうした起原をもつのであらう。*

* 「ロシア歴史文庫」第二巻第七七號。「大地圖書」《Кн. Б. Чертеж》二〇六頁。シュレンク第二巻二〇七頁。

【漁獵産業者によるマンガゼイア柵の建設】

ミルレル〔七七〕の時代には、ベリョゾフ砦市も漁獵産業者たちの過去の冬營小屋の跡に建設されたのであるといふ傳説*がのこつてゐた。

マンガゼイにはすでに十六世紀末にロシア人漁獵産業者の手でオストログ〔柵〕が設けられ、一六〇一年〔慶長六年〕にスルグトから派遣された軍人の一隊はさうした柵の一つである「ズイリァンスキイ小砦市(ゴロドク)」の在るところへ出た。**

「カァメニ越え」交通路はこのやうにして、逐次にロシア人狩獵産業者の手に掌握されていつたのである。

* ミルレル「西伯利國誌」七四―七五頁。ミルレルはロシア人に傳り易くするため異民族語の地名をロシア語に直譯して書いてゐる。その後多くの地名がその地の原住民の古來からの稱呼を露譯することなくそのまま殘されることにあつた。

** 「西伯利局文書」第一册一一三頁。ロシア歴史文庫」第二巻第一八八號。

【ウラル越え交通路にたいする政府の注目】

「カァメニ越え」による狩獵産業者の進出は十六世紀末において夙にモスクワ政府の注目するところとなり、フョドル帝およびボリス帝の時代にソビ河の河口に「旅商人から十分の一稅」徴收のために小柵(オストロジェク)が設けられたが、この小柵は長くは存續しなかつた。

十六世紀末および十七世紀初には、「カァメニ越え」交通路によつて「ペチョラ河の川筋を、ブストオゼロやビネガ、メゼニ、ワガから多くの人々が多量の商品を船に積んで」* 航行してゐた。すでにフョドル・イワノヴィチ帝やボリス・ゴドゥノフ帝の時代においてもベリョゾフ砦市へ旅行した役人たち――軍務知事、使者、飛脚がこの交通路をしばしば利用し「時には急仕立てでベリョゾフの官用黒貂毛皮がカァメニ越えで發送された。」** 一六〇八年〔慶長一三年〕にはこの「ウイマ河へでる水路」を利用してオスチァク族の土侯(クニャージ)イギチェイ・アラチェエフがルッシへ旅行してゐる。***

☆ 「ロシア歴史文庫」第二巻七七、二五四號。ペチョラ河およびウサ河からオビ河にいたる交通路は一五八四年にすでにブストオゼロの住民からイギリス人が聽き知るところとなつてゐた。(ハーメル「ロシアにおけるイギリス人」二一八頁)

** 「ロシア歴史文庫」第二巻、二五四號。「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」第四四および五三號。

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

***「ロシア歴史文庫」第二巻六八號。ブストオゼロの住民はウサ河を航行してオビ河へでる交通路をイギリス人ロガンに教へてゐる。(シュレンク第二巻一八七頁)

一六一八年(元和四年)にトボリスクの軍務知事は商品をたづさへた商人たちが「多數往來して……ウイマ河よりカアメニを越えてベリョゾフに出で、ベリョゾフよりトボリスク砦市へは立寄らずにオルグト、トムスクへ赴けり」*と書いてゐる。

*「ロシア歴史文庫」第二巻二五四號。

【ウラル越え交通路公許の時期】

だがそれにしてもこの交通路のことはその頃まだモスクワでは割合に廣く知られてをらず、政府もまだ公認してゐなかつたのでトボリスクの軍務知事は皇帝に「勅命をもつて認許あらんこと」を請願してゐる。そして一六一九年(元和五年)十一月二十九日附でトボリスクにいたる公道とおなじくカアメニ越えによつても「アルハンゲルスク市および總ての海岸地方の都會から西伯利の都會、ベリョゾフ砦市へ」旅行することが勅許されたのである。この勅令は一六二〇年(元和六年)四月二十四日附をもつて確認され、ウサ河、ソビ河、エリ河を航行してカアメニ(ウラル)に達し、カアメニ越え連水陸路を經てもう一つの別のソビ河にいで、ソビ河からオビ河にいたる——といふ順路も告示されてゐる。

*「ロシア歴史文庫」第二巻二五四號。

一六二四年(寛永元年)になつてこの問題がふたたび審議されてゐるがそれは財政改革家として有名なトボリスクの軍務總督ユ・ヤ・スレショク侯が「ソビ河を航行してイジマ自由村落を通過するカアメニ越え」交通路について新たにモスクワの訓令を仰いだ結果である。この際に問題は有利な形で解決され商人や狩獵者たちは十七世紀中を通じてなんらの障害もなしに「カアメニ越え」交通路を利用しうることとなつた。*

*「西伯利局文書」第六册。

ト、ウラル越え交通路上における關所の發生

【ロシア本國と西伯利との國境稅關】

モスクワ政府はペチョラ河による交通路發生を公許したのであるが、それとともに國庫の收益につとめ、その途上に數多の關所を設け、漁獵から歸つてくる狩獵者たちの移動を捉えて課稅した。「西伯利の軍長や僧侶や書記官やその子弟家族、また西伯利へ赴く商人や狩獵者たちがモスクワその他のロシアの都會地方へ往來するため」*に設けられたこの關所(ザスタフ)は、ルッシと西伯利との

調—0523

0081

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

國境稅關の役目を果してゐた。

＊「古代公文書」一六三六年一號。「ロシア歷史文庫」第七卷一一號。

【ソビスカヤ關所】

またウラル山の向ふ側には、ソビ河からオビ河へ、さらにオビ河からオビ灣地方にいたる自由交通をおさへるためのもう一つの關所（ヴスターグ）があつた。右のやうな目的ですでに十六世紀中にソビ河々口の少し上流に小柵ともいふべきものが設けられてゐたが、ワシリイ・シュイスキイ帝の治世には最早やそれは存在しなかつた。だから海の狩獵者たちはベリョゾフやトボリスクを廻避して氣まゝに西伯利へ通過するためにこの交通路を利用した。そしてミハイル・フョドロヴィチ帝（一七八）の時代になつて、いはゆる「ソビスカヤ關所（ヴスタグ）」がこの地に設けられたのである。＊

＊「ロシア歷史文庫」第二卷七七號。

【オブドルスカヤ關所】

オビ河の東岸、ポルイ河がオビ河に合流する地點におよそ十六世紀末（文祿年間）ごろに小柵が設けられたが、それはオブドルのオスチャク族や化外のサモエド族から毛皮稅を徵收するために設けられたもので、ノソウイ・ゴロドク〔鼻の町〕とよばれた。オビ河の河流の屈折によつて形成された岬の格好からさう呼ばれたので、後年オブドルの柵として有名になつたものである。この「岬」の柵で

は通行する商人や狩獵者から十分の一稅が徵收され、その稅關はオブドルスカヤ關所とよばれた。ソブスカヤ稅關とオブドルスカヤ稅關は一つの共通の役所に統一されてゐた。一六三五年（寬永一二年）までは關稅徵收のために現地へ書記官や裁判書記、收稅役などが派遣されてゐたが、その年なつて二つの關の重要性にかんがみてルゥシからベリョゾフへ派遣されてゐた二人の稅關長がいろいろな人物の「通行を監視するため」夏ぢうそこへ出張することを命ぜられ、＊この手續はその後にいたるまでずつと繼續されてゐた。

＊「西伯利局文書」六二號。三二〇―三二九頁。同上二三六―二七頁。

ソビ河口およびオブドルスカヤの關へ出張してきた稅關長は「西伯利の町々やルゥシからカァメニを越えてソビ河を航行し、またマンガゼイからオビ河を航行し、商品や毛皮を携へて柵をよけて旅行する商人や狩獵者および役人や軍人を監視するために徵稅人を途上の要所々々へ派遣した。」＊だがこの二つの柵は「ごく短期間、すべて六、七、八の三箇月間」活動しただけでそれ以外の季節には誰れもそこにはゐなかつた。セミョン祭（九月一日）以後、秋から冬一杯、それから春がきても六月までは商人も狩獵者もその他の人々も、オブドルやソビ河の河口を通過して旅行することは不可能で、冬季にそこを通つて西伯利の町々へゆく者は一人もなくこの地方はまつたく無人の境だつたからであ

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0082

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る。**

* 「西伯利局文書」第一七八號、一六七―一六八頁。
** 同上　三二二頁。

その代りに短かい夏の期間中はルゥシからカァメニを越え、その反對にまたルゥシへこの交通路をすぎて來往する商人や狩獵者、或はトボリスクからマンガゼイへ往復する軍長たちまでが一時に通過するので、オブドルは非常に活氣を呈した。カァメニを越えて旅行する人々は途中サモエド族に襲撃される危險があつたので、ここで軍人、時としてはマンガゼイへ往復する軍長たちまでが一時に通過するので、オブドルは非常に活氣を呈した。カァメニを越えて旅行する人々は途中サモエド族に襲撃される危險があつたので、ここで「上流地方の西伯利の町々からくる仲間の商人」を待ち合はせ大きな團隊を組んでいつしよに旅行するため滯在してゐた。マンガゼイから來着したコチァ船の乘客たちはカァメニ越えにのぼるために荷物を河船に積みかへ、またカァメニ（ウラル）を越えて來た者は自分たちの乘つてきた「木ッ薬船を二東三文」に賣りはらひ「マンガゼイへ航行するため」コチァ船を買ひいれた。また「航海に慣れた」水先案内人たちはコチァ船へ乘り組んで海を越えてマンガゼイへ「案内する」ためにこの土地までやつて來た。トボリスクの商人たちはまた河開きの時機までにマンガゼイ行きの產業者たちに賣る穀物を持ち込んできた。それと同時にまたオブドル近郷のオスチァク族たちがこの地へきたロシア商

人らと交易をするために安物の毛皮類をたづさへて集まつてきた。トボリスクの住民もまたこのオスチァク族たちから「魚油や魚類を買ひ入れてそれを樽や箱へ鹽漬けにして」トボリスクへ持ち歸つた。また或る商人たちはカァメニの向ふからオブドルまできて此處で品物を販賣し「全部賣りきつてしまふ」と、ここからルゥシへ歸つていつた。旅行者のために官立の浴場や官立の「製パン所」があり、食料品や飲料や麥芽なども賣られてゐた。かうした繁昌殷賑はほんのしばしの間で終りをつげ、やがて誰れも彼も、或る者はルゥシへ、或る者はマンガゼイへとおのが路路に立ち去つてしまひ「オブドルの柵には人影が薄くなつて」いつた。「カァメニを越えて去る者もあれば、安穩に「海路を越える」時機におくれないためあはてて出發する者もあつた。*

* 一般的な狀況はオブドルスカヤ稅關書があたへてゐる。（西伯利局文書第二册）その他。

【キルタスカヤ關所】

ソブ河を口とオブドル河畔の稅關のほかに、一六二六年（寬永三年）にトボリスク政廳の命令でシチュゴル河およびスイグワ河を經由、ペチョラ河を航行して西伯利へやつてくる商人や狩獵者を監視するためにキルタスカヤの關が新設された。ここへは最初のころトボリスクから稅關役人が出張し

調―0523
0083
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

てきたが、その後この税關はベリョゾフ税關長の管轄にはいつた。*

* 「ロシア歴史文庫」第七巻、二二號。ベリョゾフ税關長への指令（西伯利局文書六二號）

チ、ウラル峠の狀態

「カアメニ越え」交通路には多くの危險や困難がともなつた。この交通路は廣漠たる無人の密林中を通つてゐたし、またところどころに「狹い小川があつて水量が少ないため小舟にのつて」辛うじて通過したのである。さういふ「お粗末な小舟」では大きな荷物を載せることができなかつたので、それがこの交通路の利用價値を非常に妨げてゐた。* *

* この交通路の一般狀態については「古代公文書」一六三〇年七一號、五七三頁以下。カアメニ越えの船舶については稅關書（西伯利局文書八一號、二五九號）

【交通路上の最大難所】

ウラル峠越えはいふまでもなくこの交通路中における最大難所であつた。巍峨重疊たる連山とゐどろくべき巨大な岩山（カアメン）「はるか雲のなかにかくれて仰ぎ見ることもできない山嶺、霧をふくんだ烈風、遠く海までつづく深い谿谷」はその人跡不到の野性をもつて旅行者を威壓し「カアメニの山中には人家といふものがなく全く荒寥たる無人の境」*であつた。

* 「西利伯局文書」一〇三號二五九頁。ミルレル「西伯利國誌」六三頁。

【サモエド族の襲撃】

峠路ではソビ河とエリ河との中間にある連水陸路を通過する獲物（旅行者）を待ちうけるサモエド族がしばしばロシア人を襲撃する危險があつた。連水陸路をたづさへて西伯利の町々へでかけ、また西伯利の町々から毛皮類を買ひ入れてし、ロシア製の商品をアルハンゲリスク市へ赴く」商人たちは一六四〇年（寛永一七年）にミハイル・フョドロヴィチ皇帝に嘆願書をたてまつり、

「陛下よ、私どもはソビ河を航行いたしカアメニ越えで旅行をいたしますときには孤立無援でありましてカアメニの連水陸路におきまして私どもを濺茶々々に殺戮いたすのであります」*

とベリョゾフやブストオゼロ地方のサモエド族の暴擧を訴へてゐる。翌くる一六四一年八月二十三日、ウラル山を越えて官用の黒貂を輸送するクラスノヤルスク、ケティ、ナルイムの軍人の一隊を「エリツ河上流のカアメニの最後の連水陸路で馴鹿に乘つた大勢のサモエド族が襲撃し……弓をもつて彼らを亂射した」が、この襲撃をうけた軍人の一人は上中書のうちで逃べてゐる。

「陛下の臣下どもは帝室官庫の黒貂を守つて戰ひ、終日たたかひつづけて私ども臣下の手には火藥も彈丸も盡きてしまひました……我方におきましては陛下の金臘の傍らでこれを守つてをりました軍卒四人のほかに二人の狩獵者が殺され、臣下どもは悉く手傷を負

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調—0523

0084

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ひ、彼らは官用黒貂をうばひ去りました。クラスノヤルスクの官用黒貂は腹皮も尾も完全なもの十八ソォロク（一ソォロクの數は四十）ナルイムの官用品は全部黒貂も腿皮も掠奪し去り、そのうへ私どもの家奇、毛皮、金錢も悉皆奪つて行きました。」[＊＊]

同じ年の九月三日にはベリョゾフの官用品をたづさへて連水陸路を通過したベリョゾフの軍人がやはり次のやうに報告してゐる。

「不意にサモエド族が來襲いたして參り矢を射かけ官財を劫掠しその場においてベリョゾフのリトワ人レフカ・ミハイロフと收稅役シドルカ・クリュコフは戰死し且つ全員ことごとく矢に當つて負傷し……戰鬪中に腿皮二駄、黒貂入の荷袋、鹿袋入の毛皮、鹿皮および栗鼠毛皮をいれた荷袋二個等を奪ひ去りました。」[＊＊＊]

そして軍人たちが一人のサモエド族を射殺したために原住民らは一時退却したが、彼らは捕虜の大部分を「虐殺」してしまつた。

「戰ひののち官用黒貂を船に搬び移しサモエド族の包圍のうちに二晝夜を過ごし、第三日目の土曜日にやはり官用黒貂をたづさへて參つたエニセイスクの軍人らと共にその船に乘つて行きました。」[＊＊＊＊]

＊「西伯利局文書」第九〇號四〇―四一頁。
＊＊同上　第二〇九號四四―四五頁。
＊＊＊同上　第一〇三號二六六―二六九頁。

リ、ウラル越え交通路の運輸狀態

【十七世紀中葉の西伯利旅行者統計】

「カァメニ越え」の交通路はかうした不便と危險を伴つたけれども、十七世紀時代を通じて「西伯利大道路」としての存在をつづけ、年々この道を通つて、西伯利への往復輸送がかなり大量に行はれてゐたのである。一六四〇――四一年度（寛永一七――一八年）のオブドル稅關書はこの輸送量について若干窺ひ知ることを可能ならしめてゐる。この年にカァメニを經由してルゥシから、オブドルスクへ）來着した者は百二十五人であつて、その中三十四人は商品を賣盡してルゥシに歸り、八十人がマンガゼイへ向つて出發し、八人はベリョゾフへ、三人はエニセイスクへ向つた。カァメニ經由で（ロシア本國へ）歸路についた者はトボリスクから四十八人または四十九人、その他の西伯利の町々から官用品を携へて來着した軍人と漕手を加へて二百十三人、出發地の記載なき者二十四人である。そしてまた海路を經てマンガゼイから到着した者は三百十九人、うち數名を除いて他はすべてカァメニを越えてルゥシへ向つた。かくして西伯利からカァメニを越えてルゥシへ向つた人數は六百三十八人若くは六百三十九人＊となる。一六三八年――一六三九年度（寛永一五――一六年）に「ソビ河口およびオブドルスカヤ關所では、ルゥシから來着した商人と狩獵者の數は九百十六人」となつてをり、その翌年度は七百四十五人であつた。

＊「西伯利局文書」第四二册。

調―0523
0085
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

*同上　第一〇二號一六九頁。

【關稅統計】

またペチョルスキイ交通路の別の地點でも「西伯利旅行者」の大きな數字が見られる。たとへば主として水路によるソリ・ウイチェゴドスキイ交通路の「西伯利旅行者」は、稅關書によると一六四三年（寛永二〇年）九月十月の二箇月間に三百六十二人*である。一六三九年（寛永一六年）の通關商品額は一萬六千四百九十四留（ルーブリ）八十哥（カペイク）で、翌くる一六四〇年は九千三百一留**である。通過旅行者と通過貨物の相當大量であつたことは關稅收入が當時としては巨額にのぼつてゐる點に反映されてゐる。一六三八年（寛永一五年）のソビ河の河口およびオブドルスカヤ關所の關稅收入はキルタススカヤの關を含めて千八百五十九留餘となり、翌くる一六三九年には千二百三十九留七十七哥餘であつた。***

「外務省保存文書」（A. M. H. Ж.）ソリ・ウイチェゴダ稅關書一六四四年、一六號。

**「西伯利局文書」第一〇二號一六八—一六九。

***同上第七八號、一〇〇—一〇一。

【マンガゼイアの湖落とウラル越え交通路の衰退】

十七世紀後半になつて海路マンガゼイにいたる通行が禁止されてマンガゼイの漁獵產業が凋落するとともに「カァメニ越え」交通路による輸送往來も減少したが、それでも相當なものがあつた。たとへば一六九五年（元祿八年）の夏ソビ河の河口を經て「ルゥシの都會地」へ通過した者は二百二十四人、また「ルゥシの都會地」から來着した者九人——合計二百三十三人であつた。そして西伯利から來た商人たちは毛皮と支那產の商品をたづさへてゐた。*

*「西伯利局文書」第一〇五六册。

【官用黑貂の輸送路】

カァメニを越えてオブドルから來る商人や狩獵者たちはトボリスクへは立ち寄らずにオビ河の流域に散在する町々、ベリョゾフ、スルグト、ナルイム、ケトスク、トムスク、さらに遠くエニセイスクやまた海路を經てマンガゼイ*へ向つていつた。だが注目を要することは「カァメニ越え」交通路が旅行者によつて不均衡に利用されてゐたといふ點である。この交通路は主として西伯利からルゥシへ赴く歸路に利用されてゐたのであつて「商人たちは雜貨や穀物を賣拂ひ產業者たちは漁獵をしたあとで」この交通路によつて家路についたのである。マンガゼイからルゥシにいたる總ての運輸交通は例外なくカァメニ越えでおこなはれた。ベリョゾフ、スルグト、ナルイム、ケトスク、エニセイスク、クラスノヤルスクおよびレンスキイ柵（オストローグ）などからの官用黑貂はすべてカァメニ越えで輸送された。**

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調—0523

0086

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ルゥシから西伯利へ赴く往路の交通路としては、ウェルホトゥルスキイ交通路が利用された。「狭い」沼澤の多い道や山間の小川を航行してルゥシから西伯利へ行くのに、毛皮との交易に必要な嵩ばった商品を携行するのは困難であつたが、それと反對に柔軟毛皮類は小さな容れ物に荷造りしてカァメニ越えの交通路を搬ぶことができた。東から西へ「カァメニ越え」交通路で行はれる運輸が西から東へ向ふそれに比べてはるかに盛んであつたのは右の事情によるのである。

＊「西伯利局文書」第六册一七七頁その他。「ロシア歴史文庫」第二卷二五四號。
＊＊オブドルスカヤ發關書（「西伯利局文書第六册一七七頁）。

ヌ、ウラル越え交通路の閉鎖

【交通路閉鎖に關するピョトル大帝の勅令】

古代からつづいてきた「カァメニ越え」交通路は尙ほ十七世紀ぢうはその役割を果してゐたが、一七〇四年（寛永元年）まつたく不明瞭な行政的思惑から總て例外なしにウェルホトゥル經由で旅行すべしといふ命令が發布された。ピョトル大帝の神經質な署名をもつて發布された偶然的なあまり據りどころのない數多の勅令のうちの一つとして、一七〇六年（寶永三年）にも再びこの勅令が繰り返し發布されて、カァメニを越えてベリョゾフカへ赴くことは、徹底的に禁止されるにいたつた。一七二二年（享保七年）にもまた重ねて「ベリョゾフカおよびソブスカヤの關を經て西伯利へ旅行することまたは西伯利より歸ることは爾今何人たりともこれを許さず」＊といふ勅命が嚴達されたのである。

＊古文獻委員會版「十八世紀の西伯利歷史記念物」《Памятники Сибири. Истории XVIII》第一卷。

それ以來、この歷史的に形成され、そして幾世紀ものあひだロシアとアジアとを結びつけてきた交通路はしだいに荒廢してその意義を喪失していつた。

二、海上交通路の發見

イ、海上交通路の方向

【十七世紀初の北氷洋沿岸交通路、ドヴィナ河の河口、カニン半島廻航、クルイ河、チジア河、チェシア河、連水陸路とコチァ船の移動、ルスキイ海角、ペチョルスカヤ灣、メヂァンスキイ海角、ユゴルスキイ海峽】

「海の交通路」は、ペチョルスキイ交通路と直接に結びついてゐて海の產業者たちは夙に十六世紀の前半において「プストオゼルスキイの柵を通過して海にいで——大洋（オケアン）による交通路」を利用し、この交通路が政府の禁止令をもつて閉鎖されるにいたるまでそれの利用をつづけてゐたのである。一六一

調—0523
0087
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

七年〔元和三年〕に書かれた狩獵者の言葉によると、彼らは「夏になると氷の解ける」海路を航行して「漁獵をいとなむため二十年もそれ以上も」＊ドヴィナ、ピネガ、メゼニの諸地方からオビ灣やマンガゼイアへでかけていつた。海の交通路は北氷洋の岸に沿ふてつづいてゐた。ドヴィナ河の河口から海へでて「海岸ぞひに灣を横ぎり西から東へ吹く追手に乘り、左手に海を右手に陸岸を眺めながら航海し」カニン半島を迂廻し、フョドル皇太子の地圖に示されてゐるカニン岬のところで折れてコルグエフを過ぎ、チェシュスカヤ灣を經てクルイ河の河口に到達した。場合によつてカニン半島迂廻の長い航路を避けるため、白海にそそぐチジァ河とメゼンスカヤ灣にそそぐチェシァ河とを結びつける「チェシュスキイ連水陸路」が利用された。この二つの河は上流では、水嵩の多い時には連水陸路が水びたしになるほど、近く接近してゐた。秋でさへも水のない距離はやつと二十尋（サージェン）足らずであつて、狩獵者たちは附近のツンドラ地帶を遊牧するサモエド族どもを雇つてコチァ船を河から河へ移搬＊した。コチァ船はそれから陸岸に沿ふてチェシュスカヤ灣を横斷し、いはゆる、ルスキイ海角（ヴィロト）に達した。そこは急角度で南折し、十七世紀のころには、「スホイ・モォレエ（乾いた海）＊＊＊」といはれ、ペチョルスカヤ灣を形成するところである。ペチョルスカヤ灣を東方から區切つてゐるメヂァンスキイ海角を迂廻し、ユゴルスキイ海峽（シャル）に向つて船を進め、さらに「海灣を横ぎつて航海し、灣内にはところどころ海溝があつたが、場所によつては一尋（サージェン）からそれ以下の淺瀨があり、時として船が動かなくなることもあつた。＊＊＊＊」

＊「ロシア歷史文庫」第二卷第二五四號。

＊＊同上。チェシュスキー連水陸路については ジュトコフの「地學協會カニン島探檢報告」（ロシア地學協會紀要《Зап. Рус. Геогр. Общ.》第四〔卷一册〕）に詳しい。

＊＊＊一六一一年―一六一二年にプストオゼルスクを訪づれたイギリス人もさう呼んでゐる。シュレンク第二卷一六六―一六七頁）

＊＊＊＊「五九四年にオランダ人たちはメヂンスキイ海角でしばしば遭難事件が起ることを證明する澤山の墓標を見てゐる。（ザムイスロフスキの上揭書）

【ユゴルスキイ海峽】

「ワランデフ淺瀨（メエリ）」＊を右手に見てカロレワ灣（現時のパイプドゥイルスカヤ灣）を横斷し、それから大陸とワイガチ島との間に形成されてゐるユゴルスキイ海廊（プロリヴ）へはいつた。

「この海廊はワイガチ島と陸地との間にあつて敷きつめられたやうに暗礁があり、或る場所は深くまた或る場所は淺い」のであつた。

＊ペチョルスカヤ灣とパイプドゥイルスカヤ灣とにより形成されるボリショイ・ラヴディイ半島のこと。

【ワイガチ島】

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ロシアの狩猟者たちの云ふところによると年によつてはユゴルスキイ海廊が氷で閉ざされてゐることもあつた。彼らはワイガチ島の近くには船を寄せなかつた。島は「遠く海洋上にはなれてゐたし、大きな氷山がそそり立つてゐた」からである。

「ところどころツンドラや場所によつては岩石が裸のままむき出しになつてゐて樹木といふものはなく……荒寥として住民はゐなかつた。」

【サモエド族の霊所、カルスカヤ灣】

この「巨岩の島」の無人の断岸にある、一五五六年（弘治二年）にロシアの狩猟者たちがステファン・バロウ（七九）に指さし示した有名なサモエド族の霊所をはるかに見遙りながら、その時代には「ニアルゾムスコエ海」といふ現在とは別の名稱でよんでゐたカルスカヤ灣に入つたのである。

＊ワイガチおよびユゴルスキイ海廊については「ロシア歴史文庫」第二巻第二五四號。ハクルート「バロウ旅行日記」《Hakluyt Hyxmeorums Beptcon》エヴリマン文庫第一巻三四六―三四七頁。ニアルゾムスコエ海は別名ナルゾムスコエまたはナルイムスコエ海ともいふ。

【ヤルマル半島】

ヤルマル半島はすでに十七世紀初（慶長年間）のころに、ロシア人たちによく知られてゐた。イサク・マアサの地圖（八〇）にもまたフョドル・ボリソヴィチ皇太子の地圖にも、この半島沿岸の多くの地名が記載されてゐる。

ムトヌイ・シァル〔濁れる海峽〕
シェラボウイ・コシュキ〔シェラボフ岬〕
プリティン・ストルブ――現時のベルージイ岬。

その東岸には

ザヴォロト〔海角〕
ムトナヤ河〔濁れる河〕
ゼリ・ナヤ河〔緑の河〕
チョルナヤ河〔黒い河〕
ルイブナヤ河〔魚の河〕

などの諸河があり、半島の内部には

オゼラ〔湖水〕

また半島の北には

ベールイ・オストロフ〔白い島〕

などが記載されてゐる。

ロシア人航海者たちは距離が長くそしてまた危険の多い迂廻航路を避けるため、カルスカヤ灣にそ

調―0523
0089
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

そぐムトナヤ河とオビ灣にそそぐゼリョナヤ河との間を連水陸路で横斷して旅行してゐた。ムトナヤ河は「向ふ岸まで石を投げることのできる」ほどの小さな河で*「コチァ船は荷を積んだまま通ることができず海から水が押しよせてくる滿潮時を待つて」進んだほど淺かつた。この河はところどころに背の低いヤルニックの疎林が生えてをり、そしてただ化外のサモエド族だけが遊牧してゐる荒寥たるツンドラの中を流れてゐた。

「上げ汐のとき網で引つぱつて二十日間でムトナヤ河の上流にある幾つもの湖水のところへでた。ムトナヤ河はこれらの餘り大きくない、いづれも二露里位の湖水から流れだしてゐた。」**

* 現時のセ・ヤガ河、すなはちサモエド語で「廊下の河」の意。ロシア語の「ヴォロチャンカ」に相當する。

** これはネイテ湖群で、この湖名からカルスカヤ灣にそそぐセ・ヤガ河は「ネイタ・セヤガ」といふ名をもつ。湖水の名はサモエド語でマルト、エルトおよびヌガイト等とよばれる。(ペ・ジトコフの「ヤルマル半島」ロシア地學協會紀要第四九卷參照)

【湖水から湖水へ船の移搬】

「ムトナヤ河の水源である湖水に達したとき積荷をボヴォズカ〔小型ボート〕に移し載せて一つの小湖から次ぎの小湖へと濕地の中を引つぱつていつた。一つのボヴォズカを二人がかりで引つぱるのであるが、湖水と湖水の間の濕地は一露里からそれ以下で、積荷をおろしたコチァ船は曳綱につけてこの濕地の上を總がかりで引つぱるのであるから、やはり曳綱で引いて行つ源になつてゐる「大きな湖水」**まで連水陸路を進んだ。湖水から湖水までの乾燥した連水陸路の距離はすべて半露里とされてゐるが、その場所は平坦な砂地であつた。」

* 土語では「セヤガ・ワヌイグ」すなはちワヌイタ族の通過する河の意。

** この湖水は土語で「ヤンブト」すなはち長い湖水と云ふ。十七世紀時代には「ゼリノエ湖」〔綠の湖〕といつた。

*** この連水陸路はペ・ジトコフが踏査して記述してゐる。上揭書。

この連水陸路を越すときには荷物は「めいめいが肩にのせて」はこび、ボヴォズカは綱で陸搬し、そして大きなコチァ船は「樽で二列に門をつくりその上をころがしながら、やはり曳綱で引いて行つた。」

「連水陸路を越すのに荷物とボヴォズカを陸搬した上に大きなコチァ船は五日がかりで綱を曳いた。」

「大きな湖水」に達してからそれを横斷し、この湖水を水源とするゼリョナヤ河へはいつた。この河ば

「ムトナヤ河より一層小さく淺く……荷物はボヴォズカに載せ、そしてコチァ船は總がかりで曳綱で引つぱりながらゼリョナヤ河を下航した。」

【カァメンヌイ岬】

ゼリョナヤ河からオビ灣にいで、そこから「順風にのつて帆走し」一日でザヴォロト（現時のカァメンヌイ岬）に達することができた。

【海路の終點——タズ河畔のマンガゼイ】

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ザヴォロトのところでヤルマル海の海岸線は南西へ急に曲線を描いてゐて、そこから東へタゾフ灣へ方向を轉じ、行く行く絶えず兩方の岸を眺めながらタズ河の河口に入つた。その河の岸にマンガゼイの砦市があつた。マンガゼイは十六世紀および十七世紀における海路旅行の終點*であつた。

＊「ロシア歴史文庫」第三卷二五四號。この交通路については一六一一年——一六一二年にイギリス人が書いてゐる。シュレンク第二卷一七〇—一七一頁および「北國旅行の回想」《Recueil de Voyages Nord》第四卷、一七九二年、五一一頁以下。

四、北氷洋岸の航海狀態

【海洋帆船コチァ船の大きさ】

航海はその時代の初歩的な造船法をもつて建造された、帆檣を備へた平底甲板附の「小つぼけなコチァ船」に乘つて行はれたのであるが、この船は普通十人の乘客と四百プードの荷を載せて帆走した。航海は長期にわたるものであつた。ドヴィナ河をピョトル祭の最後の肉食日に出帆してウスペン祭かまたはセミョン祭（九月一日）ごろ迄にムトナヤ河の河口に到達したのであるから、この一部分の交通路だけの航海に二箇月半から三箇月を費やしたのである。マンガゼイからカルスカヤ灣までの航程は狩獵者らによつて五、六週間と計算されてゐる。だから總ての航路に平均三、四箇月は要してゐる譯である。*

航海につひやされる所要時間はまつたく天候次第であつた。

「神さまが順風をお惠みくださらぬときにはコチァ船はみんなアストオゼロへ引返した。またムトナヤ河やゼリョナヤ河は季節がおくれると河口に氷が張りつめてしまひ自分たちの食料用の家畜や貯藏食料品が盡きてくると、めいめいスキイに乘つて徒歩でベリゾフスキイ郡へあるいて行つた。」

「……厚い氷が張ると氷を劃りながら帆と櫂で六週間もかかつたが、時には氷を劃つて進むことができず、さういふ場合にはそこからもと來たアストオゼロへ引返した。」

【自然との鬪爭】

たとへば、ピネガの住民フォムカ・ポリソフは、ブルロフ海岸（ワランデフ海に在る）のちかくで「厚い氷に閉ぢこめられその場所で四週間も氷を割りながら進航をつづけ、氷が大洋の方へ流れ去つたのでやつとユゴルスキイ海廊まで到着することができた。」と書いてゐる。

一六二六年（寛永三年）にトボリスクを出帆した軍人たちは海角（サヴォロト）で「雨まじりの黒雲と北から吹きつける逆風に逢ひ、コチァ船の帆を破られた上にボートも壞れてしまひ、親船は碇ごと岬の向ふまで押し流され、岩鼻の蔭で碇泊して風向の變るのを六週間も待つてやつと順風にめぐまれた」が、ウス

調—0523

0091

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ペン祭後にあとへ引返した。

「といふのは、もう季節が晩くなつたので海に氷が張りはじめ、とても氷が多かつたからである。」

ロシア人航海者たちはかうした困難と闘ひながら「厚い氷やおびただしい物資缺乏のために到達しがたい難所」を征服していつた。*

*「ロシア歴史文庫」第二巻二五四號、第八巻一一號。プルコフ海岸の地位はベスチャナヤ・プルコワ河（ヌバイキイ版大地図書）およびゴリツィン侯一族の流刑關係文書により確かめることができる。

【北洋貿易とドイツ商品】

海の交通路はあらゆる困難と危險とを伴つたのであるが、それでもこの航路を利用したのは單に偶然的な冒險家だけではなかつた。その頃の資料が語つてゐるところによると

「アルハンゲリスクの町からマンガゼイアへ向つて多數の商人や狩獵者たちが毎年いろいろなドイツ製の雜貨や穀物をたづさへてコチァ船で乘りだしていつた」

のである。

【十七世紀初マンガゼイ來航のコチァ船と旅客統計】

一六〇一年（慶長六年）に海路マンガゼイアへ四艘のコチァ船が到着しそれには四十人の旅客が乘つてゐた。翌くる一六〇二年（慶長七年）もそれと同じ數であるが、一六一〇年（慶長一五年）には十六艘のコチァ船で百六十人が到着してゐる。その翌くる一六一一年にはボモリエ（海岸地方）から二十六艘のコチァ船が出帆したが、悪天候にはばまれて余儀なく全部引返した。一六一二年には十六艘、一六一三年には十七艘、それから一六一八年および一六一九年（元和四年および五年）にはマンガゼイアへ「大勢の人々が海路で到着」* してゐるのである。

*「ロシア歴史文庫」第二巻二五四號。シュレンク第二巻一六八―一六九頁その他。

【十六世紀の北氷洋航海者バロウ】

マンガゼイへの航海の歴史は夙に十六世紀* からはじまつてゐる。これに關する最初の記錄は一五五九年（永祿二年）のステファン・バロウの北氷洋航海日記中に見いだすことができる。彼れはワイガチ島の近くで海象と白熊の獵をしてゐたホルモゴルスクとペチョラの住民たちに遭遇し、そのうちの一人は「もしも神さまが順風と好天をお惠みくださつたら」このイギリス人をオビ河か「ナラムザイ」河へ伴れてゆかう**（この男はワイガチの海象獵が思はしくないので自分もそちらへ移つて行かうと考へてゐる矢先きであつた）と申しいでた。

*ブツィンスキイの論文「マンガゼイおよびマンガゼイスキイ郡」《Mangazeia i Mangazeiskii uezd》（ハリコフ大學紀要一八九五年）「ウラル以東への交通路發見と征服の過程」

調―0523

0092

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊＊ハクルート、第一卷三四六、三四七頁。

【十六世紀後半オビ河流域の貿易】

十六世紀の後半（天文年間）以降になるとすでにはつきりとした完全な幾多の指摘がある。たとへば一五九五年（文祿四年）にオランダ人たちの手で蒐集された情報によると毎年數名の人々がホルモゴルからオビ河へ、さらにその先きのエニセイ河へ、羅紗その他の雜貨をたづさへて出かけていつた。＊

一六〇〇年（慶長五年）に提出された嘆願書によつて明白になつてゐるところに依れば十六世紀末に海路とオビ河を航行してマンガゼイへ往來してゐたのは、ピネガやメゼニの住民たちであつた。＊＊

＊ザムイスロフスキイ上揚書の八九―九〇頁にオランダ探檢隊日誌の引用がある。

＊＊「歷史的公文書」第一卷三〇號。

【初期のオビ河口探檢隊】

フョドル・イワノヴィチ帝の治世にモスクワの豪商ルカは、「三艘のコチァ船を率ひてオビ河の河口を踏査する」ために探檢隊まで組織したのであるが、この探檢隊の運命は非慘な結果におはつた。隊員たちはことごとく「恐ろしい缺乏」に惱んで餓死し、生きのこつたのは僅かに四人だけであつた。＊

＊「ロシア歷史文庫」第二卷二五四號。

【十六世紀イギリス人の北氷洋より支那への交通路探求】

十六世紀中葉（天文年間）にイギリス探檢家の一隊が北氷洋から支那にいたる交通路を探しだす目的で、ロシア人航海者の跡をたどつてこの海路を利用してゐる。

【奇書「奇な人間の話」と古代北氷洋地圖】

「ペチョラ河口の海岸に沿ふて海路東方へ向ふ」交通路のことは前述のごとく一五五六年（弘治二年）にステファン・バロウがペチョラ河やオビ河の河口地方へ海象獵にでかけてゐたロシア人狩獵者から聽き知るところとなつてゐた。それから稍やおくれてジェンキンソンはロシア旅行から「珍奇な人間の話」《Сказание о чюдныхъ человѣцѣхъ》といふ本を材料としてマンガゼイアに關する荒唐無稽な報道をもたらしたのであるが、まことに突拍子もないこの小ぼけな物語が英譯されるや否や、科學的根據のないその頃のロシア人航海者たちの「地圖」がヨーロッパにおける北氷洋地圖編纂の基礎材料として採りいれられたのと同樣に、それが大膽な學問的臆說や無責任な營利出版の種に利用されたのである。＊

＊ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0093

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

* 「珍奇な人間の話」については、アーチンの論文「エルマク以前のロシア人のシベリア征服の歴史について」(К истории ознакомления с Сибирью до Ермака)（モスクワ古代愛好者協会論文集第十四巻）。この論はチートフの「十世紀における西伯利」およびアーチンの前述の論文中に記載されている。この論の中の叙述の実際はジェンキンソンによって行はれた。（ハクルート第一巻四六七頁――エリマン英版）イギリス人はこれによりマンガゼイのことを知つた。オランダ人が一五九四年に白海からペチョラ河にいたるまでのロシア人の地図を利用してゐることについては、やはりロシア人の地図を基礎にしてゐることは明白である。マップの地図は

八、十七世紀における海上交通路の要念

【十六七世紀イギリス人およびオランダ人の北氷洋探検、ロシア人漁猟者のエニセイ河口探見】

十六世紀中葉から十七世紀初にわたるイギリス及びオランダの幾多の探検隊――一五五三年（天文二二年）にヴィルロビイ、一五五六年（弘治二年）にバロウ、一五八〇年（天正八年）にイスメよびチャンソン、一五九四年（文祿三年）にケイ・ナイ、一五九六年（慶長元年）にバレンツ、一六〇八年（慶長一三年）にグソン、一六二五年（寛永二年）にポスマンなど――はいづれもこの海洋交通路を略奪してゐる。

一六一〇年（慶長一五年）にマンガゼイへ漁猟にでかけたロシア人狩猟者たちは非常に重要な發見をなしとげてゐる。ドヴィナの住民コンドランニカ・クロチキンは「自分の仲間やまなじドヴィナ出の商人たちと相談をして」トゥルンの町からコチア船に乗つてエニセイ河の河口へ探検を企てたのである。彼らは

「エニセイの河口には港の方から氷が吹き寄せられてゐて……氷を越えて河から港へ船を出すことは出來ないし、しかも北風が吹いてゐた。」

そこで、直ちに海へ乗りだすことは絶望だとおもつて、河口で五週間碇泊した後に、あとへ引返さうと欲したのである。

「ところが半日ばかり烈風が吹きつのるとその風のために氷塊が河口から港の沖の方へ吹き流されていつて……一日のうちに河も港もお綺麗になつてしまつた……そこでエニセイ河から出帆して」

彼らは海へと出たのである。

【エニセイ河と北海との連絡】

かくしてエニセイ河は「ドヰツ人たちが自國からアルハンゲリスク市へやつてくるあの氷の海とおなじ」海續く流れ入つてゐるのであつて、

「港を發つてエニセイの河口へ行く通路は有る……大きな船に乗つてゆけば海路エニセイ河へ航行することができる」

といふ事實が明らかにされたのである。

【海洋交通路發見と新ドヰツ貿易の展望】

調―0523

この情報は一六一六年（元和二年）にそのころ西伯利の行政的中心地となつてゐたトボリスクに達して人々をおどろかした。トボリスクの軍務總督イワン・セミョノヴィチ・クラーキン侯およびイワン・ブルイギンは新らしく發見された海洋交通路の重要性を見のがさなかつた。彼らは皇帝に上奏して逃べてゐる。

「私ども陛下の臣下はマンガゼイアやエニセイ河へドイツ商人が參ることを希望いたしてをります。エニセイ河は有益な河でありまして、この河には魚族が夥だしく、沿岸には農業に從事するタートル族が住み、この河に產する海獸は高價なものでドイツの商品と交易をいたすことは有利であります。」

だが間もなくトボリスク政廳の長官には二つの關係においてこの新交通路が危險なものに思はれだしたのであつた。

【海路ドイツ人侵入の危惧】

「ドイツ人は自國をでてアルハンゲリスク市へは寄航せずにマンガゼイアへ通過することが……出來るのであります。そして軍兵が多數はいりこんできて西伯利の町々にたいして勝手な狼藉をはたらくやも計られませぬ。」

【海上密貿易の危惧】

もう一つには國庫に損失をもたらすかも知れぬといふ危惧であつた。

「（ロシア人どもが）海洋を遠く渡つてユゴルスキイ海峽やトレスコワ河……コルグエワ河、モルジ

エヴィカ河……カニン岬の沖合でドイツ人や他のロシア人どもと交易をいたす樣になりますれば……國庫は稅金を失つてしまふのであります。」

この海上交通路はまた次ぎのやうな關係でも商人や狩獵者たちに有利であつた。彼らはこの交通路を利用することによつて數々の國內稅關を避けて旅行をとげることが出來るのである。

【海路禁制の上奏と勅令】

クラーキン侯は右のやうな政治的な考慮と官僚特有の御見附役的な思惑から、ロシア人が海路マンガゼイアへ旅行するのを徹底的に禁止することを上奏するにいたつた。その効果があつて、その年のうちに「將來海路により西伯利へ旅行したる者は重刑に處す」といふ勅令がモスクワから發布された。ところがこの勅令にたいしては海で生活する人民の側から猛烈な反對の聲がおこつてゐる。「貿易や漁獵のためにマンガゼイアへ旅行する」いろいろな地方の商人や產業者たちはマンガゼイアの軍務知事に嘆願書を呈出して

「皇帝陛下がマンガゼイアからルゥシへ、またルゥシからマンガゼイアへ……從前のとほり大きな海を越えて旅行することを御勅許相成るよう、私どもが將來職を失ふことのないよう、また私どもの交易や漁業が滅びてしまつて國庫に損亡をかけることのないように」

盡力されんことを願つてゐる。

調—0523

0095

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【中央政府の地理的知識の缺乏】

商人たちの陳述してゐるやうに、海路禁制にともなふ結果はたちまち國庫收入の上に顯著に反映した。そればかりでなく當時モスクワでは地理上の知識に暗く、クラーキン侯の提唱してゐる問題を正確に判斷することができなかつた。一六一八年（元和四年）には最初に發布された禁制の勅令が廢されて「これまで通り……大きな海を越えて」西伯利へ旅行することが再たび勅許された。だがこの場合政府は實際においては問題の最後的解決を地方廳の手に轉嫁してゐる。モスクワからクラーキン侯に宛てた書翰に云ふ。

「マンガゼイの海路に關しては擧げて貴下、わが貴族イワン・セミョノヴィチ侯に一任す。貴下は現地の事態にかんがみて政府の收入を增加し政府のために何らの不都合も生ぜざることを期せられたし。」

【海路禁制令違反者に死罪】

クラーキン侯は與へられた全權を利用して一六一九年（元和五年）自分の權限をもつて改めて西伯利からルッシへの往來に海上航路を以てすることを禁ずる命令をだし、その旨を海岸地方の各地へ通達したのである。翌年になつて彼れのこの命令は政府によつて正式に確認され、モスクワからは「嚴命」が布達された。かくして一六二〇年（元和六年）には「古代からの大きな海による」旅行が徹底的に禁ぜられ

「これを犯したる者は盜賊反逆の罪により死罪に行ひ家產を沒收す」*

といふ嚴罰をうけることとなつた。

*以上の引用はすべて「ロシア歷史文庫」第二卷二五四號。

この法律がひとたび決定されるやそれは頑迷に履行された。

「この道は古來から大きな海からマンガゼイ海へ、またマンガゼイ海から大きな海へ誰れも航行せぬよう勅令により死罪をもつて嚴禁されてゐた。」* と後代の人は書いてゐる。

*「古代公文書」一六三〇年七九號七五—八〇頁

【ドイツ人およびロシア人貿易者の通航監視】

「ドイツ人やロシア商人どもの通過を監視するため」にムトナヤ河とゼリョナヤ河の間をむすぶ連水陸路上に小柵（オストロジェク）を設け、河川の開航期中は毎年そこへ見張りの役人をベリョゾフから派遣滯在せしめよとモスクワから命令がでた。だがこの命令の實施には實に克服しがたい障害があつた。

【監視役人の任務途行難】

「非常に遠隔の地であつたのと北海の寒氣が苛烈をきはめた」のとで役人たちは柵を設けることが出來なかつたばかりでなく、その連水陸路まで到達することさへ不可能な場合が稀れでなかつた。それ

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調—0523

0096

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

でも尚ほモスクワ政府は年々トボリスク政廳にたいして「時機を逸せず」役人の派遣を督促する公文書の發送を繰返し、トボリスク政廳はまた命令を履行し得なかつた役人たちを手きびしく罰した* のである。

＊「西伯利局文書」一六號、二五號、二四五號、六〇號。「ロシア歷史文庫」第二卷二五四號。第八卷一一號。

【北氷洋航海史の空白時代】

かやうにして偉大なる海の交通路は企業心の旺盛な海岸地方のロシア人航海者の前に閉鎖されてしまつたのであるが、「大きな海」による「嚴禁された」「盜賊の道」に關する追憶はさまざまな口碑傳說となつて「領内」の航海者仲間のあひだに長く語りつたへられてゐた。彼らの間ではそれから後も相當長く「オビ河の河口から大きな海へでてその大ざつぱな海岸を航海してリスアニアやドイツへ行くことができる」＊といふ噂が流布されつづけた。この傳說は十八世紀にいたるまでつづいてゐて、一七五三年（寶歷三年）にペ・イ・シュワロフは「昔は海を通つて旅行した狩獵者が多く、彼らは莫大な利益を上げてゐた」と報告し、それを看板にしてタズ河までの北氷洋の沿岸で「洋上」の狩獵產業をいとなむ會社設立の特許を獲得**しようと企ててゐる。

＊「古代公文書」一六三〇年七九號。この年マンガゼイア知事ゲ・ココレフが海路について興味をもつたことが動機となり、彼の政敵から陰謀云々の中傷をうけ、彼がひそかに海外との間を密航してゐる等の噂が立つた。

＊＊「ロシア歷史文庫」第十八卷。

【十九世紀における北氷洋探檢】

しかし實際においては、ようやく十九世紀後半および二十世紀初になつて、ノルデンスキョルド（一八七五年——一八七六年（明治八—九年）一八七九年（明治一二年））およびナンセン（一八九三年——一八九六年（明治二六—二九年））の探檢、それからまたロシアの企業家シドロフおよびシビリャコフなどの努力によつて西伯利北岸との交通に「古代の航海路」が利用できるといふことが決定的に明らかにされたにすぎぬ。

五、カマ河交通路の發見と征服

イ、カマ河交通路の歷史

【西伯利征服史と重要關係】

ペチョラ河とその支流を航行する、それからまた海路によるそれぞれの交通路は、主としてロシアの海岸地方に住んでゐた人々の漁獵產業的要求を滿たすために利用されてゐたのにすぎない。

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調—0523

0097

国立公文書館 アジア歷史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

西伯利征服の歴史にとつてもつと重大な意義をもつてゐたのはそれとは別の交通路——カマ河とその東方にある幾つかの支流による交通路である。

カマ河系の諸河によるカムスキイ交通路の起原は遠く古代にさかのぼる。今日でも尙ほカマ河流域の系統に屬するいろいろな河川の沿岸で發見されるササニイド時代の特徴をもつあの銀器は、すでにキリスト降誕後第六世紀の頃にこの交通路を通つてアジア地方からもたらされたものである。だがこの交通路はロシア民族にたいしては長いあひだ閉鎖されてゐたものである。といふのはロシア人たちは中部ヴォルガ沿岸へ進出するにあたつてカマ河の河口附近に介在してゐた「ムラク（暗黒）の國」——すなはち西方から西伯利にいたる交通路をその手に掌握してゐた、强力なチュルコ・ブルガル族の國家にぶつかつたからである。ブルガル族の商人らは高價な毛皮をもとめてウラルの東へ旅行してゐた。アラビアの歴史家は彼らが西伯利の異民族たちとの間におこなつてゐた隘貿易のことについて興味のある事實を書き傳へてゐる。それによるとブルガル族もロシア人とおなじやうにその異民族——つまりユグラ族のことを「ユラ」人と呼んでゐたのであつた。

＊テイゼンハウゼン「金帳汗國史料集」《Сб. материалов по истории зол. орды》二九七頁。レルベルグ「一八一九年の路程における ユグラの領地の地理狀態と歴史について」《О географич. положении и истории югорских земель, в исследова-

【ロシア諸侯のカマ河遠征】

十二世紀以降、スズダリ地方のロシア大侯たちはこのカムスキイ交通路を獲得するために不撓の鬪爭をつづけ、しばしばカマ河に向つて遠征を企だて、いくらか成功的な結果をえてゐた。しかしブルガル帝國はその外歴に堪えるべくかなり强力な國家であつて、ブルガル族自身の側からもノヴゴロドの北方通商路の要衝であつたウスチュグまで勢力を伸張しようと若干の侵略計畫を示してきた。

【タタール侵寇とブルガル帝國の衰微】

十三世紀中葉にブルガル帝國がタタール侵寇の打撃をうけて沒落したとき、その首都の廢墟の上に最初まづカザン汗國が形成されて、このカザン汗國はウラル以東にいたる交通路をその手に握つてしまつた。カザンと西伯利との間には商業上および政治上の交渉が活潑におこなはれてゐた。カザン市の城門の一つに「チュメニの門」があること、カザンの汗家と西伯利の諸侯家との間に婚姻同盟がおこなはれてゐたこと、などはそのよき證據である。

【古代カザン街道】

カマ河を航行してウファの町にいたる、また曠原（ステップ）を通つてイセチ河の上流にいる交通路を後世ロ

調—0523

0098

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

シア人は「古代カザン街道」と呼ぶやうになつたが、この街道はおそらくアラビアの歴史家が傳へてゐるブルガルにいたる非常に古い隊商路であつたものであらう。カザンのタタール族たちはウファ曠原（ステップ）を通つてゆく隊商路とともに、チェソワ河およびスイルワ河の水路をも利用してゐたやうである。

【ロジア人のカザン占領とカマ河掌握】

ロシア人はカザン汗國を征服してからのち、ようやくカマ河とその諸支流に確固たる地歩を据えることになつたのである。

ロ、ロジヴィンスキイ交通路

カマ河からウラルの東方に向つて數個の交通路があつた。十五世紀および十六世紀の時代には次ぎの交通路がもつとも廣く知られてゐた。その一つは

すなはちロジヴィンスキイ交通路であつた。

「ソリ・カムスキイからチェルドゥイニを經てヴィシェラ河（カマ河の支流でその岸にチェルドゥイニの町があつた）を上流へ遡航し、それからカメニ（ウラル）を越えてロジワ河にいで、ロジワ河を下航してタウダ河にいり、タウダ河を下航してトボル河にいたり、更にそれから先きヘイルトゥイシュ河およびオビ河を航行する」

ハ、チュソフスキイ交通路

【ソリ・ヴィチェグダ河、ウィレヂア河、スイソラ河、ウジガ河、カマ河、ガイン河、ヴィシェラ河、ウィチェグダ河、ネム河、コルク河、ヴィシェルカ河、チュソフスコエ湖、ヴォグルカ河】

もう一つのチェルドゥイニを經由し、カマ河を航行してすすむ交通路があつて、この交通路はウィチェグダ河およびベチョラ河と密接に連絡してゐるといふ優越性をもつてきた。それは二つの大動脈をもつて結ばれてゐる交通路である。すなはちソリ・ヴィチェグダ河からウィレヂア河および「ウィレツギイ連水陸路」によつてスイソラ河へ、スイソラ河からウジガ河および連水陸路によつて直接カマ河にいで、それからガイン河およびヴィシェラ河に入つてチェルドゥイニ＊に向ふか、もしくはウィチェグダ河の上流からネム河および連水陸路によつてチェルドゥイニの附近でヴィシェラ河に合流するコルワ河の支流ヴィシェルカ河にでる＊＊のである。そこからベチョラ河への交通路はヴィシェラ河からコルワ河に入りチュソフスコエ湖を水源とするウィシェルカ河を經て同湖水に到るのである。が、このチュソフスコエ湖へは、ベチョラ河の支流ヴォロスニッツア河の上流で同河と非常に近く接近してゐるベリョゾフカ河の支流ヴォグルカ河が流れこんでゐるのである。＊＊＊

調—0523

0099

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊プラトノフ「ロシア歴史論集」(Сравн по русской истории) 第一版一九六一二〇〇頁。

＊＊交通路の記録についてはマアザの「シアおよびモスクヴィアの公道」一六三〇年、参照。

＊＊＊ザゴスキン「ピョトル時代以前のロシアの水路」(《Русские водные пути до Петра. Русск》)（内國水路及び道路局版第一五冊）一九三一一九四頁。外務省保存文書ストロガノフの部一六二三年。

【十五世紀におけるペルム遠征の交通路】

カマ河からチェルドゥイニを經由してヴィシェラ河を航行する交通路は、一四七二年（文明四年）ペルミ征服後にはじめてロシア人が侵入できたものであつた。一四八三年（文明一五年）にモスクワ大侯の將軍フョドル・クルブスキイ侯およびイワン・ソルトゥイコフがウラルの東方タウダ河の流域に住んでゐたペルイムのヴォグル族にたいして遠征を企てた時にはすでにこの交通路をとつて進撃してゐる。

「ペルイニア河（タウダ河の支流ペルイム河のこと）の河口近くで戰ひを交へたのちチュメニの傍らをすぎタウダ河をくだつて西伯利の地へ侵入……そして西伯利からイルトゥイシュ河を下流に向つて戰ひ且つ進んでユグラの部酋どもを征服した。」＊

＊アルハンゲリスク市年代記略、一七八〇年。一六〇—一六一頁。

【ヴォグル族のペルム侵寇路—エルマク遠征の交通路】

十六世紀中にペルイム河畔のヴォグル族があの殲滅的なペルミ侵寇を遂行した際にもこの交通路をとつた。西伯利から「タウダ河を遡航し、カァメニを越えてヴォグリッチ河系を航行する」交通路は

「頭目」エルマクもこれを知つてゐたのである。＊

＊「西伯利年代記集」三三〇頁。

【城砦都市の建設】

モスクワ政府は西伯利汗國を征服したのち、およそ一五九〇年頃（天正一八年頃）ロジワ河畔に小砦市を設けてチェルドゥイニ交通路の確保に鋭意した。チェルドゥイニおよびこの「新砦市」を經由する道路は、はじめモスクワと占領地方とを連絡する公道となつてゐた。官用金や官用の黒貂およびに穀物の輸送をはじめ、ペルミの住民やそのほかの町々の商人たちはこの道路によつて旅行＊してゐた。かうしてチェルドゥイニの砦市は中心的な都會となりそこを根據としてウラル以東の土地の占領と新らしい城砦都市（たとへばペルイム、ベリョゾフ、ウェルホトゥリエのごとき）の建設がおこなはれ、それに必要な一切の物資供給や毛皮稅の徵收までがそこを中心にして行はれた。＊＊

＊「西伯利局文書」第二冊一五一頁。ミルレル「西伯利國誌」三三二頁。

＊＊「ロシア歴史文庫」第二卷五三、五六、六〇號「西伯利年代記集」四五頁。

【トゥラ河上流への新交通路發見】

一五九七年（慶長三年）にアルテミイ・バビノフによつてソリ・カムスカヤからトゥラ河の上流に

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

いたるもつと短距離な交通路が發見されると共に、チ
たつた。ウェルホトゥリエ砦市の建設とともにこの市を經由して國道が開かれ、そして一五九八年
（慶長三年）にはロジヴィンスキイ小砦市は破壊されてしまつた。それでも狩獵者や商人たちはウェ
ルホトゥリエ新國道にすぐには慣れず、或る期間やはり「ロジヴ河にいたる舊道」を旅行しつづけて
ゐた。*

*「西伯利局文書」第二册一五一頁。

【カマ河上リウラルへの別路】

カマ河からウラルにいたるもう一つ別の交通路があつた。それはカマ河の支流チュソヴ河を航行して同河に合流するセレブリャンカ河の河口に達し、セレブリャンカ河をタギリスキイ連水陸路までたり、連水陸路によつて二十五「行路（ポヴォロチナ）」でジュラウリ河にいで、ジュラウリ河からバランチァ河へ、バランチァ河からタギル河へ、タギル河からトゥラ河へと連絡するものであつた。* 右の交通路のもう一つのコース（チュソヴ河の支流スィルヴ河によるも）もあつたやうである。**

*「西伯利年代記」一一、一六、二一六、三一四頁。「大地圖書」一四六頁。
**「アルハンゲリスク市年代記」一七七―一七八頁。ドミトリエフ「古代ペルミ」《Древняя Пермь》第一卷一九二頁。

【タタール族のカザン＝チュメニ連絡路】

チュソヴ河を經て西伯利にいたる交通路は夙にカザンのタタールたちがチュメニとの連絡に利用してゐたものの如くである。十六世紀全體を通じて後ウラル地方の異民族がロシア國境諸州の襲撃を企てた場合にもやはりこの交通路をとつてゐた。

* タギルスキイ連水陸路はロシア人が西伯利を占領する遙か以前においてチュメニ道路の名をもつてゐた。イワン四世の使者チエプコフはウラルを越えミチュソヴ河を航行して西伯利へ旅行してゐる。チュソフスキイ交通路とカザンの連絡は全十七世紀を通じ保持されてゐた。

【カザン汗國植民の遺跡】

一五七三年（天正元年）に西伯利の地、トボール河畔から縫靼の侯子マフメット・クルがペルミにいたる「道路踏査」を名として麾下の軍を率ひてチュソヴ河畔へ侵寇してきた。また一五八〇年（天正八年）にはペルイムの縫靼侯ベクベリ・アグタエフがこの河流の沿岸にあるロシア人部落を劫掠した。西伯利の諸汗はかうした襲撃の結果として一時チュソヴ沿岸地方に住むオスチァク族をその勢力下に服從させてゐた。またそれとは別に、カザン方面からチュソヴ河およびその支流地方にむかつてタタール族の植民が進められてゐたことを示すいろいろな徴候も見られるのである。十七世紀の二十年代においては、チュソヴ河がカマ河へ合流する附近（上部および下部ムラ河のムリンスキイ・タタ

調―0523

0101

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ールの居住地）やスイルワ河およびその支流ダザ河、シャクワ河、ユルマン河などの流域地方にタタール諸侯の「世襲領地（ヴオッチナ）」があつた。*

* 「古代ペルミ」《Пермь древняя》第四巻七九頁。シシュンコ「ペルミ年代記」第二巻一二六―一二九頁。タタール族の世襲領地については カイザロフ著「古代ペルミ」第四巻および外務省保存文書ストロガノフ部参照。

【カザン占領前のロシア人の西伯利貿易路】

ロシア人はカザン占領後にチュソワ河による交通路を支配するやうになつたのであるが、その以前においても西伯利の異民族との通商交易のためにこれを利用してゐた。すでに十六世紀前半において ペルミの住民たちは「交易のためにペルミ産その他のいろいろな商品を携へた手代どもをチュメンスキイ連水陸路またはヴォグリチ河畔やスイルワ河畔へ」派遣したし、ペルミの代官自身も腹心の者の手を通してこの交易に關係してゐた* のである。カザン汗國の沒落とともに、右のごとき通商交易はますます發展して「チェルドゥイニ地方の人々」はカマ河やチュソワ河を航行して頻繁に往來しはじめ「オスチャクの産物を買ひとつた」** のである

一五七二年（元龜三年）にストロガノフ家の砦市の近くで異民族が八十七人のロシア人を殺戮したといふ事實を指摘するだけでもその狀態を示すに充分であらう。***

* 「古代ペルミ」第一巻九二頁。

** ストルミンスキイ「トリフォンの生涯」《Житие Трифона》（ペルミ縣古文獻委員會論文集第九巻九三頁）およびオソーキン（ヴャトカ古文獻委員會論文集一九一二年一・二合册三五頁）參照。

*** 「歷史的公文書補遺」第一巻一一〇號。前揭「トリフォンの生涯」參照。そこにはチェレミス族叛亂軍中にペルミのロシア人アンドレイ・ダニロフが仲間とともに參加してゐた興味ある報道がある。

イワン・グロズヌイ（雷帝）の政府もまた後ウラル地方との連絡のためにチュソワ河を航行してカザンを經由する交通路を利用した。公文書によつて明らかなやうに皇帝の使者たちはモスクワから西伯利へ、また西伯利からモスクワへの來往にストロガノフ家の砦市を通過* してゐたのである。たとへば一五七三年（天正元年）に旅行の途上マフメット・クルに道を阻まれて殺されたトレチャコフ・チェブコフは西伯利からこの交通路をとつて旅行をつづけてゐたのである。

二、ストロガノフ一族の植民活動と交通路占領における役割

【カザン汗國の沒落とロシア人の西伯利進出】

カザンの占領はロシアの植民が「カマ河上流の豐かな土地」へ進出する道をひらいた。移民の波はこの地方へ殺到した。カザンが陷落したのは一五五二年（天文二一年）であるが、一五五八年（永祿元年）にはすでにソリ・ウイチェグダの產業家ストロガノフ一族はそのころ「黑々とした森林、自然

調―0523

0102

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

のままの河や湖水、無人の島や河ぞひの原野」が廣々と展開されてゐた新らしい「荒蕪地」の中に根據地をつくる勅許を願ひでてゐる。精力的な企業家である彼ら一族は夙に十六世紀初において ソリ・ウイチェゴドスカヤからその經濟的活動の範圍をカムスキイ・ウソリエ（カマ河沿岸の鹽坑地）へ擴張し、そこで大規模な製鹽事業に着手したのである。※※

＊「歴史的公文書」第一巻一一七、一一九號。

＊＊十六世紀初にウソリスキイ郡にストロガノフ家の領地が存したといふ價値ある資料はモスクワ歴史博物館保存公文書のストロガノフ關係書類中にある。ストロガノフ氷家の子孫の經濟的活動については ウエデンスキイの概説「ソリウイチェゴドスクの經營におけるアニカ・ストロガノフ」（Аника Строгановъ и своихъ Солеварнихъ хозяйствахъ）（プラトノフ記念、ロシア歴史論文集、一九二二年）

【カマ河沿岸の鹽坑開發】

彼らは鹽坑區の探査をはじめ一五五八年以降において逐次にソリ・カムスカヤからカマ河を下流へくだり、最初まづソリ・カムスカヤから南東へ數十露里へだてたスィルヴァ河とチュソヴァ河の二つの河口の中間に根據を据え、それから十年ばかりの間に次々にその先きの西伯利にいたる河川交通路——スィルヴァ河、チュソヴァ河を占領し、かくして一五七四年（天正二年）にはすでにこの交通路の伸張獲得につとめ

「西伯利の國にあるカマメニ〔ウラル山〕の向ふのタグチェヤ河、トボル河、イルトゥイシュ河、オビ河その他さまざまな河々」の河畔に根據地の建設を企てたのである。

【モスクワ政府の領土擴張】

その後になつて政府みづからストロガノフ一族の占領した西伯利國の領土をその手におさめ、これによつて東方への進出が確保されるとともに、さらにカマ河、オチェラ河（フョドル帝の治世）およびオシァバ河（ミハイル・フョドロヴィチ帝の治世）に沿ふて、南方に向つてその領土を擴げていつた。＊

＊一五五八年グリゴリイ・アニキエフ・ストロガノフに與へられた勅狀はミルレルの「西伯利國誌」七六—八〇頁に記載されてゐる。一五六八年のヤコフ・ストロガノフへの勅狀はミルレル同上八〇—八四頁および「歴史的公文書補遺」第一巻一一七號。一五七四年南ストロガノフ宛の勅狀はミルレル八七—九〇頁。これらの勅狀はいづれもストロガノフスカヤ年代記に入つてゐる。その他ストロガノフ家に與へられた勅狀數通が保存されてゐる。

【ストロガノフ家の勅許私領地】

モスクワ政府はストロガノフ一族に「荒蕪地」を與へるとともに彼らがこの勅許の土地の運營を容易にするため廣範な特權を賦與した。彼らはこの新らしい世襲領地（ウオツチナ）へ「無籍で納稅賦役を課せられてゐない者」を移民として「呼びよせる」權利をあたへられ、これらの移民は一定期間（十年乃至二十

調—0523

0103

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

年）のあひだ引續き國庫にたいする一切の納稅賦役の義務を免除された。この期間がすぎるとストロガノフ家では自分の手でその世襲領地の住民から相當な貢稅を徵收してそれをモスクワへ屆けるといふ權利を獲得した。裁判の權利もまた世襲領地の主人にあたへられてゐて、ペルミの代官やその配下の裁判官にはストロガノフ家の領民を裁判することが禁ぜられ、それらの領民を告訴した者や執達吏にたいしては――領民の家宅に侵入したり彼らを逮捕したり又はなにかの理由で彼らを追ひ出したりすることが禁じられてゐた。それのみならずストロガノフ家の領地内では自由取引の制度が設けられ「金錢や商品を携へて鹽、魚類その他の物資を買入れにきた人々はそこ（勅許領内）で一切無稅で自分の商品を賣り、彼らストロガノフ一家の手から品物を買ひ入れる」ことが許されてゐた。

【勅許私領地の邊境國家的形態】

かくのごとく十六世紀前半に西伯利への交通路の途上にはその地方の代官の行政權からは全然獨立した廣大な私有の世襲領地、小規模な邊境國家のやうなものが形成され、その領地の主人は占有領地内においては經濟上・政治上の權利を掌握してゐた。自分の力で遠い邊境地方に植民する能力を缺いてゐた政府は民間の企業家に支持を與へたのである。

カマ河畔の廣大な莊園（ラスプンディア）をその掌中におさめたストロガノフ一族は、その勅許領内において瀦澗と植民事業を發展させていつた。彼ら自身の言葉を借りて云へば、そこでは次ぎのやうな目論見によつて經營がおこなはれたのである。

「流浪農民たちを招きあつめて農戶を建て、耕地をたがやし、閑地を開墾し、河々や湖水では魚漁をいとなみ、鹽坑のある所には……製鹽所を設けて鹽を燒き、鹽井から鹽を汲みだす櫂を立て、薪を伐りだして製鹽所へ運ぶやうにする。」

【新植民地領内の異民族部落】

十六世紀時代におけるカマ河の沿岸は「密林」と「草むら」で蔽はれてゐて、その間にところどころ點々と人口のすくないタタール、ヴォグル、オスチャクなどの諸民族の「ウルス」（帳幕部落）が散在してゐた。移住民たちは「穀物を蒔きつけるために森林を伐りひらくのに夥だしい苦勞をし……木の根を火で焚いて掘りおこした」のである。この「荒蕪地」はかやうにして比較的急速にロシア人によつて定住地化されていつた。＊

＊「トリフォンの生涯」ペルミ古文獻委員會論文集第九卷九五頁。ヴャトカ同上委員會論文集一九一二年一・二卷四八頁。

【ストロガノフ家私領植民地の發展狀態】

ストロガノフ家の植民事業の成果については十六世紀末および十七世紀前半の公文書資料によつて

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0104

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

これを窺ひ知ることができる。一五七九年（天正七年）すなはち最初の勅許をえてから二十年を經た頃には、ストロガノフ家の領地内には一つの町、二百〇三の農戸をもつ三十九の部落と農具修繕場、それにストロガノフ家で建立した一つの修道院があつた。約半世紀ののち、一六二三・四年度（元和九・一〇年）には、その領地内に町三、小柵三、自由村落二、修道院二、地主の邸宅のある小村二、寺院十二、農戸九百三十三戸、製粉所十一があり、そしてそれが百十八の部落と農具修繕場にわかれてゐて總て千三百五十四人の人口を擁してゐた。實際においては人口はこれよりも遙かに多かつた。といふのは臺帳に登錄されたのは農民（クレスチアニン）だけであつて、ストロガノフ家の領地には農民とともに相當多數の奴僕や役付の家人やカザックの「警備兵」がゐたからである。

同時にまたストロガノフ家で建てたプイスコルスキイ修道院の植民事業も發展をとげ、「修道院領の自由村落」には信徒や農民や小作百姓たちが住み、また尼僧院もあり、領主が修道院に寄進した土地の中には修道院直轄の部落や農具修繕場が點在してゐた。それから稍〻おくれて一六四七年（正保四年）にはストロガノフ家の領地内には町三、小柵四、自由村落一、村（寺院を有する）六、部落および農具修繕場二百三十一があり、そこには五千七百〇一人の人口を擁する千八百四十四の農戸があつた。*

農業の發達につれて製鹽事業も發展していつた。すでに一五七九年（天正七年）にオルロフ町の近くに「ツレナ」（鐵製の大型鹽燒釜）をもつ製鹽所七、「ツレナ」なしの製鹽所六があつた。**

＊一五七九年のヤホントフの臺帳は保存されてゐない。この總計は後代の資料によりドミトリエフにより確かめられたものである。（ベルミの古代）第四卷八一頁）カイザロフの臺帳は同書一一〇―一九四頁に記載されてゐる。一六四七年のエリザロフの戸口調査書はベルミ古文獻委員會論文集第二册に記載、總計は一四六頁にある。プイスコルスカヤ修道院の領地については「外務省保存文書」ストロガノフ部一六七三年第四號參照。

＊＊「外務省保存文書」ストロガノフ部一五七五年―一六四一年。一六一四年の製鹽所については「ウェセロフスキーの「七つの課金徴收」參照。

一六二三年（元和九年）には二十四の製鹽所、一六四七年（正保四年）には三十一の製鹽所がストロガノフ家に屬してゐた。*

＊ストロガノフ家の製鹽事業に關する興味ある資料は「外務省保存文書」ストロガノフ部一六三六年を參照。それによると十七世紀三十年代におけるチュソフスキイ製鹽所の製鹽高は年約五〇、〇〇〇プードであつた。生活狀態の詳細は「トリフォンの生涯」に記述されてゐる。

ストロガノフ家の經濟においては「漁業、大豆製油、各種の水獸獵」などいろいろな産業も閑却されてはゐなかつた。彼ら、ストロガノフ一族は「カマ河その他の小河川や湖水の水域や沿岸のあらゆる漁獵區」を運營してゐた。「黑貂、ラッコその他の獸獵をする」ために自家の領民をおくつた。遠

調―0523

0105

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

くウラルの彼方からストロガノフ家領の町々へ集まつてくる異民族の手からも交易によつて毛皮を手にいれた。そしてストロガノフ家の側からもウラルの彼方へ毛皮の買付けをするために手代をおくつた。*

＊「歴史的公文書」第三巻一一二號。伺上『補遺』第四巻五六號。

【異民族壓迫と搾取の狀態】

僻遠なベルミの邊境におけるストロガノフ家の活動が大きな植民的意義をもつてゐたとともにその世襲領地もまた巨大なストロガノフ的意義をもつてゐた。

ストロガノフ一族は新らしい土地の森林を伐り拓いてそこへ人間を集めると共に、それらの移民を原住民の襲撃から守る手段を講じなければならなかつた。彼らの領地はスイルヲ河およびその支流地方で、彼らの占領する前からタタール族が建設してゐた「オスチャク族の帳幕部落」と直接に境界を接し、その他のいろいろな場所でもヴォグル族やチェレミス族と接觸してゐた。

原住民に屬する森林や獸獵區へ侵入して、そこへ耕地や農具修繕場を設け、「威嚇と壓迫」とによつて「太古以來の永代世襲地」から彼らを追ひ拂つたり彼らの神聖な禮拜所を破壞したりしていつた新來者と、昔からのその地の主人公との間には必然に敵意的な衝突が避けがたかつた。

【原住民の反抗と襲撃】

ストロガノフ一族はまた自分の側からも原住民の暴行について訴へてゐる。ベルミへ書き送られた或る公文書中で云つてゐる。

「その自由村落は遠隔の地にあり附近にはヴォグル族どもが住んでをります。その地は密林地帶でありまして彼々の者や農民は柵内から出ることが出來ません。耕地をたがやすことも薪を伐採することもできません。小人數の者どもがこつそり襲つてきて牛馬を奪つてゆき入間を殺し自由村落内の產物を掠め取り鹽を燒くこともできぬ始末であります。」＊

＊異民族とストロガノフ家との關係については「外務省保存文書」ストロガノフ部一五七五年——一六四一年「トリフオンの生涯」等を參照。

「ストロガノフ一族は、彼ら【原住民】の祖先の地に自分の農民部落を建設し、彼らはまたその蜂蜜採集や、大豆油の製造、漁業などをいとなむために貢稅を徵せられ、すべてのものを取りあげられた。」

＊「外務省保存文書」ストロガノフ部一五七五年——一六四一年「トリフオンの生涯」等を參照。

チュソフ河沿岸のヴォグル族がストロガノフ家の自由村落を襲撃して村々や部落や穀物の收穫を燒き拂ひ、農民たちを妻子とともに捕虜とし、製鹽所や製粉所を破壞したのである。

＊「外務省保存文書」ストロガノフ部および「歴史的公文書補遺」第一巻二六號、「西伯利年代記集」參照。

【西伯利タタール族のロシア植民地侵蝕】

ストロガノフ家の東方への進出とともに恰かもこれに對抗する形で反對の方向から西伯利のタタール族が侵入してきたので、この場合、現地の異民族からうける危險が特別に强く感じられるにいたつ

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た。右のやうな侵入の兆候はすでに十六世紀初において感じられた。チュメニのタタール族はイバク汗の子クルク・サルタンを隊長として下流地方の全域を占領し、カマ河畔の製鹽所を劫掠し、ロシア人どもを捉え去つてこれを殺戮* した。

そして西伯利の諸汗がとくにはつきりと侵寇政策を實行しはじめたのは、クチュムがタイブガ汗朝の汗位にのぼつてその地歩をかため、後ウラル全體に勢力を伸張しようといふ慾望を露骨にあらはし始めた時代であつた。

一五六四年（永祿七年）にグリゴリイ・ストロガノフは書いてゐる。

「西伯利のサルタンやシバン〔タタールの投石兵どもがペルミへ攻めよせてくるといふ噂が……騒がしくおこつてゐる。」**

* 「アルハンゲリスク市年代記」一三六頁。

** 「歴史的公文書補遺」第一卷一一七號。

一五七二年（元龜三年）のチェレミス族の叛亂はクチュム汗の影響のもとに勃發したのである。その翌くる年マフメット・クルは軍兵を集めて、ロシアに貢稅を收めてゐるチュソワ河畔のオスチャク族らを虐殺してペルミに侵入しようと企て、ストロガノフ家の自由村落を距るわづか五露里のところまで肉薄したが、遂に目的を達しなかつた。それから數年ののち韃靼侯ベクベリ・アグタコフは

「ヴォグル族やオスチャク族と合體して……氣づかれぬやうにこつそりと」ストロガノフ家の領地に侵入し「人家のある村や部落を燒いて原野と化し……大勢の人を捕へ去つた。」

【ヴォグル族のマカ河製鹽所劫掠】

また同じやうな方法により一五八一年（天正九年）にチュソワ河およびスイルワ河の流域に侵入したペルイマのヴォグル族の土侯はカイ・ゴロドおよびチェルドゥイニの町に侵寇劫掠したのちカマ河畔の製鹽所を襲撃したうへ西伯利へ凱旋したが、この侵寇計畫もクチュム汗の參加のもとに企てられたのである。これに際してストロガノフ家の世襲領地が甚大な被害を蒙むつた。

「スイルワ河畔の自由村落や農民部落では根こそぎ一切を燒き拂つてそこにゐた人々や農民たちを殺し妻子を捕虜として捉え去り、馬や家畜も奪ひ去つた。」

そのとき大勢の人々は「自分たちの自由村落や砦市をすてて……ペルミへ逃亡していつた。

* 「外務省保存文書」ストロガノフ部「歴史的公文書補遺」第一卷「西伯利年代記集」二頁等。

【私領植民地における私設要塞の建設】

ウラル地方の狀態が不安であつたので、これにたいする防備手段を講ずる必要がおこつた。ストロガノフ一族は私領植民地を擁護するため堡塞をもつて防備をかためた柵を建設して進出をはじめた。すでに一五五八年（永祿元年）にグリゴリイ・ストロガノフはカマ河畔の製鹽所から十五露里をへだ

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

てたアイスコルスキイ岬にカンコル小砦（コルドーク）市の建設を許可＊されてゐる。

「そこに堅固な防備地點を築き、砦市には大砲や火繩銃を備へつけ、砲手や銃手や城門の衛兵を配置し……ノガイ族その他のオルドからの襲撃にそなへた。」

一七六

【オリョル砦市】

一五六四年（永祿八年）に彼はまた新らしい製鹽所を設けたのでそれを防衛するためにカシコルから十五露里の上流にあるオルロフ運水陸路にもう一つの砦市――ケルゲダン、またはオリョル砦市を建設する許可をえた。

「城壁は各三十サージェン宛あつて製鹽所に近い正面のところでは下部に粘土の中へ石をいれて堅固に築き、警備のために砲手や衛兵を……私費で養ひ、そしてこの砦市の中には遠射砲を備へてゐたが、これも自費で備へつけた。」

【ヤイヴェンスキイ砦市、チュソフスキイ砦市】

チュソワ河の支流ヤイワ河に合流するウソリヤ河の河口に第三の砦市ヤイヴェンスキイが建設されたのも略〻この時代のことであらう。一五六八年（永祿一一年）にヤコフ・ストロガノフはチュソワ河上流の新鹽産地に同じやうな砦市の建設を許されてゐる。要塞を築き砦市を建設しそこに守備兵と砲兵隊を配置すること」を許可されたのである。下部チュソフスキイの城砦都市はこのやうにして發生し、さらにその後チュソワ河の上流に鹽坑が發見されるとともに上部チュソフスキイ砦市が建設（一六一六年）されるにいたつた。

【植民地砦市の狀態】

すでにイワン雷帝の治世にスイルワ河畔にも砦市が建設され、一五九七年（慶長二年）フョドル帝の時代となつてオチェラ河の漁業を安全に防護するためにオチェルスキイ小砦市が設けられた。これらの小砦市は本質において世襲領主たちの武裝邸宅のごときものであつた。木造の丸太づくりの城壁の蔭には白く磨きたてた鐵張りの櫓の塔や教會堂の屋根や鎗樓が高々とそびえ立ち、そして主人たちの高樓第宅と家人（けにん）たちの住宅、炊事場、穴藏、倉庫、溶場、畜舍などがあちこちに散在してゐた。便窓をうけた場合の要心のために砦市のなかには相當數の砲隊――大砲と火繩砲や火繩銃、その他の火器、弓、矢、火藥、鉛、石彈などが備へられてゐた。ストロガノフ家では火藥用の硝石を自分のところで燒いて製造してゐた。＊

＊「大地圖書」一四五頁「歷史的公文書補遺」第四卷五六號。カンコラの砲隊については「古代ペルミ」第一册にあるアイスコルスキイ修道院に宛てたストロガノフ一家の書翰參照。

【カザック師入れの特權】

ストロガノフ家では自分の砦柵を守るために警備兵、銃砲手、城門守衛兵などのほかに獵手として

調―0523

0108

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

カザックと狙撃兵を雇ひ入れる權利（一五七二年および一五七四年の公文書）を賦與されてゐた。一五八一年（天正九年）に彼らは改めてまた「猟手、カザックを雇ひ集めてこのカザックが家人たちといつしよにヴォグル族の襲撃を防ぐやうにする」ことを願ひ出でてゐる。これについてモスクワからペルミへ次のやうな書翰が送られてゐる。

「汝のもとにこの文書が屆くとともに猟手たちがオニケウイ自由村落、チュソワ、スイルワ、ヤイワ等に到着すべし。オニケウイ自由村落の人々はよろしく彼らとともにチュソワのヴォグル族に對する防備につき、砦柵、部落、修繕場等を防禦せよ。」*

* 「外務省保存文書」ストロガノフ部。

【植民地砦市とロシア人進出の關係】

經濟的な要求から私有領地内に發生したストロガノフ家の砦市はそれがロシア民族の居住してゐる國境地方に點在するといふ事情から、ひとり東方における植民の前哨となつたばかりでなく東方邊境における有力な軍事的要害ともなつた。カシュル、ケルゲダン、ヤイヴェンスキイなどの各砦市は、西伯利からカマ河流域にいたる河川交通路上の關門を成すと共にカマ製鹽所にたいする南方からの侵入を防衛したのである。一五六四年（永祿七年）にケルゲダン・オリョル砦市が建設されて以來カンコルの軍事的價値が失はれることとなり、すでに一五七〇年（元龜元年）にはこの砦市はストロガノフ家が建立したブイスコルスキイ修道院へ寄進されるにいたつた。*

* 「古代ペルミ」第一巻一九五―一九七頁。

チュソワ河畔に建設された砦市はこの交通路をさらに南方へ伸張させ、スイルヴェンスキイ砦市は異民族がときどき利用してゐた西伯利交通路中の一つであるスイルワ河を遮斷することになつた。ストロガノフ一族の武裝邸宅は後ウラル地方の異民族の侵寇區域に網の目をなして展開されてゐた。彼らの手で建設された砦市の木造の城壁の蔭には傭兵カザックたちがゐて「城内に住む人々と力をあはせ信仰のないこの異敎徒、神を信ぜぬアガリァン人どもにたいして用捨のない戰ひをした」のであつた。

一五七三年（天正元年）に西伯利汗の太子マフメット・クルは「城の中には軍兵が犇々とあつまつてゐる」と聞いて兵を引いて去つた。一五八一年（天正一〇年）にペルミのヴォグル族が侵寇してきた時には、彼ら異敎徒は「神さまのお惠みによつて」大損害をうけて砦市の城壁の下から擊退されてしまつた。*

* 「西伯利年代記」六頁、九―一〇頁。

【私領植民地砦市の獨立性】

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0109

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

政府はストロガノフ一族にたいして砦柵を建て砲臺を設け「溝塞」を構築して軍隊をやしなふことを許可すると共に、彼らの世襲領地を東方國境の防禦機關と見做してゐた。ストロガノフ家は「ペルミ地方を守護する」といふ義務を公けに負はされてゐた。そして一五八二年（天正一〇年）には周知のごとく皇帝から「ペルミ市にたいしては何らの支援もあたへない」といふ條件をつけられてゐる。

「汝等はただただ政府に奉公すべきである……汝等みづから……彼ら（カザック）と家人を遣つてわがペルミの領地を守護せよ……。」*

このやうにストロガノフ家をもつてペルミ地方の軍事的防禦機關と見做してゐたのである。グリゴリイ・ストロガノフ自身もその手で建設した砦市の任務を規定して「河の岸に柴柵をきづいて速射火器を備へつけ軍兵か通告なしにそこを通過することの出來ぬやうにする」と云つてゐる。**

* 「歴史的公文書補遺」第一卷、一二八號。一五七二年、チェレミス族に對する方策についての勅狀（同上一二一號參照。
** 同上一一七號。

【異民族の經濟的征服】

ストロガノフ家の砦市はウラル方面からくる敵にたいしてペルミを守る防禦線としての役目を果すとともに更にそれから先きの新らしい領土征服の據點ともなつた。この征服は、或る程度まで經濟的方法をもつて行はれた。イワン雷帝の勅命によつてストロガノフはスイルワ河畔の「オスチャク族やタタール人の魚族・水獸の漁獵區」へ侵入することを許されてゐた。オスチャク族の帳幕部落は逐次に遠く東方へ壓迫され、原住民の禮拜所は次第に荒廢に歸し、それらの土地はたえず新來の移民によつて略取されていつた。そして十七世紀初の二十五年間においては、ユルマン河畔に住むタタール族たちはいつしか「ストロガノフ家の領地」内に包まれてゐるといふ狀態になつてゐた。十七世紀の公文書によるとチュソワ地方の「ストロガノフ族は「ストロガノフ家の領地から彼らのところへ貢稅の徵收に人を遣はす」といふ風に完全な納稅義務者となつてゐた。*

* 「古代ペルミ」第四册一三四頁。カイザロフの寫本。「歴史的公文書」第三卷。「外務省保存文書」ストロガノフ部等。

【異民族領土の軍事的侵略】

漁獵區や土地にたいする經濟的征服と併行的に東方にたいする組織的な軍事上の侵略がおこなはれた。ストロガノフ一族はすでに一五七四年（天正二年）に西伯利の住民どもを捕へて「彼らの凌辱に報復するため特別の許可をうけることなく手兵を派遣する」ことの勅許を願ひいで「タフチ河とトボル河の河畔に要塞を築き、火器を備へ、砲手や銃手から成る守備隊をおき、西伯利人やノガイ族を防禦する」許可をうけ「ヤコフとグリゴリイにたいして獵手をその手に集めて西伯利のオスチアク族、ヴォグル族、ユゴル族、サモエド族に向つて武裝した手兵を派し、これと戰つて西伯利人どもを捕虜

調—0523
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

とし、政府のために彼らに毛皮税を課する」勅許をえたのである。十七世紀七十年代の末にストロガノフ一家がカアメニ（ウラル）の東の「新らしい土地」にいたる交通路を踏査するため同家に雇はれてゐたオランダ人オリヴェイ・ブリュンネルを西伯利へ派遣したのはこの勅許と關係をもつものであらう。*

＊ハクルート（エヴリマン文庫版）第一巻三六四頁。「ロシア歴史協會文集」一一六巻三〇―四一頁。

チュソワ河の流域とペルミとヘヴォグル族が強襲的に侵寇してきた有名な一五八二年（天正一〇年）に、ストロガノフはまた新たに「わが自由村落や部落を劫掠したヴォグル族どものところへ遠征してその者どもを狩りたてる」許可を請ひ、これにたいして

「ヴォグル族どもの棚へ遠征し、勇敢にこれを征服して狩りたて、その地の狀況によつては彼らがふたたび侵寇を企てざるやうに武力をもつて磨慝せよ」

といふ勅許をえた。

その後の報道に信を措くことができるとすれば、傭兵カザックたちは事實「後カアメニへ遠征してヴォグル族を征服し……そしてマクシム・ストロガノフから給與された穀物で養はれてゐた」のである。*

＊「西伯利年代記集」三一三頁。

【エルマク遠征隊の組織内容】

このやうな進撃はエルマクの遠征によつてウラル以東へと展開された。エルマクを隊長として西伯利の征服に向つたこの遠征は、本質においてストロガノフ家の手で個人的な利益を目的として組織された產業的企業であつた。

「約束を守る男」―ストロガノフはその「傭兵」カザックを派遣するとともにこの遠征に要する費用一切を私辨し、そして軍隊に「軍需品や食糧のすべて」を供給し「充分な報酬と被服やいろいろな武器やたくさんの食料品をあたへ……また西伯利への道案内人、ブスルマン語（回教徒のことば）の通詞まで供給した」*のである。

＊「西伯利年代記集」一一、五九、八四、三一七頁等。同上七、七〇頁「傭兵カザック」の項。傭兵カザックに關する一五七四年および一五八三年の勅狀參照。

のちに公けに承認されてゐるところに依ると、グリゴリイ・ストロガノフは「軍隊にたいして金錢、被服、火藥、鉛その他あらゆる軍需品を貯藏品の中から取だして供給し、またその家人中から西伯利の町々を知る案内人を軍隊につけて派遣した」

のである。*

＊ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊「歴史的公文書補遺」第四巻六七號。

【エルマク遠征隊とストロガノフ家との契約内容】

これらの「給與品」は「前貸」の形であたへられたのである。そしてこの前貸を返却せぬ場合には農奴になるといふ契約で、前貸は農奴權をもつて保障されてゐたといふ報道が存在してゐる。

「日用品をうけ取つた者はこれを値段にしたがつて正確に計算し、高い利息とともに返却した。」＊

＊「西伯利年代記」三一四―三一五頁。後代の傳説（クングルスカヤ年代記參照）ではエルマクの債務契約のことを打消し、エルマクが高利を拒絶して單に口約だけを與へたやうに書いてゐる。

云ひかへてみればストロガノフは食料品、武器、被服その他一切の裝備を、十七世紀時代にロシアの企業家が西伯利へ漁獵にでかける場合にその勞働者に與へたとおなじ條件＊で準備して與へたのである。カザック達はその代償として獲物を分配する義務を負ふてゐたらしい。

「神がわれらに獲物を惠み給ひ、どつさり摑んでくることができたならば、儕つてから（債務の一支拂ひをした上に報償をさし出すであらう。」＊＊

＊エス・ベフルーシン「十七世紀における黒貂獵の雇用契約」（ロシアにおける勞働）《Наемуте на соболиных промыслах XVII века》（Труды в России）一九二五年、第一册。

＊＊「西伯利年代記集」三一三頁。

かうした契約はおそらく「十字架を接吻」して宣誓されたのであらう。カザックたちは「神の御名へで正直な人々の間に約束をし……その誓約をあたへた」のである。＊

＊「西伯利年代記集」二二頁、六八頁。

企業が成功すれば貸金は當然高利とともに償却された筈であつた。クングルスキイ年代記の述べてゐるところに依ると、マクシム・ストロガノフはカザックの第一の捷報に接すると

「それをきいて欣喜雀躍し、すぐさまいくらあつても無駄にはならぬ食料品や武器をしこたま補給した」＊

のである。

＊「西伯利年代記集」三一五頁。

【エルマク遠征隊とモスクワ政府の關係】

モスクワ政府がこの遠征計畫をもつてストロガノフ自身が私腹を肥やすため、成功した場合には彼らがその私領地を擴張するための私人的な企業と見てゐたことは一五八二年（天正一〇年）の公文書によつて窺ひ知ることができる。

ストロガノフは傭兵カザックのみを以て西伯利を維持することがその力に及びがたいと思はれたので、モスクワ皇帝に援助を請はざるをえなかつた。それでも尚ほ新らしく征服された土地は最初からストロガノフ家の世襲領地中に加へられ、その當座においては彼らの舊領地にたいして勅許されたと

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0112

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

おなじ特權が適用されたのであつた。そして一時はストロガノフ自身の手でその私領の町々から派遣して「プソルメン」（回教徒）から貢税を取りたて、これに「自分の家人をつけて」モスクワやノヴゴロドの役所へ送り届けてゐた。これは全私領地からの「一切の貢税」を直接みづからモスクワの國庫へ「届ける」といふ従來の特權に準據したものであること明白である。*

ストロガノフ家はやがて間もなくトボール河畔の土地にたいする右の世襲領地權を喪失するに至つてゐるのであるが、彼らによつて發見された土地の征服完遂といふ仕事においてはこの一家はやはり大きな役割をもちつづけた。一五八四年（天正一二年）に彼らはボルホフスキイ侯の軍隊のために「輸送用の一切の必要品とともに」艀船の準備をなすべき指令をうけてゐる。*

一五九二年（永祿元年）にストロガノフ一族はペリョゾフ市建設の役を命ぜられた軍務知事トラハニオトフに率ひられて船に乘つて西伯利へ赴くべき五十人の軍兵を「破城機、弓具、堡壘、逆茂木その他悉皆の軍用品と共に」提供することを命ぜられてゐるし、またベルイマ河畔の戰闘に際しては同じ人員を馬や砲とともに請負はされてゐるのである。**

「政府はまた、新征服地の植民事業にストロガノフ一族の參加を求めてゐる。一五九〇年（天正一八年）には「西伯利軍」の給與に充てるべきソリ・ウィチェゴドスキイ地方の徵税を監督する役目を負はせてゐる。***

* ミルレル「西伯利國誌」一七一頁。
** 「歷史的公文書」第一卷一三八號。
*** 「考古學探檢文書集」第一卷二四九號。

【大莊園の發達】

このやうにチュソワ河による西伯利への交通路征服は全く私人的な企業心と共に、ストロガノフ家の「信用の置ける人々」の助力のお蔭で完遂されたのである。この關係で、チュソワ河の流域におけるストロガノフ一族は、ベルミの大司教がウイマ河の流域で演じたのとおなじ役割を果したものと云へる。かくしてその何れの地域においても、ロシア領土と異民族の世界との境界點にあつてモスクワの中央からほとんど獨立した、そしてその地方のオスチャク族、ヴォグル族などの諸民族を征服して遂次ウラル以東への侵略を完遂する仲介の役目をした、大規模な莊園（ウチャスティア）が發生していつたのである。

調—0523
0113
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【チュソフスキイ交通路の廃棄】

西伯利汗國の征服完遂のために利用されたチュソフスキイ交通路はその後の西伯利との交通には大きな意義はもたなかつた。そしてチュソワ河とタギル河の中間にある連水陸路上にロシアの支配權を確保する目的で一五八三年（天正一一年）にタギル河の上流地方に建設された上部タギルスキイ砦市は、一五九〇年（天正一八年）にロジヴィンスキイ小砦市が建設されるとともに放棄されて、荒廢に歸してしまつた。*

* 「古代ロシア文庫」一七八八年、第三卷一一五頁。

この交通路の發達を妨げた一の原因は山間に狹隘な激流があつて航行困難なためであつた。この交通路の一部をなしてゐた「チュソワ河は岩石がおびただしく急流で曲りくねつてゐて岩角に要心しなければならなかつた、と十八世紀初の報道の一つ*は述べてゐる。それにも增して大きな障害となつてゐたのはチュソワ河の私有者たるストロガノフ家が享有してゐた特權で「彼らが乘物や案內者を與へない」ことであつた。そこには驛遞制度がなかつたので、この交通路を公用に利用することが困難であつたのである。「西伯利砦柵要覽」«Росписи Сибирскимъ городамъ и острогамъ» には次のやうに書かれてゐる。

「カザンを出發して韃走する飛脚はストロガノフ家の砦市を通つては走らない。ウェルホトゥリエにいたるにはチュソフスキイ逕水陸路を越えて行かない。チュソワ河の岸にはどこにも驛遞が設けられてないので乘物を手にいれる場所がないからである。」

ただ「皇帝の急用の時だけは秋の或る時期にこの交通路をとつて」ヴェルホトゥリエから「ストロガノフ家の柵へ飛脚が立てられ……また乘物や船、それから漕手をよび寄せるためにヴェルホトゥリエから轉裝した一人の使者がソリ・カムスカヤへ派遣され、ソリ・カムスカヤ河から來た船と漕手がカマ河を航行してウスチ・チュソワ河の河口まで輸送していつた。チュソワ河の岸には驛遞がなくストロガノフ家では乘物も船も漕手も與へなかつたから。」**

* アダム・ブラント「一六八一年、一六九二年、一六九三年におけるイー・イズブラントの旅行物語」Adam Brand: «Relation du voyage de Et. Isbrand en 1681, 1692, 1693» アムステルダム、一六九九年、三三頁。「西伯利局文書」一四二六號。

** ディトフ「十七世紀の西伯利」一一—一二頁。

ホ、十七世紀におけるチュソフスキイ交通路

【西伯利直通路における稅關の建設】

チュソワ河は十七世紀中を通じて西伯利にいたる道路として頻繁に利用されてゐた。政府はすでに十七世紀初のころからチュソワ河畔の「西伯利直通路」に稅關を設けて商人たちの通過を監視し、五十年代（慶安、承應年間）にはウトカ河がチュソワ河に合

調一0523

0114

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

流する地點に自由村落を建設した。「ここで關稅收入がすくなからず上がる」と期待したからである。*

*ドミトリエフ「古代ベルミ」第四卷一七六頁。ブツインスキイ「西伯利の植民」五四頁。「歷史的公文書補遺」第四卷二〇號。

「西伯利局文書」八六九號。

【逃亡農民と流民の西伯利往來、遣支使節イズブラントの交通路】

その後、オブワ河、インワ河およびチェルドゥインスキイ郡などから多くの納稅負擔農民たちがソリ・カムスカヤやクングルを避け、ストロガノフ家のチュソフスカヤ世襲領地を通りぬけて西伯利へ逃亡するといふこと、またチュソワ河畔のストロガノフ家の私領農民たちが西伯利から穀物を移出する新道を開くとともに、それに伴れてこの新道を通つて流民どもが「盜みをするため」西伯利の町々からウソリスキイ郡へ通過侵入する*といふ喚聲をきくやうになつてゐる。役人たちもときどきこの新道を通行した。一六九二年（元祿五年）にピョトル大帝から支那へ派遣された使節イズブラント〔八二〕もこの道を乘物にのつて通つていつた。また十八世紀初には官營工場で出來た鐵製品や鐵材のルウシへの輸送もこの道を通つて行はれてゐた。**

*「歷史的公文書」一一三號。

**チェカン「十八世紀初のカアメンスキエ製鐵所」《Пашенские заводы начала XVIII в.》

しかし十七世紀にはチュソワ河による交通路は十六世紀の八十年代（天正年間）にエルマクがこの交通路を利用した時とはちがつた道筋をとつてゐた。すなはちチュソワ河を上流へ遡ぼつてウトカ河の河口まで舟航し、河口に近いチュソフスカヤ（ウトキンスカヤ）自由村落で上陸してそこから陸路レジ河の岸まで進み、さらにレジ河の岸に沿ふてアヤトスカヤおよびアラマシェフスカヤ兩自由村落を經てネイワ河畔にでてネヴャンスカヤ自由村落にいり、そこから水路ニッツァ河によつてチュメニまで下航したのである。*

*レミゾワの「地圖」第八葉、「西伯利局文書」一四二六號。プラント「イズブラントの旅行物語」二四―二五頁。三二頁以下。（順路の記述は明確を缺き所々混亂してゐる）アヤトスカヤ自由村落の意義については「歷史的公文書」第五卷一二六號。一三三號參照。チェカン上揭書。

ヘ、ヴェルホトゥルスキイ交通路

【毛皮貿易港アルハンゲリスクとの關係】

チュソフスキイ交通路はそのころの毛皮取引の中心地であつたウスチュグやソリ・ウイチェゴドスクの町々から遠く離れてゐたのと、また主として毛皮商品の全集散を調整し西歐との全貿易の中心地となつてゐたアルハンゲリスク港と直通連絡を缺いてゐたのとで、上述の困難を別として、モスクワ

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0115

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

政府はカマ河からオビ河にいたる更に北方のコースを採るにいたつた。前述のやうにこのコースは最初チェルドゥイニを經由し、ヴィシェラ河とその支流を航行してロジワ河およびタウダ河にでる交通路をとつてゐたのであるが、一五九七年（慶長二年）ソリ・ウイチェグダの住民アルテュシカ・バビノフが、陸路による新道路を發見してこれを踏査したのである。バビノフの計算によると、この新交通路はソリ・カムスカヤからチュメニまでの間で半分以上も距離を短縮してまつすぐにトゥラ河の上流へでるものであつた。その翌くる年ヴェルホトゥリエ砦市が建設されるとともに、この新らしいバビノフ道路はロジワ河畔にでる舊道に代る國道として布告され、爾後この道路は一七六三年（明和元年）まで國道として保存されてゐた。*

ウェルホトゥリエにいたる道はソリ・カムスカヤからウソルカ河、スルマグ河およびヤイワ河の上流（チクマン河およびモルチァン河）を經てコスワ河にいで、それから更にコスワ河の支流クイリエ河を航行するものであつた。クイリエ河畔にロステスといふ小部落があつた。**

＊ミルレル「西伯利國誌」三三一―三三三頁。「歴史的公文書」第二巻二六號。

＊＊「西伯利局文書」一二三號、七六頁。

【ウラル峠の裏村】

この小部落はウラル山脈の一部をなしてゐるバウヂンスキイ山嶺（カワノ）の峠に近いところにあつて、この峠を向ふ側へ越すとそこにバウダン スカヤ村が展開されてゐた。ウラルを越すと道はソシワ河の流域に屬するリャリ河の支流バウダ河を横ぎつた上で更にリャリ河を渡り、そこからトゥラ河に合流してゐるモストワヤ河にいで、そしてウェルホトゥリエの砦市に到達した。バビノフはソリ・カムスカヤの町からウェルホトゥリエ砦市までの全行程をその頃の里程で二百六十三露里（グェルスト）と計算してゐる。一六七二年（延寶二年）の「西伯利地圖一覽」もおよそこれに近い距離（二百五十露里）をあたへてゐる。一七四二年（寛保二年）にこの交通路をとつて西伯利から歸路についたグメーリンは二百十一露里と計算してゐる。

＊ミルレル「西伯利國誌」三三二頁、その他。

【新西伯利街道】

この新道のコースによるとチェルドゥイニの町は傍の方へのこされてしまひ、ソリ・カムスカヤの町が「新西伯利街道」の最重要地點となつた。モスクワからソリ・カムスカヤまでの交通路はどうなつてゐたかと云へば、それはセルゲイヴォ・トロイツキイ修道院を通過してペレヤスラウリ、ロストフ、ヤロスラウリ、ヴォログダにいで、それからスホナ河およびヴスチュグ河

調―0523

0116

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

へ、さらにウスチュグ河からウイチェグダ河を航行してウイチェゴドスカヤ河へ、更にそこからカイ・ゴロドクの町を經てソリ・カムスカヤの町にいたるのであつた。*

＊「西伯利局文書」中に保存されてゐる多くの「道路案内書」參照。

【モスクワ―ソリ・カムスカヤ間の第二路】

モスクワからソリ・カムスカヤにいたるにはこの通常コースとともに例外の場合にはコロムナ、リヤザニ、カシモス、ムーロム、ニジニ・ノヴゴロドおよびコジモデミヤンスクなどの町々を經てカザンにいたり、さらにカザンからテチュシの町を通つてソリ・カムスカヤに至ることもあつた。*

＊「歴史的公文書」第二巻六九號。

【西伯利街道の狀態】

政府は西伯利街道を交通便利な狀態におくやうに努力した。そのため一五九九年（慶長四年）にこの街道に修理を加へて割栗石で舗裝し「泥ぶかい水溜り」には橋を架け、ソリ・カムズカヤからウェルホトゥリエまでの間にすべて七箇所の橫斷橋と三十箇所の長橋を架けた。その後、道路の「掃除」をしたり「森の倒れ木」を片づけたりすることは沿道の住民の義務として課役されることになつてゐた。政府が右のやうな配慮をしたのにかかはらず道路の維持はきはめて惡い狀態におかれてゐた。一六一六年（元和二年）にはすでに「橋はすつかり腐れ果ててしまひ、河々は汎濫して泥濘は膝を沒し

……また道路上には大木が倒れ散つてゐた」ので、道路の惡狀態に關する苦情は十七世紀中を通じて常に繰返されてゐた。

「泥濘と水溜りで通ることもできない」そして到るところ森の樹が倒れたままになつてゐて「早くから雪が降り……越えがたいカアメニ」の峠越えの難路が橫はつてゐたといふ事情から、ウェルホトゥスカヤ道路の利用が可能であつたのはただ冬季（セミョン祭（九月一日）の日から聖母受胎告知祭（三月二十五日）の日まで）もしくは夏季の乾燥した季節だけであつた。*

＊「歴史的公文書補遺」第六卷一一九號。

またウェルホトゥルスカヤ道路は旅行の前途を水路によつて接續するため西伯利の諸河の解氷期に間に合ふやうに主に冬季にだけ利用されたのであつた。冬季の道路は、もつとも速度がはやいのである。

「冬季には……ソリ・カムスカヤからウェルホトゥリエまで八日路であるが、道が惡くなつてゐる時には場合によつて九日も十日もかかつた。」＊

＊「西伯利局文書」八三號一五三頁。ティトフ「十七世紀の西伯利」グメーリン「紀行」第四卷四九七頁。

イズブラントは十二月――一月に、そしてランゲは一月に、ウェルホトゥリエからソリ・カムスカ

調―0523
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ヤまでの交通路を各五、六日間で旅行してゐる。それに反して「春がやつて來て」雪解け最中の惡條件にぶつかつた時には「冬の交通路はめちやくちやに壞されてしまひ」或る時には「ウェルホトゥルスキイ運水陸路」を四週間もかかつてやつと進んだし「秋の泥濘期」にも略〻これとおなじ狀態であつた。*

*「西伯利局文書」五三號、三九―四〇頁。「歷史的公文書」第二卷一一四號。

モスクワからソリ・カムスカヤまでの全行程はイズブラントおよびラングル(八三)の通過路程表によつて判斷するとおよそ一箇月を要することとなる。

【西伯利街道の關所】

またウェルホトゥリエ砦市はその國道上における位地によつて西伯利への關門となつてゐた。そこには稅關が設けられてゐてカムスキイ交通路を通つてウラルの東方へ旅行する者は少くとも原則としてここを通過せねばならぬこととなつてゐた。この稅關はまたそこを避けて通りぬけるのを取締るために國庫が設けた、更に幾つかの小稅關網の中心ともなつてゐた。さうした小稅關はたとへばカアメニ越えの峠の取りつきのところにあつたロステル村にも、峠の向ふ側のバウヂンスカヤ村にもあり、またウソリの住民たちが脫稅して原住民たちと交易するのを取締るために連水陸路の途上にも、さらにその先きのチュソワ河の上流にもあり、さらにウェルホトゥリエ郊外のリャリ河の河畔（國道が同河を橫ぎつてゐる場所――現時のカラウリノエ村）にもリャリンスキイ監視所（カラウル）があつた。

ウェルホトゥリエから北東にいたる（ベルイム河へでる）道路はコクシャイスキイ柵の關門によつて、また南東にいたる（トゥリンスキイ郡の方向）道路はタギルスカヤ關門によつて抑へられてゐた。*

*「西伯利局文書」第二號。「歷史的公文書」第五卷。同「補遺」第五卷。ブツィンスキイ「西伯利の植民」五三―五四頁。

ト、ヴェルホトゥルスカヤ稅關と運輸狀態

【西伯利への交通狀態と統計資料】

ウェルホトゥルスカヤ關門を通過する運輸交通はきはめて頻繁であつた。まづ第一に中央政府と西伯利との總ての連絡はこの道路によつて行はれてゐた。任地へ赴く軍務知事たちもここを通つて西伯利の都會地へ旅行したし、西伯利守備隊用の穀物も輸送され、書狀をたづさへた飛脚などもここを通つて驅走していつたのである。一六二二年（元和九年）の夏には西伯利各地の知事、書記官、秘書役および西伯利の軍人、それから官用穀物の輸送用としてウェルホトゥリエから出發した大小いろいろ

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の船舶は八十六艘で――コチァ船（大型囘漕船）六、甲板船室附および甲板船室なしの大型艀船八、平底艀船一八、三檣大型荷船三一、大型傳馬船五、ほかにボート八である。その翌くる年にはマンガゼイアからウェルホトゥリエへ知事および書記官の乗用として、その他の西伯利の町々から軍人の乗用として三十五艘（コチァ船三、平底艀船五、平底三檣大型荷船六、その他小舟一一、小型船舶、丸木舟等）[*]が到着した。一六六一年（寛文元年）にはウェルホトゥリエから知事乗用、官用穀物、商人の請負にかかる酒類などの輸送用として三十六艘の船舶[**]が發船した。一六八五、六年（貞享二、三年）には「國庫その他種々の任務を帯びた高官」五十六人がウェルホトゥリエを通過した[***]

* 「西伯利局文書」一六六五年、一六一、一六六頁。
** クルツ「十七世紀におけるウェルホトゥリエ市」（キエフ大學、歴史人種學會記念論文集）
*** 「歴史的公文書補遺」第二巻二八號。

【ウェルホトゥリエ市の殷賑】

西伯利各地の知事の更迭のある年には「新來の長官」の到來というのでウェルホトゥリエは異常な活氣を呈し、とくに全西伯利の最高支配者とされてゐたトボリスク總督の更迭來往の際には極度の殷賑をきはめたのである。ウェルホトゥリエの知事は到來の賓客のために夜會を催ほし、この夜會へはたまたま西伯利の各地からウェルホトゥリエに來合せてゐた軍人や官吏が未來の長官に敬意を表し挨拶をするために集まつた。一六三一年（寛永八年）にトボリスクの新總督フョドル・テリヤチェフスキイ侯がウェルホトゥリエを通過した際には知事フョドル・ボヤシェフは他の知事たちとともに午餐に招いて歡待のかぎりを盡してゐる。

「賓客は內謁聽フェ・テリヤチェフスキイ侯、イワン・タチェフ侯その他の知事たちであつた。」

その宴席へはトボリスクの小貴族メニショイ・レメョゾフやミキタ・モトヴィロッなども出席し「午餐のあと」ですつかり醉ひのまはつたモトヴィロフはフョドル侯を西伯利の皇帝と稱して「健康を祝した」[*]上でその手に接吻の禮をした。列席の多くの官吏たちはまたいろいろな名目をつけて祝辭演說をした。

* 「西伯利局文書」一六三四年、七八號三八七頁。

ウェルホトゥリエを經て多數の役人たちが通過したとともにロシア製の商品を積んだ荷馬車が陸續と列をなして絡繹し、商人や狩獵者の群れがそこを通過した。一六三五、六年（寛永一二、一三年）にウェルホトゥルスカヤ稅關に登錄された通過人員は總て二千二百人以上（五百五十人以上の馭者を含む）に達した。これらの諸年における物資輸送量は約六萬二千三百六十三留および六萬九千二百十四留[*]であつた。一六四六年（正保三年）十一月十九日から、翌一六四七年二月二十七日までの二箇

* ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調―0523

0119

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

月あまりの間にウェルホトゥリエ經由で三十人の商人が一萬八千七百九十四留餘**の商品を携へて通過した。一六九二、三年（元祿五、六年）にルゥシから來てウェルホトゥリエを西伯利へ向つて通過した者は千百八十六人、また西伯利から來てルゥシへ向つて通過した者は二百八十四人であつて、兩方向に往來した數者の數は七百十一人、これに流民その他の通過者三百十五人を加へて總計二千四百九十六人が登錄されてゐる。そのほかウェルホトゥリエの住民七十五人が魚類の積荷をたづさへ「仲間とともに」ソリ・カムスカヤへ向つて出荷してゐる。稅關を通つて輸送されたルゥシからの商品は二萬五千五十六留**であつた。

* 「西伯利局文書」六六號、八五號。
** 同上　二六〇號。
*** 同上　七四七號

運輸交通の數量を明瞭に示してゐるのは積荷を運搬していつた馬匹の數である。一六三五、六年度（寬永一二、一三年）に登錄されてゐる通過馬匹は九百四十五頭であり一六三六、七年度（寬永一三、一四年）は九百四十九頭、一六九二、三年度（元祿五、六年）は七百十一頭がロシア製の商品を積んで通過し、二百五十五頭がウェルホトゥリエから魚類を積んで出發し、その合計は九百六十六頭と計上されてゐる。上揭の諸年度における關稅收入は二千二百四十留餘、二千四百五十留、および千三百四十五留餘等である。

ウェルホトゥリエ經由の運輸狀態は一年間を通じて一樣ではない。稅關書に示されてゐるところに依ると、商品を積んだ荷馬車は「解氷期」すなはち三月末乃至四月一日以前にウェルホトゥリエに到着する見込みを立てて冬の道をとつてウスチュグやソリ・カムスカヤを出發してゐる。そしてウェルホトゥリエで四月一杯水路の開通を待ち土地の住民から買入れた平底船や小型荷船に商品を積み込んで氷上交通路をたどつてそれから先きの東方へと向つたのである。六月以降においてウェルホトゥリエの町はまつたく靜寂に歸し、それが十二月乃至一月までつづいた。

十七世紀前半においてはルゥシから西伯利へ、またその反對に西伯利からルゥシへの往來は、前述のやうに例外なく「カァメニ越え」で行はれてゐた。しかしマンガゼイにいたる海路が廢止されてマンガゼイの產業が衰微するとに、商人たちはルゥシへの旅行にもウェルホトゥリエを經由するやうになつた。たとへば一六九二、三年度（元祿五、六年）にトボリスクからルゥシへ毛皮や支那製品をたづさへてここを通過した者は二百四十人、その他の町からの通過者は十九人と記されてゐる。西伯利から來着する通過者はおもに十一月、十二月で、それが三月頃までつづいてゐる。冬の交通路を利用

調一0523
0120
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

してソリカムスカヤおよびウスチュグの町まで到達しようといふ計畫でさういふ時期を選んだものと思はれる。

【西伯利旅行者の宿驛】

ウェルホトゥリエの砦市は商人たちが集まつてくるお蔭で冬季ぢうは活氣にあふれた取引市場の觀を呈してゐた。ルッシからやつて來た商人たちは河川航路の開通を待機しながら旅館附の勘工場やウエルホトゥリエ住民の小店を借受けてそこに商品を積みあげ、景氣よく懸引をしたり商賣をした。けれどもそれは携行した商品中のほんの一部を賣るだけで大部分の商品は「黒貂の産地」であるエニセイ河やレナ河の流域地方へ持ち込むために先きを急いで出かけたのである。

「ウェルホトゥリエでは柔軟毛皮が商人たちの間で取引されることはなかつた。」

ただヴォグル族や土地の住民や近在の農民の手からおもに栗鼠や麝（じゃ）のやうな安物の毛皮を買ひ集めるため一部の商人だけがウェルホトゥリエに長逗留してゐたのにすぎない。荷馬車について行つた馭者どもはまたその機會を利用して僅かばかりの羅紗類だとか、その他の安い雜貨をウェルホトゥリエで賣るために仕入れてきた。ウェルホトゥリエの役人や住民、それから農民たちも冬になると「大小の魚類」の荷をたづさへてソリ・カムスカヤの町へでかけ、それを賣つて歸りに鹽とかロシア製の雜貨類をウェルホトゥリエへ持ちこんできた。ウェルホトゥリエの關へは年々數百人の流民どもが蝟集してきた。遠來の商人や狩獵者たちはその中から自分の持船の中で働らかせたり黒貂狩りの手傳ひをさせる人夫を傭ひいれた。また遠い旅行に要する船舶とか食料品の買入れ準備もここで行はれた。ウェルホトゥリエはかくしてルッシと西伯利との中間における重要な境界地點としての地位を占めそこに獨特な繁榮をもたらしつつ特異な都市としての姿を形成していつた。*

＊「西伯利局文書」六六號、八五號。

政府は監視の必要上からウラル以東への運輸交通がすべてウェルホトゥリエ關門を經ておこなはれるやうに努めてゐた。「西伯利からくる、また西伯利にいたる多數の道路が無秩序になるので、ウェルホトゥリエを避けて」新らしい道路が開かれることを極力阻止した。さうした新發見の道路ができるごとに

「砲令騎馬の者たると徒歩の者たるとを問はずその新道を通過することを嚴重に取締るべきこと」

といふ命令が發布されたのである。*

＊「歴史的公文書」第五卷一二三號。

チ、クングール曠原經由の交通路

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調一0523

0121

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【古代の隊商路】

嚴重な禁止命令が出てゐたにもかかはらずウファ曠原（ステップ）地帶を經てチュメニにいたる「舊カザン街道」はウェルホトゥルスカヤ公道と併行的に依然として存在をつづけてゐた。この舊道は夙にブルガル國の時代から繼承されたもので、タタール族の支配してゐたカザン市と中央アジアの商業中心地とを結びつける古代からの隊商路であつた。

モスクワは西伯利を占領すると同時にただちにこの交通路を確保することに努めた。そして一五八六年（天正一四年）にウファ砦市を建設したのは「この町から多くのカザンの人々が白い陸路（冬の雪野）を通つて西伯利へ行く」ことを廣れた結果である。モスクワ政府は十六世紀末において或る場合にはこの道路を軍事上の目的に利用してゐる。一五九四年（文祿三年）にはカザンからトボリスクへこの交通路を通つてクチュム征討軍がしばしば輸送されてゐるのである。*

【草原諸民族の交通路】

十七世紀前半には、チュメニからウファへ急を要する公用の書狀を屆ける飛脚が、この道路によつて派遣*された。ブハラやユルグンヂ地方からくるタジキ（ブハラの商人）**たちもチュメニ經由のこの舊道を利用した。それとひとしくウファのタタール族、バシュキル族、それからチュメニ近郷のタタール族も「ウファの村々やバシュキルの地を出て曠原を越えて」市場で賣るための蜂蜜をチュメニの町へ輸送していつた。

この曠原交通路の全旅程は「乾燥陸路を馬上で」三週間、冬季は橇で五週間と計算されてゐた。***

* ティトフ「十七世紀の西伯利」一四、一五頁。
** ヴィヨフ「ウファ貴族証會の歴史資料集」《Сборникъ матеріаловъ для исторіи Уфимскаго дворянства》一八頁。
*** 「西伯利局文書」九〇號。

十七世紀中葉にこの道路の一つのコースが確定され、それは同世紀の最後の二十五年間を通じてかなり大きな意義を有つてゐた。そのコースは一六四九年（慶安二年）に建設されたクングル經由のものであつた。この道路は「ウラル山を越えて大國道」をすぎ、クングルからクングルスキイ郡を經てウファ河の支流ビセルティ河にいで、同河の上流、上部ビセルティのタタール村からチュソワ河の河畔に出て「チュソフスカヤ（ウトキンスカヤ）自由村落へは入らずに」、同河を渡り、そこから先きは道が二岐にわかれてゐて北東へ向ふ道はウトカ河、レジ河を航行してアラマシェフスカヤ自由村落、イルビット方面にいで、南西に向ふ道はチュソワ河の上流からカァメンカ河にいで、更にそれからイ

調—0523
0122
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

セティ河へ、アラミリスカヤ、コルチェダンスカヤ、カタイスカヤなどの自由村落に入り、ダルマトワ修道院にいたるのであつた。この後者の方はエカテリンブルグにいたる後代の西伯利街道のコースをかなり正しく豫定したものであつた。＊

＊レミョゾフ「地圖書」二四頁。「西伯利局文書」七八八號。「歷史的公文書補遺」第八卷。「十八世紀における西伯利歷史記念物」《Памятники Сиб. нст. XVIII в.》第一卷七〇號。ティトフ「十七世紀の西伯利」一一、二九頁。ドミトリエフ「古代ペルミ」第七卷三六—三七卷。グメーリンの「紀行」第一卷八五頁以下對照。グリゴリエフ「西伯利におけるモスクワ街道の建設と移民」《Очерк[и]торго и заселение Московского тракта в Сибири》（西伯利研究所報第六號）

この「公設驛路を避けて間道」を利用する者はモスクワへ追ひ返すといふ禁止令が發布されてゐたにかかはらず、十七世紀後半においてはクングルを經由して「ロシアの都會地から西伯利へ商人や狩獵者、または家族を引きつれた流民どもが間道を通過したばかりでなく「一年ぢう」雜貨や魚類をたづさへた「商人の手代ども」がしきりに間道を往來してゐた。

「西伯利からルヅシへ、自由村落から、チュメニから、自由村落のさまざまな人々やロシア人狩獵者や外國人がロシア產のホップだの寢蠟を買ひ集めるために、またルヅシから西伯利產物買ひ出しのために」

そこを通行したし、また公用で旅行する西伯利各地の知事や役人たちもこの道を利用した。＊

＊「歷史的公文書」第四卷。同「補遺」第九卷。第八卷。ドミトリエフ「古代ペルミ」第八卷三七頁。

【ヴォルガ下流とウラルとの交通路】

クングルスキイ交通路は十七世紀時代に西歐との全通商連絡を行つてゐた北部海岸地方の利益のためには僅かしか寄與しえなかつたが、ヴォルガ下流地方やウファ地方への移住人口が增加するにしたがつてますます重要な意義をもつやうになつていつた。＊

＊ここに記すほかにトボリスクからアルハングリスクへのカルムイク部落經由の途があつたが、あまり利用されなかつた。

リ、十八世紀におけるエカテリンブルグ驛遞路の建設

【ウラル鑛山地方の發展と交通路の整營】

十八世紀に海岸地方の商業生活が衰微し、それに反比例してロシアの中央、とくにモスクワの商業生活が盛大になつていつた時代には、カザンを經てチュメニとモスクワを直接に連絡するクングル街道が早晩ウェルホトゥリエ經由の舊道にとつて代るべき運命をもつた。そしてエカテリンブルグの鑛山地方が發展するとともにウェルホトゥリエ街道は徹底的に凋落してしまつた。しかし政府は十八世紀においても尙ほ頑固にすべての通過輸送を人爲的にウェルホトゥリエへ振りむける舊來の政策をとりつづけてゐた。

ウラル以東への交通路發見と征服の過程

調—0523

0123

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一七〇四年（寶永元年）には、何人といへども、とくに商人にたいしては「ウェルホトゥリエ經由以外の他の道路によつて西伯利との間を往來すること」を禁ずるといふ勅令が發布されてゐる。この勅令は一年の後にあらためて確認され、その際には明白に「アラミリおよびカタイスキイの柵、ウトキンスカヤの關ならびにイルビットを經由して旅行をしてはならぬ」と附け加へて述べられてをり、それから更に一七二二年（享保七年）にもおなじ勅令が反復されてゐる。*

【エカテリンブルグ市の建設】

その同じ一七二二年にエカテリンブルグ市が建設されても事態はやはり變更されなかつた。一七三五年（享保二〇年）、さらに一七五八年（寶曆八年）においてさへも商品をたづさへてエカテリンブルグおよびクングル經由で旅行する者は商品を沒收するといふ威嚇的な禁令が繰返されてゐる。しかしながら十七世紀末以降においては政府の郵遞のためにはすでにクングル街道を利用してゐたのである。ようやく一七六三年（寶曆一三年）になつてクングル――エカテリンブルグ――チュメニ街道の自由交通が公認されるやうになり、ウェルホトゥリエの關門は、その年のうちに廢絶されてしまつた。**

＊『十八世紀における西伯利歷史記念物』第一卷七〇號、第二卷八〇、八六號。

＊＊グリゴリエフ、上揭書。

【西伯利鐵道の端初】

このやうにして西伯利――モスクワ街道は逐次に形成され、この街道は全十九世紀を通じてロシア本國から西伯利にいたる唯一の交通路となり、そしてまたこのコースにしたがつて一八八五年（明治一八年）にペルミ――エカテリンブルグ――チュメニ鐵道が布設されたのである。

ウラル以東への交通路發見と征服

調―0523

0124

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第二章　東部西伯利への交通路發見と征服

一、オビ河よりエニセイ河への交通路發見

【ロシア民族東漸の條件】

西伯利の奥地ふかく東方にいたるロシア人の進出は、主として水路を辿つておこなはれたのであつて、それがまたあの廣漠たる西伯利の密林とツンドラ地帶をきはめて容易に征服することを可能ならしめたのであつた。さうした關係で水域の多いこと、「ひろびろとした美事な河がすばらしく澤山」あること、そしてそれらの河川が北アジアの原野に規則ただしく配列されてゐることは、まことに絶好の條件であつた。ウラル以東へのロシア植民のそれぞれの段階は、一つの流域から他の流域へ、オビ河からエニセイ河へ、エニセイ河からレナ河へ、それからさらにアムール河へといふ風に時期を劃して進展してゐるのである。だから、われわれはロシア人がウラルから東へ向つて太平洋に到達するまでの進出に利用した、主要な河川交通路について知つておく必要がある。

イ、マコフスキイ連水陸路經由の交通路

【遊牧使節スパーファリの通路】

十七世紀中にもつとも多く利用されたオビ河からエニセイ河にいたる交通路は、オビ河の支流ケテイ河をエニセイスクの近くで直接エニセイ河と連絡させるマコフスキイの柵を經て導かれてゐた。普通、トボリスクから陸路イルトゥイシュ河の河口に至り、そこからスルグト、ナルイムを經由してオビ河を上流へ遡ぼり、三つの河口がオビ河へそそぐ會流點ナルイムの近くでケテイ河にいり、そこからケテイの柵を經て同河を上流へ遡航していつた。ケティ河の或る地點に「ヤール・コロコルヌイ」（鐘ケ淵）と稱せられる場所があつて、そこは「瀦灘（ボロゥ）のやうなおそろしい淵と矢のやうに速い急湍の難所で、淵と瀬の右手にみえる樅林のところに、平底船にのつてケティ河を航行する旅行者に難所の目印としてあまり大きくない鐘が吊してあつた」のである。

一六七五年（延寶三年）にケティ河を航行したスパーファリ（八四）の旅行記によると「おそろしく憂鬱な船旅で……そこには牧場もなければ耕地もなくただ人跡未踏の密林と沼澤と湖水があるばかり」であつた。上流へゆくと、ソチュラ河口のあたりから、ケティ河は「急に河幅が狹く」迫つてゐた。ケティ河を上流へマコフスキイの柵まで遡ぼると、そこから連水陸路がはじまつた。*

＊「歷史的公文書補遺」第八卷一〇〇號。ティトフ「十七世紀の西伯利」三〇頁、四六―四七頁、八一―八三頁。アルセネフ編東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0125

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「一六七五年ニコライ・スパーファリの西伯利經由旅行」《Путешествие через Сибирь Н. Спафария》（ロシア地學協會人種學部刊）。この交通路の記述はブラントの「イズブラント旅行物語」にもある。イズブラントの原文は「外務省保存文書」支那關係書類五册。（カ・ベジレヴィチ「ボグドゥイ・ハンの賓客として」《В гостях у богдыхана》參照。）「十八世紀の西伯利歷史記念物」第二卷一一五號。

【商人の自由部落】

十七世紀時代にこの運水陸路を支配してゐたマコフスキイの柵は「秋になると」雜貨や穀物の貯藏を倉庫（アンバール）へ陸揚げして冬になつてからそれを荷駄でエニセイスクの柵まで移送し、さらに春になるとそれから先きレナ河の沿岸地方へ輸送して行くためにやつて來る「大帝の軍人たちの宿場」になつてゐた。この柵から半露里（ヴョルスト）ばかり距てたところに「商人たちの自由部落（スロボーダ）」があり、そこにはボースイとかレヴャキンとかバレジンなどのやうな豪商一家の「たくさんの倉庫」が櫛比してをり、宿舍用の住宅や生活用品を蓄はへてゐく納屋などが軒をならべてゐた。また、そこの河岸には「平底船（ドシチャニク）や小船（カユーク）のこはれたのや完全なのが無數にもやつてあつた。」*

* 「西伯利局文書」九四號、「スパーファリ旅行記」《Путешествие Спафария》八四頁。

【エニセイスクへの運水陸路】

マコフスキイの柵からトゥイ河の岸ぴにケミを經由してエニセイスクへまつすぐ通じてゐる運水陸路がはじまつた。この運水陸路は夏季には五露里しか進めなかつたが「冬道」となると日程五十露里と計算されてゐた。運水陸路は濕地の上を蜿蜒とつづいてゐて、ところどころに橋が渡してあつた。

「この運水陸路一帶の生活は實に汚らしく、泥濘と溝川が多いため、到るところに長い橋が渡されてゐた。」

そしてまた

「運水陸路の或る箇所には山があつたり景色のいい清流の岸があつたりして、さういふ場所で立ちどまつて休息した」ものである。荷馬車を進めることは困難であつたので物資は馬背に括りつけて輸送してゐた* ものと思はれる。この運水陸路を越えるのに二日乃至三日を要した。**

* テイトフ「十七世紀の西伯利」八二頁。スパーファリ「旅行記」八四―八五頁。「イズブラント旅行物語」參照。運水陸路はレミヨゾフのエニセイスキイ郡の地圖に繪畫として描かれてゐる。

** スパーファリ、八五頁。テイトフ三七、四〇、八二頁。イズブラント一七九頁。

一六六五年（寛文五年）の地圖（チエルチョン）によるとイルトゥイシュ河の河口からマコフスキイの柵までの全行程を併せて十一週間四日から十三週間五日を要するものとされてゐた。スパーファリはこの交通路に八週間三日を費やし、イズブラントはエニセイスクまで十週間三日で旅行してゐるのであるが、個人

調―0523

0126

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

的な旅行者は使節のやうな速度で旅行することは出來なかつたであらうから、右の日程はおそらく實際に近いものであらう。

イズブラントは歸路には「冬の道」を利用してここを旅行し、途中の長逗留の時間をのぞくと全行程を約七週間で通過してゐる。

【ツングス族領への最初の侵入】

一五九八年（慶長三年）にナルイムの砦市が建設されると間もなくケティ河の沿岸地方に住む異民族は非常に急速に毛皮稅を課せられてゐるが、ケティ河を經てエニセイ河にいたる交通路は比較的おくれて發見されてゐる。エニセイ河にいたる交通路征服の根據地となつたのはナルイム砦市の建設に數年おくれて設けられたケトスキイ柵のカザックたちは、一六〇九年（慶長一四年）にはすでにエニセイ河沿岸のツングス族の居住地方へ侵入してゐる。しかしカザックの進んでいつた道は上掲の交通路とは稍や別のコースで、彼らの報告によると輕快な小船（カユーク）でケトスキイ柵を出發してから二週間半で「ナマクの部曾（ブイブ）の住家」、すなはちマコフスキイ連水陸路に到達し、そこから更に

「ケティ河からトマ河まで夏の道を各自二ブウドづつの荷を負ふて二日間陸行したが、冬は犬橇でやはり同じ時間かかつた」＊

と述べてゐる。そして彼らはトマ河で艀船を作つてケミ河まで半日航行し、ケミ河をエニセイ河まで一日で航行したのである。＊＊

＊一七六四年三月「月刊文集」二〇七―二〇八頁。

＊＊同上二〇六―二〇七頁。

【アルブイチェフ遠征隊】

ところがトボリスク政廳ではようやく一六一七年（元和三年）になつて新らしく發見されたこの交通路の踏査に着手し、ケトスキイ柵の軍長にこの交通路に關する報告を求め、また現地の調査記錄を作るために二人の役人と一人の狩獵者を派遣したにすぎぬ。しかしその翌くる年になると貴族ビョトル・アルブイチェフを隊長としてエニセイ河畔へ軍事遠征隊を派遣し、マコフスキイの柵を構築させ、さらに一六一九年（元和五年）にはエニセイスク砦市を建設し、ここにトボリスクからエニセイスクまでの全交通路は、完全にロシア人の支配するところとなつたのである。

ロ、エログイスキイ連水陸路經由の交通路

【エログイスキイ柵】

十七世紀中にオビ河からエニセイ河への連絡に利用されてゐた交通路としてはケトスキイ交通路が

調―0523

0127

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

唯一のものではなかつた。十七世紀の三十年代（寛永年間）以降イルトゥイシュ河の河口からオビ河を遡航し、その支流ワハ河により更にヴォロチャンカ河口に出てエログイスキイの柵にいたる別の交通路もかなり重要なものとなつてゐた。當時の記錄によるとエログイスキイ連水陸路は十五露里と計算されてをり、二日行程でエニセイ河の支流たるエログイ河にそそぐヴォロチャンカ河に達したのである。この交通路を主として利用したのはツングスカ河の下流地方やボドカァメンナヤ河の沿岸地方へ往來してゐた商人や狩獵者たちであつた。この交通路はエニセイスクの下流地方へでる近道であつたのと、この道を旅行すれば三つの官廳の所在地（ナルイム、ケトスク、エニセイスク）を避けて通ることができ、通行許可證をうけるために登錄をしたり、七面倒な手續をしたりすることが省かれたのである。

【商人・狩獵者のツングスカ河畔通過】

ワハ――エログイ交通路は、マンガゼイからトボリスクにいたるもつとも近い安全交通路の發見に一時興味をもつてゐたマンガゼイア政廳の注目するところとなつた。マンガゼイの軍務知事ゲ・イ・ココレフは、一六三〇年（寛永七年）の夏にこの交通路の踏査を企だて、「オビ河にいたる道を發見するためにエログイとワハへ人を派した」＊のである。それからやや時を經てマンガゼイの別の軍務知事ペ・イ・ブーシュキンはこの交通路をトボリスクおよびモスクワとの連絡に利用しよう＊＊と考へた。そして其後ときどきマンガゼイアからワハおよびエログイに向つて公用郵便が仕立てられ軍人たちがその間を旅行した。しかしエログイスキイ柵を經由する交通路は主として「ツングシチク」たち――すなはち「貢あつめた柔敵毛皮」をたづさへてツングスカ河畔から歸路につく商人やツングスカ河の流域へ漁獵にでかける狩獵者たちの利用するところとなつてゐた。たとへば一六四二年（寛永一九年）の稅關書は「エニセイ河からワハ河を航行しスルグトを通過していつた」狩獵者のことを指摘し、一六四五年（正保二年）にはこの交通路によつて「五十艘の小船（カユーク）が通過し」翌くる一六四六年に「商人や狩獵者たちはワハ河からヤログイへ全部通過しケトスキイの柵を通つて行つた者は一人もなかつた」＊＊＊と報告してゐる。だからマンガゼイの軍務知事ベクレミシェフは一六八〇年代の初めにエログイ河畔に關を設ける必要があると考へたのである。＊＊＊＊

＊「古代公文書」一六三〇年七一號。

＊＊「西伯利局文書」一七八號、三五頁以下（マンガゼイよりトボリスクにいたる道路關係書類）

＊＊＊「西伯利局文書」二一一號、一三四號、四三四號その他。レミョゾフ「地圖書」一五頁。ミルレル文書ヤクーツク關係書類。

＊＊＊＊グメーリン「紀行」第三卷一九七頁。東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0128

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

エログイスキイ交通路とケテイ河航行による公認交通路との競争は、官廳的な見地から特別の懸念をよび起さざるをえなかつた。ケトスキイ柵の軍長は、一六四〇年代において次のやうな不満を訴へてゐる。

「ケトスキイの柵のおいては誰からも通關税や人頭税收入を徴することを得ず、軍人や銃工にたいする俸給、各種の臨時支出に要する金錢は皆無であります。その理由は、エニセイスクから旅行する商人や狩獵者はワハ河を通過してしまひケトスキイの柵を通過する者は一人もないからであります。」*

* 「西伯利局文書」二五九號。國庫の缺損を防ぐためケトスクを回避して旅行した者からはスルグトで「ケトスキイ柵のため」として徴税した。

【マンガゼイア軍人の密貿易】

これによつてみるとエログイスキイ交通路が公けに許されたことはいかなる時代にも営つてなかつたのである。一七〇二年（元祿一五年）に政府は「ワハ河とエログイ河の連水陸路を越えて」旅行するマンガゼイアの軍人たちが、あまたの悪事を行ひ、商品を携行して途上で異民族と交易し、自由勝手に異民族を荷役に徴用し、商人どもを配下の勞務者のごとく裝はせてマンガゼイからトボリスクへ同伴するなど言語同斷のことが多いので、將來は軍人も商人もエログイ河を通航することを禁止* したのである。ミルレルの證明してゐるところによると、それでも尚ほ十八世紀中においてトボリスクからトゥルハンスクへ旅行する商人たちは依然としてワハ――エログイ経由の道路を利用しつづけてゐた。**

* 「西伯利局文書」一三三一號。

** ミルレル文庫五一四號「月刊文集」一七六四年六月、五一二―五一三頁。

【スイマ河口の關所】

それからまたソビ河からエニセイ河にいたるには、その上流地方で相接近してゐるソビ河とトゥイマ河およびエニセイ河の支流スイマ河を仲介として交通* することができた。エニセイ河畔からスルグトへでる狩獵者たちはすでに十七世紀の二十年代（元和年間）ごろからこの道を通過してゐた。エニセイスクの軍務知事はこれを阻止する目的でスイマ河の河口に關を設けたのであるが、スイムスキイ交通路はあまり大きな意義をもつにはいたらなかつた。**

* 同上　五一二頁。

** 「西伯利局文書」一號、一一號、一四三號等。フィシェル「西伯利史」四〇三頁。

ハ、マンガゼイアへの海上交通路

【タズ河、エニセイスキイ連水陸路、トゥルハン河】

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0129

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

オビ河の上流とエニセイ河とを結びつける上述の諸水路のほかに、ロシア人たちはほとんど全十七世紀を通じて海上経由の交通路を利用してゐた。すなはち、オビ河の河口からオビ灣にいで、そこからタゾフスカヤ灣（または「マンガゼイ海」）にいたり、タズ河の河口から同河をマンガゼイ砦市まで遡ぼり、更にそれから先きへタズ河の支流ヴォロチヤンカ河を航行していはゆる「ロソフ」又は「レジヨム」（淺い小さな支流の意）にいたつて「エニセイスキイ連水陸路」（約一露里）に達し、これを越えてふたたび小支流にいで、エニセイ河の支流トゥルハン河に合流する前述のとは別のヴォロチャンカ河に入つたのである。

この交通路はケトスキイ交通路よりもよほど前からロシア人の知るところとなつてゐた。ボリス帝の時代にすでに海の狩獵者たちはこの交通路をとつてプル河、タズ河、エニセイ河の河畔へ旅行してゐた。マンガゼイに柵を設けるために政府が派遣した一六〇〇年（慶長五年）の遠征隊もこの交通路をとつて進んだのである。*

【トゥルハンスコエ冬營所】

すくなくとも一六〇九年（慶長一四年）以前においてマンガゼイアから出かけていつたロシア人狩獵者たちの手でトゥルハンスコエ冬營所が設けられてゐる。さうしてこの交通路はすでに十六世紀時代にロシア人が最初にエニセイ河畔に到達したときの道**として利用されてゐるのである。この交通路はきはめて複雑であつたにかかはらずトボリスクの總督ペ・イ・ゴドゥノフの命令でマンガゼイアへの「海路が廢止される」にいたつた十七世紀の六十年代（寛文年間）まで依然として存在をつづけてゐた。この交通路の狀態は非常に注目を要する奇異なものであつた。

＊「歴史的公文書」第一卷三〇號。

＊＊エニセイに關する最初の記錄が現はれたのは十六世紀の八十年代および九十年代である。ボースがオビ河および「エンデジ」河（イギリス人の航行許可を願ひ出でたのは一五八四年である。一五九五年に「ギリセイ」河のことをオランダ人はロシア人産業者から聽いてゐる。エニセイ河の河口がロシア人によつて發見されたのはようやく一六一六年であるから彼らが當時エニセイ河畔へ出かけていつた時は海路によらずマンガゼイを經由したことは疑ひない。

【海上橫斷旅行の狀態】

この交通路中で興味をひくのは、オビ河の河口からタゾフスカヤ灣までの海上を橫斷する部分である。通常、コチア船の船隊はトボリスクを出帆してイルトゥイシュ河を經てオビ河を下航し、ベリョゾフを通過し、そして「オストロワ」（島々）、すなはちオビ河の三角洲（デルタ）へでた。一六一六年（元和二年）に商人コンドラシュカ・クロチキンおよびトボリスクの狙撃兵カレイラ*はオビ河の三角洲について語つてゐる。

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523

0130

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「オビ河の河口には誰も住んでゐる者はない。あちこちに河が氾濫してたくさんの島々ができてゐるのである。」**

* 「ロシア歴史文庫」第二巻二五四號。オビ河三角洲の記述は一五八一年のメルカトール宛の手紙（ハクルート、エヴリマン文庫版第二巻三三六頁）參照。

** 「西伯利局文書」第五〇三號。

【サモエド族の漁場】

夏になると冬季は無人の境となつてゐるそこの「島々」へツンドラ地帯を遊牧してゐるサモエド族たちが集まつてきて「魚漁をするために海に近い島々に散在して住んでゐた」* のである。この三角洲ちかくは淺瀬が非常に多いので船隊にとつては甚だ危險な區域であつた。前述のクロチキンとカレイラは「おそろしい淺瀬なので大型の船ばかりでなく艀や小船でさへも進むことができない」と述べてゐる。時にはかなり長いあひだ島にかかつて風待ちをした上で海洋へ乘りだしていつた。**

* 同上。

** 一六二年にマクシム・チャプリンは二週間島に滯船してゐた。（ミルレル文書第二巻五號）

【オビ灣の航海】

それから先きの風波の荒いオビ灣の船旅はまつたく天候の如何に支配されてゐた。天候が惡化すると近くの河口に難を避ける必要があるので陸岸に近く沿ひながら、まづオビ灣とタゾフスカヤ灣を分

劃するルスキイ海角（ザヴォロト）まで北進し、そこから南東に針路を轉じて進んだのであらう。海角から先きではてゐる。それから先きへ現在ナホドカと稱せられてゐる大陸と島との間のヤバンチン海峽を通過して、そこから深く切れ込んだブロフスカヤ灣の入口に横はつてゐるブロフスキイ島を右手にみながらタゾ河の河口に入つたのである。*

* マンガゼイにいたる海路の記述については「西伯利局文書」中に報告書や嘆願書が多數ある。ミルレル文書第二巻四七頁、「古代公文書」一六三〇年五五號その他。

【サモエド・ユラク族の襲撃】

タゾ河ではしばしば慓悍なサモエド族や、特に十七世紀の四十年代ごろに同河の下流地方を支配してゐたサモエド中のユラク族（八五）に船を襲撃される危險があつた。たとへば一六四五年（正保二年）にトボリスクの貴族ヤコフ・エリザロフを指揮者とする船隊が穀物を積載してトボリスクを出帆したが、彼れは皇帝にたてまつつた上申書のなかで次のやうに述べてゐる。

「陛下の臣下たる私どもがタゾ河の河口にさしかかりますと、陛下よ、サモヤヂやユラキの匪賊どもが陛下の御用品や私どもに褒ひかかつて參りまして、陛下の臣下たちを殺し、御用の穀物を掠奪しようといたしました。」

【サモエド討伐隊】

東部西伯利への交通路發見と征服

調一0523

0131

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ユラク族たちは「コチア船の上におどり込み」五人に手傷を負はせたが「陛下の御威光により」撃退されたのである。そこでエリザロフが護送の貨物とともにマンガゼイアへ到着するやマンガゼイアの知事ペ・エム・ウフトムスキイ侯はただちに同人を隊長として「サモエド匪賊團の鎮定」と交通路の清掃を目的として「タズ河の下流から海まで」の討伐遠征隊をだした。この征討隊は勝利をもつて目的を完遂し、ヤ・エリザロフは美事に使命をはたしたことを賞せられてデミアンスキイ宿驛の代官に昇任された。*

*「西伯利局文書」一四三號、三四三號、その他。

【トボリスク＝マンガゼイアの行程】

トボリスク總督イワン・クラーキン侯の報告によると、この交通路はトボリスクからマンガゼイアまでの旅行に總て二箇月から四箇月を要した。

「マンガゼイアはトボリスクからもその他の都會からも遠く隔たつてをり、天候がごく順調な場合でもトボリスクを出發してから八週間の後に到達することができるのであるが、晴天の日が少ないため十三週間からそれ以上の旅行である。」*

【海路における季節と天候の關係】

都合のいい場合、とくに季節に入つてから早く出發した場合には割合に短時日で旅行をとげることができた。たとへば一六四五年（正保二年）に、トボリスクを五月三十一日に出發したコチア船は七月十七日、すなはち七週間足らずでマンガゼイアへ到達* してゐる。航行の速度は、出發時期の好適であること、風と天候の具合が順調であることなど、いろいろなコンディションによつて定まるのである。さらにもう一つの例を擧げると、一六五六年（明暦二年）八月五日に官用黒貂を護送してマンガゼイを出發した軍人デメンティ・ティシュコフは、九月十一日にマンガゼイアへ引返してきて知事イ・コルサコフに報告してゐる。

「私どもが引返して參りましたのは次のやうな顚末からであります。海まで出ましたところ知事セミヨン・ラリオノフ閣下（マンガゼイアから海路赴任の途中にあつた）の船に逢ひまして海上で一晩と翌る半日滯泊いたしましたところ、その時風は順風でございましたが間もなく風がはたと凪ぎましてそれ以來三週間といふもの海上に停船いたしました。チョルヌイエ・コシュキ岬から海の方へでる順風がなく海上において穀物の貯へが空しくなつてしまひましたし、順風を待つどころではなく寒さに凍死しないやうに愼しなければなりませんでした。」

このやうに僅か二日間の滯泊といふ一事がこの旅行を失敗に歸せしめてゐるのである。もしこの滯泊をしなかつたならば「チョルナヤ・コサ岬ちかくの海上では逆風でありましたが、そこを越えたならば風はいつも海を渡るのに追手を受けたことでありませう。」**

結局すべてが偶然的な機會によつて決せられたのである。

「年によつては早く航海に出ても船は海上で惡天候に逢つて難破することがあつたし、また年によつては晩くなつて出發しても往々

調—0523

0132

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

にして海路を平穏に到着することができた。」[*]

[*]「西伯利局文書」三二八號。
[**]同上、五〇三號。
[***]同上、九三號。

【来海旅行におけるロシア人的氣質】

航海旅行は原始的な構造のコチァ船に乘つて行はれてゐたのであつた。それは木釘で枘をかためた一層甲板、平底の木造船である。

「櫂で漕いでも帆を張つても進むことができたが、乘手が下手で航海のことをよく知らぬためにこの船では順風に乘つて進むことができるだけで側風はほとんど利用されなかつた。」

フィシェルは驚嘆の聲をあげて述べてゐる。

「ヨーロッパ人はこのやうな船にのつて一年ぢう氷の絶えることのない海上を旅行する勇氣があるであらうか。だがアルハンゲリスク市の人々は皆はこれ以外のいかなる船をも知らなかつたのである。」[*]

[*]フィシェル「西伯利史」一七四四年、二〇五頁。

【コチァ船の構造と耐久力】

コチァ船の構造についてはミハイル・フョドロヴィチ皇帝からトボリスク總督グリゴリイ・クラーキン侯にあたへた勅命によつても窺ひ知ることができる。

「船匠に命じて堅固なるコチァ船を造らしめよ。船材は緻密にして良好なるものを選び、よく縫ひ合はせ、横周を詰め、側腹を張り、板張りがゆるまぬようにびつたり張り合せて錐でかたく打ちかため、そのコチァ船が航海に充分安全なように總てに細心の注意を拂ふやうにせよ。」[*]

[*]「西伯利局文書」一三四號。

日用品の貯藏や荷物は甲板の下にある船艙に積みこまれた。甲板上にはかなりの廣さをもつ船室—「カジョンカ」[*]がしつらへられてゐた。コチァ船には二つの錨と二艘の「ボヴォズカ」すなはち「短艇」が附屬するのを通例とした。この船の構造がいかに初歩的なものであつたかといふことは、普通それらのコチァ船が航海用として役立ちうる期間は三年以下とされてゐたのでも判る。官用のコチァ船の建造にあたつて、すくなくとも

「三年間は使用に堪へるよう堅牢頑丈に造るべし」[**]

と云はれてゐるのである。

[*]「西伯利局文書」三七四號。貴族リハチョフがコチァ船の「カジョンカの机の下」にあつた酒樽を沒收された事件の關係書類)
[**]コチァ船の構造の詳細については「西伯利局文書」一三號、一九八號、二〇五號その他參照。

【コチァ船の難破とサモエド族の掠奪】

東部西伯利への交通路發見と征服の過程

調—0523
0133
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ロシア人航海者たちは、やつと板つぺらをよせ集めたやうなこの不格好なボロ船にのつて海洋に乗りだし、マンガゼイ海において恐ろしい有りとあらゆる「度はづれなシケ」にぶつかつたのである。海上でコチャ船の難破がなしに済むといふ年は稀れであつた。最上の場合でも積荷を「海中へ投げ棄て」ねばならなかつた。難破にあつた者は暴風と激浪に粉砕されたコチャ船の破片にとりすがつて一命をとりとめ、また海岸へうち上げられた自分の持荷や穀物入りの袋が沿岸のツンドラ地帯を遊牧して「掠奪した」穀物で大部分の食料を満たしてゐたサモエド族たちにまだ盗み去られずにあつた場合にはそれを拾ひ集めたのである。

一六四二年（寛永一九年）に軍人の一人ワシュカ・ペトロフは報告して云つてゐる。

「陛下の御用品のなかで、残りましたものと申しますれば、麦粉入の袋が岬の崖沿ひ三露里の間にあちらこちらに水や砂びたしになつて發見されたのであります。そのほかの袋は盗みを業といたしてをりますユラクやブルスキイ又はナドゥイムスキイのサモエド族どもがてんでに分けて盗み去つたのであります。」[*]

*「西伯利局文書」一二三號。ナドゥイム河はオビ湾へそそぐ河、ブル河はタズ湾にそそぐ。この沿岸に住むサモエド族を河名によつてさう呼びなしてゐる。

【トボリスク軍人遭難事件】

海岸へうち上げられた航海者たちはナルタ（犬または馴鹿の橇）に乗つて陸路をとつて先きへ進むかもしくは難破した船の断片をよせ集めて小船をつくり、それに乗つて勇敢にもふたたび危険を冒して命がけで海上へ乗りだしたのである。たとへば一六二四年（寛永元年）にマンガゼイアで勤務するために派遣されたトボリスクの軍人らは次ぎのやうに報告してゐる。

「神さまのお蔭により私どものコチア船は海上で打ちくだかれ……私どもは悲惨な艱難とたたかひながら海岸のツンドラまで漂ひつき、そこで壊れた船の船板を探しあつめ、それに乗つて大きな苦労をしてようやくマンガゼイの役所に到着いたしました。」[*]

*「西伯利局文書」第六號。

「難船」のあつたあとでは獲物を待ちもうけてゐる原住民の襲撃といふ危険がいつも必らず遭難者をおびやかした。一六四二年（寛永一九年）にトボリスクの五十人長ラリカ・セミョノフは同僚とともに官用穀物を護送してマンガゼイアへ派遣されたのであるが、次ぎのやうに報告してゐる。

「海上に出ましてから山嵐と相闘してゐる場所において逆風に逢ひ、そこに二日間停船いたし、その場所で錨索と錨が破損しコチア船は岩礁に打ちつけられ、壁際に襲ほれました。そのときコチャ船に向つて三百人ばかりのサモエド族が襲つて參り……御用の穀物、塩、いろいろな船具、帆、索具などを奪ひ、また商人や狩獵者の所持品やロシア製の商品などを殘りなく掠奪し、コチャ船を差押へ、乗組員を殺さうといたしました。」[*]

*「西伯利局文書」一三〇號。

事態は掠奪だけにはとどまらなかつた。一六五五年（明暦元年）にサモエド族の部酋ボスコ・フレエフはオブドルの通詞に次ぎのやうに物語つてゐる。

調—0523

0134

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「ルスキイ岬の先きの海上でコチァ船が難破しますと船には大勢のロシア人が乗組んでをりましたがオブドルに住んでゐるアデル部の歸順サモエド族タイと申す者が三人の仲間といつしよにそのロシア人たちを殺してしまつたのでございます。」

この事件についてはまた別の歸順サモエドが證言して語つてゐる。

「コチァ船が岩鼻のところにのし上げてをりまして船の中には艫のはいつた櫓がありましたが、そのほかは何一つ殘つてをりませんでした。海岸の近所を迂路ついてをりますアデル部のサモエド族どもが殺してしまつたのでございます。コチァ船の中には二人のロシア人の死骸がありました。そのコチァ船のある反對側のところにロシア風の小屋が掛けられてありまして海ぎはの道の上には七挺の櫓が乘せてあつたのでございますが小屋の中にも櫓の近所にもロシア人の姿は見あたりませんでした。」

＊「西伯利局文書」五〇三號。

【チェリャエフ遭難事件】

「海上旅行」の狀態を說明するためには一六四三年（寛永二〇年）の遭難事件の顚末がもつとも好い例である。この年七月三日に穀物を積んだ二艘のコチァ船がトボリスクを出發したがその一艘の方のコチァ船には新たにマンガゼイ勤務を命ぜられた書記官グリゴリイ・デェリャエフが乘つてをり、もう一艘は商人や狩獵者の船であつた。八月十九日頃にルスキイ岬のあたりで暴風が吹きつのり「荒天が船を粉碎しようと猛り狂つた」のである。官船と商人の船は「あはてて避難のため港のある所へ逃げ込まうとした」が積荷は激浪に浚はれて或は沖の方へ運び去られ或は海岸へうち上げられ、波に浚はれた人間は檣や板切れにつかまつて泳ぎ、またはボートにのつて岸へたどりついた。書記官グリゴ

リイ・テェリャエフのコチァ船は

「岸へうち上げられて浚はしなかつたが、積荷は根こそぎ波に浚はれてしまひ……コチァ船は岩の上ですつかり砂をかぶり、二週間かかつてやつと砂の中から船を掘りだした。」

テェリャエフは、二人の兵卒に遭難報告をもたせ小船にのせてトボリスクへ遣はし、自分は前途へ出發した。一艘だけ殘つた彼れのコチァ船へはいろいろな人間が七十人も乘りこみ、商人や狩獵者のうち十五人は「遭難の現場に殘つてうち上げられた自分たちの荷物のそばで冬越し」をすることにきめた。テェリャエフの船は一日帆走したが、

「チョルヌイエ・ゴールイを越えストルボワヤ河の沖合までくると、そこでまた側面から北風に吹きつけられて船は陸べうち上げられ、砂洲からそれを引離すことができず、其場に八週間滯留してゐるうちにサモエド族がやつてきて包圍した。この遭難後に陸岸づたひに橇でフイリップ祭の十日前（十一月四日）にマンガゼイアへ辿りついた。」

その間ずつとサモエド族どもは彼らを追跡して來たのでこれを追ひ拂ひながら進んだ。

「サモエド族どもの襲撃をうけ、しかうこれと戰ひつづけて前進を妨げられた。」

そして物資や武器を積んだ橇八臺をサモエド族に奪はれ、二人が戰死をし、一人は頭部に矢疵を負ひ、書記グリゴリイの橇に乘つてゐた嬰兒の乳母は浚はれていつた。サモエド族たちはプロフスキイ島まで一行を追跡してきて其處でふたたび長時間の戰闘をつづけ、一人に瀕死の重傷を負はせた。不

調—0523

0135

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

幸な遭難者たちはかうして苦しい旅行をつづけた上タズ河の河口に達したのであるが、

「チョルヌイエ・ゴールイからタズ河の河口まで八週間かかつた。」

ここで彼らは飢餓に襲はれた。サモエド族どもが行手をさへぎり、貯藏の食料品をことごとく奪ひ去つたからである。兵卒や狩獵者たちが相次いで餓死しはじめ、死する者五十人に達し、そのうちには書記官テェリャエフの二人の甥とがあり、彼れの部下も死亡した。かういふ事態のなかで彼れは「飛報」をもたせて數名の兵卒をマンガゼイへ送つた。この使者は餓死に瀕しつつマンガゼイアまで辿りつき、その中の一人は「町まで辿りついたが……飢えのために死んでしまつた」のである。

ところでグリゴリイ・テェリャエフは他の同行者とともに遲々としてダズ河の岸を上流へ進んでいつた。

「飢餓に迫られながらタズ河の岸を十日間進んでいつたが、私たちは空腹のためにもはや精根が盡き果ててゐた。」

テェリャエフはレデンキン・シァルのあたりで疲勞と困憊のために前進をつづける力が盡きてしまひ、そこに滯留せざるをえなくなつた。彼の妻と從者、ほかに彼とおなじく前進する氣力の盡きた數

名がいつしよに殘つた。貴族ドミトリイ・チェルカソフはトボリスクの軍人たちといつしよに前進したが、すでに次ぎの野營所でその中の一人コメチカ・ガルキンが落伍し「一歩も進むことができずあとで死んでしまつた」のであるが、彼らはこの野營所に辿りつくまでに飢饉と闘ひながら三日間進みつづけ帶革やカムイサ〔カンジキの革具〕まで喰つた。その次ぎの野營所でまた二人が落伍してこれもあとで死んだ。彼らはそこからスハレフ冬營小屋のある所まで三日がかりで進んだ。「一と足ごとに飢えと疲れが加はるばかりで、私たちは自分の魂がいやしくなり犬の肉まで喰べた」とあとで彼らは述懐してゐる。

彼らはスハレフ冬營小屋で仆れたまま三日間ぢつとしてゐた。この冬營小屋で彼らはテェリャエフの報告によつて知事ウフトムスキイ侯が派遣した知事の息子フョドル侯は書記官テェリャエフを捜査救助するために、數名の軍人を下流の方へ派遣したのである。フョドル侯はレデンキン・シァルの對岸でテェリャエフの一行を發見したが、彼れとともに妻のた。この捜索隊はレデンキン・シァルの一行を發見したが、彼れとともに妻のほか六人の人々が生きのこつてゐただけで他は全部餓死してしまつてゐた。生きのこつてゐた人々の狀態は慘憺たるものであつた。彼らはそこへ到達するまでに死者の屍肉を喰つて飢えをしのいだのである。

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523

0136

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「人間同志が人間の肉を喰べた……おそろしい空腹のために（鹿皮で作つた）敷布團や鞣革やカンジキの底革、それから犬や死んだ人間の肉まで喰つた。」

彼らは橇にのせられて町へ運ばれていつたが、途中、マンガゼイの町へ到着する一日半前に書記官テェリャエフは死んでしまつた。彼れの妻や従者たちは一月十四日にマンガゼイへ着いたのであるが生き殘つてゐたのは軍人や狩猟者をあはせて總員二十人ばかりであつた。

＊以上の引用は「西伯利局文書」一三四號、一四三號。オグロブリン「十七世紀の生活の特徴」「ロシアの古代」誌、一八九二年六號。「古代公文書」一六三〇年五五號。

【海路の危險はロシア人の進出を阻止せず】

海路の危險――「豫測しがたい天候」「缺乏と襲撃、異民族の殺戮と死、飢餓と凌辱」――そのどれもこれも冒險的な航海者を阻むことはできなかつた。狂暴なマンガゼイ海を乘り越えて航海する商人や狩猟者の團體が年々歳々大きくなつていつた。一六二六年（寛永三年）には三十艘のコチァ船がマンガゼイへ到着し、その翌くる年には＊マンガゼイから十二艘出帆＊した。一六三三年（寛永一〇年）十一月には海路で二百三十七人が到着し＊＊一六三八年（寛永一五年）にはマンガゼイから同じ海路で百八十四人が出發＊＊＊した。オブドルスカヤ税關では一六三四年（寛永一一年）にマンガゼイを出發した旅行者二百四十四人が登錄され、また一六四一年（寛永一八年）にはコチァ船に乘つたマンガゼイア行の旅行者二百三十一人がこの税關を通過し、マンガゼイアから歸路についた旅行者が三百十九人通過＊＊＊＊してゐる。そのほかに毎年マンガゼイ守備隊用の穀物を積んだ何艘かの官船がトボリスクから海路によつて派遣され、この官船は歸途マンガゼイアから官用の黒貂を輸送してゐた。軍務知事、書記官、モスクワやトボリスクの御目付役、そのほかマンガゼイアへ往來する役人たちはすべて海路を利用した。

＊「西伯利局文書」二六號。
＊＊同上　一二一號。
＊＊＊同上　七八號。
＊＊＊＊同上　四二號。

【基地としてのマンガゼイア】

狩猟者の大部分にとつてはマンガゼイアはエニセイ河やツングスカ河の流域地方へでる途中の一時的な休泊地にすぎなかつた。彼らは秋にマンガゼイへ到着し、そこでエニセイスキイ連水陸路に向つて出發するため春のくるのを待機したのである。

二、マンガゼイアよりトゥルハンスコエへの交通路

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523
0137
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【溜川を辿つて東進】

マンガゼイアからエニセイ河にいたる交通路はタズ河を上流へ遡行しさらにタズ河の支流ヴォロチアンカ河を航行してクルグロエ・オゼロ（「固い湖水」）にいで、それから先きは溜川や小川を通つて連水陸路に辿りついた。水量のすくない「溜川」づたひに小船を進めることができるのは早春だけで、晩くなると人工的に「帆や土で堰いた帆状の溜川」をつくつてそれを進んで行かねばならなかつた。

「そこに流れてゐる小川を堰き止めて溜川をつくり、溜川に水がいつぱいになるとその溜り水の上を……大きの帆堰まで進んでいつたら。」*

＊ レナ河流域の諸河口における「帆堰の水溜り」をさう記述してゐる。（「歴史的公文書補遺」第三巻六號。ミルレルでは「西伯利國誌」一〇二―一〇三頁）との様にして堰を作つたかについての詳細は確かめがたい。

さういふ狀態でいはゆる「エニセイスキイ連水陸路」まで出ていつた。この連水陸路の端から端までの距離は七百サージェンもしくは一露里（約一粁餘）と計算されてゐた。マンガゼイアの知事バウロフはトボリスク總督ペ・イ・ゴドゥノフに宛てた書翰のなかで述べてゐる。

「連水陸路は乾燥いたしてをります。いろいろの貨物を輸送してゆく湖水と湖水との間は場所によつて一露里からそれ以上の所もあるのでありますが、さういふ場所の中には濕地もあります。」

【トゥルハンスキイ交通路の狀態】

連水陸路を越える時には荷物を手ではこぶかまたは「手押車」にのせて移搬し、船は一艘ごとに「十人がかり」で擔ぴうつした。連水陸路を越える、とそこにはまた濕地や小川や湖水がつづいてゐた。

「小湖や湖畔の泥道は進むのに困難をあつた。」

さうした沼澤や小川についてマンガゼイアの知事ピョトル・ウフトムスキイ侯が一六四六年（正保三年）に書いた手記は一般狀態を次ぎのやうに述べてゐる。

「トゥルハンスコエからマンガゼイアまでの道くてしかも必要な交通路は……水量の少ない小川や滯川を辿つて行くのであるがこのトゥルハンスキイ交通路にはエニセイ側からマンガゼイア側の湖水までの間に一露里の乾燥した連水陸路があり、この連水陸路まで兩方面から各三十露里は滯川を通るので、小船がそこを通るときは積荷を卸して進み荷物はめいめいが負ふて岸を徒歩で進んだ。滯川は水が濁れてゐて水のない時が多いからである。滯川の附近は泥濘の深い濕地で、滯川の交通路もどろどろの泥濘である。」

滯川から「ボドウォロチノエ」その他三つの湖水を經てエニセイ河の支流トゥルハン河へ合流する別のヴォロチァンカ河へでる。トゥルハンスクからマンガゼイアまでを併せた全行程は二、三週間歸路は二週間半から四週間を要するものと計算されてゐた。*

＊「西伯利局文書」三六七號、二六三號、七三一號。ティトフ「十七世紀の西伯利」二一―二三頁、三七頁、五一頁。

調―0523

0138

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【トゥルハン公道の建設】

「小さな狭い川」や「小湖と泥濘」の路を辿らねばならぬ交通條件があつたので「連水陸路を越えてから是非通過せねばならぬ」この交通路は春と初夏にだけ交通可能であつた。秋になると「溝川の水はいやが上にも涸れつくして」まつたく乾燥してしまつたからである。冬は「橇道」があつて馴鹿かまたは犬橇に乗つて交通がおこなはれた。「馬の通れる道はいかなる季節にもなかつた」からである。この地方は無人の荒野で、ツンドラ地帯では「案内者なし」には道に迷ひ易かつた。そのため一六五一年（慶安四年）にマンガゼイアの知事イグナチイ・コルサコフは公道の建設を命じたのである。「マンガゼイアからトゥルハンまで森林を伐り拓き、ツンドラ地帯には小屋を建て、將來一定の旅路を正確に定め……すべての人々が案内者なしにこの道を旅行できる様にすべし。」*

すでにこの公道が開通する以前に連水陸路上には旅行者の便利のために食堂を設備したウォロコヴァヤ・ゾアニア（連水陸路宿場）があつて、そこでクワスや麥芽汁のごとき飲料水も賣つてゐたし、骰子やトランプそのほかあらゆる勝負ごとをする賭博場もできてゐた。**

エニセイ河にいたる右の交通路は十七世紀前半の時代を通じて海の狩獵者たちから深く愛好された旅路であつた。この交通路にはまだエニセイ河にいたる南方交通路のことがまつたく人々の念頭にものぼらなかつた十六世紀の頃からの傳統があつた。その上にこの交通路の强味は「カアメニ越え」変通路と密接に連絡してゐる點にもあつた。春になつてツングスカ河の流域地方から歸路につく狩獵者たちはマンガゼイ海の開航期までに間に合ふやうにマンガゼイアへ到達することができ、そして七月の末か八月にはそこを出帆して結氷期前にオブドルへ着き、さらにそこから小船に乗つて秋の交通路をとつてカアメニを越え、十月までにはソリ・ウイチェグダやウスチュグに達することができたのである。

* 「西伯利局文書」三六七號、七三一號、四三五號、四六二號。ティトフ上掲書二一頁。
** 「西伯利局文書」七八號。

ホ、マンガゼイアよりオビ河下流への交通路探査

【ツンドラ横斷路探査】

それにしても海路の危險ということは夙に浪の荒いオビ灣の航海をさける別の新交通路を探求せしめる原因となつてゐる。傳へられてゐる所によるとマンガゼイアの知事ゲ・イ・ココレフは一六三〇年（寛永七年）にエロヴイ河による交通路の探査を企てた。それから少し時を經て知事ボリス・プーシキンおよび書記官ビァトイ・スビドノフは原住民サモエドたちがツンドラ地帯を經て直線的にタズ

調—0523
0139
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

河からオビ河の下流地方へ出てゐた交通路を利用しようと考へた。マンガゼイアの古老や軍人たちは訊問に答へて次のやうに云つてゐる。

「マンガゼイからルゥジへ行くにはオブドルへ出てそこからブストオーゼロへ〔真直ぐに行く近道があります。〕

一六三一年〔寛永八年〕にマンガゼイアの事務知事たちの間で内亂戰爭が起り、前述の知事ココレフは同僚のバリツィンのためにマンガゼイア砦市を包圍された際にこの道を利用した。

トボリスクおよびモスクワとの連絡を確立するために直線的な道を探査しようとした知事プージキンの企ては、派遣した使者たちがユラク族の手で殺されてしまつたので畫餅に歸した。*

* 「西伯利局文書」一七八號。

【難破遭難事件の續發】

海上で引きつづき幾度かの椿事がおこつたので、一六四〇年〔寛永一七年〕になつてマンガゼイアおよびトゥルハンスコエにいたる交通路變更の問題がとくに八釜しくなつた。一六四二年〔寛永一九年〕から三年間にわたり相踵いで船が海上で沈沒してしまつてマンガゼイアに到着しなかつた。一六四二年八月十八日チョルヌイエ・ゴールイの近くで船隊がことごとく「一艘のこらず難破し」その際にマンガゼイアへ向つて旅行中の知事ウフトムスキイ侯は辛うじて溺死を免がれ、狩獵者や商人の一部はプラ河の河畔で越冬し非常な困難を冒して橇でマンガゼイの町へ辿りつき、別の一隊は穀物や商品を收拾するためプラ河畔から遭難の現場へでかけていつたが、酷寒のために七十人以上が凍死をとげ、拾ひ集めた穀物とともに氷雪の中に建てた小屋で冬營してゐた四人はサモエド族に殺され、そのほか大勢が壞血病にかかつて* 死んだ。それから一六四三年には前述した書記官テェリャエフ一行の遭難事件がおこつた。一六四四年〔正保元年〕には官用穀物を積載したコチァ船二艘のうち一艘が難破し、この輸送隊の指揮者であつた貴族エム・レミョゾフはトボリスクへ引返した。**

* 「西伯利局文書」一三四號。
** 同上 一三九號。

七、海上交通路の閉鎖

【海上交通路の凋落期】

コチァ船がマンガゼイアへ安着せぬといふことは、移入穀物のみによつて生活してゐた「耕地のない」都市のロシア人住民を飢餓におとしいれることになる。守備隊をはじめ知事自身までが居城を棄てエニセイスク方面からの補給をうけるために一時トゥルハンスク砦市へ移轉* してしまつた。か

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

うした事件の頻發が海上交通路の運命に決定的な影響をあたえることになった。この交通路は一六四〇年代から凋落期にいり、もつと安全な道がこれに代つたのである。一六五〇年代（慶安、承應年間）になるとマンガゼイアへはただ官用船だけがごく少數の狩獵者をのせて到着してゐるにすぎない。たとへば一六五四年（承應三年）にマンガゼイアへ來着した狩獵者はすべて六人にすぎず、一六五六——七年、一六五八年には最早や一人もない。*

*「西伯利局文書」一三九號。
**同上　五〇三、五六六、六五一號。

【海上交通路廢止令】

およそ一六六七年（寛文八年）ごろに、相次ぐ難破事件のうちの一つとして海路トボリスクへ官用黒貂を移送する際に椿事がおこつたのち、トボリスク總督ペ・ゴドゥノフは管下の官廳にたいし海路マンガゼイアにいたる交通路を全然廢止する旨の命令をだした。

「樣事については皇帝に報告書を奉り、コチ船を停止し、今後航海旅行をなさしむべからず。貨物はエニセイスク經由をもつて輸發すべし。」*

*同上　三六七號。八〇五號。

二、エニセイ河よりレナ河への交通路發見

【エニセイスキイ柵の建設】

これに次ぐロシア民族の東漸史の段階は、エニセイ河からレナ河への移動であつた。

エニセイ河畔にエニセイスキイの柵が設けられるや否や、すでにその年のうち、すなはち一六一九年（元和五年）中にエニセイスキイの軍人たちは原住民の口から無名の大河のことを聽き知つてそれをトボリスクへ報告してゐる。

「その河は非常に大きく……最近にピヨトルとテェルカスが建設いたしたツングスキイの柵から通水陸路まで舟行二週間、さらにその陸路を越えて大きな河までは二日路であります。」*

*「ロシア歷史文庫」第二卷、一二一號。

【レナ河への交通路發見と原住民の征服】

エニセイ河畔の柵が建設されてその根據が固められるとすぐに直ちにツングスカ河の上流やその各支流、さらにそこから連水陸路を越えてレナ河に合流するクタ河上流への軍事的遠征がはじめられた。それと時をおなじくしてマンガゼイアからは同樣な遠征隊が下部ツングスカ河からヴィリュイ河へ向つて

調—0523
0141
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

派遣された。このやうにしてロシア人は一六二〇年代（元和、寛永年間）にエニセイ河からレナ河へでる二つの交通路を發見したばかりでなく、その流域地方に住んでゐた異民族をも征服した。そして一六三〇年（寛永七年）以降においてはすでに、この二つの交通路の計畫的調査に着手したのである。

【レナ河にたいするモスクワの關心】

エニセイスクの知事セミョン・シャホフスコイ侯（有名な文學者で且つ神學家）は一六三〇年（寛永七年）にエニセイスク以東の「地誌」＊を書いてモスクワへ送り、またマンガゼイアの知事ア・フェ・バリツィン（やはり教養高き人物とされてゐる）は一六三二年（寛永九年）にエニセイ河からレナ河にいたる交通路圖を附した厖大な報告書を書き送つた。さらに一六三四・五年（寛永一一、一二年）にはエニセイスクの知事アンドレイ・プレミアンニコフがやはり同樣の問題についてモスクワへ報告を書いてゐる。モスクワではかうした總ての報告によつて興味を喚起され、カザンスキイ宮殿へ西伯利から歸還した軍人たちを招いて聞き訊し、遂に一六三八年（寛永一五年）八月に「新發見の河」レナ河へ向つて大膳職ピョトル・ゴロヴィンを隊長とする探檢隊を派遣することとなり、その際いろいろな任務とともに交通路地誌の編纂が命ぜられた。＊＊

この命令にもとづいて一六四〇年——一六四一年（寛永一七年——一八年）に「地圖」《kapra》とそれに添附する「エニセイスキイ柵よりレナ運水陸路までの河および瀬の地圖總覽記事」が編纂された。＊＊＊

＊これについては「西伯利局文書」三〇號、三一號。

＊＊「ロシア歷史文庫」一二一頁。バリツィンについての詳細は私の論文（論文集「世紀」（ヴェカ）一九二四年）參照。

＊＊＊「歷史的公文書補遺」八九號。

【南北兩交通路、ヤクーツク公道】

かくして一六三〇年から一六四一年（寛永七年——一七年）までの十箇年間にエニセイ河からレナ河にいたる交通路の根本的調査が遂げられたのである。

レナ河の調査とともに二つの交通路——すなはち一つはエニセイスクとヤクーツクとを連絡する南路——もう一つはマンガゼイもしくはトゥルハンスクからヤクーツクにいたる北路の存在することが明白になつた。右の二つの交通路のうちでは云ふまでもなく前者がもつとも重要な意義をもち、この交通路はその後ヤクーツクにいたる公道となり、そしてヤクーツクはレナ河流域の行政上の中心となつたのである。

調—0523

0142

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

イ、南路――レナ連水陸路經由の交通路

【ツングスカ河】

エニセイスキイ交通路はエニセイスキイの柵からエニセイ河を上部ツングスカ河の河口まで遡航し、更にそれから同河を上流へイリマ河の河口に達するものであつた。上部ツングスカ河の航行は「非常な困難」とともに曳綱によつて行はれた。

「おそろしい急流と度はづれな瀬や難流のために……航行は曳綱をもつてたいへんな苦勞をして行はれた。ツングスカ河は流れが急激でいくつもの大きな岩石の瀬があつた。」

【河航の難路】

特別の難所とされてゐる急流の瀬が四箇所あつて、第一は「ツングス第一の瀬」ともストロレチヌイ（矢の瀬）とも呼ばれるものであつた。

「河幅ぜんたいに大きな岩礁が重疊としてゐて河流がおそろしく急流で岩にぶつかつた水が大波を立ててゐる。」

【ムラ河の瀬瀨】

ムラ河の河口にあるムリンスキイの瀬は「二露里以上もある」といはれ、カシンの瀬は「急流に河いつぱいの大岩石が横はつてをり、水の淺い箇所があつて平底船も通れない」所があつた。さらにアブリンスキイの瀬は「いちばん骨のおれる場所」であつた。

「ツングスカ河はいたるところ大岩石が横はつてゐてその岩石に水流がぶつかつていやが上にも激流となつた。」

【瀨難舟航の狀態】

大きな瀬のある所では積荷を陸上へおろして荷はすべて「めいめいの肩に負ふて」進まねばならなかつた。「荷物は何一つとして船の中には殘さずに」最良の場合でも「小船に積みかへて運んだ。」つまり荷を小船に積みかへた上で親船は「岩石のなるべく少ない狹い瀨の間を」選んで「七十人からそれ以上の人手をもつて曳綱で引つぱり上げて」進んだのである。かうした岩石の「門」を通りぬけながら「船にのつてゐる總員が曳綱を手にとり大きな綱で力を合せて平底船を引つぱり、そして船の上にはただ岩門の間のどこが船の通りぬけられる箇所であるかを知つてゐる五人ばかり」の人が殘るだけであつた。しかし旱天で水涸れの甚だしい年の夏にはカシンの瀨のごときは船を「どうしても引つぱり上げることが出來なかつた」ので「天氣都合を待つために八週間もそこに碇泊し、もし好都合な天候がやつて來ない場合にはそこで冬を越した」＊のである。

＊「司法省保存文書」一五號。「外務省文書」支那宮廷關係書類八號。「歷史的公保存文書」第二卷七一、八五、八九號。「ロシア歷史文庫」第二卷二一三號。「スパーファリ旅行記」八七―一〇一頁。

【イリム河の舟航】

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523
0143
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

上部ツングスカ河からその支流のイリム河へはいつた。ここでもまた夥だしい激流が航行を困難ならしめた。イリム河の大瀬や「激流」のある場所ではやはり同じやうに「親船は曳綱で引つぱり上げ」荷物は「船からおろして各自にはこんで」いつた。最初はイリム河をイディルマ河の河口まで遡航してそこから先きは連水陸路を進んだのであるが、その後別の交通路が設けられた。それはイディルマ河のやや上流の方でイリム河に合流するトゥラ河の河口まで舟行してそこから連水陸路で進んだのである。*

＊「西伯利局文書」三一號、二四五號、五三號、「ロシア歴史文庫」第二卷二一三號、「歴史的公文書補遺」第二卷八九號。レミゾフ「地圖」イリムスキイ郡參照。

【レンスキイ連水陸路の狀態】

イディルマ河の河口またはトゥラ河の河口からレナ河系に屬するムカ河の上流へと連絡するいはゆる「レンスキイ連水陸路」がはじまつた。この連水陸路はあまり長くはなかつたが「道が山嶽を越えて行く」ので難路であつた。途中コロデェッ（井戸）までは荷物を馬背に括りつけて搬んだが、そこから先きはもう「荷馬車」で運搬することができた。この山越えは難路ではあつたが人々は荷を負ふて徒歩一日でその道を越えたのである。

冬期にはこの水量のすくない小さな河流を長途にわたつて曳航するのを避けるため、陸路橇道を利用してまつすぐにムカ河の河口へでた。ゴロヴィンの「總覽記事」には次ぎのやうに述べてある。

「冬の橇道はイリム河から山嶽を越えてムカ河の河口へつづいてゐる。」

この冬の道は二日路であつた。ムカ河がクタ河の支流クバ河へ合流する所で「春の增水」を待つて船を仕立て「氷の解けるあとを追ひながら」その先きのレナ河へと航行していつた。*

＊「西伯利局文書」五三號、「歴史的公文書補遺」第二卷八九號、第三卷六號。

【イリムスキイ砦市の建設】

エニセイスクの軍人たちはレナ連水陸路の重要なことを考へて夙に一六三〇年（寛永七年）にその途上に小柵を設けた。この小柵はイリム河からレナ河にいたる交通路上のロシアの支配權を確保せしめた、後のイリムスキイ砦市である。そしてこの砦市は更にそれから先き東方へ產業および商業上の探檢を進める中心地となつて、大きな產業的宿驛を形成するにいたつた。一六五九年（萬治二年）に商人および狩獵者たちが提出した嘆願書の一つは次ぎのやうに述べてゐる。

「レナ連水陸路へは商人や狩獵者が多數集まつてきて暮してをります。私どもはレナ連水陸路、イリムスキイの柵、その近鄕、ウスチ・クタ河地方、大河レナ河の沿岸などで商業や狩獵をいとなんでをります。……私ども陛下の下僕は孤兒のやうに無緣の境遇にあります。黒貂獵のために出張員や雇人をレナ連水陸路からレナ河の下流や支流、オレクマ河の沿岸へ派遣いたします。……またレナ東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523
0144
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

連水陸路で穀物を買入れまして手代どもをレナ河、その支流オレクマ河を航行して下流の方へ出張いたさせてをります。」*

*「西伯利局文書」三一號、「歴史的公文書」第二巻六七號、八九號、第三巻六號、第八巻一〇〇號。テイトフ「十七世紀の西伯利」三三頁、五二頁。

【連水陸路における宿駅の發達】

ルゥシからレナ河畔まで一開航期中には到達することが出來なかつたので、晩くなつて到着した狩獵者たちはレナ連水陸路で冬を越した。「レナ河流域の邊阪地方は無人の荒野であつたから凍死」するのを虞れたためである。また或る者はその反對に

「レナ連水陸路で商品を賣り盡してしまひ、或は連水陸路に近いレナ河やその支流の沿岸で狩獵をして……ヤクーツクの樹へは行かずに……ルゥシや西伯利の町々へ歸つて行つた。」

すでに一六三九年（寛永一六年）にレナ連水陸路には「商用旅行者のため」に旅館が設けられ、そして旅館に附属して「食料用の穀物を貯藏したりロシア雜貨取引のため」の倉庫も設備されてゐた。そればかりでなく、ナデェイ・スウェシニコフとかアファナシイ・フェドトフのごとき豪商らは以前からそこに自家專用の倉庫や宿舍*をもつてゐたやうである。この宿驛での宗教や社交の中心は、ロシア商人の寄進によつて建立された祈禱所で、そこはまた庶民集會所としても利用されてゐた。**

*「西伯利局文書」四七〇號、ヤクーツク政廳關係書類第三册一六號。第一册二九號。「歴史的公文書補遺」第二巻六七號、九二號。

**同上ヤクーツク關係書類第一册八號。ティトフ「十七世紀の西伯利」三一頁、五二頁。「スパーファリ旅行記」一三二頁。

【レナ河畔の關所】

レナ連水陸路はこのやうに重要な意義をもつてゐたので、ここにはすでにヤクーツク市が建設される前からエニセイスカヤ稅關所の管轄のもとに徵稅所がおかれてゐた。レナ河畔に獨立した稅關が設けられるとともにレナの稅關長が連水陸路へ收稅吏を派遣することになつた。*

*「歴史的公文書補遺」第二巻六七號。

【ムカ河の筏航】

前述のごとくレナ連水陸路を越えるとクタ河の支流クバ河へ合流してゐるムカ河へでた。ムカ河では筏を組んでそれに乘つて航行した。

「岩石が多くて水が淺く荷物は二十プウドづつ筏にのせて非常に骨を折つて擴んだが、さうして擴んでさへもときどき淵へ沈ませてしまつた。」

クバ河もクタ河もおなじやうに水量がすくなかつた。一六四五年（正保二年）に知事ワシリイ・プーシュキンは書いてゐる。

「クタ河がレナ河に合する河口までは筏でムカ河とクタ河を航行した。岩石や淺瀨がたくさんあつて船では航行できなかつたからである。これらの河を船で通れるのは春の增水期だけであつた。……狩獵者たちはこの河上でようやく二十プウドばかりを載せる小さな筏を

調—0523

0145

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

作り、その筏はいたるところの岩石を右に左に縫ひぬけながら河を帆の形に張いて水を溜めては前進していった。」

【クタ河口の定期市】

クタ河からレナ河へ船を進めていった。クタ河の河口には時々かなり多数の商人や狩猟者たちが集まつてきて活気のある定期市（ヤルマルカ）のやうなものを開くこともあつた。

＊「西伯利局文書」二四五號、「歴史的公文書補遺」第二巻六七號、八九號。第三巻六號、一〇〇號。第四巻二四號。グメーリン「紀行」第二巻二一〇頁。

【旅行の所要時間】

エニセイスクからクタ河の河口までの全行程はペ・ゴロヴィンの「道路要覧」《росписи》によるとほぼ九週間と計算されてゐる。だが實際ではそれよりもはるかに多くの時間を要した。「瀬が多いので船の進むのがおそく」また瀬のところでは長い間、時には二週間も滯船しなければならなかつた。スパーファリの逃べてゐるところによると、カシンの瀬では或る時は八週間も滯船したのである。要するに旅行は「道路要覧」よりもはるかに長時間かかつたのである。たとへば一六四五年〔正保二年〕にワシリイ・プーシュキンは「季節が晩くなつてから水路で」エニセイスクからレナ連水陸路までの旅行に十二週間五日といふ日子を費してゐる。＊

＊「歴史的公文書補遺」第二巻八九號、八五號。「スパーファリ旅行記」九六頁、八七頁。

ロ、北路——ヴィリュイスキイ交通路

【ティテ河、チュルカ河】

エニセイ河からレナ河にいたる北路は下部ツングスカ河の支流ティテ河を通つておこなはれてゐた。ティテ河の上流から連水陸路を二日で越え（これは春の場合で夏には五日かかつた）ヴィリュイ河の支流チョナ河に合流するチュルカ河へでた。チュルカ河を下航するには水量が少ないため非常な困難をともなつた。

「河は淺くて舟行に適せずただ春の雪解け期にだけ水滿が多かつた。」

【チョナ河、ヴィリュイ河】

チュルカ河からチョナ河にいで、チョナ河からヴィリュイ河へ、ヴィリュイ河からレナ河へとでたのである。この交通路の全行程についての正確な報道はない。ア・バリツィンの報告にある記述はむろん信憑するに足る正しいものではない。＊

＊「西伯利局文書」五二號、「ロシア歴史文庫」第二巻二一三號。

【ヤクーツクの發展とマンガゼイアの調落】

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523

0146

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

マンガゼイアがまだ黒貂猟の中心地となつてゐた間はヴィリュイ河による交通路は大きな意義をもつてゐた。新らしい「黒貂の猟場」を探しもとめる狩猟産業者や、異民族から毛皮税を徴収するために旅行したマンガゼイアの毛皮税徴収人たちはこの河を通つてレナ河へ航行してゐた。また一六四〇年（寛永一七年）までではトボリスクからマンガゼイアを經てレナ河畔へ派遣された軍事遠征隊もこの交通路を利用した。ヤクーツク砦市が建設されてレナ河の流域やその支流地方一帯の毛皮税徴収區域がヤクーツク政廳の管轄に属するとともに、レナ地方の異民族の征服と毛皮税の徴収といふ事業にもけるヴィリュイスキイ交通路の役割は自然と凋落していつた。それと同時にヤクーツクが新しい産業中心地となり、そしてまたヤクーツクは必然にマンガゼイアと競爭せざるを得なくなつた。だが一六四〇年代および五〇年代（寛永―明暦年間）において狩猟者たちは依然マンガゼイアから「新らしい狩猟地、ヴィリュイ河やレナ河へ」でかけてゐたのであるが「彼らの狩猟産業は成功を收めなかつた。」*

*「西伯利局文書」二一〇號、九四號、三九號、その他。

ハ、チチュイスキイ（ツングスキイ）交通路

【新交通路、ネバ河、クレンガ河水源、チチュイ河、チチュイスキイ小楯】

しかしヴィリュイスキイ交通路はやがて間もなくマンガゼイアとレナ河との連絡のためにさへも別のチチュイスキイもしくはツングスキイ連水陸路と稱される交通路によつて取つて代られることとなつた。ネバ河の河口をすぎて、河航六日目に船を棄て、陸路によつて「クレンガ河の水源地を越し…馬上二日路」（別の資料によるともつと短時間）でレナ河へでた。すなはち「クレンガ河とオンガ河の中心」チチュイ河の河口に近いところでレナ河へでたのである。*

連水陸路の途上にチチュイスキイ小楯があつた。一六五〇年代にはそこに關所があつて「商人や狩猟者がチチュイスキイ連水陸路を避けてレンスキイ・イリムスキイ連水陸路から抜け道をする」のを監視してゐた。この事實はまたエニセイスクやヤクーツクを避けて旅行しようとする狩猟者たちが努めてこの交通路を利用してゐたことを示すものである。

【旅行の所要時間】

エニセイ河畔のトゥルハンスコエ冬營所からチチュイスキイ連水陸路までの全行程は約十一週間、そして「ツングスカ河、チチュイスキイ連水陸路からレナ河まで」は或る報告では夏季に半日路であるが、別の報告によると三日路であつた。**

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0147

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

*「西伯利局文書」一一五號、一〇五六號。「歷史的公文書補遺」第二卷八五、九〇、九二號。グメーリン「紀行」第二卷二八五頁。

**ヤクーツク政廳關係書類第三册一五號。「西伯利局文書」四七〇號參照。「歷史的公文書補遺」第七卷八號、第九卷五四號。

***「西伯利局文書」一〇五六號、一五八號。ヤクーツク政廳關係書類第三册一四頁A。「歷史的公文書補遺」第二卷八五號。「司法省保存文書」第二卷二〇三號。グメーリン第二卷二八五頁。

三、レナ河より北東海岸への交通路發見

レナ河および廣大なレナ河系の諸支流からさらに東部西伯利のあらゆる地方へ向つていろいろな道が發見された。ロシア人たちはそれらの道を辿つて北氷洋にそそぐ「遠い海の彼方の河々」――すなはちインデギルカ河、ヤナ河、コルイマ河、アナドゥイル河その他の流域へ、一部は陸路により、一部はレナ河口から海に出てさらにそれから先きは海角や岬の鼻を海岸づたひに迂廻しながら進出していつた。東方の海洋にそそぐ諸河――アムール河やオホタ河への交通路もここを根據として發見したのである。

イ、ヤナ河、アナドゥイル河への交通路

【海の彼方の諸河と北極海への交通路】

通常レナ河から「海の彼方の諸河」や「極北の海洋」にいたる交通路は、レナ河の流域と東海岸へそそぐ諸河やその河口を遮斷してゐるウェルホヤンスキイ山脈を「馬背」で越えて連絡した。ヤクーツクを出て間もなくアルダン河は「渡し場」のところで山嶽にぶつかり、それから山越えをして五週間でヤナ河の上流に達した。

【トルストカ河、タイ・ハヤンタス山脈、インデギルカ河、アラゼイ河、コルイマ河】

ヤナ河からその支流トルストカ河の岸に沿ふてさらに馬背で東進し、タイ・ハヤンタス山脈を越え、三四週間路でソバチャヤ河またはインデギルカ河にいで、インデギルカ河からアラゼイ河までは橇でやはり三四週間で到達した。アラゼイ河からアラゼイ河から十日路でコルイマ河の上流に達した。このコルイマ河はベーリング海峽の沿岸およびオホック海（昔はペンジン海とよばれてゐた）の北部にいたる道路發見の出發點となつたのである。

【アナドゥイル河、ホドゥイン族の報告、アニュイ河、デジュネフの地圖、ベーリング海峽、ペンジェンスキイ山脈、ペンジナ河、チョンドンスキイ山脈、ギジカ河、スタドゥヒンの發見】

コルイマ河とアナドゥイル河を連絡する連水陸路のことは、そこを馴鹿にのつて交通してゐたアナ

調―0523
0148
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ドゥイルのホドゥイン族たちには古來から知られてゐた。コルイマ河畔にゐたロシア人たちは、ホドゥイン族の人質や虜囚の口から「山脈を向ふへ越えた彼方の新らしい河アナドゥイルは、アニュイ河（コルイマ河の支流）の上流と接近してゐる」といふことを聽き知つたのである。アニュイ河からアナドゥイル河にいたる交通路の地圖は十七世紀中葉に有名なデジュネフの手で作製されてをり、ロシア人はこの道を利用してアニュイ河を上流へ山脈まで遡航し、橇にのつて峠を越え一樹一木の姿もない憂鬱なツンドラ地帶を流れるアナドゥイル河を下航してベーリング海峽へでたのである。コルイマ河のもう一つの別の支流オエモコナ河を遡ると八週間でベンジェンスキイ山脈に到達し、それから山脈を越えてベンジナ河にいで、河岸に沿ふてチョンドンスキイ山脈にいたり峠を越えてチョンドン河もしくはギジガ河にいたつた。ベンジナ河への交通路は一六五一年（慶安四年―承應元年）にミハイル・スタドゥヒンによつて發見され、彼の手で地圖が作製されたのである。

「歷史的公文書」第二卷五八號第四卷五、六、七號。第六卷一三六號。テイトフ「十七世紀の西伯利」三二―三三頁。五二―五三頁。「スパーファリ旅行記」一三二―一三三頁。オグロブリン「エス・デジュネフ」（「文部省雜誌」一八九〇年一二號）同人「十七世紀の東部西伯利北極の航海」《Плавание мореходцев по Ледовитому океану в XVII веке》（同上誌一九〇二年五號）

【ラムウト族、ユカギル族、ホドゥイン族】

慓悍な異民族――ラムウト族、ユカギル族、ホドゥイン族などの住んでゐる、無人の境にひとしい

處女地を通つて「海の彼方の河々」にいたる陸路は、非常な困難と巨額の費用の支出とにより、漸やく維持されてゐた。騎馬旅行は一人のために「二頭の馬」を充てて行はねばならぬので非常に高價な旅行についた。乘馬が途中で斃れることも珍らしくなく、「また副馬（スガトエ）は飢餓のために自分たちが喰べてしまつた」と或る軍人は逃べてゐる。そして途中の食料缺乏がいかに甚だしいものであるかについて次ぎのやうに附け加へてゐる。

「松の樹の皮や雜草、それから草木の根だの有りとあらゆる忌避すべき物まで喰べた。」

【原住民襲撃の危險】

最大の危險はロシア人にたいして敵意をいだく原住民でいつも「裏切者の……襲撃と殺戮におびへながら……たいへん苦勞して」* 旅行をしたのである。

＊ヤクーツク政廳關係書類第一册一四號（ヤナ河およびソーチャヤ河への派遣）。オグロブリン前出書「歷史的公文書補遺」六五號。

ロ、オレネク河、コルイマ河への海路發見

【ツングス族の神聖なる海】

陸路とともに海路も利用されてゐた。レナ河をコチア船にのつて下航し「聖なる海（スヴァトエ・モーレ）」または「喇嘛（ラマ）

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0149

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

海」（ロシア人たちはツングス族の言葉をそのままレナ河口の海洋のことをさう呼んでゐた）へでたのである。*

* 「十八世紀における西伯利歴史記念物」第二巻二三號では北氷洋をスヴャトエ・モーレエ（「神聖なる海」）と呼び、「歴史的公文書」補遺第二巻八六號ではラマ「喇嘛」海と呼んでゐる。バイカル湖もオホック海もおなじく「ラマ」といふ名をもつてゐる。

【オレネク河】

海洋へ乗りだすために、時としては長いあひだ「順風」を待機した。レナ河の河口から二つの方向をとることができた。順風の日には、河口から左へオレネク河*へ向つて帆走した。右手の方向へは帆走すること五晝夜（別の報告によると三晝夜）でオモロエヲ（ボルホイスカヤ）灣を横ぎつてヤナ河の河口にいたり、そこから更に海岸線に沿ふて東方へ向ふこともできた。手工業的な方法で造られたコチャ船に乗つて海洋を旅行することは危險の多い仕事であつた。

* 「歴史的公文書補遺」第二巻八六號。オグロブリン「東部西伯利北極の航海」。しかし陸路オレネク河へ行かうとした者はレナ河をモロダ河の河口まで下りそこから橇で十日路の山脈を越えてオレネク河畔へでた。「歴史的公文書補遺」第六巻一三六號第二巻八六號參照。）

【氷海旅行の狀態】

船を海岸の方へ吹きつける「北海からの寒風」はおそろしく船足を阻んだが、それよりもつと大きな障害は北洋の海面に張りつめてゐる「氷の板」であつた。航海者の言葉をかりて云へば「海上には氷塊が歩きまはつてゐて船を叩き壊す」のである。コチャ船は「たいへんな苦勞をして氷と氷の間を走りぬけ」航海者は言語に絶した困難と闘ひながら「その氷から逃げるために船を停めたり、あとへ引返し」たりしなければならなかつた。「海上で大きな氷塊」がコチャ船のゆく手を阻んだときには「氷の隙間」をもがき抜けながら「陸岸に近いところの氷の割れ目をさがして進んだ」のである。もし氷が薄い場合には「帆走」してそれを押し割つて進んだが、さういよ時には船の底板が滅茶々々に擦りやぶられた。

悪くすると船體が氷に閉ぢこめられて海洋の眞中で凍寒に襲はれることもしばしばあつた。さういふ場合には「厚板のやうに張りつめた氷の上を渡つて」徒歩で海岸までたどりつく外はなかつた。*

* 「歴史的公文書補遺」第二巻八六號。第三卷、第五卷各所。ミルレル「ロシア方面より北氷洋および東海による極北旅行」（「月刊文集」一七五八年。クラシェニンニコフ「カムチャトカ地誌」《Описание земли Камчатки》第二卷、一七五五年、二六七頁。オグロブリン「十七世紀の東部西伯利北極の航海」。

【フルダコフの遭難記】

一六五一年（慶安四年）に五艘のコチャ船隊の指揮者として北氷洋を航海したヤクーツクの軍人チ

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

モフェイ・ブルダコフの手記は氷に閉ぢこめられた航海者の運命を生き生きと描いてゐる。

「フロマ河の河口のあたりで……日が暮れて闇がせまつてきた。そして陸け方は海が結氷しはじめた。私たちは陸岸に近い海上で五艘の船を一つにあつめて停船してゐた。そこに三日間立ちどまつてゐたが氷がだんだん厚くなつてきたら櫂にのつて陸へ渡らうと考へてゐた。それはセミョン祭の日〔露暦九月一日—新暦九月十四日〕で神さまのおぼしめしによつて風が陸の方から海の方へと吹きつづけ、海上では氷といつしよに私たちの船を沖へ運び去り、五晝夜のあひだ氷に閉ざされて海上を吹き流された。風が凪くと海は一夜のうちに堅く堅く結氷してしまつた。それから三日目には氷の上を人が歩けるやうになつたので私たちは決死の覚悟で二三人づつに分れてあるき廻り陸地の方向を偵察することに努めた。」*

* 「歴史的公文書補遺」第二巻七九號。

その時同じやうに氷に閉ざされた軍人アンドレイ・ゴレルのコチァ船でもこれと同じやうな行動をとつた。陸地を「探しだす」ためにコチァ船からのおのから三人づつの人を偵察にだしたのである。ところが數日たつと俄かに

「海の沖の方から氷が押しよせてきて氷を碎き、私たちは沖の方へ五晝夜のあひだ吹き流された。やがて風が靜まると寒さが急に加はつてきて凍死の危險に襲はれた。」

【飢寒と壞血病】

航海者たちは薪も暖衣もないのでそのために凍死したり、また海水のほかには水がなくなつて壞血病のために死が迫つてくるのを船の上で空しく待つことを欲せず、氷が固まるのを待つてふたたび陸

岸への道を探さうと決心した。

「海上では風がなくても波浪にしたがつて氷が流動し、そのために氷が幾重にもかさなり合つた。」

全乘組員の士氣は沮喪してしまつた。

「私たちは絶望の極に立ち一所懸命になつたが陸地の方向は發見されなかつた。陸地から外れて進めばもう生きて還れるかどうか判らない……今までこんな神の責苦に逢つたことはないし、この海路で誰かこのやうに遠くの方まで流された漂難事件は未聞のことであつた。」

【氷上の漂流】

ブルダコフは手記をつづけて逃べてゐる。

「そこで私は軍人や商人や猟獵者たちといつしよに船を棄てて陸地と思はれる方向へむかつたのであるが、そのとき海上の氷が流動してコチァ船を碎き、氷が倒れて船からおろした荷物をあちこちへ運び去つた。私たちは食料品や衣類や貴重品をいくつかの橇につばい積みこみそれを互に綱で結びつけて引つぱり、氷から氷へと移りながら進んだ。コチァ船に備へつけたボートは棄ててきた。海上で壞血病に罹つてゐて歩くのもやつとのことであつたが、神の御心に運命をゆだねて船をはなれて進んだのである。氷上を九日間さまよつた揚句に陸岸へつき、そこで橇とスキイをととのへた。」

そして最後に「飢寒にさいなまれながら裸足のまま」ようやくウャンデンスコェ冬營所へたどりついたのである。

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523

0151

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

。

【十七世紀中葉における氷海旅行者の統計】

北氷洋の航海者たちは航海上の危険におびやかされたばかりでなく淡水や食料品の缺乏に惱み、しばしば猛烈な壞血病に罹つたが、彼らの間ではそれは「海靈の祟りと遠い苦勞な海の旅のお蔭だ」と考へられてゐた。

商人や狩獵者たちはかうした數々の障害と鬪ひながらも「交易のため」「漁獵のため」に海角や岬を迂廻し、極北の河口地方の海岸に寄航しながら遠い海路の旅行をつづけてゐた。たとへば一六三六年（寬永一三年）には四十人の商人と狩獵者、それから十人の軍人がレナ河を下航して北氷洋への航海に出發した。一六五一年（慶安四年）にはレナ河の河口に八艘のコチァ船が集まり、彼らはそれから先きへの航海の途上ヤナ河の河口で四艘のコチァ船に逢ひ、さらにフロマ河の先きの海上で氷に閉ぢこめられた一艘のコチァ船に遭遇した、と報告してゐる。

一六六七年（寬文八年）に五人の軍人と三十五人の狩獵者をのせた官用船が海路インヂギルカ河へ到着し、そのあとからまた更に二艘の商人のコチァ船がやつてきた。このやうに十七世紀において「氷海」をわたる交通が相當に活潑であつたことは、歷史がわれわれに物語つてゐる。*

*「歷史的公文書補遺」第二卷七九號、第五卷六五號。テイトフ「十七世紀の西伯利」二三頁、五三頁。

ハ、チュコト半島附近の海上交通路踏査

【ロシアにおける商業發展と東方海岸進出の關係】

モスクワ國家が混亂時代（一六〇）を清算し、十七世紀の四十年代（寬永年間）にはすでに明瞭にその徵候を現はしてゐた全般的な商業の發展が始まるとともに、主として海洋產業の運營を目的とする東方への海上交通路が熱烈に探求されるやうになつた。この熱烈な探求は、現在われわれがチュコト岬と呼んでゐるアジアの北東端を廻航しようとする不撓の企てとなつてあらはれた。

「遠く海中に向つて壁のやうに蜿蜒と突きでてをり……その突端がどこまで續いてゐるのか誰一人まだ知る者とてはなく、氷が邪魔してゐるのでその突端を廻航することができない。」

「それは通航することのできない《山嶽》である。」

夏季のうちにコルイマ河からこの「カァメニ」までコチァ船で帆走した。

「氷に閉ざされて一と夏で通過できない場合には二年も三年もそれ以上も旅行をつづけた。」

【エラストフの探檢計畫案】

一六四五年（正保二年）にイワン・エラストフを隊長とするカザック隊はヤクーツクで次ぎのやうな計畫を提出してゐる。

東部西伯利への交通路發見と征服

調一0523

0152

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「レナ河の河口から……海上を右に向つて進み東へ針路をとつてヤナ河、ソバチャヤ河、アラゼイカ河、コルイマ河の河口をよぎつて新らしいボグイチァ河へ……」

つまりオリュトルスキイ岬の西方でベーリング海へ流れ込んでゐるボカチア河に達しようとする計畫であつた。*

*ボグイチァ河とボカチャ河とが同じ河であることについてはベルグ「マーリングおよびクック以前のベーリング海峽とその沿岸に關する報道」（「水路學紀要」第二卷第二册一九二〇年）ミルレルはボグイチァ河をアナドゥイル河の別名と考へた。（月刊文集一七五八年一月）彼れの誤りをその後オゴロドニコフも繰返してゐる。（「西伯利征服の歴史――ユカギル領土の征服」チタ、一九二二年、七七頁）

【チュクチ族との最初の交易、デジュネフの氷海漂流】

この計畫は實現されるに至らなかつたやうであるが、一六四六年（正保三年）にザメネツの市民イサイ・イグナチェフはチァウンスカヤ灣を踏査してその沿岸地方に住むチュクヂ族との間に貿易關係をむすび、多量の海象の牙をたづさへて歸つてきた。それに續く幾年かの間に、本質的には失敗に終つてゐるのであるが、コルイマ河の河口を出發點として「通航不可能な〝カァメニの鼻〟を迂廻することを目的とした幾つかの探檢がおこなはれてゐる。一六四七年（正保四年）にホルモゴルの市民フェドト・アレクセエフを隊長とする商人合同團によつて準備された探檢隊は四艘のコチア船に分乘して出發したが、目的を達せずにコルイマ河へ引返した。一六四八年（慶安元年）にこの企てを一層大規模にして六艘のコチァ船にのつて再擧をはかつたが、そのうちの一艘はデジネフ岬の近くで難破し、他の五艘は遠く海洋を漂流し、フェドト・アレクセエフは行衞不明となり、ただ有名なセミョン・デジュネフが乘つてゐた船だけが暴風に吹き流されて遠く「アナドゥイル河の河口を過ぎて」南方へ漂着した。

【スタドゥヒン探檢隊】

コルイマ河から「順風に乘つて」三晝夜でボグイチァ河の河口に達することができるといふ計畫を立てた軍人ミハイル・スタドゥヒンの探檢もおなじく失敗に終つた。

結局「カァメンヌイ・ノース」（山嶽の鼻――すなはちチュコト岬）を廻航することは實際的に不可能だと考へられ「山脈が海に向つて長く突き出てゐるのでそこには水路がない」のだから「廻航は不可能だ」といふことに歸してゐたのである。

【北東海岸への交通路探求の成果】

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523
0153
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

だが北東にたいする交通路の探求はクリジァニッチ〔八六〕の言葉をかりて云へば、次ぎのことを解決する上で若干の成果をもたらしてゐる。

「西伯利の岸と、それより更に南方のダウリヤおよびニカニア、最後にまた支那帝國の岸を東側から洗つてゐる東海と北氷とはつながつてゐるか？　もしくはこれらの海――すなはち北氷洋と東海もしくは支那海とは、西伯利から東方に向つて連續してゐるなんらかの大陸によつて隔てられてゐるか？　といふ疑問」

に解決を與へたのである。＊

＊「歴史的公文書」第四巻七號。オグロブリン「セミヨン・デジネフ」。ミルレル「航海記」（「月刊文集」一七五八年一月）。テイトフ「十七世紀の西伯利」一一〇頁ノ一五八――一五九頁。ベルグ上揚書。

四、アムール河畔および太平洋への交通路發見と征服

イ、アムール河の發見とその諸交通路

【アムール發見の歴史的意義】

東方海洋への出口の發見は、十七世紀四十年代（寛永、正保年間）における商業的企業熱の物與に負ふところ甚大であるとせねばならぬ。

十七世紀におけるロシア人のアムール河畔への進出は、ひとり西伯利征服の歴史といふ點からだけでなく、世界地理的發見史においても劃期的な出來ごとである。

【アムウル河に關する初期の報道】

アムール河は、スパーファリが西伯利の地における第四の「素晴らしい美事な大河」で「第一はオビ河、第二はエニセイ河、第三はレナ河、そして最後の第四はアムール河である！」＊と誇示したところの大河である。アムール河に關する報道は十七世紀の四十年代初から次第にモスクワへ達しはじめてゐる。ロシア人がレナ河の流域に根據をかためると間もなく個々の軍人たちはヤクーツクを出發して新らしい地方の探査をはじめ、そしてアムール河へ通ずる交通路へでたのである。軍人マクシム・ペルフィリョフらの發見に興味をいだいたヤクーツクの初代軍務知事である內膳職ピョトル・ゴロヴィンは一六四三年（寛永二〇年）に秘書官長ヴェ・デ・ボヤルコフに、レナ河からシルカ河へでる交通路の探査＊＊を命じた。それから間もなくロシア人冒險者たちはひとり交通路を發見したばかりでなく、アムール河畔に住む原住民族の小砦市（ゴロドク）の一つに早くも根城を固めるにいたつてゐる。

＊「スパーファリ旅行記」一三二頁。

＊＊「歴史的公文書補遺」第二巻九六號。「歴史と古代協會」誌一八六一年一號。

調―0523

0154

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【ハバロフのアムール侵寇】

西伯利にいたる交通路の最初の征服にストロガノフ一家がしたとおなじやうに、ここでも個人的な企業者の手で仕事が片づけられた。ハバロフは最初ヤクーツクの軍務知事デ・ア・フランツベコフから個人的に資金を借りいれ、それを資本として私財で準備をととのへて遠征にでかけたのである。彼の遠征計畫は企業者自身の「金儲け仕事」と考へられて、國家事業として取扱はれるほどの興味をひくには至らなかつたのである。ところが悠遠の樂土であつたダウルの國の異民族を戰慄せしめたハバロフの匪賊的な侵寇は、この美くしい樂土にいたる道をロシア人の前に開披することとなつた。ハバロフの遠征によつて捲きおこされたさまざまな紛糾のあと始末をする必要にせまられた知事イ・ペ・アキンフィエフは一六五二年（承應元年）に十人長ニキタ・プロコフィエフに「何もかも細大もらさず記錄に書きしるし、ダウルの町々、河々が一目瞭然とわかるやうに正確な地圖をつくる」ことを命令した。*

＊「歷史的公文書補遺」第三卷九九號。

【エニセイ軍人のバイカル湖畔進出】

それからやや時を經てエニセイスクの軍人たちはアムール河の上流地方へ探檢にでかけて行き、バイカル湖畔に要塞を構築した。一六五二年――一六五三年（承應元年、同二年）に知事フェ・バシュコフの命令でビヨトル・ベケトフはセレンガ河からシルカ河にいたる交通路の踏査をとげた。かくしてエニセイ河からアムウル河へ通ずることが出來るといふことも明らかにされたのである。

【モスクワ政府の對支貿易にたいする關心】

十七世紀の七十年代になると、モスクワでは支那との通商問題と關聯してアムール河畔の「ダウルの國」への交通路に關心をもちはじめた。「ダウルの國を經て」支那へ行くのが特にもつとも便利な道だと考へられたからである。

スパーファリの使節團が支那へ向つて出發の準備をする際にこの使節團の命令で途中の順路について入手できるかぎりの資料が蒐集されたが、そのときダウルの道路のことも調査するやうに命ぜられた。そしてスパーファリ自身にたいしては「支那にいたる交通路をできるだけ正確に調査」してそれを基礎として地圖を編纂することが委任されたのである。*

＊この地圖はアルセネフにより「スパーファリ旅行記」の附錄として印刷に附せられてゐる。

スパーファリはトボリスクへ到着するとともにその土地に住んでゐる「ロシア人、ブハラ人、それ

調―0523

0155

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

からまたタタール人」などについて問ひ訊した上、彼らの語るところを基礎にして、エニセイスクからセレンガ河およびアムール河へでる交通路を選むことに決定した。*

＊「スパーファリの旅行記」一五二―一五三頁。一六五―一六八頁。

【スパーファリの「支那交通路記事」】

彼の手で編纂されたトボリスクから支那帝國にいたる交通路の地誌は、その通過した地方に關するきはめて貴重な文獻となつてゐる。

さういふわけで使節團の手許には西伯利の交通路に關する廣汎な資料が蒐集されてゐたのである。一七八〇年代に、その頃のロシアにおける權勢家であつたヴェ・ヴェ・ゴリツィン侯の眷顧をうけてゐたフランスの宣教師エフ・アヴリィルがこの資料を見る機會をあたへられ、彼は一六九三年（元祿六年）に、ロシア人が支那へ旅行した交通路に關する資料を印刷出版した。これによつて初めて東部アジアに關するロシア人の發見がヨーロッパの學界へ紹介される機緣をもつ事となつたのである。＊

＊アヴリィル「ヨーロッパ使節團のアジアへの奇異なる旅行」一六九三年、一四二―一四五頁。

【レナ＝アムール流域交通路と原住民の知識】

レナ河の沿岸に住む原住異民族たちは、レナ河流域のいろいろな河の上流から馴鹿に乘つてアムール河系諸河の流域地方へ旅行してゐたので、この兩大河を連絡する連水陸路については古來から知つてゐた。ロシアの軍人たちもさうした連水陸路の所在については、最初まづ彼らから敎へられたのである。＊

＊「歷史的公文書補遺」第二卷九六號、第三卷二六號。「歷史と古代ロシア協會」誌一八六一年一號參照。ツングス族からロシア人が最初に知つたのはウイチ・マヅイビラ河による交通路であるが、それは後に大きな意義を有つにいたらなかつた。

ロ、トゥギルスキイ連水陸路からアムール河への交通路

【ハバロフ侵寇の交通路】

ダウルの地の征服に大きな役割をつとめたのは、いはゆるトゥギルスキイ連水陸路とよばれる道路である。ヤロフェイ・ハバロフはこのトゥギルスキイ連水陸路によつてダウルへの遠征を遂行したのであつて、彼は最初のころすべての連絡をアルバジンとの間におこなつてゐた關係からこの交通路は非常に重大な價値をもつたのである。この交通路はレナ河の支流オレクマ河によつて連絡されてゐた。オレクマ河の航行は上部ツングスカ河とおなじやうに「急流の瀨や岩石がおそろしく多い」ので非常

調―0523

0156

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

な難所であつた。オレクマ河は相迫る山峡のあひだを縫つて十箇所の瀬を形成してゐたのであるが、「大型の河船」が遡航することは可能であつた。山峡を通りぬけると、もうそこには「瀬がなくて船を進めるのに好都合」である。オレクマ河からその支流トゥギル河へでると、そこからニュグジ河（またはニュグチ河）までは樂々と航行できる。ニュグジ河畔から連水陸路がはじまり「峠を越え馴鹿（ナルン）橇に乘つてアムール河までは十二日路」である。＊（別の報道によると「荷を負ふて徒歩で」八日路である。）

＊「スパーファリ旅行記」一三三頁、一六四頁。「歷史的公文書補遺」第三卷二六、九九、一〇三號。第四卷一三六號。テイトフ「十七世紀の西伯利」三三頁。

【ウルカ河、アマザル河】

連水陸路はアムール河へ合流するウルカ河（又はウラ河）へ導かれてゐて、そこから船を造つてアムール河へ下航していつた。この連水陸路にはもう一つ別の道路があつて、ウルカ河よりも稍〻上流でアムール河へ合流するアマザル河へでる。この河は水量が少なくて瀬と岩石が多く、積荷を船からおろして岸づたひに「運んで」行かねばならなかつた。＊

＊「歷史的公文書補遺」第三卷七三號、第四卷四〇號。

【旅行の所要時間】

オレクマ河からトゥギルスキイ連水陸路を越えてアムール河にいたる全行程は十一週間五日で、別に八週間二日、六週間二日などとする報道もある。

＊「歷史的公文書補遺」第六卷一三六號ラスパーファリ旅行記」一六四頁。前者の報道が眞に近いやうである。

【オレクマ河口の關所】

ハバロフの遠征が行はれてから、オレクマ、トゥギイル兩河による交通路は一獲千金を夢みてダウルの國へ殺到する冒險者や狩獵產業者の要路となつた。そこでヤクーツク政廳は一六五六年（明曆二年）に「軍人や狩獵者や農民どもがダウルへ脫走する」のを防止するためオレクマ河の河口に「關所（ザスターワ）」を設けることとした。＊

＊「歷史的公文書補遺」第四卷三三號、第六卷一〇三號、第八卷二一號。

【露支兩國の連水陸路爭奪戰、ネルチンスク條市の建設】

トゥギルスキイ連水陸路のこうした重大な役割は、遂にアムール河の流域において相角逐する二つの大民族——ロシア人と支那人との間にこの連水陸路の支配問題をめぐつて激烈な鬪爭をよび起すにいたつた。ロシア人はこの連水陸路を確保する目的で一六五三年（承應二年）に其處へトゥギルスキ

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523

0157

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

イの柵を設けてそれをアムール河にいたる交通路上の資材貯蔵所とした。しかしこの柵はやがて間もなく廃棄されるにいたつた。一六五九年（萬治二年）に支那軍がそこのカザックを襲撃したのと、新たにロシア人の領有に歸したダウル地方の中心地としてネルチンスク砦市が建設されたのとで、六十年代初（寛文年間）には、トゥギルスキイの柵はすでに自然の荒廢に委せられたのである。一六七〇年（寛文一二年）には支那人がトゥギルスキイ連水陸路に近いところへ小柵を設け、そこを根據にして「オレクマ河畔にいで、河流づたひに……大帝の小砦（ごさく）市に迫り」ロシア人の手に征服されてゐた異民族たちから毛皮税を徴收しようとした。*

*「歴史的公文書補遺」第六巻、二二號。

ハ、ゼイヤ山脈越えアムール河への交通路

【アルダン河、ウチュラ河、ゴノマ河、ニュエムカ河、ゼイヤ峠越え連水陸路、ブリァンダ河、ボヤルコフの旅行所要時間、トントラ河、カトゥマ河】

オレクマ河およびトゥギイル河とともに最初のころロシア人たちは一時レナ河のもう一つの支流アルダン河をアムール河との連絡に利用してゐて、或る者はこの交通路の方が「オレクマ河よりも近くて、食料品が豊富で、瀬がなくて好い」と考へてゐた。この交通路は一六四三年（寛永二〇年）に秘書官長ワシリィ・ボヤルコフが發見したもので、アルダン河からウチュラ河を經てゴノマ河の河口にいで、同河を上流へ遡航するものである。このゴノマ河は「いたるところ瀬だらけで、……船が瀬を越えてのぼつて行く」のは非常な苦勞であつた。ゴノマ河からニュエムカ河へでると其處から「ゼイヤ峠越え」の連水陸路がはじまつた。この連水陸路はアムール河の支流ゼイヤ河に合流するブリァンダ河の河畔に向つて導かれてゐた。ワシリイ・ボヤルコフはアルダン河の河口からアムール河まで十二週間三日*で到達してゐる。その後、この交通路の別のコースが定められたが、それはアルダン河からウチュラ河へは出ずに別の支流トントラ河へでて、同河がらカトゥマ河まで舟行し、それから先き連水陸路五日でゼイヤ河に達するものである。これによるとアルダン河の河口から合計十週間五日を要する交通路である。**

*「歴史的公文書補遺」第三巻一二、二六號。第七巻七四號。「歴史と古代ロシア協會」誌一八六一年一號。

**「スパーファリ旅行記」一六五頁。

【ゼーヤ流域における露支衝突】

ゼイヤ峠越えの交通路はトゥギルスキイ連水陸路の場合とおなじく露支兩國の間にはげしい葛藤を捲き起した。ゼイヤに柵を設けようとしたステパン・アヌフリョフは支那側から猛烈な反撃をうけ、

東部西伯利への交通路發見と征服

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一六七五年（延寶三年）にニコライ・スパーファリと支那外交家との間にナウナで行はれた外交交渉の結果ロシア側はゼイヤ河の流域に住むツングス族の毛皮税を支那側へ「譲歩」させられることとなつた。ところが一六七七年（延寶五年）になるとロシア人はすでに再びゼイヤ河の上流に柵を設け、さらに二年の後には全ゼイヤ流域地方を掌握するためにセリンビンスキイおよびドロンスキイの二柵を築いてゐるのである。右の二柵のうちで特にドロンスキイの柵は、原住異民族との交易を目的としてゼイヤ流域に「交易所」を有つてゐた支那人にとつて大きな脅威であつた。

【支那の最後通牒とアムール艦隊派遣、愛琿城建設】

一六八二年（天和二年）に支那政府はロシア官憲にたいして、これらの柵の撤退を要求する最後通牒をおくり、その結果ネルチンスクの軍務知事ヴォエイコフはドロンスキイの柵の廢棄を命じた。支那側は尚ほこれに滿足せず一六八三年（天和三年）にアムール河へ强力な艦隊を派遣してその掩護のもとにゼイヤ河の河口に近い愛琿（アイグン）（サハリン・ウラ・ホトン）に要塞を築き、それに次いでゼイヤ流域にあつたロシア人の諸柵はことごとく支那軍のために壞滅されるにいだつた。*

＊愛琿はその後支那人によつてアムール河の左岸に移された。「外務省保存文書」支那關係雜類八號。

【ネルチンスク條約】

モスクワ政府は一六八九年（元祿二年）のネルチンスク條約によつてアムールを放棄したことになつてゐるのであるが、事實においては爾來ほとんど四十年間にわたつてレナ河からアムール河へでる交通路の獲得をめぐつて露支兩國のあひだには激烈な闘爭角逐がくり返されたのである。

【エニセイ河からアムール河への路程】

エニセイ河からアムール河へでる交通路はイリム河の河口を經て上流へ遡航するものであつた。ツングスカ河の河流は上流へ遡ぼるにしたがつて兩岸から山が迫り、河流は岩石の連鎖をもつて遮られ、幾箇所となく激流と瀬ができてゐた。さうした瀬にぶつかるごとに船から積荷をおろして「荷を負ふて河ぞひの山道を」進まねばならなかつた。

「荒れ狂ふ激流の瀬では船を輕くするためとまた平底船がときどき難破するので、ロシア人やツングス族が一艘の船に六十人もかゝつて大きな曳綱で船をようやく引つぱりあげた。」

【スパーファリの旅行記】

もつとも危險な難所といはれてゐたのはシェマンスキイの瀬とパドゥンの瀬であつた。スパーファリはシェマンスキイの瀬について次ぎのやうに書いてゐる。

「河幅は三露里もあり、長さ四露里もある瀬の岩石の間をあちらこちらに迂廻して船を進めるのである……この瀬には河ぢういつぱいに鷲ろくべき巨巖が横はつてゐて、そこはまた恐ろしい激流であり、その巖石に激流がぶつかつて山のやうに大きな波が立つてゐ

調—0523
0159
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る。また西岸の岩壁は見あげるやうに高く聳えたつてゐる。……シェマンスキイの瀬は（激流のために）冬も凍ることがない。」

【僧侶アワクムの旅行記】

シェマンスキイの瀬の次ぎにドルギイの瀬があり、その次ぎがバドゥンの瀬であつた。このバドゥンの瀬は最大の難所とされてゐた。

僧侶アワクムの旅行記には次ぎのやうに書かれてゐる。船をうまく廻轉させて進まなかつたが最後、「この場所は河幅が一露里で河いつぱいに三つのはなはだ硬い岩床が横はつてゐる。船をうまく廻轉させて進まなかつたが最後、つば微塵にやられてしまふ。……このバドゥンの瀬とシェマンスキイの瀬にまさる難所はツングスカ河ぢうどこにもない。」

またスパーファリは威嚇して述べてゐる。

「この瀬を（空落）とよぶのは、たくさんの船が叩き潰されるためである。」

その先きにビヤァヌイの瀬とボフメリィの瀬がある。＊

＊「西伯利局文書」五三號「スパーファリ旅行記」一〇一―一〇七頁。「イズブラント旅行物語」一七七―一七八頁。「十八世紀西伯利歴史記念物」第二巻八二號。上部ツングスカ河の航行と瀑越えは僧侶アワクムが記述してゐる。（「生涯」古文獻委員會版、二一―二二頁、二四頁参）

【アンガラ河、イルクーツキイ橋、バイカル湖】

ブラツキイの柵の近くで上部ツングスカ河は左からオカ河をうけいれて二倍の廣さになり、十七世紀時代にはそこから上流はアンガラ河と稱されてゐたのであるが、現在では通常すべて上部ツングスカ河と總稱されてゐる。この交通路はアンガラ河をさらに上流へ、バラガンスキイの柵およびイルクーツキイの柵を越えてアンガラ河の水源たるバイカル湖に向つて導かれてゐる。スパーファリはバイカル湖からアンガラ河への出口を次ぎのやうに描いてゐる。

「アンガラ河の河口は西岸から深い密林に蔽はれた擾山が迫つて聳立し、その河口の幅は一露里以上もあり、物すごい激流がバイカル湖から流れでてゐるのである。この隘路の高い山嶽の間からバイカル湖畔の對岸にある雪をいただいた恐ろしい連山が見える。」＊

＊「スパーファリ旅行記」一〇八―一一七頁。

【バイカル湖横斷旅行に關する報道】

アンガラ河の河口からバイカル湖の湖心のもつとも狭い箇所を船で横斷してセレンガ河の河口へ達したのである。レミョゾフは次ぎのやうに書いてゐる。

「その場所は廣くて仕方がないといふほどのことはない……船は帆をあげてそこを横斷し、風のあたらない靜かな入江に走りこんで碇泊した。……好天のときは一日でセレンガ河へ走りこんだ。」

スパーファリもそれを裏書してゐる。

「二晝夜たらずで横斷できない箇所はない。」

冬季は橇で湖上を横斷したが、レミョゾフによるとやはり一日路であつた。

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

バイカル湖の横断にはバルグジンの柵に向ふ別のコースがあつた。

「まづオルホン島にむかつて湖水をよこぎり、オルホン島に沿つて小一日航行しそこからスヴャトイ岬まで努力すれば半日で横断できるが、そこはおそろしい深潭でそのため多くの船がこの場所で難破する。」

このコースによつてバイカル湖を横断する者はバルグジンスカヤの入江に着き其處から峠を越えてバルグジンの柵までは徒歩半日路と計算されてゐた。この交通路は「はなはだ不安な氣持で旅行した」のであるが、それでも長いあひだ公路となつてゐた。

「エニセイスクからダウリヤ守備隊用の物資を積んで行く平底船や、商用のために……商人たちが湖水を越えて」この交通路を旅行してゐたのである。

このコースを選んだ理由は主としてザバイカル地方の行政上の中心であつたバルグジンの柵の位置の關係からであらうと思はれる。*

＊「西伯利屈文書」三〇八號。レミョゾフ「地圖書」一六葉。外務省保存文書」支那關係雜類八號。「十八世紀西伯利歷史記念物」第二卷八二號。「スパーファリ旅行記」一二頁。

【バイカル湖の神聖】

風波の荒いバイカル湖の横断は異常な危險とされてゐた。「茶碗」の中にはいつたやうに、壁のやうな山嶽にとり圍まれたバイカル湖は、ロシア人旅行者にとつてまことに不氣味なおそろしいものに思はれたのである。

「岸には靜かな避難所がなく山の鼻と岩石ばかりである。あたりは一面におそろしく高い雪を冠つた山々、人跡未到の密林、兀突とした巖角の岬にとり圍まれ、太古このかた人間が通つたことのない場所だと思はれて對岸へつくのが待遠しかつた。とスパーファリは書いてゐる。また僧侶アヴクムは次ぎのやうに回想してゐる。

「暴風がたけり狂つて高いはげしい波が岸を噛んでゐた。湖畔の山々は高く、岩石だらけの岩鼻が不氣味にそゝり立ち、二萬露里の旅行中どこでも見たこともない恐ろしい風景である。山嶽には雪が深く、斷崖絶壁、岩の門、石の柱、すべてが神わざで創造された神祕なものである。」

【原住異民族の迷信とロシア人の迷信】

ロシア人たちは湖畔ちかくに住む原住異民族たちのバイカル湖にたいする迷信的な恐怖をそのまま受けいれて、これを「湖水」と呼んで冒瀆することは危險だと信じ、「スヴャトエ・モーレェ」（神聖な海）と稱し、そこを横断するときには酒と烟草を禁斷してゐた。*

＊「スパーファリ旅行記」一一七―一二三頁。ブラント「イズブラント旅行物語」七六頁。ランゲ「支那旅行日記と北國旅行」

調―0523

0161

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

記」第五巻三九一頁。「アワクムの生涯」四一―四二頁。「歴史的公文書補遺」第七巻六七號。

【バイカル湖よりシルカ河】

バイカル湖の南岸からシルカ河に向ふ數箇の道が發見された。バルグジンの柵から

「陸路非常な苦勞をしながら駱駝や馬の背にのつて岩石と密林と濕地の山道を越えて行く……こんな骨の折れる道はない。」

【冬の密林旅行】

冬は山道に雪が深かつた。

「拂値なしに一サァンジェンから場所によつてはそれ以上も積つてゐた。」

この雪を鉞で割りながら道をつけて通らねばならなかつた。都合のいい時でもネルチンスキイの柵まで二週間からそれ以上もかかつたのである。

＊「スパーファリ旅行記」一二三頁。「西利局文書」三〇八號。

ホ、イルゲニ湖連水陸路よりアムール河への交通路

【新交通路の探求、イルゲンスキイ連水陸路、セレンガ河、ヒルカ河、イルゲニ湖、インゴダ河、ネルチ河、シルカ河】

このやうに「骨の折れる」交通路を通る困難をさけるために新らしい道路が探求された。十七世紀五十年代（慶安年間）にエニセイスクの軍人たちは知事ア・パシュコフの命令によりイルゲンスキイ連水陸路を經由する交通路の踏査をおこなつた。この交通路はセレンガ河を上流へ遡航し更に同河の支流ヒルカ河を航行してイルゲニ湖およびエラクレイ湖に達し、それから湖水と連水陸路を經てインゴダ河に入るものであつた。インゴダ河はネルチ河と合してシルカ河を形成してゐる。ヒルカ河とインゴダ河の兩河を上流で結びつける連水陸路は、すべての資料が一樣に一日路と計算してゐる。僧侶アワクムはイルゲンスキイ交通路について鮮明な描寫をあたへてゐる。

「それから先きへイルゲニ湖まで航行した。そこの連水陸路を冬に越え……春になつてからインゴダ河を筏にのつて下航した。……食物が何もなくなつて人々は河の中の藻草を喰つて飢餓をしのいだ。河が淺くて筏の流れは重かつた。……おお何といふ苦しいことであつたらう！」

【イルゲンスキイ柵の建設】

一六五三年（承應二年）に連水陸路の出發點に近いところにイルゲンスキイの柵が設けられるとともにイルゲンスキイ交通路は確保されたのであるが、長いこと利用されずに十七世紀の七十年代（延寶、天和年間）には殆んどまつたく遺棄されたままになつてゐた。＊

＊「歴史的公文書補遺」第三巻九三號、一一二號、第四巻二一號。スパーファリ旅行記」一二六―一二七頁。テイトフ「十七世紀の西伯利」三一、四七、一〇六頁。ルミョンツフの「地圖」二〇葉「アワクムの生涯」二六頁。フィシェル「西伯利史」一

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0162

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

【第三の交通路、セレンガ河、ウダ河、エラヴィンスキイエ群湖】

バイカル湖からの第三の交通路はセレンガ河から同河の支流ウダ河の岸にそふて「陸路」を進み、さらに三つの湖水から成るエラヴィンスキイエ群湖にいたるもので、これは十七世紀末の二十五年間にわたり一般に廣く利用されたものである。

「これらの湖水群は周圍二十露里以上もあり、湖水中にはシチュウカ（カマスに似た淡水魚）そのほか各種の魚族がゐて湖水群を總稱してエラヴィンスキイエ湖といつた。一つの湖水は大きく、もう一つのは中位で第三の湖水はやや小さい。」

【チタ河、インゴダ河】

それから更にテレンビ湖を越えてチタ河およびインゴダ河にでた。インゴダ河はシルカ河へ合流してゐるのである。＊

＊「スパーファリ旅行記」一三六―一四〇頁。プラント「イズプラント旅行物語」七八頁以下。ラングル「支那旅行日記」。エラウン湖については「西伯利局文書」三〇八號參照。

【スパーファリイ、イズプラント、ラングル等の支那への道】

この交通路は一六七五年（延寶三年）にスパーファリが支那への旅行の際に通過し、彼のあとからイズプラントおよびラングルが旅行した道である。この交通路は支那にいたる公道となり長いあひだ支

那との一切の外交通商上の交渉がこの交通路を經ておこなはれてゐた。

【ネルチンスキイ柵、群湖々畔の諸柵】

セレンガ河からシルカ河までの全延長線の途上には幾つもの根據地が設けられてゐた。一六五八年（萬治元年）にネルチンスキイの柵が設けられた。スパーファリが旅行した時代にはすでにテレンビンスキイエ湖の湖畔にはテレンビンスキイの柵やエラヴィンスキイの柵が設けられてゐた。スパーファリはこのエラヴィンスキイの柵の將來の發展に大きな期待をかけてゐた。

「この場所は多くの人間が住むことができるからこの柵は時を得て大きなものとなるであらう。」

スパーファリ自身はウダ河の河畔にも柵を設ける必要のあることに着眼して次ぎのやうに書いてゐる。

「ウダ河の近くに柵を設けてそこに造船所をつくることも可能である。」＊

＊「スパーファリ旅行記」一三六頁。

【ダウリアの鍵――ウヂンスキイ柵】

それから間もなく新設された（ウダ河畔の）ウヂンスキイの柵は、イズプラントの言葉をかりて云へば「ダウリアの鍵」となつたのである。＊

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0163

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊「北國旅行記」第八巻一三六頁。

【旅行所要時間】

上掲の諸道をとつて進むエニセイスクからネルチンスクまでの交通路に要する所要時間は季節やコースによつて區々であつた。その一部分を冬季の交通路によつたスパーファリとイズブラントは略ぼ同一に近い時間をこの交通路に費してゐる。すなはち前者は二十週間、後者は二十一週間である。そしてイズブラントは歸路を夏季にとりアンガラ河の河航を利用してこの旅行をはるか短時間の十三週間足らずで成しとげてゐる。

へ、レナ河よりオホツク海への交通路

【ロシア人の太平洋進出の出口となつた諸河】

アムール河のほかに、十七世紀時代のロシア人がレナ河から太平洋へ進出する出口となつたのはオホツク海に流入するウヂ河、ウリヤ河、それからオホタ河などの諸河であつた。

オホツク海の沿岸にいたる交通路はすべてレナ河の支流――アルダン河および同河の支流マヤ河を通じて導びかれ、夙に十七世紀中葉にはマヤ河の河畔にマイスコエ冬營所が設けられてゐた。そこから

ら「輕裝した」馴鹿にのつて「秋の交通路」を利用してウヂ河にいたり、四週間で海へでることができた。アルダン河の河口から海までの全行程には三箇月を要した。＊

＊「歷史的公文書補遺」第六巻一三六號。

【ウリスキイ連水陸路、シクシア河、ウリヤ河、オホツク海】

マヤ河を上流へ遡つてヴォロチャンカ河に通ずる別の交通路があつて、そこからウリスキイ連水陸路がはじまつた。この陸路は荷橇で越えるのであるが、或る報道によると八日路、また別の報道によると二週間でウリヤ河に合流するシクシア河に達し、それからウリヤ河を航行してオホツク海へでた。ウリヤ河の航行には若干の危險がともなつた。

【ウリヤ河の舟航狀態】

「河が急流で、この河には多くの難所があつた」ので、この河上では軍人たちがしばしば遭難してゐる。一六五一年（慶安四年）にセミヨン・エビショフの船は「ウリヤ河の中流で……暗礁にぶつかり、神さまのおぼしめしでようやく命だけは救はれた。」

セミヨンの遭難事件のやや前にシェルコウニクは船とともに岩にあたつて死んだ。正確な計算によるとマイスコエ冬營所から海までは七週間六日で旅行することができた。＊

東部西伯利への交通路發見と征服

調―0523

0164

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

*「歴史的公文書補遺」第三巻一二號、九二號。

【マヤ河よりオホタ河への交通路】

しかし十七世紀の後半時代にもつとも多く利用されてゐた交通路はマヤ河からオホタ河にでる交通路であつた。この交通路はマヤ河をユドマ河の河口まで遡航し、それからユドマ河を上流へゴルビッツァ河にいたり、そこでウラク河の支流ウルドナヤ河へ（或は直接ウラク河へ）導かれる連水陸路ユドムスキイ會交路がはじまつてゐる。

ウラク河から先きはやはり二つの交通路があつた。——陸路でオホタ河へでるか若しくはウラク河を下航して海に達するかである。グメーリンの計算によるとウラク河の河口からオホタ河の河口までは僅かに十露里か十五露里である。*

*「歴史的公文書補遺」第四巻八一號、第六巻一三六號。十八世紀西伯利歴史記念物」第二巻二〇號一一五號でグメーリン「紀行」第二巻五四〇—五四一頁。（ここではユドマ河はアルダン河にそそぐベラ河の支流といはれてゐる。ゴルダア「ベーリングの航海」（アメリカ地學協會叢書第一輯ニューヨーク「九二二年」一三頁に一七二五年のユドムスキイ連水陸路の地圖の複製版が入つてゐる。

【ヤクーツクからの別路】

ユドムスキイ會交路越えの交通路があまり連水陸路の距離が長くて難道であつたため、嶮岨ではあつてももつと短距離なヤクーツクからアムガ河（アムギンスカヤ渡船場）および次アルダン河（ベリスカヤ渡船場）を經てユドムスキイ會交路に達し、さらに其處からウラク河にいたる陸路がしばしば探査された。

【グメーリンの報道】

ベリスカヤ渡船場から先きは、グメーリンの記述によると「荷馬車で越すことができないので荷物は馬か馴鹿の背にくくりつけて運搬するといふ恐ろしい山道」がはじまつた。

【クラシェニンニコフの報道】

クラシェニンニコフ（一八八）はこの道路について次ぎのやうに書いてゐる。

「この道路は……想像以上に通行の困難なそして危險なものであつた。……道路が河の岸の斷崖ぞひや密林中の山道を通つてゐて、その河の顆粒道はごろた石や圓い硫黄塊に蔽はれてゐるので、この土地の慣れた馬どもでさへ辿むのに相當な難儀で、石の上をゆつくりと用心ぶかく歩いていつた。」

【交通路の行程】

かういふ難所があつたけれども、この陸路の方が割合に時間が懸らなかつた（ヤクーツクから一箇月と少しであつた）ので、この交通路は十八世紀初にいたるまで廣く一般に利用されるところとなつ

調—0523

0165

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

てゐた。一七二四年（享保九年）に行はれた調査によるとこの交通路のヤクーツクまでの全延長線は新制の五百サァジェン一露里計算にして八百露里あまりである。＊

＊「十八世紀西伯利史記念物」六〇號、一二五號。グメーリン「紀行」第二巻五四〇―五四二頁。クラシェニンニコフ「カムチャトカ地誌」第二巻一七五五年版、二七一―二九〇頁。

【オホツク市建設の端初】

のちにオホツク海沿岸の行政中心地となつたオホツク市の前身であるオホタ河口のコスイの小柵が一六四九年（慶安二年）に建設されて以來、ユドムスキイ會交路越えの交通路はきはめて重要な意義をもつやうになつた。

五、むすび

【ロシア民族東漸の諸條件とその方法】

ロシア人をして東部西伯利へ進出する可能性をあたへた最も重要な諸交通路は右に述べるごときものであつた。これらの交通路による移動進出の諸條件と、なだロシア人によつて西伯利が發見されずつと前に彼らの祖先たるスラヴ民族が東歐平原に點々と移住していつた方法とが、あまり異つてゐないと云ふことは容易に觀察されるのである。その方法は、狹小な、水量のすくない小川や涸れ川をたどつて船をすすめ、連水陸路を越えて船や荷物を移搬し、「苦勞な」激流の瀬や渦を卷く急潭を通つて進むといふ方法であつて、彼らの祖先が十世紀か或はそれよりも前に採用してゐた方法とおなじことが西伯利の征服にも踏襲されたのであつた。

それとともに、これらの交通路や西伯利の海や河をロシア人がいかにして旅行したかといふ狀態を研究すれば、自然發生的な東方への進出運動の途上でぶつかつた現實的な困難や、北アジアの野性に滿ちた領域を克服するのに彼らがいかに多くの精力を費したかといふことが、きはめて具體的に觀取されるのである。

調―0523

0166

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第三篇　西伯利征服に關する歴史文獻の研究

第一章　西伯利年代記の研究

一、同一源泉から發生した諸年代記

かぎりなき西伯利の富源とその野性的でしかも一種獨特な樣相をした自然とは、ウラル以東へ侵入していつたロシア人がはじめて西伯利を知つたとき、彼らに强烈深刻な印象をあたへた。

ウラル連山は「その或る峯の頂は雲にとどくほど高々とおそろしく聳え立ち……神さまのおぼしめしに依つてはつきりと仕切りをつけるために立てられた壁」であると感じられ、ルゥシ（ロシア本國）の地と西伯利の地との間によこたはるこの自然の境界は、平原の景觀に慣れたロシア人の貧しい想像に絶するものであつた。

「この山嶽にはシベリア杉や檜やそのほか有りとあらゆる樹々が茂つてゐる。いろいろな野獸が棲んでゐる。樂しさうに囀づりかはす澤山の鳥どもがゐる。さきざまな草花が咲き亂れてゐる。この山嶽からは多くの河々が流れ出てゐる。……神さまのおぼしめしに依つて河は美しく、そして急流である。……廣々とした美事な河の水はうまく、いろいろな魚族が多い。それらの河々の岸の密林は

廣大で、穀物がよく稔り牧畜の草場によい場所がおそろしく廣々と展けてゐる。」*

*古文獻委員會版「西伯利年代記集」《Сибирские летописи》изд. Археогр. Комиссии 一九一一 一〇頁。

十七世紀時代の筆者はかうした驚嘆の言葉をもつて後ウラル地方の天然の富を描いてゐる。僧侶アワクムは、西伯利の自然のおどろくべき偉大さを直接に體驗したロシア人の感銘を、彼れ獨特の鮮明さをもつて表現してゐる。

「山々は高く、密林は通ることもできぬものであり、岩石は壁のやうにそそり立つてゐて、見上げるのに頸の骨が折れるほどである！」

自然の富が豊かなことに彼は驚異の眼をみはつてゐる。

「野獸がおびただしく、それを眺めるのにわれわれの眼がくたびれるほどである。」

「鳥は數かぎりもなく」バイカル湖の上を「まるで雪のやう」に埋めてゐる。

「そして魚類はおびただしく滴も滴ちてをり……鍋で燒くと脂でいつぱいになる」ほど脂肪に富んでゐる。

「草花は美しく、芳香にみちてゐる……それは皆な人間が神を讃美するために創造された世界である」*

と彼は嘆稱してゐる。

西伯利年代記の研究

調—0523

0167

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊古文獻委員會版「僧侶アヴァムの生涯」《Житие прот. Аввакума》三一—三二頁、四二頁。

ロシア民族の財産となつた西伯利は、自然旺盛な興味を惹かざるを得なかつた。この神によつて約束された土地へ、ロシア人がどうして、またどのやうな狀態のもとに入りこんで行つたのであらうか、この密林と山嶽とがロシアのキリスト教文化によつていかに征服されたのであらうかを知りたいといふ願望は、非常に早くから現はれてゐる。

「驚愕ふかき太陽は西伯利の國土を照りかがやかし、數々の地に町をつくり、聖なる敎會をうち建てて、讃美歌の高らかな歌聲はどろき渡り……あまたの異敎徒はキリスト敎徒となつて父と子と聖靈の名において洗禮をうけ、西伯利の國土は神の御惠みにあふれ渡つた。」＊

＊「西伯利年代記集」一六一頁。

イ、キプリアン大主敎と「過去帳」

【西伯利最初の大主敎管區の發生】

西伯利における ロシア植民の初期にたいする興味は、一六二一年（元和七年）に西伯利大主敎管區が創設された直後、ただちに現はれてゐる。

初代の大主敎管區長に任命されたのはノヴゴロドのフトゥインスキイ修道院の院長キプリアンであつた。この大主敎はスエデンとの媾和の際にカアル・フイリップを王位に卽けるといふ交涉をとげて名聲をあげ、ミハイル皇帝の治世にノヴゴロドをモスクワ國家へ併合するために活動した。彼のノヴゴロドにおける活動はスエデン政府の抗議を招いたほどであるが、その代りに新政權からは高く買はれて目まぐるしい立身をしたのである。

彼はトボリスクの大主敎管區長になつて二年半を西伯利で送つてからモスクワへ歸るとクルティツキイの聖大司敎となり、その後さらにノヴゴロド大司敎となつた。すでにフトゥインスキイ修道院長の時代から獨立不羈の傑出した地步を占めてゐた彼は、いまや勢威隆々たる高位にのぼり、そして賢者としての評判が高かつた。

困苦な生活體驗を經歷したのちに高位にのぼつた人間である彼は自信に富み、極度に自尊心がつよく、自己の僧職を華美と莊嚴とをもつて飾ることを好んだ。彼は偉大なるニコン大僧正を出身せしめた敎會を俗界の權力よりも上位に立つものだと考へてゐる智僧の一人であつた。そしてノヴゴロド大司敎の時代に「殿下」といふ尊號を獲得し、彼の「家臣」や商人階級中の知己たちは「いろいろな話の中で大司敎の名を呼ぶときには大司敎殿下」とよんだのである。公式にも彼はこの尊稱でよばれて

調—0523

0168

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ゐた。

彼は大司教職にふさはしく帝室に匹敵する華美な宮殿を建て、宮廷風な儀禮をもつて自分の周圍をめぐらし「今までの大司教には嘗つてなかつたやうな尊大さ」を示した。ノヴゴロド政廳の役人たちを引見する場合にも彼は莊嚴な儀禮をもつてした。修道院や教會の祈禱に參列するため市中へでかける時には夏でも轎にのり、十字架行進の際には「金やそのほか色々な色彩をもつて飾り立てた天蓋」を翳しかけさせ、徒歩で行進するときには背後から轎を引かせてあるいた。祈禱に立つときは甚だしい威嚴を示し、中央寺院へ赴くときは兩脇を二人の老僧に支へさせ、また朝夕の祈禱を彼は自席に腰をかけたまゝで聽いた。皇帝との交涉をキプリアンは殆んど對等の態度をもつて行ひ、請願書をかくときには自分の名をもつてせず「威嚴を保つて」代僧の名をもつて書かせた。彼は教會領地の不可侵權を熱心に擁護し、ソフィスキイ寺院の世襲領地事件がおこつた際には、敵方の言葉をかりて云へば「大司教は皇帝の勅命を肯かず、その世襲領地の中へはいかなる官用があつても入ることを許さなかつた」* のである。

權勢にほこる彼は大司教廳の命令もあまり眼中におかなかつた。みづから教會法に通曉してゐると考へてゐた彼は俗界出身のフィラレット大司教を蔑視してゐた。

*ゼルツアロフ「古代史」一八九六年第一卷。

この「教會と僧職の制度」に通曉した權勢家キプリアンは、西伯利へ着任するとともに自分の「聖院」を光輝をもつて飾らうといふ欲望に驅られた。僻遠な未開地方の大主教管區は、赴任の瞬間から彼に精神的空虛を感じさせた。性急な彼はそれを忽ち行動のうちに現はした。西伯利で彼はその地の異常な生活條件の上に、移住民によつて作りあげられた深刻な道德的頽廢をみた。

「善き牧者」の義務といふことを廣義に解釋してゐた彼は大主教管區内の不秩序を絶滅しようと努めた。

「不法の婚姻やそのほか數々の宗務上の缺陷を矯正して堅固にした」のである。かうした彼の行動はむろん一方から反抗にあつた。

「多くの無理解な人々からは數々の惡評をうけ反抗や迫害に逢つた。」

彼はひとり現地の軍人たちとばかりでなく行政官廳の代表者たちとも衝突した。これに關聯してモスクワから次ぎのやうな示達が發せられてゐる。

「西伯利各地においては軍人その他の役人らは大主教およびその部下の宗教上の命令に服從せず彼らの審判をうけることを欲せず大主教を誹謗しつつあり、軍務知事諸子はこの點において監督不行屆きたることを免れず。」*

モスクワの支持を信じてゐる頑固な大主教はドボリスクの軍務知事マトヴェイ・ゴドゥノフのことを皇帝に直訴し、そして遂に秘密探偵を派遣させることに成功した。**

調—0523

0169

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊ソロヴィヨフ「ロシア史」「オプシチェストヴェンナヤ・ポリザ」版 Соловьевъ: «Ист. России» Изд. "Общ. польза" 第二巻、三六五頁。「歴史的公文書」«Акты исторические» 第二巻、第一一三號。

＊＊「古代ロシア文庫」«Пр. Фр. Библ» 一七八八年、第三巻、一三九頁。

【トボリスク中央寺院の建立】

キプリアンは大主教職の地位を飾る立派な形式を作りあげることに熱中した。彼はその故郷であるノヴゴロドの本山を崇める記念として、賢者ソフィヤの名を冠した中央大寺院をトボリスクに建立し、そして西伯利の各地にいくつかの修道院を建設した。彼は例のごとき熱意をもつて、聖ソフィヤ寺院が將來耕地と農民を世襲財産として保障されるやうに努力した。彼は疲れることを知らぬ執拗さをもつて草場や耕地の寄進を政府に請願し、皇帝からはそれがいつも好意的態度をもつて迎へられた。かくてトボリスク郡ではクルデュムカ河畔に、チュメンスキイ郡ではニィツア河畔に廣大な聖ソフィア寺院の世襲領地ができ、またタウダ河畔では七百デシャチンが彼の私領となつた、等々。勘定だかい經營主としての彼は、かくして「莫大な土地」＊をその後繼者の手に遺したのである。

＊ブツィンスキイ著「西伯利の移民」Бунчинскій: «Заселеніе Сибири» 一〇七頁、一二二―一二四頁。

【エルマクの英雄化】

キプリアンは大主教廳を物質的に保障すると共にそこに精神的な光輝をも賦與しようと欲した。新らしい教會の教壇を飾るためには、古い教壇のそれと比肩するに足るべき聖者の像をそこに掲げる必要がある。キプリアンは赴任の第二年目の夏に、有名な西伯利征服者アタマン・エルマクとその一隊のことを「想ひ起し」これぞ大主教區のふさはしき守護者であると考へた。

【「過去帳」の編纂】

彼の編纂した「過去帳（シノーダク）」《Синодикъ》＊に記されてゐるところによると、大主教猊下は「エルマク遠征隊のカザックたちに、彼らがどういふ風にして西伯利へやつて來たか、どこで異教徒と闘つたか、どこでカザックが殺されその名はなんと云ふか、それを詳しく書きあげた「手記（ティエツ）」《Писаніе》を彼のところへ持つてきた」

＊「西伯利年代記集」一六二―一六四頁。

教徒どもが戰闘中に何處で誰れを殺したかを訊ねよ、と命じた。」

「カザックたちはどういふ風にして西伯利へやつて來たか、どこで異教徒どもとの戰さが行はれたか、異教徒どもが戰闘中に何處で誰れを殺したかを訊ねよ、と命じた。」

これらの報道を基にして「善き牧者」は戰死者の名を聖ソフィヤ寺院に彫りつけて「寺院の過去帳へ載せさせ」そして正教週間には「その他の殉教者たちとともに正教の永遠の記念のために」彼らの名を讃美することを命じた。

【エルマク・カザック隊の宗教化】

この目的はまことに明白である。つまりトボリスクの大牧師はエルマクとその一隊を正教信仰の殉

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

教者たる榮光をもつて包み、自分の權力でこのいかがはしい聖者たちを英雄化し、彼らの名を正教週間の莊嚴なる祭詞の中に加へ、もつて彼らがキリスト教につくした功績が教會によつて承認されたことを明確にするにあつたのである。*

* グメーリンはトボリスク中央寺院で正教週間にエルマクやカザックたちの名が讃美されることを日記のうちに書いてゐる。"グメーリンの西伯利紀行" Johann Georg Gmelins, Reise durch Sibirien. 一七五一年、第一卷、一三六頁。

【「過去帳」の文學的構成】

かういふ緣起によつて編纂され、そして後代「西伯利年代記集」* 中に保存されてゐるこの「過去帳」は、かかる種類のありふれた文書がもつ、狹い目的の範圍を越えるものであつた。トボリスク中央寺院の「過去帳」はその形式の美しさと內容の面白さとにおいてそれ自身が文學作品としての性質を示してゐる。この「過去帳」は神によつて選まれたエルマクの一般的な性格を說明する高邁な序說に筆を起し、その先きでこの遠征に參加した個々の人々が自分の頸をおとしたそれぞれの戰鬪についてかなり詳細な記述をしてゐる。かくしてエルマク自身の戰死に關する物語をもつて結ばれてをり遠征の主要なモメントが圖式的に概說されてゐるのである。同時代に生きてゐた人々の口述を基とした「過去帳」の編纂は「年代記の著作に……最初の礎石」** をおいた點でミルレル以來西伯利最初の歷史家としてのキプリアンの名譽を確固たらしめてゐる。西伯利の大主敎によつてカザックの追善贈位が決定されたことは地方的意義をもつにすぎぬ出來事であつたが、一六三六年（寬永一三年）二月十六日になつてエルマクおよびその配下のカザック達の「讃美」は、皇帝の名において中央政權ならびに大司敎廳の確認するところとなつたのである。***

* 「過去帳」はそつくりその儘「エシポフスカヤ年代記」の中にはいつてゐる。（「西伯利年代記集」一六四―一六八頁。および若干の省略と共に二三六―二三八頁）

** ベカルスキイ「帝室科學アカデミアの歷史」Пекарский: «История Имп. Академии Наук» 第二卷、三五五頁。

*** 「西伯利年代記集」三五三頁。

ロ、「過去帳」と「エシポフスカヤ年代記」「ストロガノフスカヤ年代記」の關係

【エシポフスカヤ年代記】

右のやうな西伯利生活における重要なモメントとともに、やはり一六三六年（寬永一三年）にエルマクを追善記念して西伯利占領の歷史を書いた新らしい文學的作品「西伯利および西伯利占領物語」《О Сибири и о Сибирском взятии》が世にでた。これは大主敎廳の書記サワ・エシポフによつて

調―0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

書かれたもので、學界では「エシポフスカヤ年代記」《Есиповская летопись》の名で知られてゐる。

【ストロガノフスカヤ年代記】

またおそらく十七世紀の前半ごろに不詳の筆者により「西伯利占領物語」《О взятии Сибирской земли》が編まれてゐる。この物語はカラムジン〔八九〕がこれを發見して以來「ストロガノフスカヤ年代記」《Строгановская летопись》の名で呼ばれてゐる。その理由は、物語筆者がストロガノフ家に近しい人物であつたことは疑ひなく、ストロガノフ家の記錄文書中の多くのものを利用してをり、エルマク隊の進擊を描くこと以上に西伯利の發見と占領の事業におけるストロガノフ家の活動を紹介するといふ目的をもつてゐるからである。

【三つの「物語」の相似性】

かく西伯利の占領を取扱つた歷史的文獻が十七世紀の前半から今日までわれわれに傳へられてをり、それらの各自はそれぞれに特殊の目的を追求してゐて、形式においても各獨立のものに外ならぬことを示してゐる。この三つの記念物はその發生において上述のごとき相異があるにもかかはらず、それを相互に對照するときは極めて近しい相似性をもつてゐて、往々にして一言一句まで一致してゐる個所があるのである。この三者の密接な關係は、そのいづれかから轉りて來たものではないかといふ疑ひを夙に抱かしめたほどである。

八、二つの年代記の文學的手法

【西伯利年代記研究文獻とその見解】

ストロガノフスカヤ年代記の、エシポフスカヤ年代記への依存關係について、またその反對にこの兩者の「過去帳」にたいする關係の問題については澤山の文獻がある。*

＊この問題に關する文獻についてはイョンニョフの「ロシア史料編纂學試稿」Ионнисов: «Опыт русской исторіографіи» 第一卷第二册を見よ。

カラムジン、また彼に次いでソロヴィョフは、ストロガノフスカヤ年代記の出版者スパスキイの述べてゐるこの年代記が最古のものであるといふ見解を支持し、彼らはそれをボリス・ゴドゥノフ帝の治世以前に當て、これが第一源泉であつて、後にエシポフに依つてそれが利用改作されたものだとしてゐる。*

＊その後この見解は「古代ベルミ」《Пермская старина》の著者ドミトリエフによつて特に詳細に裏書されてゐる。

それに對立してエシポフスカヤ年代記の方が古く且つ信を措くに足るものであり、ストロガノフスカヤ年代記の源泉となつたものであるといふ見解は、ネボリシンによつて擁護されてゐる。

調—0523

0102

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

最近では次のやうな結論に歸着するエス・アドリアノフの見解がもつとも廣く承認されてゐる。

西伯利年代記の第一源泉はキプリアンの「過去帳」であつて、エシボフの年代記はそれの簡略化された「コッピイ」であり、その以前においてはいかなる年代記も存在しなかつた。ストロガノフスカヤ年代記は單にエシボフスカヤ年代記の源泉と考へがたいのみか、反對にストロガノフ一族を偉大ならしめる目的で中間に挿入を試みつつ後者を利用してゐるものである。西伯利年代記の書かれた經緯は、かくして彼には次のごとく考へられるのである。

一六二二年（元和八年）以前にはエルマクの遠征に關する文書的な典據は全然存在してゐない。よそこの年に近い頃に「過去帳」の基礎となつてゐるカザックの物語の、最初の記述が行はれ、一六三二年（寛永九年）にサワ・エシボフがキプリアンの「過去帳」を基にしてエルマクに關する劃期的な著作をなし、それ以後に誰かストロガノフ家に好意をよせる人物がエシボフスカヤ年代記の改作といふ方法によつてストロガノフスカヤ年代記とよばれる新らしい年代記を編述しだものである。

アドリアノフは初めて嚴密な科學的方法をもつて西伯利年代記原文の批判をしてをり、「過去帳」と二つの年代記を並べて對照した上で彼が與へてゐる結論は極めて重要な意義をもつものである。*

* アドリアノフ「西伯利の征服に關する問題に寄せて」Адрианов: «К вопросу о покорении Сибири» (「文部省雜誌」《Изв. Имп. Пдос.》一八九三年第四號)

一八九三年（明治二六年）にアドリアノフの論文が發表されて以來、彼の見解は學問的文獻中もつとも廣く承認され、そしてキプリアンの名は今尚ほ「西伯利年代記の始祖」として保持されてゐる。

一九〇七年（明治四〇年）に新らしい、そして美事に完成された古文獻委員會の「西伯利年代記集」が出版されたと共に、現在また全體としてこの問題を再檢討することができる。

「過去帳」と、二つの年代記のそれぞれに該當する箇所を竝べて比較對照するときは三つの記念物の基礎的な原文が總て同じものであることは疑ふ餘地がなく、同時にまた「過去帳」編纂者の文學的創造の興味ある狀景がわれわれの眼前に浮んでくるのである。しかし、だからと云つて二つの年代記が單に「過去帳」を利用してこれを擴大增補しただけのものだと決定することはできぬ。

二、「サビサニエ」〔手記〕

【西伯利年代記の源泉「サビサニエ」】

要するに西伯利史の最古の記念物としてわれわれの知る三つの年代記――「過去帳」、「エシボフスカヤ年代記」、「ストロガノフスカヤ年代記」の基礎となつてゐるのは同一の第一源泉で、それはキプ

調―0523

0173

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

リアン大主教が「どのやうにして西伯利へ侵入してきたか」をカザックたちから親しく知りたいと云つたとき彼らが大主教のところへ呈出した「ナピサニエ」（手記）である。この「手記（ナピサニエ）」は文學的な修飾のない比較的簡潔な記述をもつて書かれたもので、それが記述されたのは少なくとも十六世紀末より遡くはない。一六二二年（元和八年）*にキプリアンの命令でこの「手記」を基にし、それをエルマク遠征に參加したカザックたちの口供をもつて增補し、そして「過去帳」が編述されたのである。一六三六年（寛永一三年）サワ・エシポフは「西伯利および西伯利占領物語」なる年代記を編纂するのに「手記」と「過去帳」を利用した。ストロガノフ家の近親者がまたこの一家の名譽を高める目的で「過去帳」もしくはエシポフスカヤ年代記とはまつたく關係なく、やはり「手記」を改作して「ストロガノフスカヤ年代記」を書きあげたのである。

＊キプリアンは「着任の第二年目」に「過去帳」を編述した。彼がトボリスク（到着したのは一六二一年五月三十日である。

ホ、「レミョゾフスカヤ」年代記とその源泉

エシポフスカヤ年代記は十七世紀の末に新らしく書かれた非常に興味ある歷史的著作――トボリスクの貴族セミョン・レミョゾフの繪入り「西伯利史」*《История Сибирская》（現在「レミョゾフスカヤ年代記」）の構想の基礎となつてゐる。

＊レミョゾフスカヤ年代記を發見したミルレルはこれを「トボリスキイ年代記略」《Тобольский летописец》と名づけてゐる。

【レミョゾフスカヤ年代記の特徵】

レミョゾフスカヤ年代記はその構成と形式とにおいて特に注目に値する。この年代記は單なる物語の寄せ集めではない。それは寧ろ或る程度まで科學的な歷史的著作である。ただそこではその時代の學者的觀念に特有の方法論上の缺陷がきはめて露骨に反映されてゐるだけである。著者レミョゾフは當時においてかなり有名な學者であり、唯一の西伯利地圖書の編纂者である。「西伯利史」の編纂にあたつては彼の息子たち、レオンティ、イワン、セミョン、それから彼に親近してゐた助手らが彼の製圖上の仕事をたすけた。レミョゾフのもつてゐた諸條件は、その歷史上の知識を、單に文書からだけでなく口供による源泉から得るといふ點で誰よりも多く惠まれてゐた。彼の官界における地位とトボリスクで彼がもつてゐた連絡、それから西伯利の完全な地圖書の編纂を政府から命ぜられて西伯利やモスクワでした專門的な歷史・地理學上の研究、さうしたすべてが西伯利研究の知識において當時のありきたりの知識人とくらべて、遙かにすぐれた多くのものを蓄積する可能性を、彼にあたへたのである。

調―0523

0174

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

レミョゾフ家はトボリスクにおける古い軍務役人の家柄であつた。歴史家セミョン・レミョゾフの祖先は一六二八年〔寛永五年〕に西伯利へ派遣された。西伯利における人不足な條件のもとで彼はトボリスクの貴族として新らしい郷土の官界で鞏固な地位を占めたのである。レミョゾフ一家はそれ以來常にトボリスクの地方官界で上層におかれ、西伯利の總ての重要行政機能を執行する責任を負ひモスクワから任命されてきた軍務知事は、それを輕視することができなかつた。軍事遠征隊の指揮官や、原住民の部會や土侯のもとへ派遣された使節や、そのほか責任ある使命を果した者の中に、われわれはレミョゾフ一族の名をたくさん發見する。四分の三世紀にわたる長いあひだ西伯利の統治に近く接觸してゐた古い軍務役人の家庭には、父から子へと相傳された、多くの報道が保存されてゐない譯はなく、その家庭的な傳統の中からわが歴史家はその資料を汲みとることができた。彼れ自身、射撃隊の百人長であつたウリヤン・レミョゾフのことを傳へてゐる。軍務知事ビョトル・ゴドゥノフの寵遇をうけ、その股肱の部下であつたウリヤンは、レミョゾフの述べてゐる所に依ると「時務に練達で……上手者」であり、西伯利の古事に興味をもち、自分の知識を滿たす機會があれば、決してのがさなかつた。例へばセミョン・レミョゾフは、ウリヤンがカルムイクの大石アプライのもとへ派遣

された使節の一行に加つて行つた際、アプライ自身の口から親しく聽き知つたエルマクの戰死と奇蹟に關する物語を彼から語り傳へられ、著者の言葉によると「西伯利史」の中のこれに該當する章はその口傳が基礎となつてゐる。レミョゾフが一六九六年から一七〇〇年〔元祿九年——同一三年〕までの間に、地圖書編纂のために行つた調査は*さきはめて多くのものを歴史家に提供してゐる。彼は西伯利局の文庫にあつた「多くの地理書」や西伯利の各地から「多年にわたつてモスクワへ送附された地圖の寫し」を利用してゐる。そのころ西伯利局の長官をしてゐたアンドレイ・ウィニウスがヴィトセンに與へてゐる資料によつて判斷すると、同局には西伯利關係の地理書とともに歴史書も存在してゐた。レミョゾフはまた一六八三年〔天和三年〕以降のトボリスク會所（スーダジャヤ・イズバ）の保存文書中から引きだしてゐる、等々。**

* レミョゾフが「西伯利總地圖」《Общая Карта Сибири》の編纂に初めて着手したのは一六七三年であつた。「西伯利地圖書の附錄」《Приложение к Чертежной книге Сибири》、一三頁。

** 同上書三頁、五——六頁。

レミョゾフは文書的な材料だけに滿足をせず、彼自身の云ふ所によると各種の「古老」や「傳說話者」「人の行けない場所、深山幽谷や曠原の奥深く、遠い海洋、そのほか未開民族の住む地方へ行つ

調—0523

0195

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た經驗者の口述を聽き……當にいろいろな階級のロシア人」ばかりでなく原住民「異民族――ブハラ人、タタール人、カルムイク人、そのほか新たに洗禮をうけた人々」や、アジア人のところに捕虜となつてゐたことのあるロシア人なども訊ねた。*

レミョゾフの研究は、地誌的資料の闡明だけに止まらず、傍ら考古學上のことにも及んでゐる。彼は「古代のチュドやクチュムの宮殿、禮拜所、その城砦、要塞、古墳」などについても知るところがあつた。**

*上揭書二、三、七、八、一四頁。
**上揭書七頁。

【レミョゾフの「西伯利地圖」】

西伯利の歷史にたいするレミョゾフの關心は、彼の地圖書の中にも反映されてゐる。地圖書には地名の間に歷史的內容をもつ短簡な說明があつて、クレストウイ島の地圖の上には「……年に踏査される」と書き加へ、グリアズノエ湖（セミンスクル）の所には「シュリギンが部隊とともに殺された」（一六九三年〔元祿六年〕異民族の襲撃による）、セレブリアンカ河の所には「エルマクの船が橫はつてゐる」と標記してある。これは彼が材料として採用したクングルスカヤ年代記中の、エルマクとその仲間たちはセレブリアンカ河畔に重い船を棄て去つた。「そしてその古船の橫はつてゐる場所に船の底を貫ぬいて樹が生ひ育つてゐる」といふ傳說*に該當するものである。

*「西伯利年代記集」三一四頁。

さらにレミョゾフの考へでは嘗つてギリアシスコエ國家が存在したと云ふアムール河口ちかくの場所を承して彼は「マケドニアのアレクサンダア大王は此所まで到達してそこに武器を匿し、鐘を殘して去つた。」と記載してゐる。

右に擧げた數例で、レミョゾフの手には地理學上の仕事と關聯して古代西伯利に關するいろいろな報道が蒐集されてゐたことが明瞭にわかる。

【レミョゾフ年代記に挿入された別の年代記】

レミョゾフの「西伯利史」を一瞥すると、現在われわれに傳へられてゐるこの書が再度手を加へられた結果でき上つたものであることが判る。同書には、すでに基本的な編述が終つたあとから別に獨立した年代記の別刷が「クングルスカヤ西伯利年代記略」《Летопись Сибирская краткая кунгурская》といふ表題をもつて附加されてゐるのである。*

*この表題のもの仕往々全體がレミョゾフの作と誤解されてゐる。この附加のことを最初に指摘したのはミルレルである。

調―0523
0176
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

この附加は全く機械的になされてゐて最初の本文と容易に區別できるものである。(五——八頁。四九——五二頁。七三——八〇頁。九九——一〇二頁の記述)。さうした後からの附加は、一四〇——一四七頁の記述にも示されてをり、前後なんらの關聯もなく異教徒との戰闘中に神がキリスト教徒に示した加護の例が語られてゐる。これら一切の附加は「西伯利史」の基礎的な部分とは内容外觀とも(筆致、挿繪の技術、表題の配置)非常に相異してゐる。すでに整理を終つた「西伯利史」の本文中へクングルスカヤ年代記からの拔萃を挿入したため、多くの混亂と重複の箇所が生じてゐる。この不手際な附加は「西伯利史」の最初の記述を完全に再生してこれと區別することができるほど別個のものである。エルマクの戰死に關する歷史の基礎材料は、アドリアノフが指摘してゐる如くエシボフスカヤ年代記である。しかしレミョゾフはエシボフの古くさい文體をやや改作してこれに十七世紀の末ごろに流行してゐた文學的嗜好を採りいれ、外國語をも挿入してゐる。彼れは、豐富な事件の報道をもつて特色とする、そして現在われわれに判つてゐない別個の文獻材料の中から採つた記述を以て、エシボフスカヤ年代記に多くの增補を加へてゐる。その事件のうちには、たとへば少數原住民の部會エバンチャ、ラブッタその他とカザックとの戰鬪、バガアノエ湖畔の戰鬪、ヴォグル族の部會イシュベルディやスクレムらの忠勤、クチュム汗の宮殿「クトッガイ」などに關する詳細な報道がある。また個々の事件の詳細な日附もその中から精りて來られたものである。この不詳の年代記の正確さは或る一つの場合において信を措くことができる。たとへばトゥラ河畔に嘗つてエバンチ小汗國の存在したことは後代までトゥリンスク市の近くに「エバンチン・ユルタ」といふ地名が殘つてゐること、また十七世紀前半の古文書中にエバンチ自身やその子アギシュ・エバンチのことが記載されてゐることによつて證明されるのである。*

＊「西伯利局文書」《Дело Сибирского Приказа》第十九冊。

【年代記にあらはれたエルマク遠征の額末】

この年代記の特色は、エルマク遠征物語がエシボフスカヤ年代記やストロガノフスカヤ年代記とはちがつた順序で書かれてゐる點である。後者では遠征が九月に初まり、其年の十月にイスケル城の占領となつてゐるのであるが、この書ではエルマクはウラルで冬を越し春から夏にかけてイスケルに向つて裕々と進擊し、十月初めにイスケル城に到達してゐる。しかもこの行軍の各段階はきちんと正確な月と日をもつて記述されてゐる。これらの報道のすべては非常な古代性と確實性の跡を示してゐる。しかしこの不詳の年代記の物語はなんらか別の源泉から採つてきたと思はれる挿入によつて調子が破られてゐる。たとへばその一つは八月一日にエルマクがチュメニ城を占領したと云ふまつたく空

調—0523
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

想的な報道であつて、それは事件全體との連絡をぶち壊してゐる。なぜなら、この不詳の年代記自身の記述に據れば、エルマクは八月一日には「カラチン城」を奪取してゐるからである。*

＊「西伯利年代記集」三一八頁、三二五頁。

かくしてレミョゾフはエシポフスカヤ年代記の傍かに二つの年代記を利用し、それらを一つの全體に統合してゐるのである。

【レミョゾフ年代記と原住民の口碑傳說】

われわれに特に興味があるのはレミョゾフがロシア人や原住民の口から傳へられた傳說から採つてエシポフスカヤ年代記の中へ挿入してゐる增補そのものである。就中もつとも綿密な研究に値するものは、彼の蒐集した原住民の口碑——彼が好んで引用してゐる「プスルマンの歷史」《Бусурманские историки》と「プスルマン物語」《Бусурманские повести》である。所傳によればこれらの傳說の形式は多樣である。第一にそれは歌詞の形式をもち、朗詠されたもので「タタールたちがこれを話す時には泣きながら歌に謠つた」ところのものである。かうした特徵は、ロシア人が西伯利を占領したことを悲しむ「物語」——エルマクに關する「物語」の中に表現されてゐる。

「彼らがこの美しくまた怖ろしい物語を話すときには涙なしには済まされぬ。」

さうした朗詠の典型的なものはクングルスカヤ年代記中に傳へられてゐる「王妃の哀歌」《Царицын плач》である。＊

＊「西伯利年代記集」三四二頁、三四六頁。

【回教徒の說教と偶像の內容】

おもしろいのは回教僧（シャイフ）たちの說教である。たとへば、小さな黑いけものと大きな白いけものとの格鬪、小獸が大獸を斃すといふ傳說、そして殺されたけものが三日の後に蘇生するといふ傳說を報道して、レミョゾフはつけ加へてゐる。

「この回教徒たちの西伯利についての呪詛は非常にひろく人々の心を感動させてゐる。彼らがこの物語のなかで小さなけものといふのはエルマクのことで大きなけものが回教徒のことであると解されてゐる。そして斃されたけものが三日の後に蘇生するといふのは間もなく回教徒が西伯利を奪ひ返すので「ロシア人の」占領は長いことではない、といふ意味である。」＊

＊「西伯利年代記集」三二八頁。

【原住民の口碑と古代西伯利の地名】

廣く流布されてゐる口碑は地名と結びつけられてゐる。たとへば、トボリスクに近いスウズグンや

調—0523

0178

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

バニイ・ブゥゴルは、クチュムの二人の妻の宮殿に關する追憶と結びつけられてゐる。これについてレミョゾフは、クチュムが「その妻たちを互ひに近い場所に住はせて置いて金曜日ごとに彼女たちのところへ赴いた」と報道してゐる。ここで回教徒の聖祭日（金曜日）が示されてゐることは、傳説が回教徒の源泉から出たものであることを證明してゐる。バニイ・ブゥゴルと關係をもつ口碑が二つある。一つの口碑では、バツィク・トゥラと綽名されるデフレティム・バイ韃靼侯の「城市と要塞」がそこにあつたとしてをり、もう一つの口碑では、そこにはクチュムの妻たちの宮殿があつたので、その妻たちはまたデフレティム・バイの娘たちであつたと云ふのである。トボリスクに住むタタール族たちが、バニイ・ブゥゴルの廢墟とクチュムと同時代に生存してゐたこの韃靼侯に關する追憶とを結びつけてゐることは一目瞭然である。

やはりタタール族の傳説によると、トボリスクの郊外にあるサウスカンスキイ岬には「君侯の墓」があつた、と云ふ。おそらくロシア人から發生したと思はれる別の口碑では、エルマクといつしよに受難した人々の墓がそこにあつた、とされてゐる。**

* 「西伯利年代記集」三二九頁、三一九頁―三二〇頁。

** 同上、三三七頁。

【口碑傳説と原住民の迷信】

さらにレメョゾフの年代記には原住民たちがいろいろな自然現象をそれによつて説明してゐる多くの迷信的な傳説が記されてゐる。これらの迷信はかなり偶然的にエルマクその他の英雄の名と結びつけた口碑をもつて組み立てられてゐる。一例をあげれば西伯利汗國沒落の前兆として語られてゐる北極光のことが、いろいろな形で、たびたび詳細に出てくるのである。

「天までとどく火の柱が立ち、この火柱の中にはいろいろな物の姿が現はれた。……人間が、柱の中にいろいろな恐ろしい姿をして現はれた。鰕ひや、物音までも……」

かういふ記述は北極光を天兵の戰鬪の現象だとする回教徒的な概念とまつたく一致してゐる。*

* 「西伯利年代記集」三一九頁、三二四頁。この場合回教徒的な概念は筆者のキリスト教徒的なイデオロギイによつて甚だしく歪められてゐるのであるが、それにしても彼は此處に「プスリマン物語」を引いてゐるのである。ガルカヴイは「回教文學者の説話」Гаркави: «Сказания мусульманских писателей» 八八―八九頁）の中で北極光に關する原住民の説明を傳へて、それは惡魔の一味と、彼らを探壞するため夜ごとに閙ふ者の姿であると」と云つてゐる。

レミョゾフの「プスリマン物語」の引用は單純で無價値な有りふれたものでなく、また自分の報道が原住民から直接に出たことを示して讀者の興味をそそらうとする著者の文學的手法によるものでも

調―0523

0179

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ない。聖にはまつた引用文の蔭にはいろいろな形の、そして非常に獨創的な、原住民の習俗に特徴的な傳説がひそんでゐるのである。

【エルマクに關する原住民の迷信的傳説】

レミョゾフが報道してゐる原住民の口碑中で、われわれに特別に面白いのは、エルマクの鎧と彼の死後にその墓の上におこつた奇蹟に關する口碑であつて、著者自身も、どういふ狀態のもとで彼がこの口碑を聽き知つたかを詳しく報告してゐる。レミョゾフのこの報告は、口頭でつたへられる傳説が基礎となつて書物の傳統が作りあげられて行く經緯をわれわれに示してくれる點で、價値が多いのである。この話は著者の先祖である前述のウリヤン・レミョゾフがカルムイクの大石（ダイシ）アブライから聽いた「お伽噺」を基礎にとつたものである。アブライ大石（ダイシ）は典型的な蒙古の君侯であつて、彼は或る短期間のあひだ數個の遊牧民族を自分の麾下に統合して、一時それらの民族から成る一つの國家を組織することに成功した。彼は支配下の人民とともに、ロシアの國境からあまり遠くないザイサン湖の沿岸地方を遊牧してゐた。一六六九年（寛文八年）には彼の遊牧部落はトボリスクから速足で十五日路、タラ河畔からは僅か三日路の地にあつて、ロシア人とたえず頻繁に往來してゐた。アブライ大石（ダイシ）は、ブハラ、エルゲニ、それから蒙古や支那のやうな國々に通ずる貿易路を支配してゐたので複雑な

國際關係のなかに立つてゐた。ロシア政府は主として、支那へ旅行する使節や商人の通過を容易にする目的で、彼と親善關係をたもつてゐたのである。*

* アブライ大石については、モスクワ古文書保管所にある外務省保存文書中の「蒙古關係文書」A.M.H.J.《Mytnaxosite nena》一六六八年第二號および一六六二年第三號を見よ。またアブライ大石の使節に關する報道は「西伯利局文書」の六二三號および六五一號を見よ。

【エルマクの鎧に關する傳説】

一六五八年（萬治元年）にアブライ大石はトボリスクへ使節を送つたが、その用件はトボリスク政廳の軍役人を勤めてゐたタタール人カイダウル韃靼侯の所有に屬してゐると傳へられる一つの鎧の讓渡をうけるべく、奔走するためであつた。カイダウル侯は當時既に存生してゐなかつたが、彼が探し求めてゐる鎧は事實その子ベク・マメットのところにあることが判つた。この鎧には怪奇なことが纏綿してをり、カイダウル家ではこの鎧について興味ある傳説が語りつたへられてゐた。ベク・マメットの語るところに據ると

「父カイダウルは死ぬ前に遺言をしたあとでこの鎧のことで私に命じた……この鎧は……大帝に仕へるのと同じやうに大切にせよ。罪にもこれを賣つてはならぬ。過ぐる年に父のアブラエフはバイギシュ大石（ダイシ）がこの鎧を手にいれたく思つてその代價として奴隷十家族と羊千頭を與へるといつたが、この鎧は大石に讓らなかつた……。」

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

レミョゾフの述べてゐるところに依ると、アブライ大石（タイシ）はこの鎧をエルマクが死ぬ時に身につけてゐた鎧であると考へてをり、またこの鎧には奇蹟的な力があると信じてゐた。トボリスクの総督ブイノソフ・ロストフスキイ侯は皇帝の勅命がなくてはこの珍らしい鎧を譲與させることはできぬと云つた。そこでアブライ大石は一六六〇年（萬治三年）にあらためて別の使節をだしてこれを請ひ、今度は目的を達したのである。

特派使節がこの勅許をアブライ大石の「ウルガ」（居城）へもたらして行つたが、その使節中にウリヤン・レミョゾフも加はつてゐた。レミョゾフはこのウリヤンがカルムイク大石（タイシ）のもとへ旅行した時のことについても、その著「西伯利史」のなかで述べてゐる。

アブライ大石は、特に荘大な儀式をもつてエルマクの鎧を迎へうけ、ウリヤンに身をよせてただづねた。

「ウリヤンよ、どこに汝らのエルマクは横はつてゐるか？」

「存じません、」とウリヤンが答へると、アブライは自分たちの歴史について物語りをはじめた。」

【カルムイク王の「エルマク物語」】

彼はタタール族やカルムイク族たちの間に傳承されてゐる、エルマクに關する口碑を語つてきかせたのである。この物語に興味をもつたウリヤンは「アブライ大石に、物語を紙に書きつけて署名と捺印」を請ふた。大石はその願ひを容れて

「エルマク物語をことごとく詳細に生き生きと自國の文字で書き記しおはつて……その上に自分の印を捺してくれた。」

アブライ大石の物語の内容は大要つぎの如くである。

「エルマクが西伯利へ遠征してきて、鹽河のなかへ落ちこんでクチュムから矢を射かけられた時、血がほとばしり、鎧は裂けたが、そのとき鎧からも貢物からも寄贈があらはれた。」

アブライはこの物語を自分の病氣を治療した追憶と結びつけて補足してゐる。

「わしはおそろしく胃をわづらつてゐたが或る時エルマクの墓の土をとつて呑んだ。するとからだが強くなり、いまだに丈夫である。エルマクの墓土をとつてきて、その土を持つて賤さにでかけるとその時はかならず勝つのだ。土を持たぬ時には戰さをせずに引返してくる。」*

＊「西伯利年代記集」三四七―三四八頁。

【ロシア人と蒙古人の傳説におけるエルマク戰死物語の一致】

セミョン・レミョゾフは二つの物語を手にし、彼が手引的な參考書としてゐたエシポフスカヤ年代

西伯利年代記の研究

調―0523

0181

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

記とそれを對照してみて「物語」の根本的な點が年代記と一致してゐること、新らしい點はただエルマクの屍體の發見と奇蹟とに關する報道だけであることを信ずるにいたつた。そして云つてゐる。

「（エルマクは）どのやうな狀態で死んだのであるか……（アブライのエルマクに關する）物語はわれわれロシア人の歷史と不思議なほど一致してゐる。」*

*「西伯利年代記集」三四八頁。

【「エルマク物語」におけるタタール的迷信の要素】

エシボフスカヤ年代記のエルマクの戰死に關する物語をレミョゾフスカヤ年代記の物語と比較對照すれば、われわれはレミョゾフのもとにただ一つエシボノにはない詳細な描寫を發見する。エシボフの年代記では簡單に、エルマクは「鐵を着てゐた重味のために一溺死したと語られてゐるだけであるが、レミョゾフの年代記では「皇帝（アブラ）から賜はつた二枚の鎧を着てゐた……」となつてゐる。この皇帝からエルマクに下賜され、そして彼がワガイ河の波に呑まれて溺死する原因となつた二枚の鎧に關する報道と、それからレミョゾフの年代記に獨特な「病氣を癒やし戰爭や狩獵のときに成功を與へる」といふ墓の「奇蹟」に關する報道とが、蒙古王アブライの「物語」から藉りて來られたことは明白である。*

*「西伯利年代記集」三四六頁。

それ以前の諸文獻（ストロガノフスカヤおよびエシボフスカヤ年代記も過去帳も）はこの鎧のことについて何ら知るところがない。それと全く同じに、エルマクの墓の奇蹟に關する口碑もアブライの「物語」から採られたものである。この口碑は純粹に原住民的な發生にかかるものであつて、それは回教聖者の墳墓の一つである「曲りくねつた松の樹の下にあるバイシェ（シェイフ）聖者の廟の跡にある墓の口碑と關聯をもつものである。*

*「西伯利年代記集」三四六頁。回教聖者の諸廟、とくにハキム・シェイフの廟については「トボリスク縣博物館年報第十四册、カタノフの「聖者ハガウザンの弟子達と異民族との宗教戰爭について」Епископ. Тобольск. Муз. Изв. XIV. Каталог: «О религиозных войнах учеников Ишака Ишаргина против инородцев»」を參照。

一般的な點では西伯利局文書によつて裏書されるレミョゾフの物語は、ロシアの文獻のなかへ原住民の口碑がはいり込んできた經緯そのものと、その時代のロシアの學者がそれを利用した手法とを具體的な形で描きだしてゐるのである。

二、西伯利征服の年時の問題

「著述」の初步的な萠芽である年代記の檢討を終るにあたつて、西伯利侵略の年時の問題について一

調—0523

0182

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

言しておく必要がある。といふのは、十七世紀時代の學問的著作の手法は特に、明確な年代的配列の上に組立てられてゐるからである。

第一源泉中にあげられてゐる年時はエルマク遠征の年時の基礎として採用されてゐる。「過去帳」とエシボフスカヤ年代記とを對照すると、エルマクが西伯利へ侵入してきた年は、二つの原文の共通するところでは世界創造の年から七〇八九年となつてゐる。その後の事件は十月中に展開されてゐるのであるから、結局キリスト降誕後一五八〇年（天正八年）といふことになる。その他の年時は「過去帳」もストロガノフスカヤ年代記も次ぎのやうな調子をもつて書きつけてゐる。

「その年の夏」、「その年の冬」、「第二の年の夏」、「エルマクが死んでから第二の夏」等々といふ風である。その代りに日と月とははつきり報道されてゐる。

十月二十三日、チュワシュ近郊の戰闘。
十月二十六日、イスケルの占領。
十月五日、アバラク近郊のカザック殲滅。
八月五日「西伯利占領後の第四年」エルマクの戰死。
「エルマクの死後第二年の夏、セミヨン祭の後」――イワン・マンスーロフの到着。

エシボフスカヤ年代記はボルホフスキイの西伯利到着の年を「西伯利占領後第二年の夏」とし、（世

界創造の年から）七〇九一年（七〇九〇年となるべきであらう）としてをり、エルマク戰死の年は七〇九二年、すなはち一五八四年となる。

ストロガノフスカヤ年代記は皇帝の勅書から次ぎの年時をとつてゐる。

七〇八〇年七月十五日、チェレミス匪賊襲來の日。
七〇八一年七月二十日（漫言者イリヤの記念祭日）マフメット・クル襲來の日。
七〇九〇年九月一日、ベルイムスキイ韃靼侯襲來、西伯利へカザック派遣の日。＊

＊ベルイムスキイ韃靼侯襲來の年時は一五八一年十一月六日附および同年十二月二十日附の公文書により決定される。この事件はイワン・エレツキイ侯のベルム軍務知事時代の出來ごとである。ストロガノフがエルマクを派遣したのがこれと同時であつたことについてはその後の一五八二年十一月十六日附の公文書で言はれてゐる。「外務省保存文書」中のストロガノフ家關係文書および「歷史的公文書」第一卷補遺、一二八號。

ストロガノフスカヤ年代記が次の年時をどこから採つてきたかは不明である。

七〇八七年四月六日、ストロガノフ一族がエルマクのことを聽いた。
七〇八七年六月二十八日（聖キリィルおよび聖ヨアンの記念祭日）エルマクがストロガノフのところへ來た日。
七〇八八年七月二十二日、ベクベリ韃靼侯襲來の日。
七〇九〇年九月九日（ヨアキムおよびアンナの記念祭日）カザックの西伯利到着の日。

これはストロガノフ家に口傳されてゐるところに據つたので現在までわれわれに傳へられてゐる文

調―0523
0183
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

書以外のものを源泉としてゐるのでもあらうか。その他のものは、複元しがたいほど不明確な年時である。

【諸年代記におけるエルマク遠征と戰死時の不一致】

いづれにせよエルマク遠征の始まりが七〇九〇年（一五八〇年）に當るとすれば、彼の戰死は七〇九三年、すなはちキリスト降誕後一五八三年でなければならぬ。

かくエシボフスカヤ年代記とストロガノフスカヤ年代記とは同一の年時を與へてゐない。遠征の年は兩者において一年の差がある。これは當然その後のすべての年時の上にも反映されてゐる。

遠征の期間* もおなじく餘りはっきりしてゐない。「ナピサニエ」（手記）はこの點について正確な指示をしてゐなかつたものと思はれる。

* マイコフ「西伯利の露領併合三百年記念祭に寄せて年時の究明」Майков: «Хронологическая справка к 300-летней годовщине присоединения Сибири к русской державе» (文部省雜誌一八八一年第九號)

エシボフスカヤ年代記もストロガノフスカヤ年代記も、エルマクが九月に遠征に進發して十月二十六日にはすでにイスケルを占領したものと解してゐる如くである。だがレミョゾフは、正確にいへば彼が利用したエシボフの年代記以外の第二の源泉は、全然別個の年時を當ててゐる。

レミョゾフのもとでは、彼がエシボフを手引としてをらぬ箇所では、年代の點では誤まりに滿ちてゐて問題とするに足りない。*

* 遠征の始まりを一五七九年——一五八〇年の冬としてゐて、一五八一年五月にトゥラ河を航行してゐる。マフメット・クル襲撃の年を一五八二年に當て、しかも彼れをフョドル帝（一五八四年三月即位）のもとへ伴れて行つたと述べてゐる、等々。私はここでは後になつて「西伯利史」のなかへ入つたクングルスカヤ年代記の年時表には言及しないことにする。

その代りにこの不明の年代記から採つて來た月日は非常に興味あるものである。それによると遠征は二箇月間で完遂されたのでなく、まる一年間にわたつてゐる。エルマクは冬に「ベルイムスキイ郡を占領し……春になつて水嵩が增すのを待つて」それから先きへ進擊した。五月一日にタギィル河を下航し、＊六月八日トボル河にいり、六月二十二日にカラウリヌイ・ヤァルに達し、七月二十一日ババサンにおいてマフメット・クルと戰鬪を交へ、八月一日「カラチン城」を奪取してカザックたちはそこに九月十四日まで滯在し、十月一日にチュワシュ近郊の戰鬪、同二十三日にチュワシュ近郊における第二回の戰鬪＊＊そしてその先きはエシボフの年時（十月二十五日イスケル郊外の戰鬪、同二十六日イスケル占領）によつて次いでゐる。

＊ 別の源泉にはカザックが夏ぢう時々戰鬪をつづけ八月一日にチュメニを奪取したことが報ぜられてゐる。

調—0523
0184
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊＊不詳の年代記の年時をエシポフスカヤ年代記の年時と繋ぎ合せようと企図したことはチュワシュの戦闘の物語が二重になつてゐるので判る。不詳の年代記によるとエルマクは「アチン城」を出て十月一日に戦闘を交へてゐるが、エシポフによるとこの出来事は十月二十三日に起つたことになつてゐるので、レミョゾフは、カザックが第一回の戦闘ののちアチン城へ引返し、それから十月二十三日に第二回の戦闘をしたかのごとく統合しなければならなかつた。

【レミョゾフ年代記の歴史的眞實性】

若干の矛盾は發見されるのであるが、ミルレル以來多くの研究家がレミョゾフの記述をもつてエルマク遠征の歴史的基礎としてゐるほど、全事件の進行が眞實に似てをり、そしてそれには充分の理由あることを認めざるをえぬ。

他方また事件がまる一年間にわたつて續いてゐることは年時上の問題をさらに一層複雑ならしめてゐる。要するにただ年代記のみを基礎にとつて、その條件的な時間を計算することで解決さるべきものではなからう。

二、「ナビサニエ」を源泉とせざる年代記

いままで檢討してきた西伯利に關する歴史文獻上の記念物はいろいろな程度においてキプリアンの「過去帳」のなかに記述されてゐる最初の「ナビサニエ」〔手記〕に基礎を置いてゐる。だが十七世紀の西伯利の歴史的編纂物は、この種の年代記だけに止まるものではない。

イ、「クングルスカヤ年代記」

前述の第一源泉には當て嵌めることのできぬ、全然獨自の性質をもつ年代記の斷片がわれわれに傳へられてゐる。さうした年代記の最初の本文中に收められてゐる。＊

＊最初の基礎的な本文と附加された部分とは筆致や挿畫の技術において甚だしい相異があるにかゝはらず私はこの挿入がレミョゾフ自身かもしくは彼の息子達によつてなされたものと敢て推測する。その根據は「クングルスカヤ年代記」のセレブリアンカ河畔にエルマクが遺棄した船に關する報道がレミョゾフの地圖書の一つに記載されてゐる標記の材料となつてゐるといふ事情である。

これから取つた多くの抜萃はレミョゾフ年代記のおもしろい標本は「西伯利クングルスカヤ年代記略」であつて、そ

この新らしい源泉からの報道を、物語の基礎的な部分と結合したり節節を合せたりするといふ企ては少しもなされてをらぬ。だからわれわれはエルマク遠征の若干のモメントについて、他の年代記の物語と併行的に、歪められざる形でクングルスカヤ年代記の物語をもつこととなる。さういふ事情は或る程度までこの現在われわれに傳へられてゐない記念物についての判斷を可能ならしめるのである。

調—0523

0185

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

この作品に残されてゐる表題そのものは、それが十七世紀後半以降に發生したものであることを示してゐる。クングルの町は一六四八年――一六四九年（慶安元年―二年）に建設されてゐるからである。

【クングルスカヤ年代記の民間傳說的色彩】

クングルスカヤ年代記の特徴的な點は、それが粗野な諧謔に滿ちた、純粹に民間的な形式をもつことである。たとへばカザックについて、彼らは最初「へまをやらかした」のであつて、チュソワ河を易々と辿つて西伯利へやつて來たのではないことを諧謔まじりに物語り、またエルマクについても、彼れがただ單に毛皮稅（ヤサク）のために西伯利へやつて來たのでなく「ついでのことにうまい汁を吸つてやらうと……」等々。或る表現は歌詞の形をとつてゐる。

サヴェルを手にふり
毛皮稅を手でとり

といつたやうな歌の調子はギルシャ・ダニィロフの民謠集の文句の一節である。個々の挿話は殆んど悉く佛噺風な言葉で綴られてゐる。たとへばエルマクの一隊を次ぎのやうに描いてゐる。

「例の名うてのエルマク・ボヴォリスキイとその一味の泥棒どもは……エルマクには二人の朋輩――イワン・コリツォとイワン・グロザァがあつた。ボグダン・ブリァズガと四人のカザック頭目、それにつづいて書き役ども、喇叭吹きに笛吹き、太鼓たたきやら鉦たたき、旗持ち雜兵をひき伴れた百人長、五十人長、十人長。おまけに坊主が三人、乞食巡禮が一人、黒い法衣も着ずに歩きまはり、掟を作つたり、お經を炊いたり、武器彈藥を調べたり、お寺の式を勤めたり。命令にそむく奴ばらは縄でたたき伏せる。いやになつて逃げださうと思つたが最後、ドン・カザック式に袋へいれて首のところまで砂を詰めて水の中へドンブリほうり込んでしまつた。さてエルマク隊はだんだん強くなつたが、二十人あまりも砂と石をおもしにしてスイルワ河へ叩きこまれた。」＊

＊「西伯利年代記集」三二六頁。

エルマクがカザック頭目を左右に引きつれてマクシム・ストロガノフのところへ援助をたのみに行つた時の態度も同じやうな口調である。

「こら、土百姓め！　てめえは命が惜しくはねえのか！　鐵砲玉でどてッ腹を穴だらげにしてくれるぞ！　俺たち一黨五千人に腊の名を書いた證文と引換へに一人當り火藥三斤（プド）……小麥粉三プード、乾パン一プード宛よこしやアがれ！」云々。

＊「西伯利年代記集」三一五頁。

【「物語」の手法におけるカザック的雰圍氣】

遠征隊の人員が五千人といふ數字そのものもやはりお伽噺的な性質をもつものである。クングルスカヤ年代記の一貫した形式は、全體として、ヤルカ・ハバロフの「ダウル遠征物語」の手法を彷彿たらしめるものがあり、或る程度までその物語を生んだカザック的雰圍氣を特徴づけてゐる。それは西伯利征服者の標本としてのカザック・ティモフェヴィチについての記憶がまだ生々しく、彼らが信仰

調―0523

0186

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

のための殉教者化され、宗教文學の粉本となる以前の純カザック的なほがらかさをもつものである。

【クングルスカヤ年代記の源泉の複雑性】

以上すべての點からみてクングルスカヤ年代記は西伯利カザックの間に發生したエルマクに關する單純なお伽噺ではない。その源泉はきはめて複雑である。レミョゾフの年代記と同樣そこにはまづ第一にロシア人の傳說ばかりでなく原住民の口碑や傳說が含まれてゐる。のみならず非常に精確な記錄がある。セレブリァンカ河とバランチァ河の間の連水陸路のいろいろな場所に古い船が棄てられてゐて、その底を貫いて樹が生えてゐるといふ傳說は、ミルレルが西伯利旅行中にロシア人からもヴォグル族からも聽いたところのものである。*

＊「西伯利年代記集」三四二頁。ミルレル「西伯利國誌」Müller: 《Description Cnd. imperiae》 一〇六頁。

【タタール傳說の要素】

タシャトカンの岩石に關する物語は非常に興味あるものである。

「その石からときどき雨や雪が降つて出る。」

これはタタール族の「デェタミシュ」にたいする信仰とまつたく一致してゐる。ラシッドは述べてゐる。

「夏でさへも雪まじりの暴風が吹きおこつておそろしい寒さになり、雨が滿然と降つてくる。」

十七世紀時代のトムスキイ郡の原住民の間に、かうした信仰の存在したことは文書によつて證明されてゐる。

＊「西伯利年代記集」三四二頁。ロシア歷史文庫」《Proc. Hon. Bafin》第二卷。ドーソン「蒙古史」D'Ohsson: 《Histolie des Mongols》第二卷。ミルレルの著書一八六頁參照。ミルレルの記述によるとタタール族はさういふ岩石を「ギル・タシュ」《Tas-tam》と名づけてゐる。その意味は「天氣を造りだす岩石」といふことである。

或る一つの場合、本文中にタタール族の「王妃の哀歌」の歌詞が挿入されてゐる。

《勇士よ、勇士よ、五人のカザックよ、汝らは勝ちて滅ぼしぬ》

＊「西伯利年代記集」三四二頁。ビシュはタタール語の「五」であつて「カザック」は「づはもの」の意である。

そこにある個々のタタール語の幾分とも正しい發音がわれわれの注意をひくのである。

クングルスカヤ年代記中にある人類學上の若干の報道は非常に價値あるものであり、また正確である。だとへばチァンドゥイスキイ砦市でシァマンが祈禱をする場合のきはめて生彩のある記述は、後世の旅行家の記すところと全然一致してゐる。

【エルマク遠征とイワン雷帝の諮問狀】

クングルスカヤ年代記の筆者はロシア人および原住民の傳說やその周圍で觀察しえた風俗習慣を記述してゐるとともに、文書的な記念物のことも知つてゐたらしい徵候がある。筆者はストロガノフの

調—0523

0187

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

文書中から「エルマクの城砦」のことを引用してゐるし、またイワン雷帝がエルマクの遠征によつて西伯利のスルタンとの友好關係を破壞したと怒つてストロガノフ一族に送つた詰問狀のことも知つてゐる。だが年代記の筆者はこの勅狀を自分一流の民間的なスタイルで記述してゐるのである。

「土百姓よ！　汝はなぜあのやうに強い隣人といさかいをして吾らの間にいざこざを起させるのだ。身のほどを知らぬ奴ぢや。」云々。*

年代記の筆者は文書を親しく讀んだわけでなく傳聞によつて記述したのであらう。ストロガノフ一族のなかで筆者が名を知つてゐるのはマクシムだけである。

* 「西伯利年代記集」二二六頁。ミルレルでは一二〇頁。

【屬住民土侯の人名における歷史的確實性】

クングルスカヤ年代記の構成はきはめて雜然としてゐるが、他の西伯利年代記にはない非常に多くの具體的事實を報道してゐる。年次が極度に混亂してゐるのに月と日を詳しく報じてゐるのは、何か當時の記載を源泉として利用したものと考へられる。またカザックが戰つたオスチャク族やヴォグル族の土侯の名もあげてゐて、或る場合にはその資料の正確さを指摘することができる。有力なオスチャクの土侯サマルの城砦をカザックがどういふ風にして占領したかを詳細に物語つてゐる。このサマルの後裔タイル・サマロフはワシリイ・シュイスキイ帝の時代に、またバイバラク・サマロフはミハイル帝の時代に、ペロゴルスキイ地方における「上流の人々」に數へられてゐたことが文書資料によつて確かめられる。またサマルの城砦につ

いてはミルレルも現地で踏査を行つてゐる。* クングルスカヤ年代記中に散見する多くの地名は十七世紀時代の收稅臺帳について檢索することができる。**

* グネウシェフ版「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」《Акты царств. Iоанна Шуйского》第六一號および第一一八號。「西伯利局文書」第七三號。ミルレル「西伯利國誌」一六一—一六二頁。

** 「西伯利局文書」銘十九號。ミルレルは西伯利旅行中にそれらの地名について現地踏査を行つてゐる。

それが誤記でないとすればこの年代記はきはめて興味あるものと云はねばならぬ。筆者はまたオスチャク族の土侯デマヤンの城砦を急襲する場面を描いて「これが進擊の手始めだ」と書いてゐる。この言葉は物語の筆者が戰鬪の參加者ではないかと思はせるものがあるが、或はも伽噺的な言葉の綾であるかも知れぬ。

【クングルスカヤ年代記の獨自性】

以上によつて、クングルスカヤ年代記の構成が多樣で興味多く且つ謎に滿ちてゐて、いかに完全な形を失つてゐるかといふことが判る。この書は現在まで充分全面的な研究がなされてをらぬ。だが、かなりの程度において口頭による傳說や正確に決定しかねる材料を基とする前のストロガノフおよびエシボフの年代記を第一源泉としてをらぬ特殊の西伯利年代記の典型として、この書は唯一のもので

調—0523

0188

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ないにしても興味多きものたることを失はぬのである。

四、「西伯利新領土誌」中の年代記

【ヴィトセンの「タルタリイ物語」の源泉】

これと同種の年代記に相當するのは、ヴィトセンの「北東タルタリイ物語」《О сѣверной и восточ-ной Тартаріи》の源泉となつた有名な「西伯利新領土誌」《Описаніе новыхъ земель Сибирскаго

rocy,apcтва》中にはいつてゐる年代記である。

私の課題は「新領土誌」の源泉の究明にあるのではないが、この「新領土誌」がいろいろな時代の文書から編纂されてゐること、そのうち若干のものが西伯利局文書から採つてきたものであることは疑ひない。ヴィトセンが西伯利局の長官をしてゐたアンドレ・ウィニウスから材料の提供をうけてそれを利用してゐるといふ事情は、「新領土誌」がこの官廳で編纂されたのではないかと考へさせるのである。

【西伯利新領土誌編纂の時期】

「新領土誌」が書かれた時期は正確に推定することができる。同書の中には一六八三年〔天和三年〕に支那人がゼィヤ河畔にあるロシアの二つの柵を奪取したことが記されてをり、他方また一六九七年〔元祿一〇年〕に死んだカルムイクのボショト・ハン（ガルダン）のことが、まだ生存者として書かれてゐるのである。*

* パラス「蒙古民族史調査資料集」Pallas, «Sammlungen historischer Nachrichten über die Mongolischen volker-schaften»〔一七七九年第一卷、六二頁。

【新領土誌の獨自性】

「新領土記」の中には西伯利占領の物語がはいつてゐる。そこには、われわれの知つてゐる各種の年代記と直接に連絡があるとは云へぬ相當充實した歴史的記述がある。この「新領土誌」は他のものには無い詳細なことを書いてをり、聖のちがつた全然別個の作品である。

「新領土誌」の物語はクングルスカヤ年代記と同樣にカマ河の沿岸と密接な關係をもつてゐる。それはカマ河畔の地勢——ウサ河、サラプルの町、ルブナヤ河、チェルトワの町、とくにストロガノフ家のことを記述してゐる點で明らかである。これらの報道がなんらかの文書の中から採られたとは考へられぬ。クングルスカヤ年代記の報道とおなじにそれは口供を基にして書かれたもので、そのうへ報道が正確で、疑はしいところがない。

調—0523

0189

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「ところでこのストロガノフは本來ノヴゴロド生れの男で、場末の住民であつたがロシアの皇帝イワン・ワシリヴィチ大帝に死罪に處せられるのを恐れてノヴゴロドから一家二族を引きつれてズイリァン、つまり大ペルミへ逃亡し、大河ウスチュグを越えてカマ河の上流へ辿りつき、カマ河の岸の肥沃な土地へやつて來た。」*

＊「西伯利年代記集」三六九頁。

やはり傳聞によつてマクシム・ストロガノフがエルマクの遠征に資金の援助をあたへたといふ物語も報じてゐる。これらの資料はすべてその地方でのみ得らるべきものである。なぜなら、エシポフやレミョゾフの例で判るやうに、西伯利の奥ではストロガノフ一家のことに關心を持つてをらぬし、西伯利占領の事業におけるこの一家の役割についてあまり知られてゐないからである。*

＊レミョゾフの「西伯利史」の基礎的な部分では、エルマクが「オリョルの町まで來てストロガノフの深山の砦柵の中から武器と小麥を手にいれてチュソワ河を先きへ急いだ」（「西伯利年代記集」三一七頁）と述べてゐるだけで、それ以外にストロガノフ一家のことには觸れてゐない。

だが、トボリスクの地理をはつきり知悉してゐる點からみると、筆者はトボリスクの住人であつたらしい。

「トボリスクの砦市はトボール河から二行路ほど上流のイルトゥイシュ河畔の高い丘の上に立つてゐる。

彼れはまたエルマクが宿營した場所についても書いてゐる。

「トボール河を進んできたがトボリスクまで七行路ある今のシーシュキン村の洞窟で宿營した。」

（トボリスクに近いシーシュキン村のことは十七世紀時代の古文書によつて廣く知られてゐる）

そして翌くる日

「トボリスクの丘の下を船で進み、現在官用の穀倉の立つてゐる草原へ上陸した。」*

＊「西伯利年代記集」三七二頁。

それに劣らずはつきりとアバラクの位置を「トボリスクから二十行路ばかりだつてゐる」＊と書いてゐる。西伯利の主府を熟知した人物でなければこれほど正確な記述はできぬ。この筆者はおそらく、山腹から投げ槊てられてカザックの呪術で威力を失つてしまつたといふクチュムの大砲の傳説と關係のある二つの大砲も親しく目撃したのであらうか、その大きさまで詳細に報じてゐるのである。＊＊

＊同上、三七五頁。

＊＊「西伯利年代記集」三七五頁。この距離は一六六七年の地圖と一致してゐる。

【レミョゾフ年代記との一致點】

筆者がレミョゾフと同じやうなトボリスクの文官か軍人で、その上に「大ペルミ」とも連絡のあつた人物であることは明らかである。この筆者の材料はレミョゾフがエシポフスカヤ年代記を補ふために利用したところのものと非常に似てゐる。それはロシア人および回教徒の口碑である。レミョゾフ

調—0523

0190

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と同樣に彼れは洞窟に關係のある若干の傳說を知つてゐる。

「西伯利のツァリ・クチュムは土を盛りあげた木造の城廓をもつてゐた。」

それからまた

「アバラクはクチュムのお氣に入りの領地であつた。」

とも書いてゐる。

彼れの利用してゐる若干の口碑――たとへばクチュム汗の大砲に關する口碑はレミョゾフのそれと一致してゐる。彼れは奇蹟の鎧に關する傳說も聽いてゐたやうである。といふのは、エルマクの戰死に關する彼れの物語では二着の鎧のことが描かれてゐるからである。エルマクの屍體がどういふ風にタタール族たちに奪ひ去られたかについてはレミョゾフと少しちがつた記述をしてゐる。同時にわれわれは彼れの物語中で、レミョゾフにはない口碑にぶつかる。それは純民間的な性格をもつ要塞に關するお伽噺である。

【新領土誌における原住民習俗の報道】

最後に、物語のなかに原住民の習俗について、口碑を誤解した記述があるが、その關係ではクングルズカヤ年代記と似た點を指摘することができる。非常におもしろいのはクチュムが軍隊を召集するとき、金塗りの矢を諸方に廻附したといふ物語である。

「勅命のかはりにその金で塗つた矢を遣はすと、見る見るうちにどこからともなく敵がわれわれの所へ集まつてくる。」

矢をもつて宣戰布告のしるしとする習慣は周知のごとく多くの原始民族のあひだに存在したし、特にわれわれは十七世紀初の西伯利ではオビ河沿岸のオスチャク族の間でそれを見ることができる。※※

※ 同上、三七一頁

※※「ワシリイ・シュイスキイ帝時代の公文書」第六一號および第一一八號。

物語の筆者はこの習慣について聽き知つてゐたらしくそれをクチュムに結びつけたのであらう。

【エルマク遠征隊の人員と「物語」の眞實性】

マクシム・ストロガノフの子孫を知つてゐた者の口述による說話、それからロシア人や原住民の傳說、その地の習俗の觀察などから組立てられたこの物語は、當時の文書資料に關係のある若干の報道をも傳へてゐる。たとへばクングルスカヤ年代記にみるお伽噺的な數字とちがつてこの物語はエルマク遠征隊の人員を多少とも信を措くに足るべき六百人としてゐる。それはエシボフスカヤ年代記とストロガノフスカヤ年代記が傳り來つた資料（五百四十人とする）と略ぼ接近してゐる。

イスケル城外の決戰の前におこつた出來ごとの記述から判斷すると、エルマクとその同僚たちが最

調―0523

0191

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

後の瞬間に神の加護を信じ、また皇帝に忠節をつくす決意を語つて互ひに勵まし合つたといふ、第一源泉中の末段の物語を筆者は知つてゐたと結論することができる。彼れはそれを自分一流の言葉で記述してゐる。それを話できいたのか、それとも當時としては感銘的で深い教訓を含んだこのエピソードを親しく讀んでゐたのでもあらうか。しかし少くともその原文が手許になかつたことだけは明白である。

レミョゾフが不詳の年代記から採つてきた諸事實——たとへばチュメニ占領の事實と、彼れの若干の報道とは符合してゐる。

【「物語」と公文書との關係】

最後にまた皇帝へ使者をだす場合の記述中にある、モスクワへ齎らされた「官用毛皮」の數字の精確なことに驚かされるのである。

この官用毛皮の數量の書き方（黒貂六十ソーロク、海狸五十、黒狐二十）とそれから黒貂についての官廳用の術語「腹毛と尾の完備せるもの」*などいふ報道は、それが公文書中から採られたものと考へられるのである。「ソーロクは古代ロシアの四十單位の數量である——譯者」

エルマクが皇帝に送つたと稱される嘆願書について云へば、それは疑ひもなく民間的な嗜好をもつて書きあげられてゐる。

十七世紀時代の若干の文學的遺物にこの物語が影響をあたへてゐることが認められる。たとへばエシボフスカヤ年代記の簡約版がそれで、マクシム・ストロガノフの役割やエルマク遠征隊の人員に關する點はおそらくこの物語から採られたものである。**

* 「西伯利年代記集」三七五頁。

** 同上、二九六—三一二頁。

三、十七世紀末および十八世紀における年代記

【十七世紀末以降の年代記編纂の科學性】

以上われわれが檢討してきた諸作品は、年代記と名づけられてはゐるが、本質において年代記というよりも全く文學的な形で西伯利占領の歴史を描いた歴史小説に近いものである。十七世紀の最後の十年間において西伯利の過去にたいする學問的な興味が高まり、レミョゾフの繪入り「西伯利史」や歴史的地誌の出版にそれが反映されるとともに、きはめて興味のあるそして大がかりな著作がトボリスクで完成されてゐる。それは、主としてトボリスクの會所（メゼヤトニズ）および聖ソフィヤ寺院の保存文書中

調—0523

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

からと、一部は若干の文學的遺物の中から採つた資料を基礎にして、一五七二年（元龜三年）以降の西伯利の諸官廳や宗教界の重要事件を要約した編年的な年代記の編纂である。この文集は現在まで二種の版が傳へられてゐる。初期のものは一六八七年（天正一五年）までで終つてゐるトボリスク中央寺院所藏の「覺帳」«Книга записная»であり、後期のものは一七〇二年（元祿一五年）までの出來ごとを記載してゐる。ノヴィコフの「古代ロシア文庫」«Древняя Российская Вивлиофика»中に收められた「勤役者の西伯利歷史紀要」«Записки к истории Сибири служащих»＊である。トゥイジノフの西伯利各市の年代記に關する美事な研究＊＊によつて證明されてゐるごとく「覺帳」も「紀要」もともに一六八七年（貞享四年）までは共通の材料を利用してゐる。

＊第一版、一七七四年——一七七五年第六卷および第七卷。第二版、一七八八年第三卷。

＊＊トゥイジノフ「西伯利各市の年代記覺書」Тизенгоузен о городских летописях Сибири»第一卷「トボリスク年代記」

【「覺帳」および「西伯利歷史紀要」の內容】

これら二書の內容は編年的に配列された各種の報道である。

一、西伯利各市の軍務知事の任命。砦市および橋の建設。西伯利官界の主要なる出來ごと（たとへば大檢察使について。軍務知事相互間の紛爭について。アジア諸國へ派遣された使節團について。異民族の征討について。

二、西伯利の教會へ派遣された大主教の任命について。彼らの行政的活動について。

三、トボリスク市の出來ごと、たとへば火災その他について。

【「覺帳」および「紀要」の源泉】

そのほか全ロシア的な最も大きな出來ごと（皇帝の死および卽位、混亂時代の諸事件）の報道が加されてゐる。そして「覺帳」においては、それがソフィヤ中央寺院に屬することでも判るやうに、西伯利の宗教界の上層に接近してゐた者の手で編纂されたのであるから教會關係の出來ごとの報道が詳細且つ完全である。最初の編纂者が利用した材料の源泉は多樣である。西伯利占領の歷史については一部を他の材料で補ひながら、エシポフスカヤ年代記に據つてゐる。全ロシア的な報道は主として「新年代記略」に據つてゐる。しかし書物の主要部分は會所および保存文庫の公文書を基礎として編纂されてゐる。採りあげられてゐる諸事實はトゥイジノフによつて檢討ずみとなつてゐる如く、とくに正確である。事實、私は西伯利局公文書の中でこの年代記中に要約されてゐる多くの事件に逢着してゐる。たとへばマンガゼイ軍務知事間の衝突事件、テリャチェフスキイ侯とフメリョフ・スキイの遭難事件、ゴドゥノフ事件その他）

【編書の歷史文獻的價値】

これらの記錄書の價値は斯くのごとくきはめて大きい。それが充分に評價されてをらず且つ割合に

調—0523

0193

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

利用されてゐないのは遺憾である。要するにそこには全百年以上にもわたる西伯利の重要事件が年代順に體系的に配列された鳥瞰圖となつて編纂されてゐるのである。

【西伯利年代記略】

年代記の形式をもつてする編年的な重要事件の鳥瞰は、西伯利占領の物語とともに十七世紀における歴史創作の特徴的な現はれの一つである。全十八世紀時代を通じて同じやうな集成書がこれらの書籍を模範として西伯利で編纂されてゐる。一五九〇年から一七一九年（天正一八年――享保四年）までの諸事件を包括する「西伯利年代記略」《Сибирский летописец》*がそれであつて、それは第一源泉以外に、何らかのトボリスクの地方的記錄を利用してゐるやうである。

* 一八二六年に印刷された「北部保存文書」《Северный архив》第十九巻第二、三號に記載されてゐる。

【全西伯利岩柵建設年代要覽】

また一七九二年（寛政四年）に出版され一七九一年（寛政三年）までの出來ごとを包括してゐる「西伯利占領以來のトボリスクおよび全西伯利砦市並に柵の知事、軍長、縣知事、その他の官吏の人名並に砦市建設の年代要覽」《Краткое показание о бывших как в Тобольске, так во всех сибирских городах и острогах с начала взятия Сибирского государства воеводах и губернаторах и прочих чинах, и кто какой город строил и когда》その他も同樣である。

【チェレバノフの新西伯利史】

本質においては各種年代記の材料を基礎にして巧みに編纂したイ・チェレバノフの一七五九年（寶暦九年）までを包括する「新西伯利史」《Переданов: «Новая Сибирская история»》もこの型に屬するものである。この書はミルレルの「西伯利國誌」（但し一六一九年まで。著者はミルレルの著作の續きが「月刊文集」Ежемесячные сочинение に載つてゐることを知らなかつた）レミョゾフおよびエシボフの年代記、「フロノグラフ」、「新年代記略」、ノヴィツキイの文集「オスチャク族について」《О народе остяком》その他の文獻材料から採つた諸報道を年代順に配列したものである。

チェレバノフは「覺帳」もしくはノヴィコフの「紀要」のごとき年代記中にある雜記もむろん利用してゐるし、その土地の發生にかかるいろいろな物語も利用してゐる。このトボリスク生れの獨學者・聖書學者の著作の獨立的な價値はあまり大きくないが、當時の教養ある西伯利人の嗜好と興味とを明瞭に示す標本たることを失はぬ。*

* チェレバノフの「新西伯利史」の抜萃は一八二一年および一八二三年にスパスキイによつて「西伯利時報」《Сибирский

調―0523
0194
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

Beerohms》に記載されてゐる。

十七世紀時代の寫本文獻を十八世紀の學問的な諸文獻と一つに統合した「新西伯利史」は、古代モスクワ的な著述家の學問から、新たに設けられたアカデミア外國人教授たちの新式學問への逐次的な移行を具體的にあらはしたものである。幾世紀もの長いあひだに生成された廣範な社會層の歴史觀と古い學問的思索の方法とは、古代モスクワの生活習慣がおのれに緣遠い西歐文明をごく緩漫に攝容して行つたごとく、唯だ緩漫に西歐の科學的方法に席をゆづつて行つたにすぎぬ。

第二章　十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

一、十八世紀における西伯利の學術調査

【西伯利の科學的調査研究の要求】

十八世紀に入るや西伯利の科學的研究時代が到來した。ピョトル大帝の時代以來いちじるしく目だつてきたロシア商工業の發達が、ロシア帝國に屬するウラル以東の廣大な地域とその天然資源の、より綿密な調査を必要と感ぜしめたことは疑ひなきところである。それとともに地理學にたいする西歐の一般的な關心がここにも反映された。無自覺でそして自然發生的な西伯利嚮野の侵略といふ時代が終りを告げ、政府もロシアの一般社會もアジアにおける自己の獲得物をより廣範な見地から觀察するといふ時代がやつてきた。別のことばで云へば、ピョトル大帝がその外國旅行中に知見し、そして彼を驚嘆させるとともに彼れの興味を惹きつけた地球表面に關する研究といふ偉大な事業に貢獻をせねばならぬといふ任務が、ロシアに課せられたのである。グメーリン（九〇）の言葉をかりて云へば、北部アジアはなほまだ「地理學者たちにとつて模糊たる雲霧のなかに深く閉ざされてをり……すべての領域

調—0523
0195
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

がタルタリイといふ名稱をもつて十把ひとからげに呼びなされ、その地上に住むすべての民族はタタール人として片づけられ、そしてその陸地がどれほど遠く（東方に向つて）展開されてゐるのか、またその陸地がアメリカに接續してゐるのか或はまた海をもつて隔離されてゐるのかさへも知らなかつた」のであつた。*

そこで、一方からは「商業上の現實的な利害」が、また他方からは純學術的な興味が、ロシア政府を刺戟して露領アジアの調査研究に着手せしめたのである。

【メッセルシュミットの調査計畫】

一七一九年（享保四年）にはすでにドクトル・メッセルシュミット〔九一〕**が政府との契約によつて西伯利へ派遣されることとなつた。この契約によると彼れは西伯利の地理、その自然、人種學上および歴史上の遺物、西伯利の古代生活、それからまた一般にすべて「注目に値するもの」一切の調査研究をなしとげることを義務とした。

＊グメーリン「紀行」第一巻序文。

＊＊メッセルシュミットについてはペカルスキイの「ピョトル大帝時代のロシアにおける科學と文學」Пекарский: «Наука и литература въ Россіи при Петрѣ Великомъ» 第一巻三五〇頁―三六二頁參照。

この西伯利調査計畫は、今は未開であるが、將來に多くのものを約束してゐる邊境地方にたいして政府が抱懷してゐた方針と興味の範圍を示してゐる點でおもしろいのであるが、これが一人の手で完遂し得られるものでないことは明白である。

【ベーリング探檢隊の任務】

一七三三年（享保一八年）になつてカピタン・ベーリングを隊長とする科學的に編成された廣汎なアカデミアの探檢隊が組織され、そしてこの探檢隊は二つの任務を課せられたのである。

第一、ベーリングを班長とする探檢隊の海洋班はその數年前におなじベーリングによつて着手され、そして夙にピョトル大帝によつて提起されてゐた問題、すなはちアジアはアメリカと「接續してゐるかどうか？」といふ問題を解決するためにカムチャトカ海岸線の踏査をつづけること。

第二、メッセルシュミット博士が有つてゐた計畫と略ぼ同樣のプランにしたがつて西伯利の詳細な調査研究をとげること。

この第二の目的のためにアカデミアは探檢隊員のなかへ次ぎのやうな人物を參加せしめた。

「實に旅行を完遂しうるといふ能力ばかりでなく旅行の途上にある現在まで未知の國々の地誌編纂といふ事業にたいして相當の寄與をもたらすことのできる人物、その國々に住む諸民族の歴史を明かにし、自然史を精確に研究し、その他學術的に興味ある一切のこ

調―0523
0196
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

とを嚴く知悉するためそれらの土地の意識的な調査に要する才能と知識とを具備した人物」*

*グメーリン上揭書序文。

探檢隊に參加した人々は、歷史家ヘラルド・フリドリッヒ・ミルレル、（更にあとから遲れてヨハン・エベルガルド・フィシェル）自然學者ヨハン・ゲオルグ・グメーリン、天文學者ルイ・デル・イリデラ・クロイエルその他數人の大學生であつて、この大學生の中にはクラシェニンニコフや測地學者グラシリニコフ、ポポフなどがゐた。彼らのうちでミルレルは歷史・人種學上の調査研究の仕事を分擔した。探檢は一七三三年からはじまつて一七四三年まで十年間にわたつて繼續された。

【エカテリナ二世時代の西伯利探檢】

その後エカテリナ二世女帝〔九二〕の治世に同樣のプランにより、別の大規模な學術探檢隊が露領東部諸地方の調査のために派遣されたが、それにはパラッス、ゲオルギイ、レピョーヒン、ファリクなどの學者が參加してゐる。

かくして、スロフツォフ〔九三〕の言葉をかりて云へば「多くの學者たちの共同の努力のお蔭で西伯利のヴェールが剝ぎ去られ、そして西伯利の自然界はゆたかに富めるものであり、且つ人類の共榮生活に望みなきものでない」といふことが明らかにされたのである。*

*スロフツォフ「歷史的鳥瞰」Слонов: «Историческое обозрение» 第二版、第一卷二八五—二八六頁。

二、西伯利の歷史に關するミルレルの諸著

十八世紀前半における西伯利の調査研究にたいする諸成果のうちで著名なるものの一つは、ロシア人による西伯利征服と植民の眞相を傳へることを目的とした西伯利の歷史に關するミルレルの諸勞作である。

【西伯利國誌】

一七五〇年（寬延三年）に、彼れの「西伯利帝國及び其處に起れる諸事件の發端よりの記錄、殊にロシア國家の西伯利征服より現在までの記錄」«Описании Сибирского царства и всех происшедших в нем дел от начала, а особлино от покорения его Российской державе, по сии времена»（「西伯利國誌」«Описание Сиб. царства» と略稱）の第一卷が出版された。そして一七五一年末にはそれに續く六章（第六章——第十一章）が出版の準備を完了し、さらに一七五二年には第十二章——第十七章がアカデミアの校閱と贊同をうけ、尙ほ第十八章——第二十二章はすでにドイツ語で書きあげられてゐたものの如くである。

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

調—0523

0197

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一七五三年二月、ミルレルは二十三章から成る自分の原稿をフィシェルに手交した。これはその中から壓縮した形で概説書を編輯して出版するためであつた。*

＊ペカルスキイ「アカデミアの歴史」第一巻四〇五―四〇七頁。

十七世紀の四十年代（寛永、正保年間）までに西伯利の内部におこつた諸事件の概観と、一七一一年（正徳元年）までも筆を及ぼして西伯利の歴史の個々の部門を取扱つた第六章――第八章は、一七六四年（明和元年）に「勤務者の娯樂と實用のための月刊文集」《Ежемесячное сочинение для развлеченія и пользы служащихъ》（そしてドイツ語では「ロシア歴史文集」《Sammlung Russischer Geschichte》）に掲載された。この「月刊文集」ではミルレルが計畫してゐた著作に關係のある個々の文章がいろいろな時期にわたつて發表された。

一七五五年――「ロシア人の最初の支那旅行および使節團について」
一七五五・五六年――「西伯利の商業について」
一七五七年――「露支兩國間における國境畫定に際して存在したる疑問の解明」
一七五七年――「アムール沿岸がロシアの領土であつた時そこに存在せる國々の歴史」
一七五八年――「ロシア方面より行はれたる北氷洋および東方海洋への航海の記述」
一七六〇年――「ブハラの砂金に關する報道、それを原因とする遠征とイルトゥイシ河畔の要塞建設について」等々。

【フィシェルの「西伯利史」との關係】

結局、およそ十七世紀の六〇年代（寛文年間）までの事が記述されてゐるフィシェルの「西伯利史」《Сибирская исторія》は、本質においてミルレルの勞作のそれぞれに該當する章節の壓縮改編だと云はざるをえぬ。かくの如く印刷に附せられたミルレルの諸勞作は、實際においてほとんど西伯利占領の全歴史を包括してゐるわけである。

【ミルレルの西伯利史編纂の方法と特徴】

ミルレルの諸勞作の價値は、包括されてゐる時代の廣さといふだけでなく、その學術性の深さにもあると云へる。異常な鮮明さをもつて自己の任務を史實の正確な再生といふことに限定した調査研究家・モノグラフィストの眞面目な學者型が、ミルレルの面目において、ロシアの歴史編纂學の舞臺に登場したのである。彼は云ふ

「歴史は單なる批評的論議（假說）によつて滿足さるべきものではない。それは各事件（一事實）を、或る場合にはその事件の中からとられた原文に立脚し、或る場合には充分可能なる證據に立脚して示すものでなければならない。」＊

＊「西伯利國誌」三六頁。

また或る個人宛の書翰のうちで彼は書いてゐる。

「私は歴史家が彼の知るところの全部を語ることを求めるものではないし、また同樣に眞實なるものの一切を語ることを要求するも

調―0523
0198
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

のでもありません。語るべからざる事柄もあればそれを公衆の前に披瀝すべく興味すくなき事柄も有りうるからです。しかし乍ら歴史家が述べる總てのことは嚴然たる眞實であらねばならず、如何なる場合にも彼は自分にたいして疑惑をよび起す根據を與へてはならぬのです。」

＊ペカルスキイ「アカデミアの歴史」第一卷三八一頁。

ミルレルはかうした原則的な考へから、自分の學問的結論のすべてを、例外なく源泉に憑據して組立て、そして「如何なる歴史的報道によつても證明できない」＊ところの有らゆる事柄に關する、さまざまな假說的判斷を避けてゐるのである。

ミルレル自身の云ふところに依れば、彼が書いてゐるすべての事柄は「もつとも信を措くに足る、そして大部分は否定しがたい證憑によつて」＊＊裏書されるところのものである。彼はさうした理由から、その頃の學界における流行問題であつた古代西伯利の住民に關する人種學的謎の解決を回避してゐるのである。彼は云ふ

「いろいろな民族に關する古代の歴史は、確乎とした根據ある證據がないのであるから、それについて虚僞の解釋を報道するよりもむしろ今までの暗黒のままに殘しておく方がより善きことであらう。」＊＊＊

（＊＊＊＊いづれも「西伯利國誌」一九、五八、九、三三―三四頁等。

【ロシア史學における一歩前進】

ミルレルの考へによれば「歴史にたいして愼重かつ冷靜な筆者」が保持すべき方法論的な仕方は右のごときもので有らねばならぬ。ロシア史の方面ではまだ福音書がおもな參考書として生命を保ちつづけてゐた時代に、ロシアの歴史學に向つて彼が斯うした要求を提起したことは、歴史方法論の領域における大きな一歩前進であつた。ミルレルはひとり彼の周圍の敎養ある社會層の間においてばかりでなく、學界においてさへも全き無理解をもつて迎へられたのであつたが、彼は頑強に自說を守りとほした。

【古文書の錄載とアカデミアの讓渡】

「西伯利國誌」が世に出るとともにアカデミア總務局は「公文書」の引用が多すぎる云ふので筆者を譴責して、次ぎのやうに彼の「過誤」を指摘した。

「西伯利國誌の第一卷には……書中多くの部分に官廳公文書のコッピイに外ならざるものがある。若し面かせざる場合においては書籍はかくも大册なることを要せざるべきを以て次卷に於てはなんらのコッピイをも錄載せざるやう嚴重にこれを禁ず。なんらかの公文書またはその拔萃を揭くる必要ありと認むるときは行間欄内にその原文がアカデミアの保存資料中に存在する旨を附記することを以て補ふべし。」

＊ペカルスキイ「アカデミアの歴史」第一卷三六一頁。

【西伯利古文書とミルレル】

源泉からの廣汎な引用にたいするミルレルの貪慾な欲求を總務局はかなり公當に指摘してゐる。原

調―0523

0199

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

則的な方法論上の見解に影響されて彼れは一種の源泉崇拝的な傾向に取り憑かれてしまつてゐるのである。ミルレルはその著「西伯利國誌」の序文草案中で云つてゐる。

「古文書を讀み慣れた者は誰でも衷心から滿足感をもつてそれを讀み、この滿足感の原因と、讀者の期待とは一致したものである。」*

＊ペカルスキイ、同上、三五六頁。

古文書の文體そのものが彼を歡喜させるのである。原文的記念物にたいする斯かる愛着が彼をして、原文中の些細な報道をも收錄しようと欲せしめるのであつて、そのために彼には批判が缺けてゐるといふ非難（そしてそれは妥當ではない）が加へられることも稀ではない。彼は云ふ

「歷史を書く者は、たとへそれが無益の事實として讀まれるものであつても總ての引用においてはその原文の出來ごとに正直に依據することを義務とする。歷史における最重要事としての眞實は、それによつて敬ひかくされるものではなく、讀者がもつ健康な判斷力はそれによつて奪ひ去らるべきものではない。」*

＊「西伯利國誌」一二一頁。

【レミョゾフとミルレル】

だから彼は、ありとあらゆる奇蹟に關するレミョゾフの寓話的な物語をも「我慢して」引用してゐるのである。原文の總てを綿密に保持するといふ歷史家にたいするこの要求は、ミルレルの同時代人たちの原文にたいする餘りにも自由勝手な態度に由來するものと解される。しかし、ミルレルは原文の批判が必要だといふことは理解してゐた。彼は「トボリスキイ年代記略」（すなはちレミョゾフスカヤ年代記）中には「最初に書かれた著作のあとから……附加された」頁のあることを指摘してゐる。

「當に文字だけではなくその中にはいつてゐる插畫においてさへもそれが相當はつきりと現はれてゐる。」

そしてまた云つてゐる。

「當時のすべての出來ごとは、それが實際に行はれた時においてでなく、多くの歲月を經てから後に口供にしたがつて書きつけられたものに過ぎぬ。」

そのために「いろいろな誤り」が起りうるのだ、といふ判斷を述べてゐる。彼は原文とその後になされたコッピイとの間に明確な區別をし、そこに「誤寫を發見することが……期待できる」とも云つてゐるのである。＊

＊「西伯利國誌」一二四、一三六、一七八、一八〇頁等。

【西伯利古文書蒐集の方法】

ミルレルは西伯利探檢から廣汎なそして種々雜多な歷史的資料をもたらし歸つた。むろんそのうち

調—0523

0200

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第一に挙ぐべきものは西伯利の諸官廳で蒐集した厖大な古文書の集積（大部分はコッピイ）である。

この蒐集の仕事が、充分な用意なしに行はれたものだと云ふことはできない。彼は勘を働かせながら仕事をしたのである。彼自身あとになつて述べてゐる。

「だがこの場合私がまだ總てを知り盡してゐたのでないこと、私はもつともつと求めたり質問したりすべきことがあるといふことを自認する。さうするためにはただ經驗によつてのみ獲得できる實際的な知識が必要なのである。」

ミルレルはその先きで語をついで云ふ。

「私の最初の仕事は古文書の山と書物とを年代順に配列しておいてあとから次々に眼を通し、その中から私のために拔萃すべきものを決める……といふことにあつた。……私はただ棚内に記號をつければいいので、私のために提供された書寫係（現地の役所からの）に手不足はなかつた。そして私は、私が印をつけたものの總てが書き拔かれるであらうといふことは信ずることができた。」

しかし彼れは立ちどころに斯うした方法に到達したわけではなかつた。彼の述べてゐるところによると、最初のころは次ぎのやうにしてゐた。

「私はただ保存文書の目錄だけを求め、それによつて何が私のために必要であるかを一瞥した。そして目錄のないところでは讀者や大學生たちが文書を讀み、彼らが自分の判斷で私の希望してゐるもの、私の書物に引用するために有益だと感じたものを別にしておいて、あとから私が眼を通すために私のところへそれを運んできたのであつた。」

一七三六年（元文元年）になつて、イリムスカヤ保存文書から先きで、ミルレルはこの方法を變へたのである。

「保存文書の目錄がまだ出來あがつてをらぬ場合には私みづからそれを年代順に整理することに努め、その間に目錄が作製されると次々にそれに眼を通して行き、私の考へで彼に立つと思はれるものの拔萃を命ずるやうにした。かうした仕事のやり方は古文書原文の狀態を詳細に知るといふ上で私に非常にはつきりとした印象をあたへてくれた。さうする場合には、私はもう他人の眼に期待をかけなくてもいいと信ずることができた。それ以來いかに文書が厖大であつても、私はいつも右のやうにして檢討に着手し、それによつて大きな利益をえた。」*

* ベカルスキイ「アカデミアの歷史」第一卷、三二一—三二二頁。三三五頁。

【古文書の書寫における若干の缺陷】

このやうに、仕事が進むにしたがつて仕事のやり方も改善されて行つた。そして除り敎養のない書寫係を使つたために、ミルレルのコッピイには可なりの缺陷*が見られるのであるが、原文中の多くのものがその後紛失されてしまつたので、西伯利史の研究においては現在まで最も價値ある參考書として生命を保ちつづけてゐるのである。

* 雜誌「ビブリオグラフ」《Библиограф》「一八八九年第一號および第八・九號におけるオグロブリンの論文「ゲラルド・ミルレルと第一源泉にたいする彼の態度」《Герард Миллер и его отношение к первоисточникам》「ミルレルの歷史編纂學の問題に寄せて」《К вопросу об историографии Миллера》等。

【ストロガノフ家保存文書の研究】

ミルレルはただ西伯利文書の研究だけに蹈跙してゐた者ではない。彼は西伯利と（ロシア本國）の十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

調—0523

0201

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

初期の交通連絡がチェルドゥイニ經由でおこなはれてゐたことを確信して、この地方の古文書の狀態を調べあげ、ストロガノフ男爵家の家庭的な保存文書の中から十六世紀時代の勒狀を見つけだし、西伯利で彼が發見した年代記（エシポフスカヤ年代記およびレミョゾフスカヤ年代記）の中ではごく僅かしか語られてゐないストロガノフ一家の役割を、それによつて明らかにすることができた。彼が發見したレメョゾフスカヤ年代記（トボリスカヤ年代記略）もまた價値多き記念物である。

【西伯利關係東洋文獻の利用】

彼はロシアの源泉だけに滿足をせず、東洋の寫本、たとへばタタールの寫本「アブルガゾワ」*《Абулгазова》にも興味を蒼きつけられたし、「ムンガリスキイ・レトピセツ」**《Мунгальский летописец》（「蒙古年代記略」）も彼のために飜譯された。彼はまた「巧妙にして勤勉な」アカデミアの飜譯者ロソーヒンが、「支那および滿洲の最善の年代記」のなかから編譯した「支那略史」***《Сокращенная Китайская история》をも利用してゐる。

* 「西伯利國誌」五一頁。
** 同上　二三頁。
*** 同上　二三頁

【西伯利原住民の口碑傳說の蒐集】

ミルレルは文書的源泉のほかに口碑傳說に大きな價値をみとめて、これを利用することを爲した。*彼れはロシア人および原住民の間におこなはれてゐた西伯利の口碑傳說蒐集家**の最初の一人であり、彼の著書のなかでは、口傳を直接源泉とする引用にたえずぶつかるのである。たとへば彼はエルマクやエルマクの乘つてゐた船に關する多くの傳說を蒐集した。エルマクの乘つてゐた船の殘片が「尙ほ現在にいたるまで」バランチェヤ河とセレブリァンカ河の中間にあるといふことを、彼は「その地に住む多くのロシア人やヴォグール族たち」***から聽き、「そこの住民たちの口から口への語り傳へによつて」エルマクが自分の寶物を匿したと云はれるチュソワ河畔の洞窟****のことも知つた。彼れは「その洞窟のほとりに住んでゐる」人々にたづねたり、チュソワ河畔の住民たちの口から、エルマクが「帆をいつぱいに張つて……岬の方へ向つて」チュソワ河を航行したといふ物語をきいたりした。*****

* ペカルスキー「アカデミアの歷史」第一卷、三四〇頁。
** ミルレル以前にこの源泉に注意を向けたのはストラレンベルグである。ミルレルは異民族との交涉をもつた際にその記載を再檢討し、また十七世紀中にレミョゾフその他の年代記作者が傳說をとりいれてゐるのを利用した。
*** 「西伯利國誌」一〇六頁。

調—0523
0202
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

同上、一〇一頁。この洞窟に關する傳說はヴィトセンにもある。

同上、一〇二―一〇三頁。

彼が書いてゐる原住民の口碑、そのうちでトボリスクのタタール族の「口傳へのお伽噺」はとくに興味ふかいものである。彼みづから云つてゐる。

「それが現在も尚ほその民族のあひだに保存されてゐるかぎりは、出來るだけ探しだすことに骨を折つた。」

ミルレルは「トボリスクに住んでゐる、いろいろな種類のブハラ人やタタール人との……數多き會見の中から」貴重な歷史的報道を得ることを「期待した」のであつた。そして彼らから信用をうけ、彼らはまた「猜疑心なしに」ミルレルにその「祕密」をうち明けたのである。* 彼はたとへば「タタール人やブハラ人の口供によつて」西伯利におけるマホメット敎の敎義がクチュムによつて弘められたといふ傳說や、それからまた「タタール人が現在でもその記念のために祭禮を執りおこなつてゐる」聖者たちに關する傳說を書いたのである。**

* 「西伯利國誌」七〇頁、一九六頁。

** 「西伯利國誌」五〇―五一頁。同樣の口碑は現在でもトボリスクのタタール人の間に存在し、ラドロフはそれを記してゐる。トボリスク博物館年誌第七輯にあるカタノフの論文參照。

ミルレルはまたおなじ彼らの口から「セイデァク汗の事件の眞相を詳細に聽き知つた」* のであるし、おそらくタタール人の口供による材料を基にして、非常におもしろい西伯利汗家の系圖** が彼の著書に載せられることになつたのであらう。

トボリスクに住んでゐた「或るブハラ人宗敎家」は、アブリガジ家出身の西伯利諸汗の系圖を彼のために飜譯してあたへた。***

また別の機會において「或る學者――蒙古の喇嘛が**** タングゥト（西藏）やハンガリ（蒙古）の書物に載つてゐるヂンギス汗の領土」の發祥に關する報道を彼に語りつたへてゐる。彼はクラスノヤルスクにおいて一人の老アリン族を發見したが、この老人はその當時まで生きのこつてゐた母國語で話をするその民族中の唯一の人間であつた。そしてこの老アリン人の語るところを通してストラレンベルグが書き誌してゐるこの民族の發祥に關する傳說***** が正確なものであることをたしかめたのである。

彼はチュメニに住むタタール族について彼らの都市の古代の名稱を訊きただし、またバイカル湖畔を遊牧するブリァト蒙古人の口から、傳說の中にあるヂンギス汗の「タガン」（鐵架）の所在を聽くことができた。******

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

調―0523

0203

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

＊「西伯利國誌」五〇頁。

＊＊同上、五八頁。この系圖はラドロフも記載してゐる。（トボリスク博物館年誌第七輯參照）

＊＊＊同上、五一頁。

＊＊＊＊同上、四頁。ミルレルのこの喇嘛との邂逅についてはグメーリンにも記載がある。第二卷一一四―一一八頁。

＊＊＊＊＊同上、三一―三二頁。

＊＊＊＊＊＊同上、四四頁。

さらに彼はまた「自分の學問上に必要ないろいろな異國の報道」＊を知るためにトムスク市とカルムイク族の帳幕部落との間を往來するブハラ商人やカルムイクの隊商などを利用したのであつた。

＊ベカルスキイ「アカデミアの歴史」第一卷三三四頁。

右にあげた諸例は西伯利原住民の傳説にたいするミルレルの探求がいかに深く手を盡したものであるかを語るに充分であつて、彼れの記載の精確さについてはラドロフやカタノフのごとき專門の東洋學者の記載がこれを裏書してゐる。

【西伯利古代地名の復元】

ミルレルの西伯利研究でおもしろい方面の一つは、彼れの研究の對象となつた地方の古代地名の、現地についての丹念な復元である。彼れは西伯利旅行中に古文書や年代記中にでる總ての固有名詞を現存のものと照合して復元することにつとめた。若干の場合において個々の古い名稱は「トボリスクに住むタタール人の記憶から全く消え失せてしまつてゐた」＊のであるが、全體として彼は美事にその目的を達してゐるのである。

＊「西伯利國誌」四九頁。

その一例として、バグダン・ブリアズガ＊＊の遠征の地名の復元や、ルゴイ汗＊＊＊にあたへられた勅狀のなかに擧げられてゐる地名の復元について指摘してみよう。

＊「西伯利國誌」の第三章を見よ。

＊＊「西伯利國誌」二〇五―二〇八頁。

＊＊＊同上、

彼は古文書中にあげられてゐる古代村落の遺跡をできるだけ現地について踏査した。かくして彼はクチュムやイスケルの「都城」＊たる「サマロヴォ・ゴロヂッシチェ」＊＊の遺蹟、チュメニ市郊外にある「古代タタール人の城砦」の廢墟、＊＊＊それから十七世紀における「製鹽所の遺蹟」＊＊＊＊などのごとき歴史的な地名と自然とを詳細に書き誌してゐるのである。

＊「西伯利國誌」一三四―一三六頁。

＊＊同上　一六一頁。

＊＊＊同上　二一三頁。

調―0523

0204

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp